

---

# 重なりあわないシンメトリー

樹  
影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

重なりあわないシンメトリー

### 【Nコード】

N0547J

### 【作者名】

鬱

### 【あらすじ】

兄は<妹は>私のことを<俺のことを>……きっと嫌いなのだと思っ。

「何故、俺が母親を殺したかですか？ うーん、何ででしょうね？」  
 白い壁に白いテーブル。鉄格子のはめられた四角い室内。男はボ  
 イスレコーダーをテーブルに置いて、鉄格子ごしに見える明る  
 い外を眺めた。病院の閉鎖的な空気とは違う和やかな風と時間  
 が流れている。

男は外の風景を眺めながら、独り言のように呟いた。

「記憶にない？ それとも言いたくないからかな。先生も……僕も  
 昔、嫌なことが一杯あってさ、親友が僕のせいで死んじゃったりと  
 かね。君のそういう気持ち、分かるよ」

「そういうのじゃありません。……あの人が俺に手を出してきたか  
 らです」

「……手を出してきた？ 暴力を、つてことかな」

「ある意味、暴力ですね。性的な暴力だから。あ、いや……直接何  
 かされたわけじゃないんです。でも、あの人の俺を見る目は異常だ  
 った。なんか熱っぽくて、俺の名前を“さん”付けて呼ぶんですよ。  
 『優さん』つて。母は父を愛していた。だから父に似ていた俺にそ  
 ういう感情を抱いたんでしょうね。でも……でもね、俺は俺で父じ  
 やない！」

力強くテーブルは叩かれ、空気は揺れた。男はそこで初めて、視  
 線をそれに向け、目を細めた。

「そうだね、君はお父さんじゃない。別の誰かでもない、君は君だ」  
 歯を軋ませて、憎悪に顔を歪めるそれとは対照的に男は微笑んだ。  
 病人のような白い服を着たそれ男の笑みに少し落ち着きを取り戻  
 すが、やはり腹の底にある憎悪が抜けきらないようだった。

「だから殺してやったんですよ。犯されたくないから、俺は俺だか  
 ら。誰も俺を咎めることはできない。だって……」

男は静かに手のひらを上げて言葉を制す。それは自己弁護や正当

化の為の言葉しかでないと分かっていたからだった。

そんなものは聞きたくない。

これは診察でもあるからだ。

もどかしそうにそれは口を止めて、ジト目で男を見た。

もう少し話しをさせてよ。

そんな抗議が男には聞こえたような気がした。

「話しを変えようか。妹についてどう思う？」

「結局こんな形になったけど、俺は夕香のこと、恨んでいませんよ」

「本当に？」

「ええ」

「それは自分の言葉？」

「おかしなことをいいますね。自分の言葉に決まっているじゃないですか」

満足げな笑みでそれは言った。相矛盾、二律背反の塊のそれは、実に朗らかに。

before 1 (前書き)

工口注意。

兄は私のことをきつと嫌いなのだと思う。

それはそうだ。それ相応のことを兄にしてしまった。だから彼はよそよそしいし、私に何かを求めることはない。

歩み寄ってこないということは、兄が私に何も求めていないのだと思う。もしも兄が息苦しさを感じているなら求めるべきだし、私は求めて欲しいと思う。願う。

兄は家計の足しになればと、アルバイトに勤しんでいて、私が学校に行っている間も家事をやってくれ。帰宅する頃には暖かい食事を作り、テーブルに並べてくれている。辛いだとか大変だとか、苦しいという言葉を一言も言わず、ただ当たり前のように身の回りの世話をしてくれる。

よくできた兄だ。

だけど、兄は人殺しだ。

彼は私の母を殺した。いや、彼の母でもある。

第一発見者は私だった。

真っ赤に染まった寝室で兄は、血溜まりに伏せる私の肩を叩いて、警察を呼ぶようにいった。あのどこまでも仄暗い瞳を私は今でも忠実に思い出すことができる。

「それから警察が来て……」

大人たちに揉まれて、いろんな事が起きて、今でも私達は事件のあった、母の死んだこの家で暮らしている。

父は……いない。父にあったことがあるのはほんの数回。事件の時に、辛かったあの時期にも全く顔を出さなかった父は憎い。だけど幼少の思い出は私にきらびやかな映像を見せて、美しく染め上げる。

父は優しくかった。父は素晴らしい人だと。

「ああ、だから私は」

この家から出られないのか。

兄が引つ越そうといっても私は拒否した。理由は分からなかったけど、何故そうしなかつたか分からなかったけど、そうかなるほど父が恋しいのか。

「くふ……ふふふ」

でも、もう父は要らない。

窓の外を車のヘッドライトが流れていく。私はケイタイで時刻を確認すると、のっそりと起きた。長い髪を手ぐしで軽く整え、枕元の明かりを灯す。事前に用意した濡れタオルと、普通のタオルを手にとった。

部屋の端に置かれた鏡に青いストライプ柄のパジャマ姿が映った。悪くないはず。

控えめに見ても私は可愛らしいと思う。

長い睫毛、細身の手足とウエスト。胸は確かに大きとは言えないが人並みにある。お尻の形は自分でも惚れ惚れする。

美しい母の遺伝子にありがとうと言いたい。

「ふふ、馬鹿ね私」

自分の部屋の扉を出て、直ぐ横は兄の部屋。一番奥の部屋は父の部屋だ。私は奥に一瞥もくれないことなく兄の部屋のドアノブを捻る。兄はベットの上ですうすうと寝息を立てて、夢に身を委ねている。顔をピクピクと踊らせ、布団を抱き枕のようにぎゅっと抱いていた。ああ、血の気がすうっと失せて行く。

暗闇に獣がいる。薄暗い闇の中、牙を剥き出しにした獣。

それは獲物の前で舌なめずりしていて、欲望に瞳の色を変えてゆく。コーヒークップに落としたりミルクのように欲望、肉欲、愛欲、情動、欲情……それらが混ざり合い、ぐつぐつと煮えたぎり、武者震いに似た震えを喚起させる。

獣は私だ。獲物は兄だ。欲情しているのは私で、欲情されている

のは兄だ。

親指の爪を噛んで兄を眺める。指に湿った自分の吐息が掛かってイライラした。

私は何かを焦っている。何を？ ああ、心臓の音が煩い。兄に聞こえてしまう。世界に響き渡るようなこの胸の鼓動が。

「お兄ちゃん……ねえ、お兄ちゃん」

兄は起きない。私はそれを知っている。

兄は夕食に混ぜられた睡眠誘導剤で起きることはない。私はそれを知っている。

暗闇で獣は唇の端を曲げて、にやりと笑った。涎が床にポタポタと零れ落ちる。

そのまま私はいつものようにパジャマを脱いで、ショーツを下ろす。下着が床にびちゃりと重い音を立てて落ちた。

熱い。熱い熱い熱い熱い熱い。

へソの下が、頭が、頬が目が。

この乾きを潤すには薬が必要だ。薬は血で、肉で、兄だ。

私は兄に覆いかぶさり、まず頬をべろりと舐める。次に舐めた額は少し汗ばんでいて塩味がした。

「うっ……ふうふう。んむ……」

兄の唇を犯す。私のことが嫌いな兄の口腔を犯す。

反応のない人形のような兄。だけど確かに生きていて、私を認識していないだけで、それは兄で。

「おいしいよ、おいしい。お兄ちゃん。凄く美味しい……」

顔全体を舐めまわしても兄は起きない。思うままキスをし続けても、兄は眉間にしわを寄せて息苦しそうに口を拭うばかり。

私が脇を、兄の硬くなった乳首を舐めまわしても、それは変わらない。足の指の谷間を舐めても、変わらない。

それは兄の勃起したモノをなぶり、しゃぶり尽くしても変わらない。い。

むしゃぶりつくような卑猥で湿った音が室内に木霊する。手で上

下に動かし、首の部分に吸い付きながら舌を這わす。あとは口の部分を舌先で撫でて喉の奥で締めれば、兄は直ぐに……出した。

肉は震え、兄は私の舌の上にとろどろのそれを吐き出す。私はそれを最後の一滴まで吸う。舌を動かして、責めることも忘れない。

それでも兄は起きない。それが私を酷く興奮させる。私のことを嫌いな兄が、私に犯されて、達しているのだと思うと、ほくそ笑むような喜びが湧いて出た。

「いっぱい出たね、お兄ちゃん。妹に犯されて、気持ちよかったんだね」

よくそれを噛んで、舌の上で広げる。そしてゆっくりと喉で味わいながら飲み込んだ。

息が臭い。息が兄の匂いに染まる。ふふふふふ、臭い。

私はそのまま兄のそれを自分のどろどろの秘所に当てがうと一気に腰を下ろした。太ももを汚す自分の愛液が兄に着くのも気にしない。寧ろ喜ばしかった。

「おにい……ちゃん、あっあっ……にいちゃん」

私の長い髪が傘になって兄と私の顔以外の物を遮る。頬を赤くして上気する兄の顔。私のことが嫌いな兄の顔。兄兄兄兄兄兄の顔。びつちりと肉の詰まった私の壺は兄の竿を舐め上げ、締め付ける。兄のそれは交差するごとに硬さを増して、私のグライドする腰に先程以上の量を吐き出した。

子宮がそれを吸い上げて、喜びの声を上げる。私は涙のように涎で口を汚し、電撃のような快感に笑い、酔った。

最後に兄に熱いキスをした。マーキングに似た熱の籠った私のキスを。

兄の服を直し、汚れを拭き取る。下着は……後で洗濯機に入れよう。

「お兄ちゃん……」

今はすうすうと寝ている兄の顔を視姦するだけ。横で、一緒に寝

るだけ。

きつと私が一緒に寝ようといえれば彼は拒まない。もしかしたらキスをしようといっても拒まないかもしれない。

兄は私に罪悪感を感じているのだ。だから私と同じ学校を止めて、私の我侷を何でも聞く。

少し悲しいけど、私は思う。

あわよくばそれが永遠に続きますように、と。

「優兄さん……」

兄の顔を見てるとまた、獣が目を覚ます。喰らえ喰らえと咆哮を上げる。

私は頭を横に振って、兄の部屋をいそいそと出た。

布団の外は酷く寒くて、部屋の外は圧倒的に何かが足りなかった。

全てが終わり、野獣は鳴りをひそめる。それは朝日と共にほぼ毎日行われる行事だった。

太陽の目覚めと共に冷静な私も戻ってくる。それは同時に圧倒的な自己嫌悪と汚らわしさを伴って自身の醜悪さを目の前に突きつけた。

早い話が兄に欲情し、そういうことをしていた自分が汚らしく思っていた。

子鳥のさえずりにベットから体を起こし、等身大の鏡を見る。

「意地の悪そうな顔……」  
つり目で、世界全てが自分の敵のような目。友達なんて一人もいなそうな酷薄そうな表情。

事実、友達なんていない。

ある程度、日常会話を交わす人間はいても、仲がいいと呼べるほどの友人はいない。そもそも私は団体行動や女々しいことが嫌だし、向こうも私に遠慮してかあまり触れてこようとはしない。

部活動に入ることもなく、静かに帰宅する毎日。下らない青春の浪費。最近はそれすらも、よく休む。

私の居場所はどこにあるのだろう。

兄の部屋の扉を開ける。遮光カーテンから浅く漏れる朝日は、兄の部屋を淡い黄色に染めていて、どこか幻想的だった。

「起きなさい」

頬に涎の跡を走らせて、彼は猫のように気持ちよさげに寝息を立てていた。少し心が揺れる。

「起きなさい」

「……………」

起きない。

私はカーテンを開き、布団を剥がす。むせ返るような優の汗の香りに少し目眩がした。

それでも彼は起きない。いつもならこれで目を覚ますはずだった。しかし、どこまでも幸せそうにくうくうと寝ている。

幸せそうに。幸せそうに？ 幸せ？ 何が幸せ？ 何で幸せ？ 現実じゃなくて、私の側じゃなくて、夢の世界がここよりも幸せだというのが。

お前は私に一生世話すると誓ったんじゃないのか！ 私の幸せを一番に考えると言ったんじゃないのか！

人を殺しておいて、私を壊しておいて、全てを滅茶苦茶にしておいて幸せそう？

ふざけるな！

「起きろっ！」

「つつわ！」

私は胸ぐらを掴んで叫ぶ。予想以上の声が部屋に反響して、私自身少し驚いた。

彼は飛び起きて唾液をすすり、寝ぼけ眼でぼうつと私を見つめた。

「……起きろと言ってるでしょう！」

「ああ、えつと、夕香さん。おはよう？」

締まりのない笑み。私は胸ぐらを離し、小さく舌打ちした。

後ろに転がった彼は申し訳なさそうに頭を掻き、欠伸をした。そして短く悲鳴を上げた。

悲鳴？ 何か今、隠した。

何だろうと覗く。優は隠すように剥がされた布団を膝にかけて愛想笑いを浮かべた。

「今日も寒いけど、いい朝だね」

「何を隠したの？ 見せなさい」

「いや、別に！ あっ」

布団を無理矢理に剥がす。

目の前に広がるのは……男の生理現象。

かあつと頬が熱くなった。彼は申し訳なさそうに恥じらった。

「け……、汚らわしいっ！」

足を踏み下ろし、蹴り上げる。それに優は声にもならない悲鳴を上げて、芋虫のようにうずくまった。少しして地響きのような唸り声。

「は、早く朝食の準備をしなさい！ ウスノロ！」

「うう……は、い」

私は逃げるように部屋から出て、頭を抱える。

自己嫌悪だ。

あれは生理現象で、しょうがないことで、もっと兄に掛ける言葉はあつたはずだ。なのに私は心配するどころか、罵声を浴びせた。あんなそそり立った力強いあれを見た私は恥ずかしさのあまり踏みつけ、あまつさえ蹴り上げてしまった。硬くて、太くて、熱いあれが酷く恥ずかしくて。

昨日あんなにしたのに。

喉の渴きを感じ、私は一階に下りて、水を飲んだ。

優は少し顔を青くしてしてリビングに下りてきた。手には着替え。私は一瞥もくれてやることなく、朝のニュースに耳を傾ける。あくまでも私のスタンスは優の存在に気がついていないという体。気にも留めていなくて、どうでもいいという形。

優はそんな私に恐る恐る声を掛けた。

「夕香さん、俺……あの」

「シャワーでしょう。分かってるわ」

「すみません」

彼が脱衣所に向かうのを横目で追う。脱衣所の扉を閉める音がして私は直ぐに椅子を立った。脱衣所の前まで行き、薄い板に耳を這わす。衣擦れの生々しい音に血が滾った。優が今、この壁一枚を隔てた向こうで、裸体になっているのだと思うと妙な興奮が湧いて、耳の奥が鳴った。爪を噛んで扉にこれでもか顔を押し付ける。

鍵はマイナスドライバーで容易に開けられる。爪でも開けようと思えば開けられるだろう。やろうと思えば簡単だ。

そう簡単。ドアをこじ開けて、押し倒せばいい。優は私よりも、いや平均的に見ても小柄だ。腕も細い。まずは足払いで、転がしてあの柔らかい唇に舌をねじ込んで、地下室で兄を飼う。抵抗したら袋叩きにして。私に溺れた兄は外に出ても、きっと私を、そして爛れた世界を。

ザアッとシャワーの音がして、意識が現実に戻った。

「くふふふふ……、私は頭がおかしい！ イカしてる！」

壁を強く叩く。歯を軋ませて白い壁を睨んだ。

誰がどうみても私は病気だ。母の死を見てしまっただけからできた病気のことでない。兄に対する異常なまでの肉欲のことだ。

兄を見ると耐え難い欲求に駆られるこの気持ち。いつも優の後ろ姿を眺め、すれ違い様には匂いを嗅いでいる自分。気色悪い自分。いつからだろう。

最初は兄のリコーダーに異様な執着があって、あの頃は母も生きていて。決定的になったのは、そうあの時。兄の夢精したパンツを見つけた時か。鼻をつくあの匂いと汗の甘酸っぱい匂いに初めて私は性的興奮と絶頂というものを知った。それから優を舐め回すような目で見るようになって、他の女と一緒に話をしているのに嫉妬して。

気がついたら夜、兄に悪戯を働く変態になっていた。汚らわしい野獣になっていた。

優から離れようと思ったこともある。でもそれを選択したら、きっと私は狂ってしまう。そう言えるほどに私は私の狂気をよく理解できていて、毛嫌いしていて、恐れている。

自分をニンフォマニアかと疑ったこともあった。でも優以外の男には何にも感じない。寧ろ他の男には嫌悪感しかない。

何故、優だけに破壊的欲求を感じるか私自身謎だった。

「本当に気色悪い」

理性の欠片もない、獣。兄の血を啜る色情狂。かちやりと音がして、湯気を上げた優が目の前に現れた。彼はタオルで頭を拭きながら、目の前の私に少し驚く。

ジャージの隙間から甘い香りがする。甘く、とろけるような匂いが、する。

「……わ、どうしたんですか？ あ、もしかして覗きとか？ 覗きは駄目ですよ、なんて」

「っ！」

ぶつりと音がして顔が真っ赤に染まった。振り上げた拳が止まらない。止まれと祈っても腕は私のモノではないかのように風を切り、兄の顔面を殴った。

兄は斜めに吹き飛んで、壁に頭を打ち付けた。ずるりと倒れて、ぼけっとした顔で私を見る。

「ば、馬鹿しないで！ 私が覗きなんてするわけないでしょう！ それもお前の裸なんて！ 気持ち悪い！」

「あはは、ごめん。ほんと、ごめんね、変なことって。あ、鼻血だ。見て、漫画みたいだよ。だばーって」

「馬鹿にして！」

私は髪を振り乱しながら階段を駆け上がり、自室に籠った。爪を強く噛んで、自分を何度も非難しながら、目に涙を浮かべて啜り泣く。

兄に言われたことが悲しいわけじゃない。自分の行為に酷く憤りを感じるのだ。

兄にごめんなさいとも言えない。兄に駆け寄ることもできない。普通の際は兄に欲情して、気がつけば兄に暴力を振るっている。

まともに接することができないイカれた私。子供のように癩癩を起こす私。

「最低だ、私。本当に最低……」

妹はきつと俺のことを嫌いなのだと思う。

それはそうだ。それ相応のことを妹に課してしまった。だから彼女は俺を責め、毛嫌いする。

こういう行動も妹が俺のことを憎んでいるからなのだと思う。もしも妹が俺のことを憎いならそうすべきだ。俺はそうなることを既に覚悟している。

優は妹のことを考えた。

母親の死を見たというのに、気丈にも母が死んだその家に住むといった妹を。そして自分と一緒に住むことを選んだ妹を。

今も定期的に通院しているが、学校までいつてる妹。背が高く、まるで姉のようにしつかりした自慢の妹。昔のことを一切口にせず、昔のことを一切省みず、強く生きている妹。

それに比べて矮小な自分。

子供のような自分。

犯罪者で人殺しの自分。

祖父が死んで、一人ぼっちの自分を拾ってくれた母。それを仇で返すようなことをした自分。

「我慢すればよかったんだ」

裸を見られること、目隠しされること、声を押し殺すこと。

優はゆっくりと起き上がると鏡に映った自分の顔を見た。頬が赤く腫れ上がっていて、鼻から赤々とした血が滴り落ちている。

妹に殴られた兄の無様な表情を鏡は冷静に映し出していた。

「変な顔だなあ」

優は思う。

自分だったら事件のあった家に住み続けるなんて耐えられないと。同じ町に暮らして、よく知った者のいる学校に行くことなど耐えら

れないと。

父が帰ってくるための家を守るうとするその芯の強さに頷く。  
父に言われた通り、俺が妹を守ってあげないと。

彼はそのまま冷水で顔を洗い流し、脱衣所を抜けて直ぐのトイレからトイレットペーパーを干切る。そして鼻に詰めた。

「ごめんなさいって謝らないと」

だし巻き卵に大根おろしを乗せたもの、ナスの漬物、パツクの納豆に味噌汁とご飯。そして妹の好物である苺のヨーグルト。

彼はそれらを四角い盆に乗せて、彼女の部屋の前に立つ。盆を扉が開いても当たらない位置に置いて、扉を叩いた。返答はない。

「夕香さん、さっきはごめんなさい。あの、朝食なんですけど……」  
「……………」

「学校はどうするんですか？」

「休むわ」

間髪かんぱつ入れずにその声は優に届いた。いつものように冷えていて、凜とした声。

「最近、よく休んでるようだけど大丈夫？ ちょっと兄的には心配的な何かだったりするんですけど……」

「休むと言ったのが聞こえなかった？」

「……分かりました。じゃあ、学校に連絡しておきますね。ご飯は扉の側に置いてあるんで、冷めないうちに食べて下さい」

優はそういつて階段を下りた。後ろで妹の部屋の扉が開くを感じて、静かに彼は微笑んだ。

怒っていても、お腹は空くものだ。

妹にもそれは例外ではないらしい。

洗濯機に洗い物を入れて、洗剤をカップですくい、落とす。

年頃のはずの妹は、自分の下着を分けるように言うでもなく、面倒だからそのまま一緒に洗えと言っていたことを彼は思い出してい

た。

「ドライ……っていうかりアリストなのかな？ 引越すにもお金が掛かるって怒ってたし」

合理的に見えるようで酷く感情的な一面もあるような気がする。

彼は洗濯機のボタンを押して、風呂場の掃除を始めた。風呂場の掃除が終われば、やっと朝食にありつける。

季節が季節なためかシャワーから出る水は指先を赤くなるほど凍らした。ひと通りの掃除が終わり、彼は自分の息で指先を温めながらリビングに入る。

「あっ」

テーブルでは夕香が黙々と食事を取っていた。盆のまま、料理をテーブルに乗せている。ヨーグルトの器は既に空だった。

「お醤油……お醤油頂戴」

優は醤油差しを取って彼女に手渡す。味噌汁の椀が空なのに気がつき優は首を傾げて言った。

「あの、お味噌汁、お代わりいらいますか？」

「……もちろん」

「火にかけるんで、少し待って下さいね」

優はそういつて微笑む。夕香はそれをチラリと見るとそのまま食事再開した。

緩やかな朝日の中、石油ストーブだけが静かに音を発していた。

「本、図書館に返しに行くんですけど……、夕香さんなんか必要なものありますか？ 買ってきますよ」

優は食器をまとめながら夕香に聞いた。ソファに座った夕香は、流し見していたテレビから視線を外し、振り返る。

黄色いひよこがデフォルメされたエプロンを着た自分の兄。

「別に何も無いわ」

「そうですか」

夕香はいそいそと食器を運ぶ兄の後ろ姿をじっと眺めて、爪を噛

んだ。

優が食器を洗い始めると、彼女は何かに突き動かされるように席を立った。冷蔵庫に向かい、中を確認するフリをして優の匂いを嗅いだ。

ギリギリまで近づき、首筋の匂いを嗅ぐ。肌から空気に伝う温もりを手をかざし、ゆっくりとねぶるように舌なめずりをした。

触れるか触れないかの距離を手のひらは行き来する。

そして、その手は。

肩を掴んだ。

「わ、何ですか？」

驚いて優は振り向く。ゴミでもついていたのだろうか、自分の肩を見るがそれらしいものはない。

視線を妹に移す。夕香はじつと押し黙り、額から汗を滑らした。

口が何かを伝えようと動くが、それは声にならない。

「……………ほっぺ、赤いけど風邪ですか？」

優は夕香の肩に手を置いて背を伸ばすと、髪を捲り、額を合わせた。夕香の頬は更に赤く染まり、瞳は優の唇を捉える。優は額を離すと笑った。

「漫画とかじゃ、こついうので熱測ったりしますけど……………分かんないや。まあ、ちょっと調子が悪そうに見えますよ。今日は部屋で寝てて下さい」

「あ……………の“優”」

「どうしたの、夕香」

彼女は下唇を噛み、視線をさ迷わしたあとに静かに言った。

「帰りに、ヨーグルト、買ってきて頂戴」

「うん、さっきのは苺だったから今度はブルーベリーにしようと思っけど、それでいいかな？」

「任せるわ」

そういつて夕香は優から離れた。優はくすりと笑い、皿洗いに戻る。

夕香はソファにしなだれると優の肌に触れた指を嗅ぎ、そして舐めた。

深緑のカーゴパンツに落ち着いた色合いのジャケットを羽織り、オレンジ色のマフラーを首に巻いた。

外に出ると寂れた花壇が目に入る。優は昔、自分の父が花壇の世話をしていたのをぼんやりと思い出した。

「うう、寒い」

グリーンのショルダーバッグをしつかりと肩に掛け、ジャケットのポケットに手を入れる。そしてゆっくり歩き出し、外の風景を眺めながら前へと進んだ。

静寂に包まれた道路はまだ眠っているような印象があり、一人も歩いていない景色は孤独でありながらどこか美しかった。

自然公園の隣に設立された図書館は近年リニューアルを迎えたばかりで、司書のレベルが非常に高い上に、洗練されたデザインが相まって一時期話題にもなったこともあった。

優は冷え切った体を温めようと足早に自動ドアをくぐる。扇形に広がる灰色のソファと市内の展示会のチラシ群が彼を迎ええた。

石造りを思わせる広い玄関ロビーを抜け、盗難防止のセンサーを進む。受け付けに佇む、司書が優を見て、小さくお辞儀。優も釣られてお辞儀を返す。

返却を終え、優は人の少ない図書館を歩いた。

開館したばかりの為か、外ほどではないにしろ、まだ館内の空気は冷たく、床を叩く靴の音がよく響いた。

図書館は吹き抜けの二階建てになっていて、三分の二が図書館として機能している。残りの一は図書館に許可をもらえば使用できる会議室や来館者の為の休憩所として機能していた。

優は緩やかな階段を上り、心理学の棚に移動する。

そろそろ棚にある本は全て読み終わってしまったな、と彼は思った。まだまだ知識は足りないのに、読みたいという心はあるのに現実が追いつかないような焦燥感。

夕香と付き合っていく為の勉強。彼女を不快にさせないための知識。

まだ自分は学ばなくてはならない。

嫌われているのは分かっている。

だからといって彼女を不快なままにさせていいわけがない。

「どうしたもんかな……。心が読めれば一番手っ取り早いんだけどな」

本を取ろうとして、優の動きは止まった。視界に入った異物に目を奪われたのだ。

黒いセーラー服に黒いタイツ、オレンジのマフラーをした白いそれ。肌が、あるいは髪までもが輝くような白。瞳は燃え盛る炎のように深い赤。

彼女はゆったりとした動きで、優の取ろうとしていた本を取った。膝の下まで伸びた大量の髪の毛の間から赤い瞳が優を覗く。

「……心が読めれば、こういったものは必要ないのか。わたしはそれは思いません。心の声が聞こえたからといって、会話というツールが必要なくなるわけじゃないです。やっぱり、どこかでソレを理解する為の術すべや経験なんてものは必要だと思えます」

どこか無気力とも取れる間延びした口調で彼女はそういい、次に本を掲げて流暢な英語でテンクスといった。

彼女はのんびりとした足取りで彼の横を通り過ぎ、二階のロビーを抜けた。何故か盗難防止のセンサーは起動しなかった。

「って譲ったわけじゃない！」

優は彼女を早足に追いかける。エレベーターにたどり着くも、既に扉は固く閉ざされていて、上に向かっているとこだった。

そこでふと疑問が湧く。

ここは今いる二階までしかなかったはず。

では、彼女はどこに向かったのか。

そんなことを考えていると上に登ったはずのエレベータがゆつくりと下りてきた。中に乗り込み、ボタンを確認するが、当然一階と二階のボタンしかない。

「オバケ……なわけないし」

ふとボタンを見ると艶やかなプラスチックの表面に指紋が乗っていることに気がつく。指紋の数は一階が三回に二階が四回。

ものは試しと優は一階を三回押して、二階を四回押した。黒い液晶パネルの文字が三を表示し、扉がゆつくりと閉まる。

次に開いた場所はどこかのマンションの玄関前のような所だった。窓はなく、天井の頼りないオレンジの光が足元を申し訳程度に照らしている。

目の前には黒い扉。インターフォンはなく、天井付近に監視カメラのようなものがあった。

ドアノブの上に切手サイズほどの小さく黒いくぼみ。ここにも指紋の跡。

優は興味本位で人差し指をそこに差し込んでみた。ピッと電子音が鳴り、大げさな機械音を立てて鍵が開く。

「なんか、スムーズ過ぎて怖いぞ。っていうか入って大丈夫なのか  
な」

理性と本能が声を合わせて引き返せといった。しかし、優はどうしてもあの本が欲しかった。

もしも、あの本に自分の妹を不快にさせない何かがあったとしたら。

そう思うと、自然に体が動いてしまう。

「えっと、あの、おじゃまします」

優はドアノブを捻り、玄関らしき場所で靴を脱いだ。

中は薄暗かった。壁に備え付けられた弱々しいオレンジ色のライトがぼんやりと道を指し示す。白い壁に手をつきながら、フローリ

ングを進み、奥から漏れる光に近づいた。

奥の広い空間には大量の本棚が陳列していた。天井は高く、また本棚も高い。どの本棚も適当に雑誌やら図鑑を区分なく押し込まれていて、雑然とした感覚を生んでいる。優には本棚の配置すら適当な気すらした。

窓らしき場所にはどれも白生地のカートンが掛かっていて、誰もいない学校の図書室のような静けさがあった。カーテン越しの光だけで室内を照らしているためか、部屋は薄暗い。

奥から人の気配がするの感じで優は進む。すぐに白いそれと出くわした。

本棚に囲まれた中央の開けた空間。巨大なクッションに腰を沈ませながら、癖毛で白髪少女は優の求めていた本を膝の上に乗せ、丁寧に読んでいた。

無気力でどこか重たげなその瞳が優を捉える。そして首がゆつくりと横に傾けられた。

「おかしいです。なんでここにいますか？」

「随分と哲学的なことを聞くんだね」

「いえ、そーゆー冗談はいいです。どうやってここに入ってきたんですか？ 狙いは何ですか？」

低血圧めいた、どこか間延びしたような口調。膝に置かれ、見開かれた本の上で指がタイプを刻むようにカタカタと忙しく動く。

「どうやってって、エレベーターは知力を使って。扉はなんかあの黒い部分に指置いたら勝手に開いたけど……」

「……それは嘘です。あの扉には私と私の家族しか登録されていません。あなたは何らかの外的手段を用いて侵入した可能性が高いです。ですけど、あれはカオス理論を基礎にしたプログラム。鍵と扉の強度は銀行の金庫レベルものです。母のプログラムと母の用意した扉が、私に気づかれることなく、こう易々と突破されるはずないんですが……。本当に、あなたは、何者ですか？」

少女はのっそりと立ち上がり、目に力を込めた。しかし、やはり

どこか眠たげで重い瞳。

「目が悪いの？ 君」

「これは睨んでるんです。敵意の現れです」

「いや、何ていうか。その本、俺に譲ってくれないかな。狙いはそれだけ。あ、読んだらちゃんと君に渡すよ」

「エレベーターのコマンドを理解し、そしてあの扉を突破してくる人がまともなわけないです。故にそれはダウトです」

確かに彼女のいうことも一理あると優は思う。

やましい気持ちがあったわけではないが、確かに優が勝手にこの部屋に入ったことは事実。許可云々という問題ではなく、それは単純にはいけないことであり、何よりも普通はしないこと。

「いや、あの。どうすれば、その本譲ってもらえるかな」

「なんでこの本が欲しいですか？ この本を使ってあなたは何を学ぼうとしてるんですか？」

「……………あの、俺の友達。そう俺の友達がさ」

優は少し嘘をついた。

四角い部屋。白い壁に、紫外線を浴びて薄黄色に染まったクロゼット。シンプルな机にシンプルなベッド。

女気など、どこにもない。

部屋の扉に背をもたれさせて、私は鏡を見た。涙の跡が新しい、キツイ表情をした女が映る。

「汚い顔」

「ごしごしと指でこすり、目を揉む。カンの鈍い兄なら泣いていたことには気がつかないだろう。」

トントんと階段を上がる音に私はハツとなって息を飲む。

それは当然、私の部屋の前で止まり、扉をノックした。

「夕香さん、さつきはごめんなさい。あの、朝食なんですけど……」  
「何で、何で何で何で何で何で何で！ 何で兄が謝っている？ 悪いのはどう考えても私で、変態な私で、気色の悪い私で、兄はこれっぽっちも悪くない。」

「わわわわわ、私が謝らないといけないんだ。私が。」

「学校はどうするんですか？」

控えめの優しい声。

「ああ、最悪。私は今、この状況ですら、兄に、欲情してる。」

「や……………休むわ」

精一杯の答え。扉越しに優の匂いが伝ってくる。爪を噛んで耐えた。

優が私を心配して何か言ってくる。

「休むと言ったのが聞こえなかった？」

私は毒づくようにそう吐き捨て、歯ぎしりをした。

「そうじゃない！ もっとということが。違う言葉が。」

「……………分かりました。じゃあ、学校に連絡しておきますね。ご飯は扉の側に置いてあるんで冷めないうちに食べて下さい」

冷静な兄の声。

一生懸命働いて、私の世話をしてくれているのに私はどうだ。兄を殴って、兄に暴言を吐いて、兄に嫌われるようなことばかり。学校にもいかず我俣をいってばかり。

そこでこの兄の冷たい声。

どんどん嫌われて行く。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。謝ろう謝ろうごめんなんさいって謝ろう。お兄ちゃんごめんねってしないと。

私は何度も深呼吸して、扉を開いた。

「あの、ごめんな……」

兄は既にいなかった。横には湯気を上げた暖かそうな食事があった。どれも私の好きなもので、兄の好きなものだった。

まともに謝ることすらできない。ごめんなさいの一言も伝えることができない。

「くふふふふふ」

馬鹿馬鹿しいほどの、笑みが零れた。馬鹿馬鹿しいほどの辛く苦しい笑みが。

お盆を手に抱えて、リビングに向かう。私の定位置にそれを置き、兄の為にと暖房を入れた。

兄は光熱費を気にして、冬でも冷たい水で風呂を掃除する。終える頃にはいつも手を真っ赤にさせていて、寒そうにしていた。

風呂場の流水の音が止み、掃除が終わったことが分かる。私はさつきまで食べていましたと言わんばかりの自然さで食事を始めた。

案の定、指を自分の吐息で温めながら兄がリビングに入ってきて、不思議そうに私を眺めた。

謝ることはできない。だから、せめて、自分から話しかけよう。

手に汗が滾る。兄がさつきのことを咎めるのではないかという恐怖。急にどなりだすという恐怖。私を嫌いだと言う絶望。

……ああ、馬鹿だ私は。それをしてるのはいつも私の方じゃないか。

「お醤油……お醤油頂戴」

自然に言えたことに心の中でガツポーズ。

私の注文を聞いた彼は忙しなく動き、醤油を持ってきた。私はそれを受け取る。優の指先が私の指に触れた。ひんやりとした指先が

「あの、お味噌汁、お代わりいりますか？」

「……もちろん」

「火にかけるんで、少し待って下さいね」

優はそういつて鍋を火にかけた。

優が鍋を火にかけ、自分の朝食の準備を始めている間に私は汗ばんだ手を拭き、冷汗を拭ぬぐった。

行ってきました、そんな声が聞こえた。

「いつてらっしゃい、お兄ちゃん」

恐らく聞こえはしないだろう声でいう。どっと疲れた体をソファに埋もれさせながら。

首を上げるとカーテンのレースごしに優が寒さに身を縮ませているのが見えた。外は室内より寒いのだろう。

私は、そう私は………熱い。好きでいて好きじゃない嫌な熱さ。優から離れるのが嫌だ。あるいは優が私から離れるのが。

私をこの広い家に一人にしないでほしい。優がいないというだけで、小さな家は迷宮のような広大さを見せて私を困惑させる。広い世界で一人きりになったような孤独が全身を襲う。

何をするにも一人。歩く音すら、心臓の鼓動すら独り。テレビをつけても世界が私を騙すように仕向けた擬似映像にしか見えない。

私から優を取り上げるための罠。お前は独りじゃないと安心させるための暗示。この間にも優を何かが連れ去ってしまうような不安

ああ、孤独だ孤独を感じる。

私は洗面台に行き、冷水で顔を洗った。肌を刺すような冷たさに意識がはつきりとした。

「お薬飲まなきゃ……」

自分の部屋へ向かい、机の引き出しを開ける。中には輪ゴムでまとめられた大量の薬の束。

チープなプラスチックの容器に詰め込まれた、ラムネのような薬。カプセルの薬。コンドームのような四角い包みに入った薬。これは……ピルだから今は飲まない。一つずつ手のひらに開けて、ミネラルウォーターで流し込む。薬を飲んだということだけで気分が少し落ち着いた。

優の部屋に向かう。優の布団を体を巻きつけながらベッドの下にある黒の仰々しいケースを取り出す。

前にこれはなんだろうとネットで調べたら、耐防火防水耐衝撃の特別なケースだった。

「お父さんから貰ったんだっけ……どうだったのかしら」

三桁のダイヤルをいつもの番号に合わせる。七が二つに四が一つ……開いた。

中には二つの通帳と印鑑と、兄が大分前に書いたと思わしき手紙。手紙は今までごめんとしか書いていない。

相変わらず古い通帳には殆ど手をつけていない。新しい手帳には今まで貯めたバイト代が二百万円以上溜まっている。

私はこの通帳を見るといつも不安になる。きっと薬を飲んでいなかったら耐えられないだろう。

常に私の頭の隅にある不安とリンクするのだ。

兄は私がまともに暮らせるようになったら、この古い通帳を突きつけてどこかに消えてしまふのではないかという妄想。

この金があれば、確かに当分生活に困ることはないだろう。生活には。

でもこの飢えと乾きと欲望は、お金では決して満たすことはできない。あの体以外では絶対に。

してはいけないこと……それは分かっている。この欲望は人が呼吸を止めることができないのと同じで、私の性なのだ。

自己嫌悪し続け、兄の体を貪るという性。

「今度、ピルなしでしてみようかしら。妊娠したら……それはそれで」

薬で“ハイ”になっているのか、くだらない妄想と下品な笑いがこみ上げてくる。笑みを噛み殺し、布団とケースを元通りにした。

そして私は母の部屋へ向かう為に階段を下りた。

母の部屋。

床の血は既に拭き取られているけど、まだ化粧台にはカサブタのような黒ずんだ血の塊がこびり付いている。

私と優と一緒に拭いた床の血はもう跡形も無い。その跡、あの臭いは記憶にだけ形を残している。

兄は自分の戒めとして化粧台の血は残すといった。そして現に台にはそれが残っている。

血が。

久々に入る母の部屋はあれからあまり変わっていないようだった。兄が定期的に掃除をしているらしいが、それでもまだあの時のままの空気がそこに停滞していて息がつまりそうだ。

部屋を見渡す。大きなベッドに化粧台と机。地下倉庫の扉。

私は冷たい床に寝そべり、母が死んだ時のカタチを再現する。母はどんな世界が見えていたのだろうか。

床に大の字で仰向けになると、頭の隅からドロドロと溶けていくような奇妙な感覚が私を侵食する。当時の匂い、音、肌感覚、視覚、それらが現在の私に上書きされていく。

喉を切られ、臓物を床にぶちまけた母はどんな顔をして、兄を見ていたのだろうか。

抵抗はしなかった。声も発さなかった。目は開いていて、口はぱくぱくと何かを呟いていて、頬はそう。

「そう……笑っていた」

確かに母は喜び震え、何かに笑っていた。あの時、母は何を思い、何を見たのか。何故、笑っていたのか。

笑った母は直ぐに事切れて、私は兄に抱き締められた。強く強く抱き締められた。泣きじゃくる私を、そうそのベッドの端で。兄は優しく背中を叩きながら、それでもなお強く。

「それから……」

それから兄の言う通りに私は部屋を出て、警察に通報した。兄は少年法のおかげもあってか直ぐに帰ってこれた。

帰ってきた兄は私を抱きしめるとまた強く言った。

一生私の面倒を見ると。これからは私の幸せを一番に考えると。

その時の私はあらゆることに疲れきっていて、心身ともにヘトヘトで、他人は自分を攻撃する生き物としか思えなくて。

だけど、その言葉が嬉しかった。

唯一の私の味方である優の口から発せられた優しいその言葉が、私に嘘をついたことのない兄の言葉が……嬉しかった。

でも当時の私は精神が今以上に不安定で、優しい兄に暴力と罵倒を返すだけだった。心と体の不一致だ。

だけど兄はどんなに殴られても、血だらけになっても、私を抱きしめてくれて。腕を折っても、足を折っても、肋を折っても、私を抱きしめてくれて。

気がつけば私の不一致は根負けしていた。馬鹿馬鹿しいほどの実直さと正直さと反則なまでの笑みが私の拒絶する心を打ち砕き、打ち負かし、討ち滅ぼした。

どうしてだろう。どうして兄のことを思うところまで気持ちが高ぶり、動悸が早くなるのだろうか。

この欲望と情動は何故、何、何なのだろう。

兄のただいまという間の抜けた声が玄関で響いた。

私は冷えた体を震わせながら起き上がり、母の部屋を抜けた。

「あ……、夕香さん。母さんの部屋、入ってたんだ」

「ええ、そうよ。それが何か？」

「いや、別に……」

そういつて目を逸らす。

玄関で鉢合わせした兄は、私が母の部屋に入っていたことに表情を曇らせた。自分の恥部を見られてしまった、そんな顔。

「ねえ、優」

「な、なに、夕香」

「……お前はあの時のこと、思い出したりとかする？」

あの時。

私達にとつて“あの時”というのは一つの答えしかもたない。

「……うん、毎日思い出している。忘れることはできないし、忘れちゃいけないことだからね」

「そう、私も忘れられないわ」

「できれば夕香さんには忘れてほしい」

「なに？」

「何でもないよ。ああ、そうだ。じゃあ俺からも夕香さんに質問」

兄は笑い、頭をかく。ああ薬のおかげでいつもよりも緊張しないし、何より殆ど欲情しない。

それは凄くいいことだ。凄く。

「……俺のことお節介とか思ってたりする？」  
えっ。

それは、一体、どういう、意味、だろう。

兄はどこか気落ちした笑みでそういった。自信を失った子犬のような顔で。諦めのついたような顔で。

その質問は私に対して適切ではない。私は正直に自分の気持ちなんて言えない。故に、それ故に導き出される言葉は確定していて。

それは私が言いたくない言葉で、兄を傷つける言葉で、私と優の距離をより隔てるもの。

ああ、なんて神様は残酷なのだろう。あるいは優が？ 優は私にそう、言わせたいのか？ 私から逃れる為に？ 自分の罪から逃れる為に？

或いは或いは或いは！

私が嫌いだから？

「……お節介どころか邪魔者だと思っているわ。それが何？ まさか、自分は好かれているかでも思っていたの？ 気持ち悪い。好か

れるような人間でもないでしょうに」

「うん、まあ、そうだよな。うん、ごめん」

違う違う違う違う違う！ そうじゃない。

呆れないで。そんな顔で私の側を通り過ぎないで。私を独りにしないで。私を嫌わないで。私に絶望しないで。

距離が、開いていく。私と兄の距離が。

「お昼、作りますね」

兄はリビングに消えた。

それは“ハイ”な私にとって、最高のバッドトリップだった。

何が問題だった？ 何がそうさせた？

いつもの兄ならそんなこという筈ない。いつものように笑って、いつものように私に話しかけてくれるはずで。

あんな質問、兄がするはずない。では……何が。

世界の崩壊。壊れゆく私の世界。砕け散る私の大切な世界。

それは常に外側からやってくる。きつと今回も外から。

優に嫌われた、兄に嫌われた、彼に嫌われた。

どうしよう。

「そこであの子にあっただね」

「そうです。あの目の赤い彼女にそこで、あってしまった。……今思えばですけど、なんか偶然じゃなかったような気がします」

「とうとう？」

ソレは視線を落として膝の上の自分の指を眺める。

何に震えているのかは彼にもソレにも分からない。

「だって俺は何度も図書館に通ってた。彼女は館内を監視カメラでいつでも見ることができたし、俺のことを知らないはずなんてなかったんですから、偶然はおかしい気がするんです。まあ、それも今となっては分からないことなんですけど」

そういつて無理に笑い、顔を上げた。

アルビノの彼女。目が赤く、白金ともブロンドとも取れる癖毛に覆われた少女。

全ての始まりであり、終着点でもある彼女。

あのままの生活がソレにとってよかったかは誰にも分からないし、彼女が現れたことを悪かったかといえば、そうとはいい切れないと男は思った。

いえるならば、そう。

全ての巡り合わせが悪かった。

あの時のように。

「彼女と出会ったことは君にとってどういう変化をもたらしたと思う？」

「そうですね。俺の行動を思い返してみると、少なからず好意的に思ってたんじゃないでしょうか。夕香は非常にそれを嫌がってたし、嫌ってたみたいですけど」

「そういえばあの子と夕香ちゃんは仲が悪かったんだってね」

「私、あの人のこと大っきらいです！ 私はあるままだってほしか

った！ あのまま変わらない日々を過ごさせて欲しかった。あのま  
ま兄と二人だけにしてほしかった……」

いつの間にか夕香がそこにいた。彼女は兄を押しつけて強く訴え  
かける。両手を何度も強くテーブルに叩きつけ長い髪を振り乱す。

対照的に男は静かな声で夕香を窘めた。

「……でも、いつかは終りが来るんじゃないかな。どんなことにも  
ね。それが今回みたいな形だったんじゃないかな。僕は思うけど」

「でも、でも私はあんなこと思い出したくなかった。掘り返したく  
なかった！ 忘れたままでいさせてほしかった。私達はひっそりと  
そっやって暮らしてきたのに、周りの目にも耐えながら一生懸命生  
きてきたのに、あんな酷いことをいうなんて……！ あの人は自分  
の欲しいものを他人が持ってたから奪った。それだけです。先生も  
そう思いませんか？」

興奮気味の夕香は全身を怒りに震わせ、今にも飛びかかりそうな  
勢いでいう。

それをみた男は静かに席を立ち、荷物を手に取った

「今日は元気が有り余ってるみたいだね。少し、時間を置こうか。

夕香ちゃんの話はまた今度聞くよ」

「先生！ まだ私は話がっ！」

「お兄さんの方も次の機会にね」

「つまり、あなたのお友達が心の病気であなたはその方……話を聞いているようですと女性さんのようですが、その方を自分の不注意から怒らせてしまったり不快にさせてしまうことがあるので、付き合い方を学びたいと」

「うん、まあ」

気怠そうな赤い瞳の彼女はクッションに腰を下ろし、優をじっと捉えていた。警戒はまだ解かれていない。

優も彼女から少し離れた本棚に背を預け、床に腰を下ろしていらた。それは自分には敵意がないということ、何か危害を加えるつもりはないということの意味する為でもあった。

「それは女性さんがあなたに頼んできたことですか？」

「いや、俺が自発的にやつてることだけど……」

その言葉に彼女は首を傾げた。癖のついた大量の髪の毛がクッションの上でさらりと散らばる。

「頼んでいないのに、求めていないのにこれが正しい、これがいいはずだと思っしてしていることはただのお節介ですよ。それで何か変わりましたか？ 何か変わったんですか？ 上手くいかないのは、自分の知識が足りないからだ、と自分に言い訳していませんか？」

それに自分に向けられた優しさや言葉が意図した効果を狙ったものだと知ったら、私なら悲しーですし酷いと思います。泣きます。それに話を聞いていると、女性さんを傷つけないようにというよりも自分が傷つかない為に……という印象を受けました。違いますか？」

緩やかな指摘。しかし、その言葉は恐ろしいほどの鋭さを秘めていた。

優は即座に反論しようとするが、何も浮かばずその場で固まった。そして一言も反論することのできない自分にショックを受けた。

妹の為と言いながら俺は自分自身の為に動いていたのか？

優の気持ちを知ってか知らずか、白い彼女は言葉を続ける。

「つまり、あなたは女性さんに暴力を振るわれるのが嫌なんです。不安定な、ダイナマイトのような彼女が怖いんです。そして彼女の呪縛から早く解き放たれたいと思っている。彼女が自立できるよーになって、自分が必要なくなっただけいいんです。その為に心理学を学ぼうとした。彼女の為……なんて綺麗な言葉で言い繕っても現実は何も変わりません」

そうきっぱり彼女は言い切った。

優は車酔いにも似た吐き気に見舞われ、脂汗を額に浮かばせた。じっと見つめる彼女の目が恐ろしくて、優は口を押さえて俯く。

「あなたは」

「もう、勘弁してくれないかな。君の言いたいことはわかった」  
そして自分の浅ましさを薄汚さも。

自己中心的な自分のことも。

彼女はゆっくりと立ち上がると、彼に近寄り、本を差し出した。

「不快にさせたのなら、ごめんなさいです。表情から察するに先程のこの本が欲しいという話や今の話は本当だったみたいですね。ですから、これはお詫びです」

「ありがとうございます……」

優はそれをおさらずと受け取り、複雑な表情のまま頭を下げた。

自分の信じていたこと、していたことを全否定された後に、無駄だと言われたあとに受け取る意味のなくなった本。

彼にはそれが煩わしいくらい重いように感じられた。

「でも、本心です。それを忘れないでほしいです。あなたの名前は？」

「俺は優。優しいのユウ」

彼は一瞬、自分の苗字を明かそうとしたが、名前に留めた。それはまだ自分たちのこと、あの事件を覚えているものは多いということを知っていたからだだった。

些細なことで好意が、あるいは友情が軽蔑や恐怖に変わる。それ

を優は経験から身に染みるほど理解していた。

彼女は優の名前を聞いて一瞬、眉を持ち上げたが、優はそれに気がつかなかった。

「……奇遇です。わたしの名前は優月<sup>ゆづき</sup>。優しい月と書きます。優しい父と偉大な母の名前です」

「俺も……父さんの名前を一文字もらったんだ」

「凄い偶然です。同じ町で同じような名前で同じような由来を持った人間が出くわすなんて。奇跡です」

優月はカタカタと太ももの辺りで指を動かし、小さく微笑む。優には優月が高速でその確率を計算しているコンピューターのように見えた。

「……もう帰るね。本、ありがとう」

「はい、さよならです。本は受付に回すと面倒なので、直接私に返しに来て下さい」

別のことに集中しているのか、気の抜けた返事を彼女は返し、優はその部屋を後にした。

カーテンごしの柔らかい光に包まれた少女はどこまでも白く、そして神秘的だった。

先程よりも幾分か賑やかになった図書館を横目に外を出て、目を瞑り、深く息を吸った。

不意に彼はマフラーを部屋に忘れたことに気がつくが、今更取りに戻ろうとは思わなかった。

それは何故か。

彼女に自分のことを指摘されたからか。

自分の心の一面を見てしまったからか。

もうこれ以上自分の心を犯されなくなかったからか。

分からないし、分かりたくない。

ただ、彼は今直ぐにでも泣き出し、図書館に背を向けて走りだしたかった。しかし、それは彼女の言った言葉を認めてしまうことに

等しいような気がして、彼にはできなかつた。

来た時と同じような足取りで図書館の敷居を出て、コンビニに向かう。どこか義務的に妹のヨーグルトを買った。

家に向かう足が重い。行き交う人々の足音や車のエンジン音が自分と世界を分かち別の何かに思えた。

体が浮遊しているような不安定感。自分の体が透けているような違和感。

彼女のいったことを否定するのは簡単だ。

しかし、それは自分のわだかまりを拭い去ることにはならない。

妹に嫌われていた自分、自分のことしか考えていない自分はそこに残り続ける。

「ああ、そうか。だから……」

だから俺は妹に嫌われていたのか。

「自分ことしか考えてないから、そっか。見透かされてたんだ、俺。自分は何て酷い人間なのだろうと彼は思う。」

妹の為にいいことをしていると思い込んで、妹を傷つけていた道化。

妹は自分の為にあんなにも頑張ってくれているのに、妹は自分の為にあんなにも頑張ってくれたのに。

「それに比べて俺は自分のことばかりだ」

自宅の扉の前でドアノブを握ったまま固まる。手が石のように動かない。

彼は再び、深く息を吸って中に入った。

どう彼女に接していいのかイメージが湧かない。何をしても彼女を傷つけてしまうような気がした。

「ただいま……」

シンと冷えた廊下。沈黙以外の音はない。

「嫌いな奴の為に出てくるわけ、ないもんな。あはは……何で俺、いつも気がつかなかつたんだろ」

靴を脱いでいる途中、すつと扉が開き、玄関に妹が顔を出した。  
母の部屋から。

儂げに手を壁に添え、彼女は視線を持ち上げて優を見つめる。自然と胸が鼓動を強く刻む。

その部屋で何をしていたんだと、その部屋で何を考えていたのかと。

優は内側のさざ波を隠して、無理やりに微笑んだ。

「あ……、夕香さん。母さんの部屋、入ってたんだ」

何をしていたんだという意味を含めて夕香に問いかける。しかし、彼女は相変わらず愛想のない答えを返すだけだった。

「ええ、そうよ。それが何か？」

小さな溜息をついて、気怠そうにいう。無駄なことに時間を喰ったとでもいたげな表情。

また俺は妹を傷つけた。

先程の白い少女の言葉が頭の中で反響しかける。自分の汚らしさが頭になりかける。

ただそれだけのことなのに、それが彼には恐ろしかった。

「いや、別に……」

どんなことをしても彼女を苛立たせる結果にしかならないと考え、彼は静かに靴を脱ぐとリビングに向った。

自分よりも背が高い妹の横を通り過ぎようとして……止まる。それは夕香が優の二の腕を掴んでいたからだだった。

背筋が凍りつき、胃がビクビクと跳ね上がる。

殴られるのではないかという恐怖。自分が何かしてしまったのではないかという恐怖。

沈みがちな瞳を持ち上げて、夕香は囁く。彼女の後ろは母の部屋で、母の死んだ部屋で、忌まわしい過去のある場所。

「ねえ、優」

「な、なに、夕香」

「……お前はあの時のこと思い出したりとかする？」  
あの時のこと。

俺と夕香にとって“あの時”というのは一つの答えしかもたない。  
「……うん、毎日思い出している。忘れることはできないし、忘れ  
ちやいけないことだからね」

忘れられるわけがない。

忘れることができない。

忘れない。

全てが変わってしまったあの日、いろいろなものを失ってしまった  
たあの時を。

夕香は優の手を離すと自分の二の腕を掴み、視線を落とした。

「……そう。私も、忘れられないわ」

「できれば夕香さんには忘れてほしい」

全て、夕香には。

不意に優の中の奥底で火が灯る。炎はぼうつと暗闇を照らし、傷  
だらけの心の壁を見せる。

側には白い白い彼女。目の奥は燃え盛るような紅蓮。その瞳は彼  
を捕らえて逃がさない。

彼女はいう。空を漂う雲のような声でいう。

偽善者、自己中心的、エゴイスト、嘘つき。

あるいは妹のことなんて何とも思っていないんです、と。

あるいは自分のことしか考えていないんです、と。

「なに？」

「何でも、ないよ。ああ、そうだ。じゃあ俺からも夕香さんに質問」  
その言葉は口にするなという声が頭の中で響いた。答えを急ぐべ  
きではないと。

しかし聞きたいという欲求、理想通りであってほしいという声は  
それを掻き消した。

希望に縋ろうと彼の心は必死に理想を求める。

「俺のこと、お節介とか思ってたりする？」

問い掛けに夕香は目を見開いた。そしてどこか神経質的に視線をさ迷わして、唇を歪めた。

三白眼の鋭い瞳が優を射抜く。

嘲笑。

侮蔑。

軽蔑。

皮肉めいた頬の歪み。イビツなユガミ。

「お節介どころか邪魔者だと思っているわ。それが何？ まさか、自分は好かれているとでも思っていたの？ 気持ち悪い。好かれるような人間でもないでしょうに」

「うん、まあ、そうだよな。うん、ごめん」

答えは分かっていた。

分かり切っていた。

嫌われていることも、自分が汚い人間だということも。

優月の言葉も分かっていた。

ただそれに気がつきたくなかっただけだった。

自分は少しでも綺麗で正しい人間でありたいと願っていただけだった。

だが、分かっているとしてもそれはとても重く、そして鋭く彼の体を射抜く。

「……お昼、作りますね」

そういつて優は無理に笑い、リビングに消えた。その後ろ姿を夕香はじつと睨んでいて、自ら握った二の腕は血で滲んでいた。

バイトのない日、自室で優はプラモデルを並べていた。ポージングさせたり、作り上げたものを並べたりするのが優の心休まる時間だった。

優の趣味はプラモデルだ。仮組みのままのものが多く、中にはきちんとデテールを弄り、塗装した物もあった。

いろんな角度から眺め、またポーズを変える。それだけで彼は至

福の時間を味わえた。

宝石を愛でる貴婦人のように、彼にとってそれは宝石であり、宝物だった。

「次はこれ塗りたくないなあ」

塗装は夕香が学校にいつている日にするのが暗黙の了解。彼女は塗装の匂いに敏感で、その匂いが嫌いだった。

かちやりと音がして、優は後ろを振り向く。机の上ではロボットのプラモデルが銃を構えて睨み合っている。

「夕香……さん？ え、ちよつと」

無言で部屋に踏み込む彼女は、着替え直したのか、優の灰色のスウェットを着ていた。

何らおかしいことはない。彼女がそこにいることは。

夕香は優の趣味がそういうものだということを理解しているし、それを許容していた。彼女に迷惑をかけた覚えも彼にはなかったし、彼女にもその覚えはなかった。

何らおかしいことはない。彼女がそこにいることは。

その手に鈍く光るバットが握られてさえいなければ。

「うつつうつつうつつうつつうつつ！」

唸り声を上げて夕香は力強く前へと進む。優は立ち上がろうとするが、彼女の蹴りに椅子ごと倒れ、頭を打った。

彼女は机の上に並べられたプラスチックの人形を睨む。

「こんなものがあるから、お前は！ こんなものが！」

振り上げたバットをプラモデルに振り下ろす。ベキリつと小気味良い音がしてプラスチックが宙を舞った。次になぎ払うようにバットは振られ、人形は壁に押しつけられ、ひしゃげた。

大切なものがゼロに変換されていく。形あるものが形ないものへと変換されていく。

優はベソをかきながら夕香の足を掴んで止めさせようとする。しかし即座に彼女の拳が優の頬を突き、彼はその場に倒れた。

彼女はそのまま獣のような唸り声を上げてプラモデルの箱を踏み

つぶし、中身を床にをぶちまけ、一つづつ念入りにバットで潰していった。

「ど、どう……して」

「お前は、私の面倒を一生見るといったわ！ だから、お前にこんなもの……いらないう！ 私の幸せを一番に考える、そうでしょう！？」

潰す、潰す、潰す。

小さな色鮮やかな粒に、ガラクタになって、プラスチックの破片は宙を舞い、床をサイケデリックな色に染める。

何時間もかけて作ったもの。何日もかけて作ったものが全て等しく踏みにじられてゆく。

優は頬を抑えながらただそれを呆然と見つめていた。

押し入れにしまったプラモデルも無理矢理に引き出され、引き裂かれ、跡形もなく潰されていく様をただ啞然と眺めた。

「これもこれもこれも、全部いらない！ そうでしょう？ お前には何もいらない。……私のことを考えていればいい。そうでしょう？ お前は、私が一番なのよね？ 私が一番大切なのよねえ！

私が、この私が……！」

息も絶え絶えな彼女の手からバットがこぼれ落ち、カランとその場には不釣合いな音を鳴らした。

静寂。

彼女の息以外の静寂。

彼女は静かに振り向いて、唾液を飲み込み、汗を拭った。

「ねえ、そうでしょう？ なんとか……いいなさいよ」

「……………」  
破片の海の中で優と夕香だけがその場で人の形を保っていた。

before | 9 (前書き)

本当に一瞬考えた話。

「来いよ、夕香！ 武器なんか捨てて素手でかかってこい！ 俺が

怖いのか！？ 腰抜けめ！」

「わ、私はお前なんか怖くない！」

先生の次回作にご期待下さい。

兄はきつと私のことをきつと嫌いなのだと思う。

昼食。味はしない。

何を食べたのかすら分らない。ただ私は兄の顔をじつと見続けていた。

背中、あるいは後ろ姿、あるいは椅子に座り、正面から兄の姿を捉えた。でも兄は私を見ようとはしない。嫌いな私のことなど見ようとしなない。私と一緒にいることに酷く気まずそうな顔をして、何も言わない。

食事が終り、私はいった。

「片付け、たまには私がするわ」

すると彼は目を見開いて、それを断る。

「いや、いいよ！ 俺が、俺がやるから！」

私がおものを受け取る時に手が触れてしまうと、彼は慌てて手を引っ込める。そして笑う。

「ごめん」

「いいわ」

腫れ物を扱うようなその行動。触れることすら忌避する優のその行動。

私の中の風船はどんどん大きくなっていく。

彼がプラモデルで遊んでいる間、少しでも役に立とうと洗濯物を乾燥機に入れておいたり、細かな掃除をした。

兄に褒めてもらいたくて、私はそつと部屋を尋ねた。

セリフはこうだ。洗い物はすぐに乾燥機に入れなさい、お前は細かい掃除ができてないのよ、だから私がやっておいてあげたわ。

何度も練習した。これならきつと上手いくと思った。笑って褒めてくれると思った。

思ったのにドアの隙間から覗く彼は、既に笑っていて、綺麗な目をしていて、オモチャを弄って一人嬉しそうにしていた。

嬉しそうに一人で。

一人。

独り。

私が独り。

私を置いて嬉しそうに笑う。私といる時には見せなかった笑み。私と一緒にいる時にはなかった笑み。私のことが嫌いな兄の美しい笑み。

その微笑みも私に向けられたものではなくて、小さなオモチャの人形に注がれている。

いつそ憎ましいと思ったかった。そうすれば私は自由だ。何にも悩むことはない。

だけど、だけれど私の体は優を欲していた。優を滅茶苦茶にしたいと、縛り上げて犯し抜きたいと思っていた。監禁して強姦したいと。

優の泣く顔がみたい、優の達する顔がみたい、優の絶望、渴望、諦め、情欲。

「……………っ！」

それが私は許せなかった。それが私に怒りを湧き起こした。

風船は大きな音を立てて割れ、怒りは外に漏れる。

私はどこか冷めた気持ちで地下倉庫からバットを出した。ゆっくりと階段を上る。

白んだ朝日とは違い、午後の緩やかな光。少し眩しい。

私はノブをひねり、中に入る。進む、進む。

「夕香……………さん？」

体の中の情動を全て怒りに変換する。バットを握る手に力が籠る。

「え、ちょっと」

いらぬいらないいらぬいらないいらぬいらないいらぬいらないいらぬいらない！

彼には何もいらぬ！ 全てゴミで必要のないもの。  
それも、これも！

「うづうづうづうづうづうづうー！」  
立とうとする兄の椅子を蹴り、横に転ばす。そして机のオモチャに狙いを定める。

彼の大切なもの、兄のお気に入り。

「こんなものがあるから、お前は！ こんなものが！」  
大切なもの、それは分かっている。  
だから、なに？

バットで一気に脳天から押しつぶし、次に横に並んだ奴をスイングして壁に叩きつけ、押しつぶす。

プラがチープな音を立てて砕け散っていく。形あるものが形ないものに変換されていく。

はつきりいつて爽快だった。何かを蹂躪するということにも、優のぼかんと私を見る表情にも。

直ぐに優が私にしがみついてくる。優の生暖かい腕。  
しかし、今はいらぬ。

私は優の顔に向けて拳を振った。優は軽く吹き飛び、その場に転がった。

「ああああああああああああああ！」  
横に積まれた箱も踏みつぶし、バットでくしゃくしゃに歪める。  
優は酷く不思議そうな顔で呟いた。

「ど、ど、ど……して」「ど、ど、ど……して？」

それをお前がいうのは酷く変な話だ。

「お前は、私の面倒を一生見るといったわ！ だから、お前にこんなもの……いらぬ！ 私の幸せを一番に考える、そうでしょう！？」

私が兄にとって嫌いな存在になるなら、好きな順から消していく。上から順に潰していけばいつかは私が一番上にくる。私だけを見る

よくなる。

だからこんなものはいらない。これもあれもそれも。

私以外に生きがいを感じなくていい。そうすると優はいったんだから。

でも何故私は、こうまでして。

ああ、なるほど。

うん、馬鹿だ。私。

兄が好きだったのか。兄に恋していたのか。優しい兄を、私に微笑んでくれる兄を恋慕していたのか。

一人の男性として。

今更……本当に今更気がついた。傍から見れば酷く滑稽だっただろうに。

兄は私のことを好きなのだろうか。私が告白したら兄は受け止めてくれるだろうか。

私は泣き笑いのようなよく分からない表情を浮かべて兄に振り向く。肩で息をしながら汗を拭いた。額についた髪の毛が煩わしい。

優お兄ちゃん、夕香はあなたのことが好きみたいです。

あなたも夕香のことを好きですよね？

「ねえ、そうでしょうか？ なんとかっ……いいなさいよ」

優、兄さん、お兄ちゃん。

そのつぶらな瞳、柔らかい唇、滑らかな肌、全てが今……いやず  
っと前から愛おしいと思っていた。

胸のつかえが取れたような心の軽さに、何でもできそう。

お兄ちゃん、私。

私ね。

「優、私……」

壁際で尻餅をついている優ににじり寄る。逃がさないように優の  
顔の両脇に手を置いた。

「私は……!」

顔が近づく。

……息が追いつかない。  
起きている兄とここまで顔を近づけるのは久しぶりで、鼓動が……

匂いが、兄の息遣いが、艶めかしい兄の兄の唇、全てが眩しい。

「夕香、俺……馬鹿だ」

「え?」

え?

だって、そんな。

なんで、優の方から抱きしめてくれるなんて、そんなそんな。

ああ、だめだ。嬉しくて、涙が、声が。

「ごめんね、今まで気がついて上げられなくて」

そういつて頭を撫でてくれる。

私の方が背が高く、肩幅も広いのに、優は一生懸命私を抱きし  
めてくれる。

あの時のように。

母が死んだあの時のように。

温もりが、優しさが私を包みこんで、全てを溶かしていく。

「プラモデルは全部捨てるよ。それが夕香さんのためだもの。あはは、今日から俺は生まれ変わる……なんてね」

「ふざけないでっ……わつたしは……本気で！」

「うん、分かってる」

交差する優と私の視線。優しい兄と鋭い私の視線。私の死線。

「ねえ、優。キスしていい？」

「え？」

返答は待たない。唇を押し付ける。

優は一瞬困ったような顔をして身を固まらせたけれど、直ぐに私に委ねた。私はついばむように何度もキスを浴びせる。

首筋から流れるように、耳へ。

「ふあっ」

兄の喘ぎ声。堪えようとして漏れた甘美な悲鳴。

私はもう一度優の唇に私の唇を重ね、舌を差し込んだ。

「わっ！ 夕香さんそれはちょっと……」

優は目を見開いて、肩を押す。温もりから私は強制的に開放された。

私を拒否する優に少しショックを受けた。餌を前にお預けを喰らった犬のように、それはもう悲愴的に。

私は私のミスを誤魔化すように、取り繕うように視線を逸らして髪を掻き上げた。

「そ、そうね。急に、これは変よね。悪かったわ」

もっとムードのある場面がいいのかもしれない。確かにそれは私も望むところで、私もそういうのが嫌いなわけじゃない。寧ろそれは。いや、がつつき過ぎたのかもしれない。急にそれは確かに変、かも。舌は流石に、うん。でも。

でも今は早く、優に触れたかった。

奇妙な焦燥感。じれったさ。目の前にそれがあるのに、触れられない。薄い布を隔てたような、そんな苛立ち。

暴力に身を任せて、無理矢理に先へと進みたい気持ちになるも、

がつつき過ぎて優に嫌われたらそれこそ私は崩れてしまう。だから慎重に進めることに私は決めた。

軽く息を吸い込んで、言った。

「あ、あの優、今晚は精のつく料理にして、ちょうだい」

優はにんにくを電子レンジで加熱したもののやら牛肉のステーキを作ってくれた。私は対面する彼に目もくれず、女性らしさを忘れてバクバクと口に含む。精をつけなければならぬのだ。今日ばかりは。

黒胡椒と醤油ベースのソースが舌の上に広がる。仄かなバター香り。

優の料理は相変わらず美味しい。

「何見ているの？ お前ももつと食べなさい」

「……うん」

食事が終わり、優がお皿を洗っている間に私は自室でうんうんと唸りながら計画を考えた。絶えず悩み、布団にくるまり、その後のことを考えてだらしない笑みを浮かべたりした。それはもう、人に見せられないほど恥ずかしいもので、自分が見ても恥ずかしいものだった。

「結局、優はゴム派なのかしら……でも、ピルもあるけれど」

一応、後で買いに行こう。そういえば栄養ドリンクも買ってなかった。

「しかし、どうしよう」

私は部屋の中央に広げたそれをみた。

黒のガーターベルト。いやらし下着。以前、ショップで衝動買いたしたもの。どんな彼氏もこれでメロメロ、というポップに釣られて買った下着。一度つけただけで、タンスの肥やしになっていたそれ。感嘆にも似た、ため息をついて私は頬を赤くした。実にそれは卑猥で、女性的だったのだ。

「淒くやらしい」

不意にコンコンと私の部屋の扉を叩く音がして、私は小さく縮み上がった。

下着を即座に丸めてクローゼットに押し込む。

当然、相手は優で。

ちよつと早い、まだ心の準備が。

私は光悦して赤くなる頬を咳払いで抑えこみ、大きく息を吸った。  
「な、何？」

いつもよりも一オクターブ音質が高い。期待が抑えきれない。

「あの、夕香さん。お風呂が湧いたんですが……」

「……今日はお前の次でいいわ」

「え、あ……ありがとうございます」

伝え終わった優は扉を閉めて、部屋から離れた。私は急いで、扉を開けて、優の背中に向かっていった。

大事なことを忘れていた。

「優！」

「ん、どうしたの？ 夕香」

そういつて優は振り向き、微笑む。

私は何だか恥ずかしくなって、扉に顔を半分隠した。

言葉の端にそういう意味を含めて私はいう。

「あの、ちゃんと……ちゃんとしっかり体を洗うのよ。隅々までちゃんと」

「あ、うん」

扉を閉めて、ベッドに倒れ込む。止まっていた息を再開して、布団にくるまり、悶えた。

優は私のことを淫乱な女だと思ったのだろうか。だとしたら少しシヨックだ。でも、大事なことだ。他人と肌を合わせるのだから、互いに初めての相手になるのだから、肌は清潔にしなくてはならない。夫婦で言えば初夜になるのだから、それはもう。

その後のことを考えれば、これくらい恥はなんてことはない。

寒い外から暖かい我が家。

私はコンビニのビニール袋を片手に、家にかかる。走ってきたからか、家の暖かさが少し鬱陶しい。

兄はまだ風呂に入っているようだった。私は脱衣所のノブを捻る。開いた。

「また、閉め忘れ」

ザアザアとシャワーの音。一枚ガラスを隔てた向こうに優がいる。私は彼を想いながら脱衣所に置かれた下着を口元に寄せて、匂いを嗅いだ。内股の部分をべろべろと舐め回す。いつもの味がした。

ふと、本当にこれは閉め忘れなのだろうか、という疑問が湧く。優は実は私に襲われたくて、鍵を開けていたのではないかと。いつも私に襲われることを待っていて、だから鍵を開けていたのではないかと。

ならいまここでガラス戸をこじ開けて、風呂場に入り込むのが一番正しい選択じゃないだろうか。

強く心臓が胸を打つ。

「そうじゃない」

落ち着け、私。

ここで優を犯し、その選択が間違っていた場合、優に嫌われでもしたら私はどうすればいい？

急がず慎重にことを運ぶべきだ。

セオリー通りちゃんとやろう。

手順は何度も頭の中で反芻した。女性誌にあった記事を思い返す。ファッション誌に書かれた、それを思い出す。

でも。

「……でももし、全て私の勘違いだったら？」

兄は私のことなんて興味がなくて、いつものように可哀想な人間に手を差し伸べただけだったら？ 私が一方的に勘違いしているだけだったら？ 誰かの罪を自分で被るような人間だ、それもあろう

る話。

あれ？ そういえば、兄から決定的な言葉をまだ私は聞いていない。好きだとか、そういう言葉をまだ。

「勘違いだったら？ そんなの簡単じゃない」  
「だったら犯せばいいだけ。」

殴って黙ったところを強姦すればいいだけ。喋らなくなるまで殴って、嫌がる優を犯せばいいだけ。

今更、抑えは効かない。兄を暴力で踏みにじって、暴力で兄に言う事を利かせることができる。知った私にはもう引き返せない。

でも、それはそれで楽しそう。とても。

私はあることを思いついて、優の着替えの上に栄養ドリンクを置いた。

「これを飲まなかったら……」

妹はきつと俺のことが嫌いなのだと思う。

だから壊す。大切なものを。

だから壊す。俺の心の支えを。

だから壊す、壊す、壊す、壊す、壊す。

犯す。俺の心を。

辛い。

でも俺は逃れられない。逃げない。

そう自分で決めたから。

夕香の為に。

静寂が支配する空間で、優はひたすらに“何故そうなったか”を考えた。

何故、妹が暴れたのか。何故、妹が自分の大切なものを壊しているのか。何故、妹が狂気に染まっているのか。

そして、何故妹がゆっくりと近づいてきているのか。

ナメクジが地面を這うようにそれはゆっくりと、そして確実に逃げ場を無くすように近づいて来ていた。

「優、私……」

猫のように、手と足を地面につけて優に近づく。しなやかな四肢は窓から漏れる光を鈍く反射して淫靡な様を見せる。

優は一度立とうと試みるが、夕香の手は彼の顔の両脇を捉え、それを遮った。

「あの……夕香さん」

「私は……！」

顔が近づく。二つの黒真珠のような眼が優の目の中を覗き込む。

相手の瞳に映る互いの瞳。

俺は何かしただろうか。

何かした？  
した。

妹を傷つけた。

妹の為だと思っただけでやってきたことは結局は自分にしていたことで、妹のことを考えたものじゃなかった。

そう優は思い、考えた。そして自分は見透かされていたんだという事に気がつく。

イコールで妹の行動の理由にも繋がりに、彼は静かに納得した。母の部屋に顔を出していたそれもきつと要因の一つ。

そしてお節介かどうかという質問。

彼女はお節介だといった。しかしそれは独りでも大丈夫だというわけではない。孤独に耐えられるというわけではない。どんなに憎らしく嫌悪している対象だとしてもそれが居なくなり、距離を取るようなことをすればきつとそれは辛い。

優はそう考えた。

俺のことは嫌いだけど独りじゃ寂しいんだ。

距離を取るようなことをすれば、嫌いな相手からされたことだとしても傷つく。

また傷つけてしまったと。

きつと今はどうしていいのか混乱しているのだと。

「夕香、俺……馬鹿だ」

「え？」

優は静かに夕香を抱きしめた。

どんなに嫌われても自分は絶対に彼女の元を離れない、そういう意味を込めて強く抱きしめる。

華奢な彼女の体は優の腕の中にすっぽりと隠れ、隣り合ったパズルのピースのように一つになる。

優は長く美しい髪を傷つけないように抱くと、片方の手でゆっくりと夕香の頭を撫でた。

「なんで……だって」

「ごめんね、今まで気がついて上げられなくて」

そうすることに夕香の体温はどんどん高くなり、感情の防波堤は決壊した。

その言葉が決め手だった。

「俺は、どこにも行きません」

「うわああああああん！！」

夕香は子供のように泣きじゃくり、瞼から涙を零した。

答えを返すかのように夕香も強く抱き締め返す。それを優は苦笑しながら優しく背中を叩いて返した。

数分経ったのか数秒経ったのか曖昧な空気の中、夕香はしゃくり上げながら優を見つめ、鼻をすすり言った。

「……ねえ、優キスしていい」

「え？」

彼の返答もまたず、その唇は距離を零にする。

優は目を丸くし、困り顔をした。夕香は目を瞑り、鼻がぶつからないように顔を傾ける。

家族ではよくあることだと彼は自分に言い聞かせて体の緊張を解くが、何か違和感のような相容れないものを感じた。

彼女は唇を離すと頬から首筋、そして耳にかけて愛撫にも似たキスを優の体に浴びせる。

くすぐられるような、痒いような歯がゆい感覚に身悶え、堪えつつも優は声を漏らす。

「ふ　ふあっ」

夕香はもう一度唇を合わせ、優の反応を探るように舌べろを差し込む。その彼女の反応に優は大きく目を見開き、手でやんわりと夕香を拒絶した。

「わっ！　夕香さんそれはちょっと……」

「そ、そうね。急に、これは変よね。悪かったわ……」

彼女は少し慌てた表情で優から視線を落とし、髪を掻き上げて体

裁を取り繕う。

そして独りで何度か頷くと急に立ち上がり、いつもの気丈な夕香の表情で口を開く。

「優、今晚は精のつく料理にしてちょうだい」

その瞳には力が籠っていて、声は凜と張っている。

だが目は赤く充血していて、その下にはクマ。声は鼻声で、シャープなその鼻の先は赤かった。

夕飯。

夕香は傍目から見てもギラついた目でステーキを文字通り貪っていた。

優は箸を止めて、その食いっぷりに唾然としていた。

というのも普段から夕香は作法や食べ方というものに口うるさい方で、優も普段から夕香に合わせて品のいい食べ方を心がけていた。そもそも夕香はそういう食べ方を恥と捉えていたはずだった。

「何見ているの？ お前ももっと食べなさい」

「……うん」

そういつて夕香は口端についたソースを舌で男らしく拭う。優はまた心の中で仰天した。

彼女の無言の圧力に優も食事を再開。テーブルの上のんにくを電子レンジで蒸したものを口に運ぶ。

「おかわり」

「あ、はい」

三度目のおかわりに優は皿を受け取り、台所に向かう。輪切りのステーキをフライパンから皿に移した。

明日の弁当用に取っておいた牛肉がこれで完全に消えたなと優は思った。

「ところで、お前は激しい運動とソフトな運動……どっちが好き？」

「……俺は運動が得意じゃないんで、優しい方が好きですね」

「ソフトな方、ね。うん、大丈夫」

「何が大丈夫なんですか？」

「運動よ」

そういつて彼女はつんとした顔で黙る。台所に目を向けている優は気がつかなかったが夕香の頬は赤く染まっただけで、頬は薄笑いがあった。

優は内心どうということだろうと首を傾げるが、結局分からず思考を放棄した。

「はい、おかわりです」

「んっ」

夕香はまたガツガツと食べる。突然その動きを止め、顔を上げた。

「そういえばお前は今まで彼女ができたことはなかったわね」

「え、あー……まあ」

「今の間は何？」

夕香の鋭い目尻が細まり、優は慌てるようにいった。

「いやですね、俺この数十年で一度も彼女がいなかったんだなあと  
思うとちよつと虚しいなとか思ってますね。まあ、今は夕香さんが  
俺の彼女の代わり、なんて」

「なっ げほっ！！」

「わわわ、ほら夕香！ 水水！」

胸を叩きながら優の差し出した水を口に運ぶ。優は後ろに回り、  
心配そうな面持ちで夕香の背中を何度も優しく叩いた。

彼女が手でもう十分だと制すと優はほつと胸を撫で下ろし、席に  
戻る。

「彼女……」

「え？」

「お前は彼女ができたらず何をしたいの？」

「そうですね。……うーん、こんな感じで一緒に食事をして、笑い  
合えたら最高ですね」

「笑いなさい」

「え？」

「……彼女、でしょう。私」

彼女は皿に視線を落として、食事を再開させながらそういった。  
優は静かに微笑む。

「そうだね、夕香ちゃん。……なんてね」

夕香は一瞬むせそうになりながらも、至極平坦な声でいった。

「それは……余計よ」

「ちゃん、なんて馴れ馴れしかったかな。ごめんなさい」

「そうじゃなくて！ もう、何でお前は……」

優は自分の心がひび割れていることに気がついていなかった。それは巧妙で、優自身にとってはいい変化だと思わせるようなものだった。

だからなのか、彼は風呂上りに独りいった。

「うん、バイトは辞めよう」

これからは夕香の為に時間を使おうと彼は決意した。

一度そう考えてみると、あれほど大切に心の支えでもあった自分の趣味が酷く無価値なものに思えた。何故、自分はあるものに熱中していたのだろうかと思っただけだった。

「そういえばあれ、夕香が褒めてくれて始めたんだっけ」

風呂場の暖かな空気に脱衣所のガラスは曇り、彼の表情を隠す。

優は体を拭こうとバスタオルを手に取り、何かが床に落ちたことに気がつく。

手とってそれを眺めた。

「栄養ドリンク？」

手のひらサイズで茶色い瓶。まだ冷たい。

優は特に考えず、蓋を開けてそれを飲み干した。どこか薬っぽい人工的な味。

「なんだか余計に喉が渴くなあ」

湯気を立ち上らして、優はリビングに顔を出した。ソファにもたれた夕香がぼうつとした顔で優を出迎える。

「ドリンク、飲んだ？」

「ごめん、飲んじゃダメだったかな」

「いいわよ。あとで飲むよりも先に飲んだ方が早く効くわ」

「ん、まあ……そうだね」

若干、かみ合っていないものを感じながらも優はそのまま流す。

夕香はふらりと立ち上がると優の前まで歩き、止まる。

「先に寝ててちょうだい」

「え、あ、うん。そのつもりだけど」

「お風呂、早く出るから」

「お湯は洗濯に使うから流さなくていいからね」

「私、緊張してる。ええ、それも酷くね。普段、優と話する時はここまでじゃないけど、今は特別ね」

優は妹が自分を恐れているのだと内心ショックを受けた。自分が傷つけることを普段から彼女は恐れていたのだと。

だから先に俺を殴った。

だから先に俺に辛く当たった。

自分が傷つけられる前に相手を傷つける自己防衛。

優の中で全てが繋がっていった。

それは夕香が望まない方向に。

「そっか、本当に気づけなくてごめん……」

「別に、気にしてないわ」

彼はうなだれ、フローリングの床を見つめた。

夕香は優の傍を通り過ぎ、リビングの扉に手をかけると振り向かずに行った。

「部屋で、先に寝てて。直ぐにいくから……」

すぐにいく？

その言葉の意味を優が聞こうとする頃には彼女はすでにそこにいなかった。

月明かり。開けた空に丸く金色に輝く月。

薄く空を漂うちぢれ雲は月を隠そうと光に蓋をするが、その強い光は雲を透けさせ、空を仄かに明るく染めた。

月明かり。

それだけが今現在の優の部屋の明かりだった。

既にプラスチックの破片やら、ひしゃげたプラモデルの箱はどこ

にも見当たらない。

ただ優は寝巻き姿のまま、椅子に座り、机に頬をついて空をぼんやりと眺めていた。

蝶番の軋む音に夕香が部屋に入ってきたことが分かった。しかし彼は振り向かず、ずっと空を眺める。

「優、暗いわよ」

「電気は点けないで」

「何を見てるの？」

彼女は音も立てず、優の傍に近寄る。

「今日は満月なんだよ。すっごく綺麗なんだ。昔の人はあの月の模様をウサギに例えたり、人の顔だとかサソリだとか考えたらしいけど、不思議だね。俺も昔の人と同じようにウサギにも人の顔にもサソリにも見える。人間特有の感性なのかな、これって」

「優、私……優と寝たい」

ぎしりとベットのスプリングが声を発する。

優は彼女の言葉に振り向く。そしてベッドに腰掛ける夕香に向かって微笑むが薄暗闇ではその表情は届かない。夕香の表情もまた暗く、闇にまぎれていて、目を凝らさなければ見えなかった。

「うん、いいよ。じゃあ、一緒に寝ようか」

「……ええ」

青いストライプ柄のそれは布団を捲り、ベッドに体を忍び込ませる。優もそれに倣い、ベッドに潜った。

布団の中は仄かに暖かく、それは夕香から発せられた熱だった。

「夕香さん、いい匂いだね……っていうと変態っばいかな」

「そんなこと、ないわよ」

夕香は手を出して優の背中を抱きしめた。優も無言でその背中を抱きしめる。

「髪の毛、冷たいよ。ちゃんと乾かさないと」

「放っておけば勝手に乾くわ」

「女の子がそんなこと言っちゃだめだよ。ちゃんと乾かさないと湯

冷めしちゃうし、何より髪に悪い」

「……優は髪の綺麗な人が好きなの？」

「まあ、綺麗な人は素敵だと思うよ」

「じゃあ、これからは綺麗にする」

「うん、その方がいいんじゃないかな」

暗闇の中、二人は見つめ合いながら言葉を交わした。

時には無言が言葉で、時には視線が言葉で、時には体が言葉だった。

思い出したかのように彼女はいった。

「ねえ、キスしていいかしら」

「……あんまり好きじゃないけど、いいよ」

「舌は入れてもいい？」

「それは……」

「キスはよくて、舌はダメなの？ それとも私のことが……嫌いだから？」

「そうじゃなくて、ええっと」

どうして舌を入れるのは駄目なのだろうと彼は真剣に考える。

恋人がするものだから？

ではフレンチキスは恋人がしないのかといえはその答えはノーだ。家族同士でもするし、恋人もする。つまり価値観の問題。

そういうものだと思っっているからという回答に優は悩み、夕香がしたいという希望も考慮し、そして頷いた。

「夕香さんがどうしてもっていうなら……やぶさかではない感じですよ」

「優……」

夕香は彼の頭に手を回して、優の唇に舌を入れた。目を瞑り、意識を全て舌に集中させた。

ねっとり彼の舌を絡めとり、唾液を潤滑油にくちゅくちゅと卑猥な音を立てる。

何度も優が眠っている間に練習したテクニックを夕香はねちっこく繰り返す。実際それは効果的で、意識した状態で初めて味わう感覚に優は腰が抜けそうになっていた。

「ぷはっ！ 夕香さん、やっぱなし！ さっきのはやっぱり撤回！

これは続けちゃだめだと俺は思う！」

「何故？」

「首筋ちゆうちゆうしないで、くれる、かな」

「優、次はちゃんと舌返さないと、駄目よ？」

熱っぽい瞳で夕香は首筋を舐め上げ、逃げようとする優とキスを再開した。

部屋に入ってきたソレは随分と機嫌が悪そうな顔つきだった。

あからさまだと彼は思い、微笑みながら聞く。

「随分と機嫌が悪そうだね」

「この主治医の先生、なんか俺を変な目で見るんです。なんていうか……その」

ソレはその言葉を言いにくそうな表情で男を上目遣いに見る。男はその意味をくみ取り、言った。

「つまり吉岡先生は君に劣情を抱いているってことかな？」

「そう、ですね。はい。……俺の待遇をよくしてくれる。ある程度我俣を聞いてくれるのは嬉しいし、ありがたいと思うんですけど、そういうのはちょっと……」

そういつてソレは俯いた。

男は吉岡がどんな人間か思い出していた。

禿げ上がった頭に、脂ぎった額。クリームパンのような丸まった手、小さな丸メガネ。

しかし、男の記憶によれば吉岡は少女趣味だったはずだ。

「君はそういうエロティックなことは苦手なんだね」

「はい」

「妹さんはお兄さん……つまり優君に“悪戯”をしていたらしいけど、それを知った時、優君はどう思ったんだろうね」

男は微笑みながら自分でいった悪戯というキーワードにいらついていた。

事実を軽くするような言葉。それをされたもの、されていたと知った者は心の奥底に一生消えることのない傷を負うのだ。

男性は女性に強姦されたとしても訴えることができない。精々、傷害罪が関の山。

それが今の法律。

そういうことの被害者は自分だけであってほしい。  
それが彼の思い。

「俺は別に……」

「んん、優君はそういうことが嫌いなんじゃなかったのかな？」  
ペンを休ませ、顔を上げる。

男の言葉にソレは当たり前のような顔で答えた。

「ええ、嫌いですよ」

「じゃあ、妹さん……つまり夕香さんにされたことは優君にとって嫌な事だったってことになるんじゃないのかな」

「さあ、どうでしょう」

「その回答は少し矛盾しているんじゃないかなとか思っただけど」  
「当然ですよ」

「………君が当然というのは些かおかしい気がしないでもないけどね」

「そうですね」

「もう一度、質問しよう。夕香さんに強姦された優君はそれを嫌だと思っただけなんだ。君はどう思う？」

「答えたくありません」

「何故だい？」

「それも答えたくありません」

「……じゃあ、大切なプラモデルを壊された優君はその日からおかしくなっていった訳だけど、君はどう思う？」

「答えたくありません」

「僕が思うにね、彼は子供の頃から集めていたものを、作っていたものを壊されて内心、酷く憔悴したんだ。きっと泣き叫び怒鳴り散らしたかっただろうね。でも、怒ることができない。資格がない。そう考えた彼は怒りを内側に向けて無理やり消化したんだ。無理やり内側に怒りを向けた結果、彼の心は破綻し始めた。自分の漫画や本を捨てて、服も捨てて、アルバイトも辞めて、暇な時間は常に自分の部屋で空を眺めるだけになった。何をしても満たされない、生き

た心地のしない人間になってしまったんだ」

「それで？ もう、どうしようもないことですよ。過去は過去です」

「反省する機会を得たのに反省しない人間は幸せになる権利はないよ。ああ、これは僕の妻の言葉なんだけどね」

「……黙れ」

「君はその時、反省したのかな？」

「黙れえっ！！」

ソレは力強く机を叩き、男を睨んだ。

私の優。

優優優優優優優優優優優優ゆうウウ！

もう、優にその気がないだとかそういうことは関係なくて、私はただ押し倒すように口腔をかき混ぜる。口が外れば、首筋を舌の腹でざらりと舐め上げる。耳をふやけるまでしゃぶる。

優は全身を赤く緊張させて、言葉を失う。

嫌だとしても、私を優が拒絶しようとしたとしても、私はこのまま押し切るつもりだった。

押しに弱い優。昔から変わらず。

「あっ、あっ、うあっ、あ……」

月明かり。月明かりに照らされる優の瞳は酷く濁っていて、自分がどうなっているのか理解していないような姿だった。

それが私を酷く興奮させた。

優が私を見ている。優が私に喘いでる。あの優が。

優が優が優が！

首を舐めれば、ビクリと体を跳ねさせ。

「ひゃっ……」

舌を犯せば体を縮み上がらせて、震える。

「んーーーーっ！」

起きている優が見せる一つ一つの愛らしい反応が私を濡れさせるのだ。布団の中で優は内股になり、私から視線を外して、窓を見ていた。

月明かり。

胸は私に重なるように息を切らしていて、頬は暗闇でも分かるほどに赤く染まり、額は汗で濡れ、髪が張り付いている。陰った瞳は焦点がどこにも定まっていない。

「夕香……さん」

そういつて私を見る。恐らくは逆光で黒く染まった私のシルエツトを。

私は爪を噛む。

欲しい。優が欲しい。

寝ている時とは違う雄の匂い。甘酸っぱい汗の匂い。私と同じ石鹸を使っているはずなのに私とは違う甘ったるい香り。乳飲み子のような甘い香り。乳飲み子のようなやわい肌。

肌をゆっくりと撫でる。さらりとしていて、手に張り付くような肌。

欲しい。優が欲しい。

月は隠れ、暗闇にまた世界は染まる。

私という鬼は優に覆いかぶさり、内股を無理やり開く。

「夕香、さん……」

彼は両手で私の手を剥がそうとする。だが私は決して止まらない。止まることができない。

怒張したそのの前ではとても、止まることはできない。

ズボンを脱がす。蒸れた空気。

私はそれを掴み、ほくそ笑む。内ももを舐め上げ、喜びに笑う。

それに舌を這わして自慢げに笑う。

「くふふふ……」

もはや優も抵抗を止めていて、ぶるぶると震えていた。

ふるえ。

震え？

月明かり。銀色の光。白銀色の光。

優は口を押さえて、ガタガタ震えていた。涙を目一杯に貯めて、声押し殺して泣いていた。

私を見るその瞳は恐怖に彩られ、どす黒く染まり、悲愴と諦めと拒絶に満ちていた。

私は……私はそこで。

興奮。

しなかった。

にいさんのなみだ。

冷たい汗が額を、背筋を流れるのを感じた。取り返しのつかないことをしてしまったような焦燥が私を襲う。嫌な胸の高鳴り。

優は抵抗することを諦めて私に身を差し出した。

途中から私は優がそのつもりがないなんてことは、分かっていた。それでいながら優の優しさに浸け込んだ。情動、躍動、それらに身を任せ、無理やりことに運ぼうと私はした。

優はやりわりと拒否していた。だけど私は止まらなかった。

結果、優は抵抗することをやめた。だけど、だけどそれは辛いことではない。

我慢できるということとは、決してそれが嫌じゃないということにはならない。

傷つかないということじゃ、ない。

「うっぐ……うっ」

優は指の隙間から嗚咽を漏らす。瞳の端からぼろぼろと涙を零し、ガタガタと震えていた。

私を恐怖したその瞳は『やめて下さい』と叫んでいた。

「あ……優」

触れる。ビクリと体は跳ねた。

「あの、優、あのね……私は」

「うっうっうっ……」

ぎゅっつと目を瞑り、声を殺す。

誰が優をここまで傷つけた？

私だ。

こうなることはもっと前から分かっていることで、優が望んでいないことは分かっている、もっと前からそれを気づくことができたはずで。

でも私はそれを認めたくなくて、認めるのが嫌で。

私は優を傷つけた。

優の涙。真珠のような粒。

二人つきりで暮らすようになってから、いやそれ以前から私は優の涙を見たことはない。どんな辛いことにも、私の言葉、暴力にも優は泣くことはなかった。

あの惨劇の時ですら、泣くことはなかった。

その優が泣いて、震え、恐怖しているのだ。

「おかあさん……」

私は啞然とする。

それは私のしていることをあの時と重ねているのか？

それは私よりも母の方がよかったと言っているのか？

それはあの母に助けを求めているのか？

それはそれはそれは、何？

「そんな……ちがっ！ だって私は優を、優が！」

「うっうっ……」

優はベットの所で胎児のように丸くなり、ガタガタと震えた。私はそれをあやすように触れるが、兄はビクビクと震えて拒絶を示す。優に私はどう映っていたのか。

兄を犯そうとする鬼子。或いは暗闇に潜む怪物。

「こんな……こんなつもりじゃ！ 優、ねえ！」

そう問いかけても優はえづくように泣き声を上げるだけで、私の言葉に耳を貸そうとはしない。

「っ！！」

私は奇妙な緊張に駆られ、優の両手をベッドに押し付けた。無理やり顔を私に向けさせる。

「……き、聞きなさい。私はね、別にお前をとって食おうとしたわけじゃなくて……その」

優は両目をぎゅっと瞑り、歯をガチガチと鳴らして震える。

聞かない。聞いてくれない。それよりも恐怖が勝っているのだ。

脂汗が額に滾り、私はどうしていいか分からなくなる。

だから、手を上げた。

マウントポジションをとって、優の頬を叩く。

ぱんと風船の割れるような音。

「優、聞いてちょうだい！」

聞かない。

「聞け！！！！！」

耳に口をつけて、大きな声で叫ぶ。

しかしあうあういうだけで、聞かない。

まるでそれは一生私の言葉を拒絶していくように思えた。

それは当然、私のせいで。

拳を振り上げる。

「優！ 聞いて！ 聞きなさい！ 聞きなさいよ！ ……聞けえ！」

私は振り上げた拳を下ろした。髪を掴んでベットに押し付けた。

張り手、首絞め、殴打。

だけど優は一言も言葉を返してくれなくて。血を流すばかりで何も言ってくれなくて。

そのうち気絶した。

どうしてこんなことになったのだろう。何がそうさせたのだろう。何が悪かったのだろう。何時から。

朝日。淡い黄色の美しい光。

ベットのの上には私以外、誰もいなかった。空虚な、何もない兄の部屋。

「優……」

声は木霊するばかりで誰もそれに反応を示さない。

「優！」

反応はない。

記憶の糸をたぐらせて、兄を気絶させたあと私もそこで寝たことが夢でないことを確認。

ベットの上に残った血痕もそれを証明している。

粘ついた汗を拭いながら、私は部屋を飛び出して、リビングに向かった。

朝食は温め直すだけでいいように準備されていて、私の弁当もそこにあった。

「どこなの？」

しかし、肝心の優がない。

玄関に顔を出す。靴はまだあった。

つまり、それは。

「……隠れてるってこと？」

私は爪を噛みながら朝食も取らず、家中を駆けずり回る。

「優！ 出てきなさい！ 早く出てこないと承知しないわよっ！」

風呂場、浴槽、トイレ、私の部屋、兄の部屋の押し入れ、母の部屋、父の部屋。

そして母の部屋の地下倉庫に優はいた。明かりも灯さず、部屋の中央で三角座りして、咽び泣いていた。

「うえっえっ……」

「……ゆっ」

私は地下の階段を下りて、優の肩を掴んで振り向かせる。私の顔を見た優は何とも言えない奇妙な表情を浮かべて恐れおののいた。

まるで怪物に見つかった人間のような、まるで狼に見つかった子ヤギのような、そんな絶望に満たされた醜悪な表情。

彼は口をぱくぱくと動かして、後ろに下がる。

「あ……うあ……」

「ちょ、ちよつと待ちなさい。優、私はその昨日のことをあや……待ちなさい！」

「わあっ！」

立ち上がり逃げようとする優の足を瞬時に掴む。優は当然転がった。

「な、何で逃げようとするのよ？」

なんでそんなに、簡単に壊れるのよ？

「ねえ、私の言っていること聞こえてる？」

ちよつと、悪戯しただけじゃない。

「ねえ、目をそらさないでちよっさい。ねえ、そらさないでっ言ってるでしょう？ ねえ！ ……いうこと聞かないとまたブツわよっ！？」

いつもはもつと凄いことしてたじゃない。確かに優は寝ていたから覚えてなかったかもしれない。だけど、それに比べればなんてことないはずだ。だから私が嫌われる理由はない。ないはずだ。

これは優が聞き分けが悪くて、心が弱すぎただけ。だから、この手は。

優の心を強くするために、振り上げる。

「ちゃ、ちゃんと聞かない優が悪いのよ？」

頬を叩く。叩く叩く叩く。

開いた手のひらは気がつけば拳に変わった。優を押さえていた手

はいつの間にか髪の毛を掴んでいた。

優に謝ろうとしていた心は優を罵倒していた。

「優の癖に！　なんで私の誘いを拒否するの！？　ねえ？　私のこと一番大切っていったじゃない！　昨日抱きしめたじゃない。だから私はっ！　あんな気があるようなことしたくせに！　どこにもいかないっていったじゃない！　嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき！」

鼻水と鼻血を混じらせながら、優は泣きながら私に「ごめんなさい」といった。くぐもった声で何度もいった。

その呪文を唱えればいつか開放されると信じているかのような必死な形相で。

それが更に私をイラつかせているとも知らずに。

しばらくして、殴り疲れた私はぐったりとした優に覆いかぶさる。首筋にキスをする。または頬を舐める。片手で股ぐらを掴む。

血にまみれ、青あざを作り、汗をかいた優の肌が異様に艶かしく、色っぽく見えた。

「ごめんなさい、優。ごめんなさい、優。ごめんなさい、優。ちょっとだけだから、ねえ？　嫌だったら、直ぐやめるわ。……だからいいでしょう？　痛くしないから、痛くしないからいいでしょう？　直ぐに気持ちよくなるから、いいでしょう？」

喋れなくなつた優にさういう。答えを返す力がないと分かっているながら、優にさういう。

彼はグズグズと泣いて、ブルブルと震えていた。口を押さえて、声を漏らさないように。昨日の夜のように。

ああ、嫌な言葉が頭の中で反響する。

おかあさん、という優の搾り出すような掠れた声が。

「……な、何よ何よ何よっ！！　そんなに私が嫌なら一人で生きていけばいいわ！　無能でウジウジしてる汚らしいお前を抱いてやるうという私の優しさが分からないお前なんてもういらぬ！　もう死んじゃえ！　お兄ちゃんなんてもうっ！」

兄はうーうーと唸りながらそこで泣いていた。私は全てが嫌にな

って階段を上ると地下の扉を閉めて鍵をかけた。

こうすれば、兄は、私を頼らざるを得ないはずだ。

そんな見え透いた自分の気持ちに吐き気がする。

「浅ましい。本当に私……気持ち悪い」

私はその場で座り込むと頭を抱えて泣いた。

音。来客を告げるチープな電子音。

出る気もない私は扉の側で三角座りして、無視しようと試みた。しかし、しつこいまでのその音に私は重い腰を上げて、玄関に向った。

チェーンを開けて、扉を開ける。

今の気持ちを八つ当たりするように相手に声をかけた。

「朝っぱらから何ですか!？ 迷惑ですよ!！」

「おはようございます」

白。

長く、そして癖のついた白い髪の毛と白い肌。

黒いセーラー服に黒タイツのその少女は大きなサングラスを下に傾けて、私に赤い瞳を見せた。

「お久しぶりです。夕香さん」

間延びしたような、ゆったりとした声。重たげな瞳。小さな体躯。

「何で……何で」

なんでおまえがここにいる?

彼女は扉を押し、当たり前のようにズカズカと私の家に入り込んだ。

「優さんはどこですか?」

「優は……今いないわ。それよりも何であなたがここにいるのよ!」

「それはダウトです。今あなた、視線を横にずらしました。そして玄関には男物のスニーカーがあります。また、嘘をつきましたね」

「し、質問に答えて!」

駄目だ。心を落ち着ける。

今は彼女の、優月の目的を知ることが一番重要だ。

「彼、よく図書館利用してます。この前、知り合いました。名前が同じだとは思いましたが、まさかこの家の優さんだとは思ってませんでした」

「……………優からこの家のことを聞いたのね」

「優さんからは、名前とちよつとした小話以外は何も。でも名前から図書カードのフルネーム、フルネームから住所を調べるのは簡単でした」

そういつて彼女は首に巻いたオレンジのマフラーから顔を出して唇を歪めた。

優のマフラー。

歯がぎりぎりと軋む。

「か、帰って！ 帰ってちょうだい！」

「それよりも、何で優さんがいないと、あなたは嘘をついたですか？ 目の下の内出血は何ですか？ 手に血がついてますけど“また殺した”んですか？」

彼女は手をカタカタと動かして、表情の少ない顔でそう私にいった。

湿った、押し殺すような泣き声。優は辛くて怖くてしようがなかった。

さつきまで人だったものが急にドロドロの別の何かに変わってしまったような得体の知れない恐怖に足が竦んだ。

妹。

自分よりもしつかりとしていて、自慢の妹。

それが夜になると魔獣のような目の輝きを見せて、自分を貪った。夕香の優を押しさえつける手は石のように重く、血を嚼るような唾液の音は怖気立つ生臭さがあった。

月明かりの中、黒いのつぺらぼうが赤い口を曲げて、優の汗を嚼った。

それが優の中のある記憶を呼び起こす。記憶の彼方あなたに投げ捨てた嫌な記憶を。

「おかあさん……」

優は上下左右分らない暗い地下でダンゴムシのように丸まって泣いた。

何故、夕香はあんな酷いことをするのだろうか。

嫌がれば殴られ、抵抗しないと肉を食われる。

もう俺には大切なものなんて何も無い。

不意に光。

天から差し伸べられた光。

「こんにちはです、優さん。マフラーをお届けに参りました」

白い天使は舞い降りた。

優は母の部屋で優月の介抱を受けていた。少し離れた位置で夕香が立ってそれを見下ろしている。

過呼吸気味な優に優月はビニール袋を渡すと振り向いていった。

「何故、優さんは半裸だったんです？ 何故、こんなところに優さんが閉じ込められていたんですか？ 何故、こんなに青あざが？」

「それは……優が勝手に転がって、偶然扉が閉まったのよ」

「それは嘘です。それにわたしは優さんに聞いていているんであって、夕香さんには聞いていません」

眠た気な瞳は夕香をじっと見咎めた。

夕香はその言葉に兄の目を睨むように見た。不利になるようなこととはいうな、とその目は語る。

「それで、どうなんですか？ 優さん」

「お、俺が階段で……足踏み外して、偶然その、閉まった……んです」

優は下を俯きながらおずおずと答える。瞼は何度も瞬かれ、意識的に夕香を見ようとしていなかった。

優月は唇を小さく歪め、首を重たそうに夕香に向けた。

「いつもこんなことして彼を苛めているんですか？ 弱いものイジメして楽しいですか？ 優さんのいうあなたを理解したいという気持ちは少なくとも本物でした。なのにあなたは……」

彼女はふらふらと立ち上がり、眠た気な瞳を薄めた。深い紅の瞳が夕香を睨む。

「なのにあなたは、兄をこうやっていじめるばかり。どうせ、兄に言い寄ったとか、そこらへんでしょーね」

「なああななななに、何を馬鹿なことっ！」

「馬鹿でも分かりますよ。このキスマークの跡見れば」

そういつて彼女は夕香を睨んだまま優の首筋を指さした。

優は恥じらうようにそれを隠す。

しかし、それはもう遅すぎた。

「あなたはいつも嘘ばかり。自分にも兄にも他人にも嘘をついて、兄に言い寄って、いうこと聞かなければ暴力ですか？ この変態」

「こっ……こここれは、それは！ そう、優が！ 優が私に言い寄ってきたことなのよ！ ねえ“兄さん”！？」

兄というキーワードに優ははつと顔を上げた。  
自分の大切な妹。大切にしなくてはいけない妹。  
その面影。

何も無くなつた心に差し込んだ唯一の何か。見せかけの、何か。  
夕香はしめたと手を差し出す。優はおずおずと手を掴み、優月の  
顔を見た。

酷く狼狽した顔。

「兄さん、あなたは言ったわよね。私が一番大切だって、いつでも  
私の味方だって」

「は……………いい」

「優さん、今はそれは関係ありません。従う必要はないです」

「……………ちが、います。俺が、夕香さんに、無理やりした、んです」

怯えた瞳はほっそりと薄まり、ぶるぶると震えた唇は無理やり笑  
顔を形作る。

イビツな笑み。ユガんだ笑み。

優は後ろから夕香に抱き締められる形になる。

「そうよ、いつもしているように優、私とキスしましょう」

「……………え？」

「できないの？ 私にいったことは嘘だったの？ 私を理解してく  
れるんでしょう？」

「あ……………う」

優月はじつとそれを見ていた。怯えきつた一人の少年の顔と、奇  
妙な汗をかいている長身の少女を。

夕香の優の肩を握る手に力が籠る。優は小さく息を呑んだ。

「し、ます」

優は目を瞑り、唇を近づける。夕香はそれに吸い付いた。舌が入  
ってきたことに優は腰を引かせるが、彼女はそれを逃がさず、手で  
しっかりと頭をホルドする。

悲鳴似たキス。捕食にも似たキス。まるで吸血鬼が処女の血を啜  
るかのようなキス。

夕香の勝ち誇ったような横目。ギチギチと床を握り締める優の足の指。

優月は不快そうに目を細め、吐き捨てるようにいった。

「茶番です。こんなのちつとも面白くない。不快なだけです。わたし、帰ります。……夕香さん、出席日数危ないなら遅刻しない方がいいですよ」

「……ご忠告どうも」

「優さん、またです」

そういつて優月は彼をじっと見つめながら横を通り過ぎた。

優は何度もその丸い瞳で、気持ちを訴える。二人きりにしないでと。

しかし、優月は赤い目を閉じて、背を見せた。

そして母の部屋の扉は閉められ、お邪魔しましたという言葉が聞こえて、静寂が家を支配した。

静寂。夕香の息遣い以外の静寂。

固く握られた彼女の手は優を束縛し続け、背中越しに伝わる心臓の高鳴りは優の心を不安にさせた。

「うっうっうっぐ……」

声。

優のぐずる声。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」  
息。

夕香の息遣い。

優の泣く声を、夕香の優を狩りを邪魔するものは、もうどこにもいなかった。

先に優が走った。脱皮の如く引つ張られた上着を脱ぎ捨て、廊下に転げ落ちるように出た。

「ゆづりゆづりゆづりゆづり！」

獣じみた咆哮、狂気じみた瞳。口端に泡を乗せて彼女は兄の名を叫ぶ。

彼は一瞬、外に逃げようかと迷うが、上半身裸なことに気がついて、風呂場に逃げた。

扉を閉めて、鍵を閉める。

尻餅をついて、優はその場で泣きべそを浮かべた。

ヒタヒタと床を歩く音。扉の前でそれは止まり、ドアノブをがちゃがちゃと揺らす。

「兄さん、開けてちょうだい」

「あつ……あつ……！」

声が出ない。

恐ろしさのあまり声がかすれて出ない。

「優、開けてちょうだい。開けないとまたブツわよ。ほら、早く。

……早く早く早く早く早くうづうづう！」

ドアノブが軋むような音を立てて何度も左右に回される。

優は耳を押さえて目を瞑った。

これは妹の復讐なのだ。

自分への復讐。傷つけた代償。

そうでなかったら妹はこんなことはしない。

静かになったと思いきや、かちゃりという音。

優は目を開き恐る恐る扉を見た。

鍵がゆっくりと横から縦になっていた。

「あ……………」

蝶番が軋むような音を立てて、内側に開く。

「ゆっ」

背が高く髪の長い女が、優の上着を口元に持ちながら、くぐもった声で彼の名を呼ぶ。

誰だ。

妹。

妹って。

夕香。

夕香はこんなことはする。

している。

「っ！！」

叫ぼうと、助けを叫ぼうとするが声が出ない。掠れた息が出るだけ。

優は半ばパニックになり、顔を赤くしながら、泣きべそをかきながら何度も声を出そうと試みた。

しかし、声は出なかった。

「優」

女は声が出ないこと、優の逃げ場がないことが分かったのか笑みを零した。

瞳孔は開ききり、足は音も立てずに近づく。だが先程の鬼のような形相はどこにもなく、至って冷静な表情。冷静な笑み。

彼の名を呼ぶその声は異様なほど平坦で、青色のストライプ柄のパジャマがどこまでも場違いだった。

「ゆーっゆーっ？」

「うっうっ……」

「何が……そんなに怖いのか？ さっきのは脅しで、もうぶったりはしないわよ。だって大切なお兄ちゃんだもの」

そう言いながら彼女は手に持った上着をすっすうと嗅いだ。

優は震える足でなんとか後ずさるが直ぐに浴槽の扉に後が詰まる。彼女は目を細め、優の上半身を舐め回すように見た。

「……寒いでしょう。上着を着なさい」

差し出されたねずみ色のスウェットは黒い染みが出来ていて、それは夕香の口から零れた涎だと彼は直ぐに気がついた。

ポタポタと粘ついた涎が顎からこぼれ落ち、床を濡らす。

幽鬼の如くふらついた足でゆっくりと夕香は優の上にその身を重ねる。

そして彼の両手を床に押し付け、頬を舐めた。

「なんで……それもよりによってあの女と仲良くなったのよ。ねえ

！ それも私に内緒で！」

「あぐっ……」

「んー、怖い？ 私が怖い？ 私が怖いか？ 目を瞑るな！ 瞑るとまたブツわよ。……ゆ、優だって本当は満更でもないでしょう？ だだだだ、だってほら、怖がってる割にはここ、カチカチじゃない。私は間違ってるわ。何も間違ってるわ。……あー、恥ずかしいわねえ。顔真っ赤になっちゃうわね。それは泣きたくもなるわね。でも誰も助けになんてこないわ。誰も優を助けにこない。

私に犯されても、殴られても誰も来ない。ほ、本当は私もこんなこと本位じゃないの。優のことが好きで優が聞き分けが悪いから、しかたなくこうしているの。……なんでそこで泣くのよ。優は私の味方でしょう！？ 私のことを一番に考えてくれるんでしょう！？ 私を理解して、私から離れなくて、私を愛してくれるんじゃないの！？ ねえ、あの時……母さんが死んだ時に誓ってくれたことは嘘だったの？ ねえ“お兄ちゃん”」

夕香は優の手をほどいて自分の腕の中に抱きしめた。強く強く抱きしめた。

優が兄というキーワードに弱いことを理解した上で、それをいい抱きしめた。

自分が卑怯だと、最低だと分かっている彼女を抱きしめた。頭を撫でて抱きしめた。

「うっうっ……」

優の頭の中で呪縛がのたうつ。

父の呪縛。

母の呪縛。

そして自ら誓った呪縛。

それらは優を兄として縛り付け、彼の意志を無視して自由を妨げる。

では自分は何をすべきか。

兄としてこのまま妹と溶け合っていくのが正しいのか。

それは……ヤだ。

「あ、がっがっがっ……お」

優は息も絶え絶えにそう口走る。それは話題を逸らすために無意識から出た言葉だった。

それ聞いた彼女は胸の中で震える兄には見えないように薄笑いを浮かべると、まくし立てるようにいった。

「学校から……学校から帰ってきたら、夜の続きをしましょう？  
今度は無理やりじゃない続き。お互い了承した続き。ちゃんと優の調子を見て、私も合わせるわ？ どうしても調子が悪いならその次の日でもいい。ねえ、それなら構わないでしょう？ ねえ、お兄ちゃん」

優が既に自分を受け入れたという前提に彼女は話しを進める。

ダブルバインドという心理学の手法。兄が借りてきた本の中にあつた手法。

それを彼女は理解して使う。

優はそれに気がつかない。自分が彼女を受け入れるといつていないことに気がつかない。

優の頭の中では『嫌なら次の日でもいい』という一見譲歩されたかに見える薄っぺらな情報だけが回る。

そして結局、彼は最後までそれに気がつかず、首はゆっくりと縦に振られた。

優は一人、自分部屋で空を眺めていた。

ほんの数分前に妹が家を出たことが何年も昔のことのように思えた。

妹。

夕香。

気がつけばぼろぼろと目から涙が零れていた。手で拭うも次に出る。

「風邪かな……はは」

次第に震えはしゃくりあげるような痙攣に変わった。みっともないと口を押さえても泣き声が手を通して外に漏れる。

気がつけばまた、彼は泣いていた。

「うづうづうづうづうづうづう」

仕方がないと自分に言い聞かす。

妹がそう望んでいるのだと。これが償いなのだ。

頭ではそう理解しているのに、涙は止まらない。頭では理解しているのに、心はそれを拒否する。

空。青く、穏やかで広大な青空。

「……空を見たってあなたが空を飛べるわけじゃありません。人間には足がある。その足が動くのなら走って逃げればいい。誰もあなたを咎めません。恐れることから逃れられる人間はいないから」

白い少女は優の背中に手を置いて、啜り泣く彼を何度もさすった。気怠そうな声が、ゆったりとした声が響く。

「失礼かと思いましたが、勝手に上がらせてもらいました。ポストの中に合鍵は些か無用心です」

「うづく……うづく」

「本当の私の目的は本だとか、マフラーじゃなくて、あなたに聞きたいことがあったんです。分かりますか？」

優は首を横に振って不定の意を示す。

彼女はそれを見てまどろむような声色でゆっくりといった。

「そうですね、分かりませんか。では、聞きます。……あなたの母

を殺したのは、本当にあなただったんですか？」

彼女は髪の毛の隙間から眠たげな瞳を緩ませて、微笑む。

優は自分の時間が完全に停止したのを感じた。

人はみな自分がいい人間だと思う。少なくとも平均的な良心を持ち合わせていると信じる。

しかし、いざという時に本当の自分は現れる。その身の丈以下の醜い自分を見て人はショックを受ける。

ショックを受けて……開き直る。屑なら屑なりに人の良心を啜って生きていこうと自身を肯定する。

なんて、恐ろしい。

私は今や兄の苦悶の表情を見ても良心を苛まれることはないのだろう。それよりもきつと“食い気”が勝る。

兄を辱めて、兄を犯して、兄を泣かせて、兄を苦しめて……それでも私はきつと私のまま。

自己嫌悪している自分もまたその嫌いな部分を含んだ自分。嫌ったところでしようがない。結局、自分を肯定して生きていくしかないのだ。

そう思うと不思議と心が楽になった。自分は異常なのだと認めるとなんだかスッキリした。

だってしようがないじゃない。

私は屑なんだもの。

遅刻。彼女の忠告も虚しく私は遅刻した。

しかし、誰もそれを気にとめることはない。クラスでの私は一人で、孤独だった。空気のような存在といってもいい。

殺人者の家族だからと後ろ指をさされないように勉強だけはしっかりやった。生活態度もよく休むということと協調性のなさを除けば別段悪くないだろう。

好きとは言えないが勉強は苦ではない。運動もどちらかといえば嫌いな方だが何もなくてもエースと肩を並べることができる。

周りも私を褒めてくれてもいいようなものだが、それを褒めてくれるのは兄だけだった。

人はおかしなもので、努力してそうなったものより才能に恵まれたものが活躍するということに拒否反応を示す。天然の美しさを持ったものよりも化粧で美人になったものを人は好む。

そういえば彼女も頭が良すぎるが故に学校に居場所がないといていたのを思い出した。

今思えばあの子、凄いいことをいったわね。

「あの、このあと時間ありますか？」

「ごめんなさい、今忙しいの」

「そう……ですか」

そういつてクラスメイトの誰かは私の席を離れる。私は一度も窓から視線を移動させることなくそう嘯いた。

告白という名の制度。儀式。

こちらに気があるなら最初からそう行動している。だけど私は見えての通り、普段から誰とも話さないし、話したくないというスタンスでいる。

だから妬まれるのも、好まれるのもお門違い。ラブレターだの、噂だのどうでもいい。美しいだの美しくないだの、お前たちの批評など本当に心の底から、どうでもいい。

優にとって私が美しく可愛らしく好ましかれば、それでいい。学校。

それは兄がいなくなつて時から無価値になつたもの。保身の為に兄に、そして私に辞めるようにいつた学校など無価値な存在。

アイドル的存在だった兄が殺人犯として報道された時に優のことをあつさりとした学校の人間など無意味。

兄の友人だったものは声高にありもしない兄の異常性を薄笑いとともに述べ、兄を追っていた女子生徒は幻滅したただの散々罵倒し『前々から少し、頭がおかしかった』と冗談めかして周りに吹聴した。それを見た人間、聞いた人間は嘘だ、誇張だと理解しながらも事実

として受け入れた。

その方が面白いからというくらいない理由で。

そんな連中に価値などあってたまるものか。

いつそどこかの無差別毒ガス事件のようにこの学校の連中も消えてしまえばいいのに。

ああ、そういえばこの学校も実際巻き込まれたんだっけ。学校の裏に慰霊碑があるとか前に兄さんが言ってたような気がする。

ふふ、洒落にならないわね。

私は静かに笑い、もしも兄と一緒に過ごす学校生活だったらどんなに楽しかっただろうと溜息をついた。

「俺は君のことを信じているよ。お兄さんは関係ないし、君は君だ」  
最もらしい薄っぺらな言葉。

「だから……俺と付き合ってくれないか？」

だから、の意味がわからない。低脳との会話は疲れる。

「あなたは私の何を好きになったの？」

「可憐な横顔とか、その孤高なところとか」

「……ああそう、ようはこの顔が好きなのね」

「ち、違うよ！ 本当は優しいところとか知っているんだ！ あのお兄さんの世話をしているんだろ？ だから早く家に帰ってるって聞いた。それは凄く大変だよ。でもそれをずっと続けている君の……」

「お話しにならないわ。噂の私が抱きたいのなら、その子を抱いてあげてちょうだい。間違っても私とその子は一緒の人間じゃないわ」  
校舎裏まで手を引っ張られたかと思えば下らない戯言。

兄を世話している？ 私が兄に世話してもらっているのだ。何も知らない癖に。

あまつさえ兄を異常者のようにいって……私に殺されたいのか、この男は。

誰だか分からないが、どうでもいい。無価値なことには変りない。

私が背を向けると男は私の手首を握った。

「待てよっ！」

はつきりいって気持ち悪い。湿った手のひらが私の肌につくのが、まるでバイキンが肌に浸透していくかのような怖気を起こす。

その、汚い、手を、離せ。

「俺なら君を幸せにできる！ 全て受け入れられる！」

どこからその自信が出てくるのだろう。いつからこんな気持ち悪い男が彷徨くようになった？

優月よりも伸びっぱなしだった髪を兄が切ってくれて、その方が可愛いといってくれて、人目につくのは嫌だったけどテストの点数や運動の成績で兄が褒めてくれて、嬉しくて。

事件のあと急に発育がよくなって、背も伸びて、顔つきも変わって………それから、それから周りの目が変わったのか。

兄はいつも通りで変わらなかったのに、こういう俗物は見向きもしなかったものに価値があると分かったと、自分の馬鹿さ加減を見せつけるように飛びついてきた。

妬んだり羨んだり、つきまったりもう沢山。

優月がいつてたわね。

「人は真に価値あるものを認めようとはしない。認めてしまうと自分の小ささに否が応でも気付かされるから」とかなんとか。

兄が私のためにどんなことをしてくれたかも知らず、周りの面白おかしい情報だけを鵜呑みにしてきた馬鹿どもはみんな消えてしまえばいい。

それに今日は兄と結ばれる日なのだ。少しでも身を綺麗でいたいというのに、この優男は私に触れてくれた。

茶髪で自信あり気な優男。

人間の癖に私に触れてくれて、どうしてくれよう。いっそ。

殺してしまおうか。

いや、それじゃ、つまらない。

「……悪いけど、あなた自分で思っているよりも賢くないし、容姿もよくないわよ。服装や髪型、言葉遣い、不快なワックスの匂い、香水の匂い……全部、品がなくて不愉快だわ。そんなものに逃げないで勝負できないの？ 恥ずかしくないのかしら？ あなたは最初のデートは映画館に連れて行くタイプね。そこでお決まりの映画を見て、お決まりの会話と感想を話して、お決まりのアプローチで驚かせて、その驚きを恋と勘違いさせるのがあなたの手でしょう？ その手口って端から自分に魅力がない、自分が薄っぺらい人間だって認めているようなものなだけけど、あなたはそれに気がついていた？ ねえ、どうなのかしら？」

「なっ……！ 誰から！」

「誰から話を聞いたのか、と聞きたいの？ 聞かなくても分かるわよ。あなたって透けて見えるくらい薄っぺらいんですもの」

あえて挑発するように上品な言葉を使ってクスクスと笑う。男は顔を真っ赤にし、歯を軋ませて睨んだ。

きっと今自分の中で私を散々罵倒しているのだろう。こんな女自分とは不釣り合いで価値がないとか、殺人者の血筋だの自分の中で良いようにこけおろして都合を図る。

それでもしないと小さなプライドが崩れ落ちてしまうから。

だからいつてやる。

それを。

「そうやって幾ら心の中で私を罵倒してもあなたが薄っぺらくて、魅力がないということは何も変わらないわよ？ ああ、そんなことも分からないほどお馬鹿だったのね。流行りの靴、流行りの映画、流行りの話題、流行りの流行りの……。無価値な自分を騙すための口実、ご苦労様」

優に向ける為に練習した最高の笑み。その一切れ分の端の端からの笑みを男に見せてやる。

男は一瞬私に見とれ、そしてそのことに気がつき自分を恥じた。

「……こ、このクソアマっ！」

男は拳を振り上げて、私に挑んできた。

私は素早く横にステップ。向かってくる男の顎を掌底で殴った。

パンと音がして男はのけぞるようにして倒れた。脳震盪のためか瞳がブルブルと震えている。

「ごきげんよう」

私は教室に戻った。

私はドクドクと高なる心臓を落ち着けて、教師の伝達事項が終わるのを待つ。

放課後のホームルーム。

「起立、礼……さよなら」

教師の挨拶が終わる。

私は即座に教室を出て、廊下を早歩きで抜けていく。階段を降り、靴箱。変なラブレターは無視して、さつさと学校から出る。

校門を抜け、学校から少し離れた場所で携帯電話を取り出すと、携帯の機能で兄の現在地を割り出した。

よし、ちゃんと家にいる。

そして今日は金曜日で明日は休日。そこで私の興奮はまた大きなものになる。

何とんでも兄を今日中に籠絡して、私の虜にして、そして土日で骨抜きにする。

頭が妄想で溢れかけ、子宮が重く滾った。締まりの無い笑みが溢れる。

優を私に溺れさせる練習はそれこそ馬鹿みたいにしてきたし、考えてきた。優の弱い場所も研究し尽くした。だからその自信は有り余るほどにある。

家まで最短距離を早歩きする。早歩きは次第に走りに変わった。

頬を切る冷たい風が私の火照った体を冷まし、心地いい。吐く息が蒸気のように白い。

家につく。門をくぐり、寂れた庭を抜けて、ドアノブを捻る。

鍵が掛かっている。

「ああ！ もう、鬱陶しい！」

爪を噛みながら私は靴の中から鍵を取り出して中に入った。靴を雑に脱いで、リビングを探す。いない。

母の部屋にも、地下にもいない。風呂場にも浴槽にもトイレにもいない。

ふうふうと自分の獣じみた声が煩い。

私は二階に上がると鞆を自分の部屋に放り投げ、優の部屋に入った。匂いで優が部屋にいることは直ぐにわかった。

優の部屋、優の濃い匂い。鼻腔がゾクゾクと犯されていく。

机に突っ伏した優は猫のように浅い夕日を浴びてまどろんでいた。くうくうという子犬のような寝息に私は涎こぼしそうになり、慌ててすすった。

私はまず首筋の匂いを嗅ぐ。次に足の裏の匂いを嗅ぎ、優の足を顔にこれでもかと押し付けた。ふにゃふにゃした柔らかい感触に息が熱くなる。

足のシワを舌でなぞりたい欲求。指の股を味がしなくなるまでしゃぶりたくなる欲求。足の指の爪を噛みながら舌を這わすという贅沢なプレイをしたくなる。

しかし、それは我慢する。それは飛ばしすぎだ。それはこっそり収集した兄の爪コレクションでいくらでもできる。

するならもつとソフトで普段したかったことをしよう。

私はそつと兄を抱き抱える。お姫様だっこ。そしてベットに寝かせ、兄を見下ろしながら制服の赤いスカート解く。

「な、なななな、何を……何をしようかしら」

このまま兄が起きても私には“約束”という免罪符がある。そして兄は約束を絶対に守る人で嘘はつかない。

それは私という野獣の自由を認めたということと同義。

今日は薬の効果が切れる心配もなくていい。薬が効くのは通常なら一時間、アルコールとセットで二時間。普段はそういう時間を上手く調整しながら兄に悪戯をしていた。故にしたいことも制限されていた。

今はそれもし放題。

ひっひっひと下品な声が漏れて、私はまた涎をすすり、少し自制

する。

優のお尻を存分に舐めまわしたあと、あの柔らかい肉に歯型をつけるなんてのもいいかもしれない。汗ばんだ脇の匂いを嗅ぎながら舌を這わすのもたまらない。それとも優の乳首をふやけるまでしゃぶろうか。優が起きるまで、ずうっと股の間に顔を押し付けて深呼吸……いやいやこれはデザート。まだ早いわ。

「……あ、夕香、さん？」

「え？」

優が、起きて、しまった。夕闇に照らされる優の朗らかな笑み。

若干涙の後が気になるが今の優は随分と落ちついているようだ。

泣き叫んだりするのかと思っていたため、少し拍子抜けするが深く考えるのはやめた。寧ろ都合がいいじゃないかと微笑み、優の布団に潜る。

「兄さん、約束……よね？」

そういえば下着は、別に、いや、もつといいのが、いやそれよりも汚れとか、でも我慢できない。

「あ……あ、やでも」

キスをしながら優をベッドに押し倒す。胸を優に押し付けて、舌をかき混ぜる。優の股の間に足を入れて玉と竿を柔らかくマッサージュする。

クチュクチュと部屋に唾液と舌の混ざり合ういやらしい音。溢れる私の唾液を優の口に流し込む。

唇を離す。唾液が糸のように優と私の間を橋渡し。

「優の嫌がることはしないわ。優のしたいことをする。それならいいよね？」

今度は優が私とセックスをするという前提に話を進める。

優はまだ心の準備ができていないのか、それともキスのせいか、顔を真っ赤にさせて視線をさ迷わした。

だめだ、その仕草がもう、たまらなく愛おしい。

「優………！」

「あ、お……おふるとか、入ってないから俺汚いかも」  
「優の匂いは全部好きよ」

寧ろ“濃い”方が好きだ。

「でも夕香さんの、方は、気に……しちゃうんじゃない」

「そういうことは分かっても言わない」

確かに汗掻いているけど、下着は特に汚れて、るか。

「えっと、じゃあ、おなか……空いてない？」

「今は兄さんを食べたいわ」

「俺はちよつと……お腹、減った、かも」

どうやら優は今直ぐというのは嫌なようだ。心の準備がしたいの  
だろう。

私は小さく溜息をついて髪を掻き上げる。そして優から離れた。

「いいわよ、先にそつちを片付けね」

「あ、うん……ありがとう」

譲歩したわけじゃない。

私は優の体だけじゃなくて、優の心も欲しいのだ。いや兄の全て  
が欲しい。

視線も嫉妬も欲情も優しさも怒りすらも。

だからちよつとずつ心を侵食していく。私という色で染めていく。

優しさという手段で、あるいは嘘、あるいは暴力、あるいは肉欲。

あるいはあるいはあるいは……。

汚いとかズルいとか浅はかだの、もう関係ない。

だって目の前にチャンスがあるのだから。だって目の前に夢が叶  
う希望があるのだから。

「ねえ、優……その前にちよつとしたお願いがあるの」

「な、なに？」

「ま、股の匂いを嗅がせて……ほしいの。だって、ほら、洗ったら  
……匂いが、ね。そ、そんな困った顔しないでちよだい！」

「優くんとする初めてのセックスはどうだった？」

最早見慣れた白い壁。

男は朗らかな笑みでそう聞いた。夕香は一瞬面食らったような顔をしながら直ぐに持ち直した。

「別にそれが初めてってわけじゃないわよ。あなたも知っている通り……」

「知っているよ。でもそれはオナニーであって、セックスじゃない。意志を無視した行為はただのオナニーだと僕は思うんだ」

「ああ、そう」

「うん、そう。で、どうだった？ 彼を騙して、彼の優しさに浸け込んでした、君の望んだセックスはどうだった？ 彼の心を犯した気持ちは、どうだった？」

微笑みながらそう聞く。

彼女はその問い掛けにニヒルな笑みを浮かべ、侮蔑と挑発を込めていった。

あるいは怒り。

「最高だったわよ。優の喘ぎ声、肌の温もり、泣く時の声もまた甘美な悲鳴だったわね。十年來の願いが叶ったあの日は今でも脳裏に焼き付いているわよ」

「そう。その時はもう何も感じなくなっていたんだね」

「……ええ。兄を食らうことで精一杯。喜ぶことで精一杯。泣くだけか、罪悪感とか、それどころじゃなかったわ」

「そう、か」

男は微笑みながら、少し下を向いて息を吐いた。黒いスーツがもう一弾暗くなったような錯覚。

夕香は対面するその表情が心なしに辛く、悲しそうに見えた。

「やっぱり悲しい？ 年中、幸せそうに笑っているあなたでも」

「それは……当然悲しいよ。兄妹が、それも望まない性交をして、片方は傷ついて、片方は反省してないんだからね」

「あら、そっち？ なあんだ、てっきり昔のことを思い出してるのかと思った。知ってるのよ、私」

「……………日記のことだね」

男の微笑みが消える。変わりに汗が額に浮かんだ。

夕香はそれを見てニヤニヤと笑った。

「ええ、勿論そうよ。今あなたは、私達と自分を重ねているんじゃない？」

「残念だけど、僕の記憶は歯抜けでね。都合よく、昔の辛い記憶がないんだ」

「あはははは、優月が“直ぐ忘れる癖は、もはや遺伝としか思えない”とか言っていたけど、このことだったのね！ なるほどね……………いえてるじゃない」

クスクスと口を押さえて可笑しそうに夕香は笑った。

ハンカチで額の汗を拭いながら男は無理に笑う。

辛い過去を誤魔化すように。

辛い現実から目を背けるように。

「夕香ちゃんもできればあの子を恨まないでやってほしい。あの子は純過ぎて、自分の理念を突き通し過ぎてあんなことになっちゃったんだ。だから」

男の言葉を遮るように夕香は言った。

「それは、父としての言葉？ それとも医者としての言葉？」

「……………」

微笑んだまま男は何も答えず、夕香を見続けた。

白い肌に白いくせ毛。それこそが本体とでも言わんばかりの長くボリユームに富んだ髪の毛。

眠たげな赤い瞳を持ち上げて優月はいつものようにゆったりとした口調でいった。

「何で優さんがいないと、あなたは嘘をついたですか？ 目の下の内出血は何ですか？ 手に血がついてますけど“また殺した”んですか？」

手がタイプライターのキーを刻むようにカタカタと動く。

夕香はその間に薄笑いを浮かべて返す。

優月は彼女が滅多に笑うことがないことを知っていた。だから瞬時にその笑みの意味も理解できた。

つまりは拒絶。

「はあ？ 何のこといってるのかしら。私全然分からない」

「わたしはあなたが何をしたかとか、これからどうしていくのか、といったことには一切興味はありません。あなたがこれからどんなに落ちぶれようが、腐っていこうがそれはあなたの自由です。わたしはただ真実が知りたいだけです」

「挑発には乗るほど、私も馬鹿じゃないわ」

「では賢い夕香さん、教えて下さい。本当のことを」

馬鹿らしいと夕香は上品に鼻で笑い、優月から視線を外した。

「本当は優さんじゃなくて、あなたが母親を殺したんじゃないんですか？ 優さんはその罪を被っている。人生を犠牲にしてまで。違いますか？」

「……………相変わらず、面白い考え方ね。でもその推理に根拠なんてないわ！ 当て付けじゃない！ 私達にとってあの出来事はもう遠の昔に終わったの！ 私達、兄妹があの後どんな辛い目にあってきたか知っているでしょう？ もう、あの時のことを掘り返すのは

やめて！」

そう夕香は強く訴えた。

優月は表情を変えず、思った。

話題をそらそうとしている。

自分は弱い立場の人間だと印象付け。

「……………変なんですよ。当時の記録を見ると、あなたはお兄さんが母を殺した場面を見て、直ぐに通報したことになっています。それから十分後に現れた警官が残した記録には遺体は死後二時間以上は経過していると記されているんですよ。残りの一時間四十五分は何があつたんでしょうね。それに母親を殺したとされる優さんですが、あの凄惨極まりない状況で何故殆ど返り血が付いていなかったんですか？」

「……………当時の兄がどんな感じだったかとか何時通報したとか、何て答えたかなんて私、覚えてないわ。返り血は……………上手く付かなかつただけかもしれないじゃない」

「そうですね。でも犯人はまず母親の背中をめった刺しにして、腹を抉り、倒れたところをのしかかるようにして喉に刃物を突き立てたんです。のこぎりのように何度も何度も。これは確かな事実です。ですから、返り血がついていないというのは、まずありえないことなんです」

「でも、私覚えてないから何を聞いても言っても無駄よ」

「直ぐ忘れる癖は、もはや遺伝としか思えないですね」

都合の良い部分だけを忘れるその記憶を揶揄し、皮肉る。夕香は視線を外し、何度も瞼を瞬かせる。

「……………で、ようは母を殺したのは私だといいたいの？」

「ええ」

「動機は何？ 私が母を殺す動機は……………」

夕香の薄笑い。探るような、それでいて怯えるような大きく開いた目。

余裕があるように見せた余裕のない顔。

優月は指をカタカタと踊らせて頭の中のデータを引き出す。そして変わらぬ眠たげな表情と口調でいった。

「事件当時、何度も警官に“僕が声を出してしまったから”といていたことから、日常的に母親から性的暴行を受けていた優さんはある日、遂に耐えきれず声を上げてしまった。それを聞いた当時のあなたは……なんとあなしに兄が良くない目にあっていると感づいていたあなたは、包丁を手に取り、母親の部屋へと駆けた。そこで見た信じられない光景、兄のむせび泣く声、そして耐え難い嫉妬にあなたは母親を殺してしまった」

指はぴたりと止まる。

夕香は彼女の推理に興味深そうに無言で何度も頷き、顔を上げた。そしてクスクスと可笑しそうに笑う。

「面白い推理だけど、それは違うわ」

「そうですね。所詮、推理ですから」

興味なさげに優月はそういって、じっと夕香を盗み見た。

自信に満ちた表情。

額には汗。

表情は何か安堵した顔。

そして“それは違う”という答え方。

それは違う……？

不自然な答え方だ。

彼女の唇はうっすらは笑みに歪むが夕香はそれに気がつかなかった。

「あなたが嘘をついているという可能性もあります」

「嘘なんて私はつかない」

「では、あなたが正直者であるという証拠……優さんが生きている姿を見せてもらえますか？」

「……いいわよ」

彼女は思う。

白い彼女は、思う。

人は答えを突きつけられるとなんとかそれを隠そうと演技する。それは時に見抜くことが不可能なほど高度なものを見せることがある。だが不思議なことにこういった場面で、あえて間違った回答を提示すると、相手は自分の悪事はバレていないと勝手に安堵し、余裕を見せる。

分り易いほどの安堵と余裕を。

そう、今の彼女のようじ。

何て、人間は単純で、そしてシステマチックなのだろうと彼女は静かに微笑んだ。

「行つてきます」

色を帯びた声。

家の裏に腰を下ろして座っていた彼女は、長い髪の毛についた土埃を払い、のっそりと立ち上がった。

太陽光が苦手な為、小さな肩がけのバックからサングラスを取り出しかける。

扉側に回り、当たり前のようにポストから家の鍵を抜き取った。

鍵を開けて、侵入。

家になると、ぐうつと腹がなった。上がりかけた階段を下りると台所に向かい、冷蔵庫を開け、中にあったヨーグルトを勝手に食べた。

コップについだ牛乳を飲みながら、ついだとばかりに事件のあった部屋に向かう。

一見、血痕は綺麗に拭き取られているように見えるが、所々壁や床には黒く変色した血の跡が小さく残っている。隅の化粧台においては当時の姿のまま放置されていて、冷えたマグマのような黒々とした塊が鏡にこびりついていた。

「返り血が付かないことは、やっぱりありえない」

一人、そう呟き、彼女はコップを戻しに台所へ向かった。

妹に暴力を振られ、欲情された哀れで可哀想な兄。

いつから彼は欲情され、恋焦がれられていた？

最近？

事件後？

事件前？

事件前だとしたら……。

静かに階段を上がりながら、兄の方はどんな嘘をつくのだからと  
彼女は笑った。

泣き声がピタリと止まる。時間が止まったかのような沈黙。

彼女は椅子に座っている男にもう一度、言葉を変えて問いかけた。「本当はあなたじゃなくて、夕香さんが殺したんじゃないんですか？」

「……………」

「いろいろ気になることがあるんです。考えても答えは分からない。だからあなたの口から真実を教えてください。……………あそこで性的虐待をされていたのは誰“で”誰“が”それを行っていたんですか？そして誰が止めに入っただんですか？」

「ど……………どれも同じことだよ」

少しどもりながらも冷静な声。彼の瞳は真っ直ぐ空を眺めている。

優月は首を横に振る。

「全く違います。例えば、例えばですよ？あそこで虐待されていたのがあなたで、していたのが夕香さんで、止めに入った母がその為に殺されたという結果だとしたらそれは、大きく意味が変わります。それとは別に虐待されていたのが夕香さんで止めに入ったのがあなたであったとしても意味は変わるでしょう。だからこそ私は真実が知りたいんです。あなたの母親が死んだ本当の意味を」

「母さんとは……………知り合い、なんだね」

頭の回転が早い。

それに至極自然な流れで話をすり替えた。

なら、違う探り方をしよう。

優月はどこか楽しい気分になってきていた。

「ええ、少しお話をしたことがあります。私の母とは仲が悪かったのですが、その子供をいびるような駄目な大人ではありませんでした。それで、優さん、教えてもらえますか？」

優は俯いて、首を横に振った。辛そうな笑み。

「真実なんて……ないよ。俺が、かかか母さんをこつ……殺して、妹が俺を恨んで、俺が妹に迷惑をかけた。それだけだよ」

「何故、あなたはあんな人を身を挺してまで守ろうとするんですか？外で何かあつたら止めようと見てましたけど、ただの変態じゃないですか。兄に欲情して、犯そうとして、それを拒否されたら暴力に訴える。人として最低です」

「……あはは、でも俺は人である前に夕香の兄なんだ。俺が守つてあげないと、俺と一緒にいてあげないと夕香は直ぐに駄目になっちゃう。俺しか夕香には味方がいないんだ」

「心理学ではそれを共依存といいます。互いに依存し合い、どんどん悪い方向に進んでいく最悪な状態のことです。そしてそれはあなたと夕香さんという状況で起こっている。あなたが甘やかすから、彼女が依存することを良しとしているから、そーいうことになるんです」

「……俺のことを馬鹿にするのは構わない。だけど妹をこれ以上馬鹿にするのだけはやめてくれないかな」

そういつて優は優月に振り向いた。

負け犬が勇気を振り絞つたような情けない顔。手はブルブルと震えている。

彼女はそれを興味深そうに見つめた。

この男は女性が怖いのか？

いや、何故、そこまでして妹を守る？

どこにそんな必要性が……。

あるとしたら、それは。

ああ、なるほど。

微笑み。どこまでも朗らかな微笑み。

表情の少ない彼女にとってその笑みは最上級の笑顔だということ。優には分からなかった。故に彼女が少し興奮しているということにも当然分からなかった。

ただ優には嬉しそうに笑っているようにしか見えなかった。しか

し、同時に嫌な汗が噴き出る。

優の本能はそれを感じ取っていた。

いつもよりも数テンポ速く彼女の舌は回る。

「……なるほどなるほど、何となく見えてきました。つまり、あなたの母親が死んだのは、あなたが夕香さんと距離を置いたのが原因なんですね。彼女にとってあなたは世界の全てだった。彼女にとって、あなたという存在は神だった。あなたは過保護に妹を見てきた。そのせいで夕香さんはあなたから離れられなくなった。でもあなたはいつまでもこうじゃいけないと距離を取った。その行為が彼女にとって世界から否定されることと同義だとも知らずに。子供にとって父と母は神です。父のいない彼女の世界ではあなたが父役。父と母はセットで、つまり彼女はあなたの横に並びたくて、なるほど。兄という男性を抱くというよりも、彼女は世界の神という兄を抱いているのか。なるほどなるほど、興味深いですね」

見透かすような赤く燃える様な瞳が彼をじっと見続け、口は一人で言葉を紡いでいく。

心を抉るような、削るような死の呪文。

優の入ってほしくない部分に彼女は遠慮なく押入る。見透かすように言葉のナイフで彼の胸を刺す。記憶の彼方に捨てた言葉を彼女は一から構築してく。

優は胸を押さえてそれを苦しそうに堪えた。

「や、やめて……」

「つまり、つまりですね、夕香さんは優さんに捨てられたたくなくて、あなたに無理やり暴力を振るった。性的暴行をした。あなたはそれを我慢した。妹の為だと。でも遂に耐え切れなくなって母親に助けを求めてあなたは叫んだ。“おかあさん”と。神からの裏切りに彼女はヒステリックになり、そして今までしてきたことが露見したら神と一緒にいることは不可能だと悟った。だから自分を神の位置まで昇華させた。神の隣に空席を作り、自分を置いた。何をしたか？当然それは……親殺し。つまり自分が神の隣に並ぶために、父を

犯す為に、父に抱かれる為に。ある意味、典型的なエディプスコンプレックス。なるほど、母への嫉妬もあったのか、いやそれが一番大きい？」

彼女は猛スピードで指をカタカタと動かして脳をフルに回転させた。そうして生み出される言葉は優の心をじつくりと溶かしていく。彼女はそこで優が自分の前にいたことを思い出して、意識を内から外に戻す。

「だから優さん、あなたは夕香さんが自分と離れることは危険だと考えているんですね。現にあれからもそうということがあったから、だから仕方がないと高をくくって我慢しているんですね。夕香さんを否定して、また自分以外の誰かが死んだらあなたは耐えられないから。……優さん、あなたは自分の母が死んだ時にこう思いませんでしたか？」

楽しそうに優月は微笑み、言葉を重ねる。親に自分のテストの点数を自慢するかのような嬉しそうな笑み。

“俺が夕香から離れなければよかったんだ。夕香を突き離さなければよかった。……そうすれば母さんは死なないですんだ。俺がそんなこと考えなければこんなことにならなかった”

気怠そうなその言葉は優の心の中で自分の声に変わり、体をズダズダにしていく。

「もう、もう！ やめて下さい！ おれの、心を、これ以上、犯さないで………下さい」

「なるほど、やっとあなた達のこと分かりました。ずっと不思議だったんです。夕香さんから逃げるチャンスはこれまで何度もあったはずですが。でもそれを選択しなかった。それはもはやトラウマとっていいほどの理由があったからなんです」

誰も傷つけたくないから自分が犠牲になる。

犠牲になることで他人を守るから。自分の妹を守るから。

何をされても怒らない理由。何をされても妹を嫌わない理由。妹を認め続ける理由。

「俺は、何も知らないし……俺は俺は！　じゅん、すいに、夕香を……！」　夕香が……！」

過呼吸気味に優は脂汗を額に浮かばせていう。嗚咽にも似た吐き気と胸の高鳴り。

そして優は胸を強く押さえながら、彼女を睨むように見上げた。

泣きながら、睨むように。

「優さん、はつきり言います。あなたは凄いです。キリストに匹敵する苦行です。いつ爆発するか分からない爆弾を抱えて、誰にも頼らず、平凡な顔をして暮らしていたんですから、全てを許し、全てを寛容して、優しく笑っていたんですから。わたし優月は、あなたを心から尊敬します。よく自殺しなかつたとあなたを褒めてあげたいです。そしてあなたの優しさに恐れを抱きます」

だから教えましょう。

彼女からも、全てからも開放される方法を。

知りたいですか？　いいですよ、教えます。

夕香さんを。

殺せばいいんですよ。

カチャカチャと、食器の音。くちゃくちゃと、咀嚼の音。

ごくりと優の喉は口の中で噛み砕き、唾液でどろどろにしたお肉を胃に落としていく。

改めて食べるという行為に注目してみると凄くいやらしいような気がする。

にゆるにゆるざらざらした優の舌ペロは柔らかかそうな唇が開く度に顔を見せて私を誘う。鼻腔をくすぐる優のオスの匂いに私は情動を隠し切れない。そもそも隠すつもりはないが。

優も自分の体を妹が熱すぎるほどの瞳で見ていることが分かっているらしく、顔を赤くしたまま気まずそうに食事を続けた。

目は殆ど合わさない。

私が一方的に見ているだけ。

それでもたまに視線は交差する。瞳が合うことに優は顔を赤らめていうのだ。

「あの……夕香さん、あんまり顔、みないで、ください」

そして私はいう。

「そうね。この後、好きなだけ見れるものね」

「……………」

湯だったタコのように優は萎縮した。

何をするのか、どうしてそうなるか想像でもしたのだろう。

私はこの前のやり直しということで優が用意した前回と同じ料理を口に入れる。

味はよくわからない。美味しいとは思う。いや、そのはずだ。

今、私の体は牛肉の味を解析するよりも、優のことは見ることに神経を注いでいた。視姦することに意識を注いでいた。

以前の私はそんなことする勇気もなく、妙なプライドのせいですういうこともできなかった。でも今は好きなだけ見れる。触れる。

あからさまに匂いを嗅ぐことも、優を見て舌なめずりすることも、優を見ながら自慰することもできる。

私の足で対面する兄の足をなぞりながら、片方の手をズボンの中に入れて、ちゅくちゅくとわざとらしく音を立てて優を見つめる。たまに剥き出しになった足を優しくつまみ、優の足を強く踏む。

「ふっ……………っ！」

歯を強く噛むが喘ぎ声が漏れた。

私は今、お前の顔を見て達したのだと訴えかける。今お前をおかずにオナニーしているのだと訴えかける。

上気した唇から漏れる私の喘ぎ声を聞けと。

「あ、あの……………夕香さん」

「……………何にかしら」

「ご飯冷めちゃうから、早く食べた方が……………」

恥ずかしそうに顔を染めて優ははにかんだ。目は潤み、所在なさがげだ。

「そうね、早く食べないとね」

「じゃないと優とセックスできない。」

「じゃないと優を食べれない。」

ああ、その羞恥に染まった顔が私の心を強く打つ。子宮を震えさせ濡れさせる。

あの時は優月を鬱陶しく思ったが、今は彼女に感謝したい。

あの子のおかげで私は優とセックスできるのだから。優を私に留めることができるのだから。優を私に縛り付けることができるのだから。

もう我慢しなくていいのだ。優を見て欲情を堪える必要も、優の下着をふやけるまでしゃぶる必要も、食事に薬を混ぜる必要もない。きつと優は私と寝たことで、自分の中に消えることのないトラウマを作ることになるだろう。自分の妹とセックスをしたという後悔や昔の古傷がそれを作るのだろう。

そうなれば兄は一生妹の私から離れられなくなる。私のことが嫌

いだつたとしても、優の中に私と寝たという事実は罪悪感を生むはずだ。いや、私から離れないといってくれた兄は私のことを疎んでいる気配はなかった。都合の良い考え方もしれないが、好意的に思っていたように見えた。

うん、やっぱり優は私に犯されたいんだ。あの泣き顔は私のことが嫌いなんじゃないかと、もっとイジメて下さいという合図だったんだ。じゃなければ今、優はこんなに嬉しそうな顔をしているはずがない。私のオナニーを見て優はきつと今も興奮している。

お風呂から出たら沢山沢山ナカせてやろう。どろどろにしてやろう。快樂に溺れさせてやろう。

私から離れられなくなるほどに。

風呂上り。

私は十分ほどで出た。優は一時間ゆっくり時間をかけて私を焦らした。

何度も風呂場に駆け込もうかと思った。時計の針を何度も確認した。喉の渴きを何度も潤した。

私は優の部屋でベットに腰掛けている。冬の夜空はキラキラと銀色の星々が輝いていて、とても美しかった。

扉がゆっくりと開くのが冷たい空気を伴って私に伝わる。

「優、覚悟できたのね」

「……………」

「随分お風呂長かったから、逃げられちゃったのかと思った」

「俺は……………！ 夕香さんとの約束は、破らないよ」

「どうして？」

「夕香さんを……………夕香を守るって決めたから」

「ふふ、答えになってないわよ」

私はそこで振り向いた。

室内の柔らかいオレンジ色の光に照らされた優の顔は酷く怯えていて、体は固く緊張していた。

本当は嫌なのだろう。本当は逃げ出したいのだろう。涙を流したい、叫びたい、拒絶し悲観したい。私がいなくていいといえばその顔は笑顔に変わるのだろう。

でも、今日だけはそれはだめだ。

絶対に、犯す喰らう陵辱するあるいは暴力でもって。

「早くこっちに来なさい」

差し出した手を優はおっかなびっくり掴みとり、私の引っ張る力にベットにしなだれた。

パジャマをゆっくりと見せつけるように脱ぐ。下着はショーツしかつけていない。

「優、力を抜いて……大丈夫。怖くないから」

「ふっぐ……はあはあ」

泣きべそをかいた優の鼓動が全身を強く打つ。私は甘くとろけるようなキスを優にした。キスをしながらゆっくり彼をベットに寝かせ、優の服を脱がし、私も裸になった。

あらわになった優の裸体を手で撫でつける。そして私の秘所に手を当てがう。

彼は目を丸くして、口をぱくぱくと動かした。

きつと倒錯的な状況に意志が追いついていないのだろう。妹のそれを触っている状況に、妹が兄に濡れている状況が理解できていないのだろう。

「……ねえ、私のそれ、どうなってる？」

「あ、の、どろどろしてて……ざらざらしたのがぐにゅぐにゅ手を吸って、その、なんか」

「別の生き物みたい？」

「う、ん」

また恥ずかしそうな顔。

私は優の竿を内股に差し込んで甘く噛むようにマッサージする。

優の半立ちのそれは直ぐに固くなり先の方からぬるぬるした液体を出した。

「早いけど、もういいわよねもう我慢できないの早く優が欲しいの。うずきが抑えられない……！」

私は優の足元に顔を持ってきて、チヨキとチヨキが咬み合うような形で優の竿を私の中に入れた。前戯などもう散々ひとりでした。ズブズブと竿は肉を掻き分け、私のざらついた肉壺はそれに絡みついた。

「うあ……ぐ」

「ふあ……ゆ、う、ゆうゆう！」

優の足の裏で舌はのの字を描く。腰は前後小刻みに動き、捻り、子宮口を優の竿は何度も強く叩く。深く、弱いところを何度も。

股の間で押さえつけるように優の袋を強く圧迫して、精子を多く出させようとする。

蛇の、またはナメクジの性交のように私は優と一つになる。優の足を口に入れ、指を、指の間をしゃぶり、優の口に私の足を無理やりねじ込んだ。

「あぐ………ああっ！」

既に“悪戯”でボルチオを開発しきっていた私は獣じみた喘ぎ声を上げて、肉壺から液を滴らせる。

起きている優としているという事実に興奮する。優の心を穢していると思うと気持ちが高ぶる。

屑な私とカワイソーな優の喘ぎ声。

私は口端から涎をだらだらと零して、お腹を好かせた赤ん坊のように優の足を愛撫した。

優は迫り来る快樂に、逃れようとベットの端を掴み、私の中から竿を引き抜こうとするが、絡み合った状態ではゴムののように元に戻るだけで、それはより強いピストンを生み、自分を苦しめるだけだった。

優の体のねじれが私にダイレクトに伝わる。竿の力り首はみつちりと詰まった肉の壁を掻く。

逃げようとする動きが何度も何度も子宮口を叩きつける。そのせ

いで喘ぐ息と溢れた自分の涎に溺れそうになった。

「あっあっあっあふ」

「あう、ああっ!!! こ、わ、い……なん、か、ああああ!」

優の竿は固く大きく膨れ、直ぐに液を吐き出すのが分かった。だから私はお尻に力を入れて激しく腰を揺さぶった。優のそれを引きちぎらんばかりの捻じりを加えて、ぬめついた壁で締め上げる。熱く熱したひだを擦りつける。

ふやけた足の指は固く握られ、優は口を開き、目を見開いた。

「っ!!!」

「ゆっゆっゆっゆっゆっゆっゆっゆっゆっゆっ」

優の声なき悲鳴。私の優を求める奇声。

互いにひとつの感覚を共有していく幸福。互いに互いの肉体に溺れていく不幸。離れられない呪縛。見えない鎖。

それを今確かに私達は感じていた。

どろどろに融け合った私たちは、電撃を浴びたかのように体を痙攣させて震えている私達は。

それを確かに感じていた。

ドクドクと鼓動は脈打ち、射精は留まることを知らない。

優は息を止め、背中を大きく仰け反らして、光から自身を遮るように顔を手で覆った。

眩しすぎる暗闇を恐れるように。

自分の過去から目を瞑るように。

私は息を切らし、襲い来る快樂と優の苦しむ様を眺めながら更に気持ちを高ぶらせた。

ああ、理念や情動。正しさ、倫理が優の中で音を立てて崩れているのが私には分かる。優が苦しんでいるのが、悲しんでいるのが、叫びたいのが、私には分かる。

だから、優は泣く。声を上げて、子供のようになく。

「うあぐ……あう……ううううううう！」  
顔に爪を立てて、しゃくりあげるように、溢れ出した感情を堪えるように泣く。

私は快樂に酔いしれながら、兄のそれを引き抜き、優に身を重なつた。重ね、まるで母親のように優を体に抱く。

「よしよし、怖かったのね。もう、終わったから大丈夫よ。これからは一緒にずっと暮らして行きましょう。辛いことも悲しいことも嬉しいことも共有していきましょう。だから私から離れないで、私を捨てないで、私を愛して。もっと私を愛して。いえるわよね、私のこと好きよね？ 心を落ち着けていってごらんなさい？ ほら、早く」

顔を優にくつつけて、兄の視界を私で埋める。

無回答は許さない。

無言で優の瞳を捉え続け、答えを待つ。

優は逃げるように視線をさ迷わすが、どこに目をやっても視界に映るのは私だけ。

「うつつ……」

「兄さん、泣いていちゃわからないわよ。私のこと、嫌いなもの？  
守るっていったのは嘘なの？」

「ほんっ……と、だよお」

「じゃあ、言えるわよね？ 私のこと好きだって、私のことこれから  
もずっと受け止めてくれるって」

自分で言っていておかしい。何が“じゃあ”なのか。私も所詮、  
あの茶髪の男と程度は変わらないということなのか。

でも気にしない。私は屑でいい。私は屑だ。

兄に欲情して恋慕している屑でいい。兄の心を騙し、都合よく歪  
めている屑でいい。

プライドなんてものは犬に食わせてやればいい。

「早くして」

じゃないと混乱してる優が冷静になっってしまう。

「夕香を愛して続けます。ほら、さんはい」

「うつつ……ゆう、かさんを」

「夕香、でしよう？」

「ゆうか、を……あいし、続けます」

「夕香をずっと受け止め続けます。ほら」

「ゆうつかを、うけとめ……続けます」

「良い子ね」

「うああ……ぐっ」

褒美とばかりに優を抱き締め、頭を撫でた。

母みたいに顔を埋めるほどの乳はないけれど、優にとって私は今  
妹でありながら母親でもあった。

だから沢山甘やかして沢山泣かせてあげる。

泣き止んだら、今度は私をナカせてもらっから。

私はその可愛い顔を見ながら、次はどう責め立てようか涎をすす  
った。

爽快な早朝。休日の早朝。

優は子猫のように丸まって、泣きはらした顔を私の体に押し付けて寝ていた。

本当は二回三回と続けたかったのだけど、泣きつかれた優は直ぐに寝てしまって、それどころじゃなかった。

優の寝顔を五分ほど視姦し、毛布の中に潜った。そして直ぐにそり立ったそれを見つける。

優は直ぐ寝たので私とは違い、まだ全裸のままなのだ。

愛液と精子の匂いで蒸れたそれを私はくわえた。歯を立てないように吸引して、舌で汚れをこそぎ落とす。

「……わっ！」

優は直ぐに起きて、布団をまくり上げた。そして何か言おうとして、その場で固まった。

私を受け入れるといったことを思い出しているのか、昨晚もつと凄いことをした手前何もいえないのか私には分からない。ただ私は兄の顔を眺めながら一心不乱にふやけるまでしゃぶるだけ。

顔を眺めながら、弱い場所を何度も責め立てる。玉を口に含んで舌でコロコロと転がしたり、首のところに何度も舌を這わす。

「ふっ、ふっ、ふっぐ……」

気がつけば優は口を押さえて、喘ぎ声を堪えていた。それがあまりにも可愛らしくて私はわざといやらしい音を立て、優のものを頬張り、弱点を執拗に責めた。

直ぐに優は身震いして、私の口に液を吐き出した。私はそれを口の中で転がし、噛んで、味わうようにして飲み込んだ。

「ごちそうさま」

耳元に近づいて、そう囁いた。

何故かそこでまた優は泣いた。

生まれて初めて、かもしれない。いや以前にはそういうこともあった気がする。でもイマイチ思い出せない。

微笑みながら朝食を待つ風景なんて。

優のエプロン姿の背中を眺め、にやにやと締まりの無い笑みを零す。今日の優はいつも以上にぼんやりとしてて、先程は何度も牛乳を冷蔵庫から出したり閉まったりしていた。

私はそつと優の後ろに立つと、優の胸をエプロンの上から揉んだ。優は一瞬身を固まらせたけど、何も言わず私を受け入れた。

次にお尻に向かい、パジャマごしに揉みながら頬ずりする。鷺掴み、鼻を押し付けて深呼吸する。

不意に優は振り向く。顔は困ったような微笑み。

「……夕香さん、これじゃご飯作りにくいよ」

「いいじゃない、朝食なんて。今日は家の中で沢山やらしいことをしましょう」

「そ、そういうのは暗くなってからじゃないと」

「じゃあ、私が兄さんの目に手当ててあげる。それなら暗いでしょ？ それとも地下室ですか？ あそこはとっても暗いわよ。……」

「……どうして泣いているの？ 優」

「あれ？ 俺、今泣いてますか？ おつかしいな、あはは……何で、こんなに涙が止まらないんだろ。変だなあ」

「変な優」

私は立ち上がり、優の涙を舌で舐めた。

その味は、とても塩辛かった。

「……君は何も聞かないんだね」

優は彼女に背を向けたまま言った。

本棚が雑に置かれた秘密の部屋。優月のあの部屋で。

優月は読んでいた本から顔を上げていう。

やはりその表情はどこか眠たげで、ゆったりとした口調。

「聞いて欲しいんですね。自分の心を、あれからのことを。だから何かと言いつくしてここにいますか？」

優は若干答えを戸惑うように、沈黙し自分に言い聞かせるかのようにいった。

「そう……そうかもしれない。俺は君に聞いて欲しいんだ。君に俺の気持ちを吐き出したいんだ。この感情をぶちまけたいんだ、多分」  
「では聞きましょう。夕香さんとあれから、何があったですか？」

冬の青空。既に夕香は学校に行っていた。

朝から優を貪った彼女はテスト期間だから早く帰ってこれると優に伝えると嬉しそうに家を出て行った。

早く家に帰ってこれるといふ笑み。

優も微笑みながら、どこか釈然としないものを感じていた。

いつてしまえば早く帰ってくるという彼女の言葉に少し恐怖を感じていた。また自分は夕香とソレをしなきゃいけないと思うと彼は涙を堪えられなかった。

彼は窓を眺めながら、グズグズと泣いた。

誰かに慰めて欲しい。

誰かに声を聞いて欲しい。

心の声を。

「ああ、そうだ……」

優はふと本を返していないことを思い出した。

机の引き出しにしまった必要のない心理学の本を取り出す。元は白かっただろ。表紙は長い間、日光を浴びていた為か、うっすらと黄色く変色している。

「返さないと……」

直ぐに着替える。元々少なかった服はあることを切っ掛けにより少ないものになっていた。

あるのは三着の服だけ。それ以外はダンボールひとつあれば足りるだろう荷物しか彼は持ち合わせていない。

大切だったものは全て捨てた。最低限必要なものだけを残した。

理由は夕香がそう望んだから、というのが彼の中の理由。

着替えを終えた優は玄関に向かい、靴を履く。そして誰もいない家に振り向き、言った。

昔、母にいうように言われたことを、言った。もはや遺言になったそれを、言った。

「行ってきます」

自動ドアをくぐって直ぐのところ、玄関ロビーの椅子にのんびりと座って本を読む老人が目に入る。優はこんな所で読まず、中で読めばいいのと思いつながらエレベーターに乗る。スイッチを前回の時と同じ要領で押した。

三階の薄暗い玄関。インターフォンを探すも、やはりそんなものはどこにもなく、優はまた前回と同じようにくぼみに指を差し込んだ。ピットという電子音と共に大げさな音を立てて扉が開く。

「おじゃま……します」

外よりも暗い廊下に目を凝らしながら、優は進む。直ぐに奥の部屋に辿り着くが、何故か前回よりもその部屋は暗かった。光を頼りにしようと思うが、少なすぎる光では本棚が多いこの部屋では役に立たない。

前回彼女がいた場所に向かうも彼女はいなかった。

「奥にいるのかな」

優は更に奥に進む。

沢山の本棚群れを抜けると木製の分厚い扉が見えた。優は一瞬、勝手に開けていいものなのだろうか躊躇うが、しょうがないと心に言い聞かせて扉に手をかけた。

「そこは私の生活区域です」

その声と共に窓の光は強くなる。

低くうねるモーター音にこの部屋は機械で光の量を調節しているのだと優は気がついた。

声のする方向を向く。窓とは反対側、壁際の四隅。

気怠そうな彼女はクッションの上に腰を据えて、優をじっと見ていた。デフォルメされたヒヨコが描かれたパジャマ。その手には機械を操作するリモコン。

「やっぱり優さんは泥棒さんですか？ それとも私が不思議で、不気味で、奇妙ですか？」

「俺は、泥棒じゃないし、別に君のことは奇妙だとか思ってないよ。少し変わってるとは思っけど……」

急に何を聞くのだろうと優は内心疑問に思った。

彼女はその言葉を吟味するように優しく緩やかなタップで見えないキーを叩く。光が届かないギリギリの所で、薄暗さの残る部屋の隅で彼女言った。

「先天性白皮症。つまりメラニンの生成に異常をきたした個体……遺伝的疾患です」

「え、何？」

「私のこの肌が白い病気のことです。俗にアルビノなんて言われます。わたしは自分のことを客観的に見れているので、あなたが恐ろしいと思っていても別に何とも思いません。奇異な目で見られることは慣れています」

慣れている。

その言葉に優は何かぞっとしたものを感じた。

いつかは自分もそうなってしまう、諦めるようになるのではない

かという恐怖。

妹とのアレも普通を感じてしまうのではないかという恐怖。

「……慣れているって！ 慣れているのと辛くないってのは、違う！ そんな、そんな悲しいこと言っちゃだめだ……」

「あなたはやはり優しい。そんなことを言われたのは初めてです。ですが人間、自分たちとは明らかに違う種に生理的な嫌悪を持つようにできています。目が赤くて、真っ白な人間。……誰が見てもビツクリします」

「……俺はさ、人殺しだ。だから君と同じように他人とは違うっていう目で見られてきたよ。自業自得でそれはしょうがないことだけど、でも。でもね納得していても、やっぱりどこか辛かった」

優は光を浴びながら暗く陰る言葉を吐き捨てる。

人工的な木漏れ日の中で優月はそれを見て少し可笑しそうに笑った。

爬虫類のような不気味な笑み、あるいは人形のような無機質な笑み。感情の籠らない形だけの笑み。

「私とあなたは違う。個としても群としても違う。私の嫌悪とあなたの嫌悪も種類が違う。だから私と重ねることは端から間違っています。同情は人間の美德ですね」

「同情なんかじゃ……!!」  
優は思った。

何故、自分と大して年端も変わらないだろう少女がここまで悲しい笑みを見せるのだろうか。今までどんな辛い目にあってきたのだろうか。

「いいんです。別に何とも思ってますから。それにわたしアルビノですけど、そこら辺の人より可愛いですし、頭良いです」

ブイと小さく言って彼女はピースを彼に向ける。ポカンとした表情で優はそれを見つめた。

ん、この子さりげなく何かおかしなことを言わなかったか？

「ジョークです。ちょっと、しんみりしていたので。おかしいです

ね、お父さんには馬鹿うけだったんですが……」

「……ははは。いや、君が冗談をいうタイプには見えなくてさ。一瞬何を言ってるのか分からなくて、あはは。なるほどね」

「ブイ」

優は思う。

なんて気配りのできる強い子なんだろう、と。

彼女は自分のことばかり考えている自分とは違い、周りの空気もちゃんと感じ取れる賢い子なのだ、と。

でも、やっぱり彼女も辛かったはずだなんだ。

思い出したくない過去は思い出さないうに限る。

常に蓋をして、それを見ないに限る。

そうすればいつまでも理想の自分を演じることが出来るから。

何も辛いことはなかったように笑えるから。

自分を殺して笑えるから。

そうなるまで自分は時間が掛かった。

彼女はどれだけの時間を費やしてきたのだろうと彼は思った。

「ああ、本ですか。ありがとうございます」  
差し出された本を受け取ると、元の位置に座り、直ぐに読み出した。

優は所在なさげに、辺りを見回す。

手に取った本はドイツ語で書かれた解剖学の本だった。リアルな図解に少し気分が悪くなる。

「パジャマ姿だけど、君はいつもこの本の森で寝てるの？」

「本の森……表現がとても詩的です。その扉の奥にわたしの生活区域、つまり寝室なんかがあります。でも最近起こった地震のせいで本が雪崩のように降ってきてベットが埋まってしまいました。なのでそこで寝れないのです」

「本をどかせばいいんじゃないかな」

「毎日やっています。でもわたし、非力な上に片付けている側から本を読んでしまうので駄目駄目です」

「じゃあ、俺も手伝うよ」

「報酬は出ませんよ」

「俺、そこまで卑しい人間じゃないと思うんだけど……」

「そうですか」

静寂。

優は英語の本をパラパラと捲る。

「こういつちや変なんだけど、アルビノって……世界がどう見える？ やっぱり普通と違って見えるのかな」

彼女は本から顔を上げず文章を目で追ったまま言った。

「分かりません。わたしはアルビノではないわたしを、普通のわたしを、一般的な目線を知らないので」

冷たく伶俐な返答。優は質問を間違えたかと内心、溜息をついた。漫画でわかる、日本の歴史という本を手に取り、その場に座った。

「……ですが、そうですね。もしもわたしがアルビノでなかったら世界はまた違ってみるのでしょーね。目が今のように赤くなければ、人に恐れられることもなかったでしょーし、肌が普通であれば人ごみの中で目立つこともなかったでしょー。逆に言えばわたしの虹彩の色が青でも見える世界は違う。わたしが眼皮膚白皮症四型であっても全く違う世界がそこにはある。つまりどんなに小さな変化でも世界は大きく変わるんです。カオス理論でいうところのバタフライ効果ですね」

「……よく分からなかったけど君が俺よりも遥かに賢いことと、何となく正しいことを言ってるってことはわかった」

「そうですね。ちなみにその本、五十三ページから六十五ページにまでにおける記述は正しくないですよ」

「……よく覚えてるね」

「一度読んだから当然です」

「……じゃあ、ここにある本、全部もしかして？」

「覚えていますよ。普通そーじゃないんですか？」

「いや……普通の人は一冊読んで大まかな話を覚えるのが精一杯だと思います」

「そうですね、随分と効率が悪いですね。わたしの母はページぱらぱら捲っただけで全て記憶するという異常な脳を持っていたので、てっきり私のレベルが普通なのかと思いました」

「……………」

彼女はそれが当たり前のようにそういつて、ページを捲る。

優は確実に五分後には忘れてしまいそうな内容のために時間を使うのが何だか酷く馬鹿らしく思えてページを閉じた。

「君のお父さんもそんな人なの？」

「お父さんは優しいのと料理が上手いのと、母を愛しわたしを愛しわたしと母に愛されるのが仕事でした。それ以外は全然駄目です」

「ご両親は何やっているの？ 一緒に暮らしていないの？」

「母は会社の社長さんで世界中を飛び回っています。父は一応医師

免許を持っていますが無職です。父は母がいつでも一緒にいたいからという理由で連れて行かれました」

「独りで寂しくはない？ 俺は一人で家事してるとき、実は世界には自分ひとりしかないんじゃないかって思うときがある。テレビは誰かが作った擬似映像なんじゃないか、とか」

「ここで一人で暮らしているのは、わたしが言い出したことです。両親はわたしを連れて行くつもりでしたが、当時のわたしは外に出ることが非常に苦手で、ルーチンな行動をしないと死んでしまうと思っていた人間でした。飛行機に乗るなんて、飛行機の落ちる確率を知っているわたしには拷問でした。今は大分まともになったのですが、それでもやっぱりどこかに行くことはあまり好きじゃありません。ちなみに飛行機は今でもわたしの敵です」

「ははは、面白いね」

「わたしにとつてはとても重要なことです」

優は微笑みながら優月が“寂しくはないか”という問いに答えていないことに気がついていた。

そしてそれは触れないでおこうと思った。

静寂を破る問い。空気を変える声。

「では聞きましょう。夕香さんとあれから、何があったですか？」

「何をあつたか、か」

優は少し自嘲的に笑う。

自分のしたことに泣きたくなる。

だからそれを隠すように彼は笑った。冷静に笑った。

「妹とセックスしたんだ」

「そうですか。それで？」

彼女の表情は変わらない。

生きているのか怪しく見えるような白い肌と何を考えているのか分からない眠気な表情。

「吐き気が、した。震えが止まらなかった。全身がボロボロと崩れ

落ちるような気分の悪さを感じた。本当は嫌だつて叫びたかった。でも夕香はそれを許してくれなくて、その許可をくれなくて、凄く楽しそうに笑うんだ。俺が見たこともないような綺麗な笑みで。それで、その日から悪夢を見るようになった」

優は口を抑えながらその夢を優月に教えた。

暗闇の中で自分は寝そべっていて、足元と手の先から何かが自分を延々バリバリと齧っていく奇妙な夢を。

「涙が！……堪えられない。歩いているだけで夕香とセックスしている時の感覚が甦ってきて、パニックになって、息が、できなくなる！夕香が声をかけてくるだけで、俺を見てるだけでおかしくなりそうなんだ。羞恥と恐怖で感情がパンクしそうなんだ。それでも夕香は毎日、求めてきて、もつともつといるんなことを求めてきて、でもそれが何故か……怖いくらい気持ちがよくて、でも辛いのにしたくないのに　　っふっぐ」

優は過呼吸になりながらその場に手をつく。全身を汗で濡らして涙を流した。

優月はそれでも手を貸さずにじっと暗闇から彼を見ていた。

典型的な心的外傷後ストレス障害。

いや、それだけじゃないだろう。

いくなれば彼は合意という名の強姦をされたのだから。

それに過去、性的虐待を受けていたという事実もある。

……しかしあの家の女は本当に家族を強姦がするのが好きらしい。

「そうですか。それで？」

「普段から、心のバランスが、取れない。前はこんなこと……なかなかたのに、涙が感情が溢れて止まらないんだ！……でも妹を断れない。でもしなくちゃいけない。嫌なのに嫌だつて言えない。どうすれば……どうすればいいんだろう」

顔を涙と鼻水でグズグズにして彼は搾り出すようにいった。祈るように頭を抱えて、窓の光に照らされ泣いた。

「彼女は暫くは貴方を貪り続けるでしょうね。今まで抑圧していた

分、きつと。多分彼女もあなたが嫌がっているのは分かっていると思います。でも今までのままでは止めることはないでしょうね」

彼女にとって兄の体を犯すことが精一杯のアピールだから。

彼女にとって兄を犯すことは年頃の少女が想い人にアピールするそれと一緒だから。

彼女にはそれ以外何もないから。

『夕香さんは、その好きな人に振り向いてもらえないんですか？』

客観的に見て美しいと思いますけど』

『……あの人にとって私を見てくれなんて、どうだっていいみたい。テストで良い点取っても褒めてくれるだけで終り。まあ、そこがいいのだけど、女としてちょっと悔しいわね、やっぱり』

いくら見てくれがよくても、相手は振り向かない。

いくら頭がよくても相手は振り向かない。

自分を好きになってももらいたくて、犯す。

自分だけを見て欲しくて、犯す。

単純で、恐ろしく、馬鹿げた思考。

「いつか、このままじゃ……死ぬ」

「……………一つだけ彼女を抑える方法、ありますよ。そんな絶望したような顔しなくても分かっています。殺す方じゃありません。教えてもいいのですが、ある程度抑えるだけで解決には至らない。それでもあなたは構いませんか？」

優は泣きながら何度も頭を首肯した。

今よりはずっと良いはずだと、首を引きちぎらんばかりの顔きでそれを求めた。

カリカリとメモ帳に何かを記している男に彼女は聞いた。

「ねえ、何故私はこんな僻地の病院にいるの？ 何故逮捕されていないの？」

「記録上では初犯ってことになっているのと、未成年だからかな。あと弁護士が心神喪失を訴えたのも大きいらしいね。君は犯罪者というよりも、公式的には病人という扱いなんだ。相変わらず優秀な弁護士だね」

男はペンを休め、顔を上げると彼女にそういった。

「ああ、母さんの時も同じ人が担当したそうですね。これも本家のおかげって奴？」

「どうだろう。あの家はただ自分の家名に傷をつけたくなかっただけじゃないかな。あの人もそう言ってたし……」

そういつて男はメモにまた目を向けて、ペンを動かす。

それに夕香はニヒルな笑みを見せた。蔑んだ笑み。

「随分と余所余所しいじゃない。母さんをあの人呼ばわりなんて！」

「……僕は、あの人、苦手だったから」

「だから私達を放つたらかしにして！ 母さんが死んだ後も、私達のこの前のことも！ そうなのね！？ ねえ！」

夕香は鋭い視線をより尖らせて、男を睨みつけた。

その言葉に男は微笑みを小さくさせるとがっくりと項垂れ、か細い声で答えた。

「……ああ、僕は本当に駄目な男だ。君たちがそんな目に遭っていたことも彼女が死んだことも、ついこの前まで知らなかった。君たちがそんな倒錯的な関係になっていたのも知らなかった。僕は……変りなして報告をずっと信じていたんだ。自分で見てないことを鵜呑みにして何年も顔を出さないなんて……本当に僕は馬鹿だ」

「え？ ねえ、ちよっとホウコクってどうということよ……。誰か私

達を監視してたってこと!？」

彼女は一瞬目を丸くし、次に怒気を孕ませながら牙を向いて、男に吠えた。

男はそれに言葉を選ぶようにして、視線を泳がせて、言った。

「えっと、誤解しないでほしいんだけど、あの子に、優月に頼んでたんだ」

「それって、どういうことよ。じゃあ、何？ 優月があの時、私に“友達になりませんか”っていったのは嘘だったの？ 私達を観察する為の口実だったの？ その後、あなたも知ってる通り私達は喧嘩したわよ。でも、でもそれってあんまりじゃない……！ 何よそれ、少しでも嬉しいと思っちゃった私が馬鹿みたいじゃない……」

夕香は下唇を噛み締め、男から視線を外した。目尻から零れた涙は頬を伝って床に膝に落ちた。

友達だと思つて喋っていたあの時期、そう思っていたのは自分だけだった。

そう思うと悔しいというよりも、何か虚しいものが胸を突いた。

必死に男は思考を巡らせ、言葉を紡ぐ。

「僕は決して夕香ちゃんと友達になつて近づけなんていつていないよ。きつとそれはあの子の本心から出た言葉だと思つ。何で僕に一切のことを伝えなくなったかは分からないし、君に何故そういったのか本当のことは分からない。でも少なくともあの子は人の心を踏みにじるようなことをする子じゃない」

「そうよね、優月は私と違って特別出来がいいものね！ 兄に欲情して、兄の心を踏みにじつて、暴力を振るう出来損ないとは違うもの！」

「夕香！ 僕はそんなことを言っているんじゃない。そんなことを言いに君に会いに来たんじゃない！ 僕は君に説教をしにきたんだ……君は兄さんに酷いことをしたんだ」

男は少し語彙を強めて彼女に言った。微笑みは消え、表情は辛辣なものに変わる。

夕香は泣き叫ぶように声を張り上げた。

「今更何よ！　しょうがないじゃない、私は物心ついた時から優が好きで、優に欲情してて！　何度も諦めようと思っただわよ。でも変な女が近づくと度に怒りがこみ上げてきて、胸が苦しくて、気が狂いそうになって！　優を見る度にうずきが、性欲が抑えられなくなつて！　何度も何度も何度も自己嫌悪したわよ、でも抑えられない！　これをどうしろっていうのよ！」

「だからって優を犯していいということにはならない。優の心を壊していいってことにもならないんだ。誰かを傷つけて、それで“しようがない”で片付けることは間違ってる」

「だってそうするしかないでしょう！？　私にはそれ以外何もありませんもの！　どんなに賢くても、どんなに容姿が優れていても優は私に振り向いてくれない！　女としてみてくれない！　無理矢理でもしないと優は私に振り向いてくれない！　優が壊れていくと分かっているても、私は優に愛して欲しかった！　優の気持ちを独占したかった……！」

「そもそも、血の繋がった家族が……恋し恋されることが間違っているんだよ」

男は苦しそうに、胸を押さえていった。

それはまるで自分に言い聞かせるかのよう。

この場にいる誰かに言い聞かせるかのよう。

いや、正確には違うか。

彼女は

「じゃあ！　じゃあどうしろっていうのよ！　死ねっていうの？　ねえ、父さん！　私はどうしたらよかったの？　あの時、母さんじゃなくて私が死ねば良かったの？　それとも最初から私なんて生まれてこなければよかったの？　ねえ、答えてよ！」

些細なこと。

靴が無くなるなんてことはよくあることで、この前は上履きがなくなつた。

誰が盗んだかなんてことは分からない。私には敵はいれども味方はいないのだから。

いふなれば全てが敵で全てが疑わしい。

私に振られた男のことを想っていた女が嫉妬で盗んだのかもかもしれない。

それならまだいいが、私のファンとかいう気色の悪い部類の人間がそれを“おかず”にするために盗んだと思うと気分が悪くなる。

私の机に白濁とした液体がかけられていたりしないだけマシかも知れないが、やはり気分のいいものじゃない。

とりあえず、あわよくば死んでくれと思う。

折角昼前には帰れる予定だったのに、無駄な時間を浪費したせいですっかりお昼時だ。私は溜息をつきながら鍵を開け、扉を開いた。「ただいま」

しんとした空気。玄関には優の靴があつて、私はそれを掴んで匂いを嗅いだ。

汗の匂い。まだ暖かい。

それはイコールで先程までどこかにいて、今さつき帰ってきたということ。

私は忍足で優の姿を探す。といつてもどうせいるのは二階の自分の部屋だろう。

脳の奥がじんわりと熱くなる。それは脊髄を通り、全身を駆け巡り、子宮を重くした。

靴を部屋の前に置き、スカーフを取る。髪を整え、唇を濡らした。そつと扉を開ける。

「あつ……夕香、さん」

「あら」

優は部屋着に着替え中で、上着を脱いでいるところだった。全身に赤い斑点のようなキスマーク。

「気まずそうに優は着替えを中断して、上目遣いにいった。」

「えっと、あの、お帰りなさい」

「ただいま、兄さん。なにしているの？ いいわよ、着替えを続けても」

「そのう……あのう……」

「風邪引くわよ？ ほら、早くしなさい」

私はベットに腰掛け、顔を赤くする兄をニヤニヤと視姦しながら見た。裸を見られたというのに着替えを見られるのはまだ恥ずかしいらしい。

彼は口をパクパクとして何か言いたそうな顔をしたが直ぐに諦めて、背を見せながら着替えを再開した。

ん、あれは。

優のヌードショーの途中、私は後ろから優を羽交い絞めにした。

下着一枚の彼の体に冷たい手を滑らせる。耳元に息を吹きかける。

「ねえ、どうしてここはこんなに膨れて固くなってるのかしら。兄さんは何を期待していたの？ 昨日のことでも思い出していた？

それともこれからのこと？ 乳首も力チ力チね」

「おっおっおっおっ……」

それは犯さないで、なのか。それともお母さんなのか。

まあ、どちらでもいいことだ。その優の嗜虐的な表情はただただ私を滾らせる。

ああ、最低だ私。兄がこんなに嫌そうな顔をしているのに、酷く興奮している。

昨日あんな変調があったのに優にこんなことをしている。

夜、優とした後に起こったこと。

ゴンゴンという音とともに目を覚ましたら、優が真顔で壁や床に

頭を自らぶつけていた。私が何をしているのかというと彼は頭の中から声がする、とおかしなことをいってそのまま続けていた。朝、そのことをもう一度聞くと彼は覚えていなかった。

軋むような、緩やかな精神の崩壊。

多分、いや確実に私が原因なのだろう。でも、私は何故かそれが酷く嬉しかった。

それが兄と私に芽生えた唯一の繋がりのように思えて、私はそれを見てニコニコと笑っていた。私の為に、私によって兄が狂っているのだと思うと楽しくて嬉しくてしようがなかった。

狂った兄を見て笑う私もまた狂っているのだろう。でも私達を狂っているなどと声高に言える人間はいない。もしも言える人間がいるなら私も問いたい。

お前らが正常であると誰が言える。自身の性癖がまともであるとお前らは誇示できるのか？

「私ね、思い出したのだけど、地下倉庫に私の小さい頃のおしゃぶりとか涎掛けてまだ残ってると思うのよ。それを今度使ったら面白くないかしら」

正常なんてものは犬に食わせてしまえ。

私は異常でいい。私は屑でいい。私は救いのない下衆でいい。

それで兄を振り向かせられるのなら、それで。

「うっうっうっうっうっ」

「やらしい匂いがしてきたわよ。どうしたの？ もう出そう？」

兄は壁に手をつけて、苦しそうに顔を赤くし堪える。私は首筋を舐め回しながら、両手をパンツの中に入れ、玉を優しく転がし、竿をこすった。

「それとも私の中で出したい？ 昨日みたいに沢山腰を振って私を鳴かせたいのかしら？」

「ゆっうっかつさん……あの、お、れ」

「ああ、このままじゃ壁にかかっちゃうものね。いいわよ、また飲んであげる」

「そうじゃ……なくて」

「顔にかけたい？ やっぱり最初は中がいい？」

「う、あの……そのう」

優が私を盗み見るような顔でじっと見た。何かを訴えたいようなそんな表情。

私は生唾を飲み込むと、薄ら微笑んで首を傾げた。一旦手を離し、ベットに座る。

足をクロスさせ、スカートの中が見えるようにする。

「なあに？ 兄さん」

「この関係って……その、なんか変です」

「……それで？」

なあんだ。優が私に何かしたいプレイがあるわけじゃあないのね。

「だから、お願いがあるん、です」

「何かしら」

セックスが嫌だと言ったら今日は足腰立たなくしてやる。お尻も脇も足の指も全部溶かしてやるう。息ができなくなるまでドロッド口に溶かしてねぶって辱めてやるう。

それでも断ったら、暴力しかない。

「あの、だから、その」

「はつきり言いなさい。男でしょう」

「俺とその………恋人に、なって、下さい」

は？

恋人。

彼女。

カップル。愛しあう二人。甘い二人。イチヤイチャするアベック。それは私が一番望んでいたもので、え？ どういうこと？

夢？ ドリーム？ カム、トウル？

優が顔真っ赤で、私を不安げに見ている。また思わせぶりな言葉？ それとも私の勘違い？

いやでもこれは流石に勘違いしようがないわよね。

え、じゃあじゃあ、本当に？

「……ごめんなさい。ちょっと聞いていいかしら」

「あ、はい」

「その……優がいう恋人っていうのは、一緒に手を繋いでどこか行ったり、ケーキを食べさせあったり、贈り物しあったりする一般的な恋人……でいいのかしら？」

「俺は、そのつもりですけど、あの駄目、でしたか？」

「いいわよっ！ いいに決まってるじゃないっ！ 今いいっていつたから、今更前言撤回はなしよ！？」

「そ、そんなことは、しないでですけど……」

「ごめんなさい、ちょっと気分を落ち着かせてちょうだい」

深呼吸。

狂ったはずの歯車が狂いすぎてピタリとハマったようなこの奇妙な感じ。

いいのよね？ 私、幸せになってもいいのよね？

長いマフラーを二人で巻いて、両手繋いで歩いて、ショッピングして、一緒にケーキ食べたりなんかしていいのよね？

ずっとそんな関係は無理だと思っていて、でも今それがしかも優の口から。

どうか夢なら醒めないで。

本当に切に。

切に願うわ。

息を整えて、優の頬を摩る。一瞬殴られると思ったのか彼は小さく背を丸めた。

「私を恋人に選んでくれるのね。血の繋がった私を。後悔はしないわね？ したとしても今更引く気はないのだけど」

「うん、俺は夕香さんには嘘はつかない」

「恋人でしょう。 “さん” はいらわないわよ」

「ごめん、夕香」

「あ……」

胸をすくような鋭いものが私の胸を串刺しにした。

それはトキメキだとか、そういった甘い感覚で、欲情とは違った心地よさがあった。

一生屑で優を苦しめて、嫌われて行くものだと思っていたのに、ああ……私は幸せで泣きそうだ。

「優、ほら、恋人が泣きそうになってるわよ。こういう時、男は女を抱きしめるものでしょう？」

「そう、だね」

精一杯手を広げ、優は私を抱きしめた。それは優しく、壊れ物を扱うように。

嬉しさが瞳から涙となって零れる。優の肩を静かに濡らす。

私達はどちらが言うまでもなく、唇を重ねた。

甘く甘くとろけるようなキス。

無理やり舌をねじ込むようなそれじゃなくて、互いをいたわる様な柔らかいキス。

優も自分からキスをして、私も優に唇を返す。

だんだん私はそれに燃えてきて、優をベットに押し倒した。お昼時だとかそんなことはどうでもよかった。ただ優と、兄とねっとりとしたセックスがしたかった。

「ゆ……ゆづ、か！」  
「え？」

「だけど優は肩を掴んでそれを止める。お預けを喰らった犬のように私は優をみた。」

「確かに今は明るいけど、私たちは恋人でしょう？」

「あの、恋人は、こんな昼間から、そんなこと………しないんだよ」

「嘘よ。みんな年がら年中しているわ」

「もっと、その、雰囲気とか………」

「今、雰囲気あるじゃない」

「なんていうか、今日は、その、夕香と一緒に、イチャイチャしたい方が、強い、かも」

「しどろもどろで彼はそういつて下を向いた。顔が赤く染まっけて不安げな表情。」

「恥じらうようなその顔に私は一瞬にしてやられた。」

「………いいわよ。でもその代わり今夜は寝かさないから」

「………うん」

「私達は一時間ほどベットで抱き合っていた。」

「優の作ったサンドイッチをお互いに食べさせ合い、私はリビングのソファで優に耳かきをしてもらっていた。」

「これは私の長年の夢で、よく昔は優にしてもらっていたものだった。」

「湿らせた綿棒で軽く耳のなか全体を濡らし、乾いた凹凸の綿棒で耳の垢を掻き出す。」

「ふきゅ………」

「はは、夕香、変な声」

「しよ、しょうがないでしょう！ くすぐったくて、ひゃあ」

「あはは」

「もう！ きゅっっ」

「優は耳かきがとても上手で、その快適さと気持ちよさは自分でや

っているのと桁違いだった。

太ももの温もりと柔らかさとストーブの音が脳みそをとろけさせ、  
気だるい気持ちにさせる。

「もう、いつぶりかしらね。優に耳かきしてもらうなんて……」

「そういえば、あの時からこんなことなかったからね」

「そうね」

互いに押し黙る。でもその沈黙は決して嫌な部類のものじゃなかった。互いに同じ時を共有して、同じ辛さを味わったのだという一種の連帯感のようなものがあつた。

悲しむのも泣き叫ぶのももう遠の昔に終わらせたこと。

「ひゃあ！ 優、あなた、わざとやってない!？」

「ごめん、夕香が可愛くて」

「いつからそんなおべっか使うようになったのよ。もう、馬鹿。…

……代わりに優しく頭撫でてちょうだい」

「うん、昔みたいに優しくね」

「ええ、昔みたく優しく……」

苦労した分、今はただ幸せを噛み締めよう。

私は窓辺で陽の光を浴びながら、膝の上で丸くなり、優の髪の毛を撫でる心地よさに瞼を閉じた。

夕闇が空を支配している。オレンジ色の空は碧々とした暗闇に支配されつつあつて、どこか退廃的であり幻想的だった。

「おはよう。足、痺れちゃった」

「え、今何時!？」

私は飛び跳ねて時計を確認する。時刻は五時を回ったところ。どうやら私はあれからずっと優の膝の上で寝ていたらしい。

大半の時間を無駄に使ってしまった。

「もう何で起こしてくれなかったのよ!」

優は微笑みながら足を揉んでいった。

「夕香があんまりにも気持ちよさそうにしてたから起こすのもなん

「だか忍びなくて……」

「……………そんな笑顔で言われたら、もうっ！」

確かに心地良かった。久々に夢を見ずに熟睡できたような気がする。兄にあんなに甘えたのも久しぶりで、精神的にも肉体的にも私は満足していた。

私は一人溜息をついてぐつと体の筋を伸ばした。

「まあ、いいわ。お夕飯は？」

「当然まだ」

「何にするの？」

「カレーにしようかなあって思ってるんだけど。ほら、夕香、カレー好きだしさ」

「そうだけど、優にカレーが好きだなんていったことあったかしら」  
「いつも綺麗に食べるし、お代わりいるって聞くと必ずいるっていうから」

何だか気恥しさを覚えて私はそっぽを向いた。

「……………とりあえず、お夕飯作りましょう」

「それがさ、材料がないんだ。だからさ、一緒に、その、買いにいかないかな。……………駄目？」

「い、いくわよ。行くに決まってるじゃない！」

防寒着を着て、家を出た。優は律儀に誰もいない家に“行ってきます”と言った。

私は寒さに強い方で黒い厚手のパーカーにジーンズ。優はいつものように分厚い格好で鼻を赤くしていた。

吹き付ける風はそれほど強くないのにやはり堪えるものがあった。少し歩いていてから優は私に振り向いた。

「手、繋ごう。その方があったかいよ」

「……………馬鹿なこと言わないで。ここらへんまだ近所じゃない。変な噂立てられるわよ」

「いいよ、夕香と一緒になら。お、俺は夕香の恋人だしね。……………それ

にそういう変な噂は今に始まったことじゃないよ」

「……途中でもらなかつたら完璧だったわね」

「あはは」

私は無言で優の手を取る。ふにやふにやしていて、温い。

素っ気なく答えながらも実は飛び跳ねるほど嬉しくて、寒さなんてそれだけで感じなくなっていて。

ああ、私は優のこういうところに惚れたんだなあと一人顔を赤らめながらほくそ笑んだ。

「少しやつれましたね」

「うん……かもしれない」

優は近くの本を手に取り、パラパラと捲った。題名は罪と罰。

自分にびったりだと彼は思った。

「そんなに他人を人に嘘をつくのが辛いですか？ それとも夕香さんだからですか？ どちらにしるあなたが選んだことですけど」

「結局、俺は我慢しなきゃいけないんだね。嘘をつくか、アレを耐えるか……どっちも俺には辛いよ」

「選択の余地はありません。あなたがそっちを選んだ。それだけのことです」

「……そうだね。自分で選んだ道だから言い訳がきかない。だからきつと俺は辛いんだ、うん」

「辛いという割りには、心は大分落ち着いているみたいですよ」  
「……………」

彼女は優に視線をくれることなく、分厚い本のページを捲る。

優月の言つとおりだった。優は確かに辛く思っていたが、それも以前と比べると大分軽かった。

夕香の食事に睡眠薬を混ぜて、身を守る。恋人という別の形で彼女を満足させる。

全てが自分の身を守るための行為。

夕香を裏切る行為。

「ああ、そうですね。お薬が欲しいんですけどね。こっちに来て下さい」

彼女はすつと立ち上がり、扉を開けた。紙とインクの香りとは違う生活臭が漂う。

扉の向こう側は昼だというのに酷く暗い。

優が進むべきが躊躇していると彼女は振り向き、手を引っ張った。

「あ……」

「早くして下さい」

暗い廊下を進むとオレンジ色のぼんやりとした光。彼女がリモコンを操作するとそれは白く無機質な灯りに変わった。

壁はホワイトで部屋は広々としている。室内の調度品は全て白と黒で統一され、シンプルでいて洒落たデザインだった。窓らしき場所には外の光りを遮るシャッター。

「やっぱり眩しいのでオレンジでもいいですか？」

「俺は別に構わないけど……」

温かみのあるオレンジ。

「少し待っていて下さい。この椅子に座っているか、そっちのソファに座っていて下さい。トイレに行きたい場合、廊下の突き当たりです。それ以外の部屋は入らないで下さい」

「一つ質問いいかな」

「どうぞ」

「前から不思議だったんだけど、なんで図書館にこんな部屋が……？」

眠た気な赤い瞳はゆっくりと唇を持ち上げていった。

「この図書館、わたしの家を買取りました。一般公開されていますけど、一応わたしの家のものです。改築する時、ついでに部屋を作りました。で、わたしここに住んでいます」

優の反応も見ずに彼女は薄暗い扉の向こう側に消えた。

初めて入る他人の私的な空間に彼は戸惑った。使われていないシステムキッチンを勿体無いと眺め、彼女は何を食べて生きているのだろうと思いを巡らせた。

そんな気もなかったが、もしもの時を考えて彼はトイレに向かった。二つと一つの扉を通り過ぎ、正面の黒い扉のノブに手をかけた。

「あれ……？」

そこで優は振り返り、左に位置する扉を眺めた。右側は風呂場の扉。

微かに香る懐かしいチープな香り。

ラツカーの独特な香り。あるいはセメダインの匂い。

「何をしてるんですか？」

白い彼女は眠たげな表情で彼をじっと見ていた。どこか猜疑心の入り交じった表情だと優は思った。

「君もプラモデル作るんだね」

「……………君も、ですか」

「うん、君も」

「……………わたしはあなたが思っているようなレベルのモデラーではありません。もつと酷いです」

優月は優の言葉に少し考えるような仕草をして、自ら扉を開けた。壁を埋め尽くすようなガラスケース。

中には飾られた力作やジオラマ。一番隅にはエアブラシと使い込まれた道具が置いてあるのが見えた。

直ぐに彼女は扉を閉じ、少し捲し立てるようにいう。優にはその眠たげな表情が少し恥じらっているように見えた。

「わたしはオタク女です。ロボットアニメが好きです。プラモデルも好きです。これが本以外のわたしの趣味です。蔑み馬鹿にしたければどうぞ。わたしはなんとも思いませんから」

「俺もプラモデルは好きだよ。作るときは柿崎いいいい！ って心の中で叫びながら作ったりする」

「あつ……………あつ」

「ん？」

「フ、ファーストで一番好きなシーンは何ですか？」

「『狼狽えるな、あれは地球の雷というものだ！』かなあ」

「あの……………空飛ぶコーヒー缶といえは？」

「マクロス？」

「ドイツといつたら？」

「ゲルマン流忍術？」

「あ……………！！」

優月は大きく目を見開いて、優の手を掴み、上下に激しく揺さぶった。

「……優さん、互いをよく知り合いましたよ。今、彼女は？」

「あ、え？ い、今は一応、夕香が」

「優さん、質問どうぞ」

「あ、そういうこと……でいいのかな。ええっと、なんでいつも指をカタカタ動かしてるのかな」

「全ての情報を脳というコンピューターに打ち込んでいます。こうすることでデータを効率良く出し入れできます。打ち込んだ情報は削除しないかぎり忘れません。母から伝授された記憶術です。優さん好きな食べ物？」

彼女の手は忙しくカタカタと動いていた。

優は急な質問に答え、何か質問をするという奇妙な状況に思考が上手く追いついていなかった。半ば投げやりに口を動かす。

「な、何でも好きだよ。カレーとかだし巻き卵が特に好きかな。あ、んーと、夕香と同じ学校いつてるよね？ テスト期間なのに何で学校に行かないの？」

「わたしもカレー好きです。同じですね。……学校は実質上わたしの母が運営しています。だからみなさんよりも早くテストを受けて毎日ここで本を読んでいます。好きな女性のタイプは？」

「あ、お淑やかな女性かな？ ああ、そうだ！ あの薬を……」

「わたし、とてもお淑やかです。薬どうぞ」  
彼女はそういつて薬の袋を彼に手渡した。

彼女は不慣れな手つきで紅茶を入れ、テーブルに運んだ。盆には  
チヨコクッキー。

優はそれを受け取り、すする。少し熱い。

「あつ」

不意に白い手が伸びて、カップが取り上げられた。

「優さんのこっちでした。ですから取り替えっことです。少し飲みま  
したけど、優さんも飲んだようなので引き分け、ということまで」

「ん？ んー、うん」

引き分けってどういう意味だろう。

彼女はそういつて優が口をつけた紅茶をいつもの表情で飲んだ。

彼女のあまりにも冷静な様子に、優は自分がそれを意識するのは間  
違っているのだと思い、彼は少し緊張しながら紅茶に口をつけた。

赤い瞳は少し頬を歪めていった。間延びした声。

「間接キスですね」

「ぶっへ！」

「あ、わたしちゃんと歯磨きしてます。口の中は綺麗なので気にし  
ないでください」

「……うん」

彼女の差し出したティッシュで机の上に飛び散った液体を拭<sup>ぬぐ</sup>う。

口の周りをティッシュで拭くと彼女はクッキーを食べるのを止め  
て、手を差し出した。優はゴミ箱に捨ててくれるのだからと口を拭  
いたそれを渡す。

優月は当たり前前のような顔で優の使ったティッシュで自分の唇を  
拭くと静かな声で言った。

「優さんは、優しいですね。馬鹿げているといえるほどに」

「あの、それ俺が使った奴……なんだけど」

「エコです」

「それはちよつと納得できないなあ」

「夕香さんと一緒にいたって傷つくだけです。それは分かっているはずですよ」

「……………夕香は俺と一緒にいてあげないと駄目になっちゃうから」

「それ、甘やかしてます。優さんがいないからおかしくなる……………」

「だから？ 彼女がそれでおかしくなつて、誰かを刺殺したとしましょう。それは優さんが悪いんですか？ 違います。彼女が平常を保つために、あなたが異常な状態でいることが正しい？ 違います。犯してボロボロにして、心を傷つけて……………そんな人間が正しいわけ

がない。弱い立場の人間が虐げられるのって間違つてると思います」

「俺は別に弱い立場つてわけじゃない！ 夕香とは対等なんだ！ だから薬も同じ量を飲んでるし、後悔もしてる……………」

「あなたは傷ついていきます。で、彼女はどうぞでしょう。肉体的な欲求が満たされないだけで幸せです。これって何か間違つてませんか？」

優はカップを覗き込む。橙色の液体は静かに目を見開いた男を映し出していた。

手についたクッキーのカスを舐めながら優月はいう。

「わたし、なんの成果もあげないでただ害を撒き散らすような人が嫌いです。嘘つきも嫌いです。アニメはその点、素晴らしいですよ。救われるべき人、優しい人が救われる。でも現実はその逆ですね。悪党や害のある人間ばかりで溢れています。それでも社会が機能しているのは悪に対して、善がまだまだ大きいからだと思わしています。だからその位置にいるあなたに聞きたい。優さん、彼女は」

……………あなたのプラスになるよーなことを一つでもしましたか？

「……………どういう、意味？」

「どんな人間にも役割はあると思います。ですが彼女の役割があなたを傷つけることだというのなら、わたしそんな人いらないと思います」

「家族は、打算で付き合うものじゃないっ……………!!」

肩を震わして優は席を立った。

それは妹が大事だから。

妹を馬鹿にされたから。

それを見て優月は笑った。優にも分かるほどの微笑。優月には珍しく表情らしい表情。

「やっぱりあなたは純で優しい。きっとあなたならそう言うだろうと思っていました。でも、でもですよ、優さん。本当にこれは大切なことなんです。……わたし、思うんですよ。優さんは結果的に母親を殺してしまった。大好きな母を……。だから」

だから、あなたは自分を責め続ける為の理由として夕香さんが必要なんじゃないですか？

責任感の強く、純なあなたです。母を死に追いやったことを一生後悔していく為に夕香さんという罰の証明を、もしくは自分に罰を与えてくれる人間を側に置いてあるんじゃないですか？ でもそれは自分の暗い過去を常に見せる。だから一方で開放されたいと思うでも責任感の強いあなたは母親の罪を一生背負わなくちゃいけないとどこかで考えていて、自分は責め続けられなきゃいけないと思っただ。今まではその矛盾した感情も上手く機能していたんでしょうね。自分を誰かに罰してもらい、逃れたいと後悔するという矛盾した感情も。

でもそれがどこかで壊れた。夕香さんの仄暗い一面によって。

夕香さんとの“接触”を嫌がったのは、それが“罰”とは明らかに関係ないから、じゃないですか？ 償うとか償わないとかじゃなくて、ただのレイプだからあなたは泣き、心を潰し、苦しんでいる違いますか？

理由があればあなたはそれも喜んで受け入れたでしょう。でもそれは何の罰も理由にもならない。

いくなれば道端を歩いていたら急に殴られたようなものですよね。

自分には何も落ち度がないんですから。

だから辛い。

だから苦しい。

だから死にたい。

だから彼女が憎い。

でも自分には憎いだとか辛いだとか思う権利はなくて、我慢しなくちゃいけない。

相反する理由、条件、感情が多すぎる。

それがあなたの心の崩壊の原因だとわたしは思います。

さあ、もう一度冷静に考えて下さい。

彼女はあなたにプラスになるようなことを一つでもしました？

一緒にいて得になるようなことがありました？ 彼女の存在に意味はありますか？

優月は微笑み、紅茶に口に運ぶ。俯きながら優も釣られるようにしてぬるくなつたお茶を飲んだ。

「俺は……」

「はい、あなたは？」

「俺は……」

「泣かないで下さい。わたし、弱いものイジメは嫌いですから」

「お、れは……」

優は橙色の液体を見続けた。

何か。

そう、何かズレのようなものを私は感じていた。

今現在が幸せか不幸かといえば、確実に幸せに分類されるだろう。しかし、何かこう……薄ぼんやりとしたものが頭の隅について回った。

「夕香、どうしたの？ ……食べないの？」

「……少し、考え事してただけよ」

私は優と一緒に作った味噌汁に口をつけた。

夕食のメニューは焼き魚にご飯とお味噌汁。漬物や玉子焼き。

そういえば、ここ数日優と肌を重ねていない。それが原因だろうか。

でも優に甘えるという行為のおかげか私の心はこここのところ、かなり満足している。昨日は優に膝枕してもらいながら髪をとかしてもらった。たまに顔を上げて唇を重ねて、どうしたのと聞かれて、何でもないと悪戯っぽく微笑んで……。

「夕香？」

「……ああ、そうね。ご飯食べなくちゃね」

最近、優に欲情することもあまりないような気がする。したとしても、別に今じゃなくてもいいだろうという気だるい気持ちがあるに勝る。

病院で貰ったうつ病の薬がまさしくそんな感じで……。

薬？ ドラッグ？

もしも優が今この口に運んでいる料理の中につつ病の薬を入れていたらどうなる？

性欲が薄まる。

では睡眠薬を入れていたら？

食後直ぐに眠くなる。

今まで眠かったか？

そんなことはない。でも確かに夜になると急激に眠くなる。まさか。

いやでも確かに優が私と恋人になると宣言した辺りから私は優とご無沙汰だ。

ということとは？

「……ねえ、優」

「え、あ、なつに？」

少し痩せた表情の優は私の顔を凝視した。

今聞くべきか？　ここで。もしも、それが正解だとしてそれはどうという結果を生む？

優は私との恋仲を解消して、また私に怯えるような生活が始まる。体は満たされど心は満たされない日々がまた始まる。優が私を恐れ、壊れ、自分を傷つける日々がまたやってくる。

それは嫌だ。私はこのバカツプルのような意味のない優との会話が酷く気に入っているのだから。

でも優の裏切りをそのままにできるほど私は優しくはない。それは私自身がよく分かっていることだ。

ああだめだめだ一度気になると、口の中が酸っぱい唾液に汚染させて、下着が濡れていく。

欲情、肉欲、愛欲、暴力的な支配欲、噛みちぎりたいほどの歪んだヒズミ。

ふつふつと黒い欲望が湧いて出る。忘れていた肉を喰らう感情が眼を開く。

どうしようどうしよう。どうやってこの欲望を開放しよう。どうやって兄を犯そう。

愛を取るべきか、獣の心に身を委ねるべきか。両方で、いいじゃない。

「そついえば、最近優と寝てないわね」

「い、いつも同じベットで寝てるよ」

「そういう意味じゃないわ」

優はごくりと唾液を飲み込む。私は弧を描いた細い目の隙間からじっと優を観察した。

私の喉もごくりとなる。優とは違う意味合いの生唾。

別に私の思いつくしならそれでいい。

そうなら、今夜は普通にセックスするだけ。

でももしも“そう”ならね、優。

私酷いわよ。

逃げる為の口実に恋人という言葉を使ったなら、それはもう……。

「じゃ、じゃあさ、今夜は……し、よう」

「期待してもいいの？」

「夕香を、満足、させられるか……分かんないけど頑張る」

「じゃあ、期待してるわね」

「うん」

どこか冷静な優はそういつて食事を再開した。冷静過ぎて少し不自然な優。

兄は少しして、無言で冷蔵庫に向かい、お茶をついだ。二つのコップに茶色い液体が注がれていく。

「夕香さんの分も」

「ありがとう」

お茶を入れた時に何かを混入させたような動作は見られなかった。私の思いつくし？

優が薬を混入させると仮定して、それを私だけに課すだろうか。

いや、優のことだから自分も同じものを食べて同じものを飲む。相手に毒を持ったら自分も贖罪の為に毒を飲むような人間だ。

念のため、このお茶は飲まないでおこう。

「優、食後にヨーグルト食べたいから取ってきてちょうだい」

「あ、うん」

私は優が後ろを見せた際に、音を立てないようにコップの中身を太ももに半分ほど零した。

服に吸わせ、唇を舌で湿らせて、あたかも飲んだかのように見せる。

スプーンをセツトに優は微笑み、席に戻ってきた。

「お茶冷たいわね」

「あ、冷蔵庫に入ってたから……うん、本当だ冷たい」

「ごくごくとお茶を飲んで、彼は私に笑った。

私も笑った。

心の奥で優を今夜どう犯そうかと垂涎させながら。

抗うつ剤や睡眠薬といった向精神薬は基本的にアルコールと非常に相性がいい。

コップ一杯のビールですら向精神薬を飲んだ後なら、それは泥酔と同じ。いやそれよりも酷い。

最初は断っていた兄に無理いって酒を飲ませた。優は普段からアルコールに弱い。

だからといってここまで乱れることは異常だった。

つまり、それはある一つの事実を示していた。

「う……？」

虚ろな瞳。赤い頬。優の部屋のベット。

「誰に薬を貰ったの？ 兄さん、通院してるの？」

「あつとえつとね……ゆづきさんから、もらった」

「優月から方法も聞いたのね。そう、そういうこと」

なるほど、あの性悪が考えそうなことだ。

アルコールと向精神薬でオーバーヒートした脳はこの質問を記憶しない。できない。

覚えていたとしてもその前に私と話した意味のない質問の羅列や言葉。それすらも今から私は行為によって上書きする。

「久しぶりなもの、今夜はちょっとくらい干からびても文句はないわよね？ 優が悪いんだし、文句はないわよね？」

「……………夕香が、好きに、すればいい」

多分私の言葉の意味も分かっていない。理性や思考というものが酷く欠けているのだ。

それでも、そうであっても私を肯定する言葉。

嬉しいじゃない。

私は優の服をゆっくり咀嚼するようにはぎ取り、寒いと震える体を抱きしめた。

煮えたぎるような熱く火照った体で。

宵というにはあまりにも遅い時刻。  
息遣い。

ひとつは息切れのようなそれ。もうひとつは獣の息遣いのそれ。  
優は艶かしく吐息を吐いて、潤んだ瞳で私をぼんやりと見た。私の裸を見た。

私は窓から零れる夜空の光に照らされる。銀色の星々の瞬き。  
そつと優の股に顔を差し込んで、深呼吸。蒸れた汗の匂いに喉からベタついた涎が沸いた。

ぐにやりとしたそれに舌をチロチロと這わす。袋を口に含んで舌で優しく圧迫。

「う……？ あう……」

優は体をびくりと跳ねさせると不思議そうな顔で私をみた。何をされているのかイマイチ理解していないような、そんな顔。

赤ん坊のようにこれから起こること、されることを一切理解できないのだろう。できたとしても結局思考が追いつかず、霞に消える。私は優に微笑みかけた。安心を誘うように目尻を細め、笑う。  
怖くない、怖くない。

そして唾液を溜めた口に優のそれを差し込んだ。唾液をすするズルズルという音が部屋に鈍く響いた。

「ふっ あ！」

優は背中を精一杯仰け反らし、私の頭を鷲掴みにして震えた。足の指がシーツを握る。

性欲はないだろう、でも抗うつ剤は感度をよくする。

いろいろ実験した私はそれをよく知っている。母の日記を見た私はそれをよく知っている。

そして暫くセックスをしていなかった優の体は酷く敏感だった。袋にはたっぷりと私の大好物が溜まっていて、くわえ込んでいる今

現在でもオスの強烈な匂いを発していた。

私が舌のざらついた腹の部分でくわえながらベロベロと舐め上げると、優はあふあふと女のように色っぽく鳴いて、私の頭皮に爪を立てた。

「あつふ……あう！」

反応を窺いながら喉の奥で締め上げたり、首筋の部分をベロベロと責め立てる。

先っぽの方からヌルヌルした液体がでてきた。私は一旦口から離し、自分の中指をしゃぶった。

「お兄ちゃん、おつゆが漏れてますよう？ くふふふ」

そしてどろどろの指を兄の穴に突き立てた。開発済みの兄のそれに。

前立腺をこりこりとくすぐると優のそれは怒張し、震えた。先の部分から透明の液が零れた。

私は即座にしゃぶりつき何度も口だけでストロークさせ、ちゅうちゅうと吸い付く。

「……………っ！」

優は口をぽっかりと開かせて天を仰いだ。私の頭に爪を立てて、びくびくと震え、白いゼリーのような塊を口の中に吐き出し続けた。私は手と口で最後までしっかりと搾り取る。髪を掻き上げながら立ち上がって汗に濡れた優を見た。

桜色に染まった卑猥で可憐な私の大切な兄。愛おしい兄。

口の中のそれを唾液と混ぜて、優にキスをした。私の唾液と混ぜたそれらを彼は放心しながら飲み込んだ。舌に若干の抵抗があったが無理矢理に押し込んだ。

「……美味しかった？ 一生懸命、兄さんの為に作ったのよ？」

「おいしか、った」

そういつて兄は少しむせた。

私はそっと耳に舌を這わし、啄む。

「くす……ぐつたい」

「ああ、にいさん。優兄さん……」

股の間で優のそれを挟んで擦り上げながら、血を吸う吸血鬼のように耳をねぶり、ふやかし歯を立てる。

私の敏感なところに優のそれは上手く当たり、私はぬめついた液をそれこそ失禁のように滴らせた。

「ゆうゆうゆうゆうゆう！　好きよ、愛してる、殺したいほど壊したいほど！」

抱き締め、腰を強く何度もグライド。優のそれはそのはずみでぬるつと私の中に入った。

瞬間、電撃。

「かはっ……」

「……っ！」

優は何かをいいたそうに震えていたが、私は優の口に胸を押し付けてそれを黙殺した。

鼻息と押し返す舌ペロが乳首を刺激して気持ちいい。

逃げようと腰を引かせる優のお尻を足でがっちりと捕まえる。

私は腰を捻り、優にキスを浴びせる。優の瞳は迫り来る快樂に対して疑問を投げかけ続け、体を離れさせようとした。だが、私の足が邪魔で逃げられない。しかもその動きが中をかき混ぜるような形になって私は嗚咽するかのように唾液を口から零した。

「ゆう、かさん……どうし、よう。なんか……なんか」

「ゆう！　そういう、時は、腰をうごか、して！」

「う、ん」

私が下になり、優の背中を足と手でがっちりとホールド。私のいっただことを忠実に優は守り、正常位の形でねっとり美味しく突いた。

一突きごとに全身に電撃が走る。

気がつけばあふあふと喘いでいるのは私で、獣のようにふうふうと息を切らしているのは兄だった。

互いの目は既に限界が近いことを物語っていて、唇と胸はどちらのともつかない涎で汚れていた。

優の腰が小刻みになる。私の喘ぐ声も濁音から舌を咀嚼する静音に変わる。

「っ！」

絶頂。

優は私に強く腰を打ち付ける。私は優を強く抱きしめた。

融け合うように舌をかき混ぜ、絶頂に悦んだ。

熱く固い液体が子宮を強く叩く。私はそれを一滴も漏らさないようにぎゅうぎゅうとぬめついた肉壺で締め上げた。

兄は疲れたのか、はては酒が頭に回ったのかその場で気絶した。

私はそれでも兄を抱き締め続けた。

そして囁く。

「お兄ちゃん、兄さん、優。好きよ、恋焦がれてる、愛してる」

その後、寝ている兄をもう一回犯した。

「人生には最高の瞬間ってありますよね。俺にもそれがあるなら、きつとそれは母さんがいて、夕香が転ばないように俺の手をとってたあの時なんだなって思います。あの頃は世の中に悪意なんてものはないって信じてました」

「人間はね、過去を正当化するようにできてるんだ。今現在のアイデンティティーを確立させる為に過去の行いは正しかったと思うそうだよ。それができない人間は心の病気になる。社会学の話だけれどね」

ソレは顔を上げて、男を見つめた。

男はその視線に微笑む。

「……先生も過去を認めたんですか？」

「うん、まあね。僕もいろいろあったけど、それで今の自分があるんだって認めることにした。じゃないと弱い僕は生きていけないから。辛い過去が多すぎるんだ」

覚えていない過去もまた多すぎる。

それに伴なう事件も。

男は天を仰ぐ。

昔のように仰ぎ、凝縮された数秒間の間に“過去”を見た。

それは男にとって日課のようなもので、ふとした時にこうして彼は過去を振り返る。

どうしようもない過去。流されていただけの過去。

自分のヒーローだった彼女。

混沌とした記憶のスープの中で記憶のカケラがキラリと光った。

ソレは両の手のひらを眺めて呟いた。

「ああ、なるほど。だから俺もあの時のことは仕方がないと思ったのか。過去を認めないと自分が崩れてしまうから。しょうがないと認めないと先に進めないから」

「優君はそうしていたらしいね。あの人が死んだとき、直ぐに悟ったんだ。もう死んでしまったものはしょうがないと。彼は強い子だ。でもだからこそ脆かったと思う」

「……どういうことですか？」

「我慢して我慢した分だけ彼の心はすり減っていったんだ。正直彼はもうずっと前からギリギリでいつ倒れてもおかしくなかったんじゃないかなあと思う」

「夕香がいたから頑張れたってことですね」

「自分に都合のいい捉え方をしちやだめだ」

男は平坦な声でそういい、言葉を続けた。

「彼女という呪縛が、母の死という呪いがあの細い体に鞭打ったんだ。あの優しい子に無理をさせたんだ。あの子に……」

「……………」

言い終わると静かに男は目頭を押さえて黙り込んだ。

じつとソレは男を眺める。そして静かに手を広げて高らかに言った。

「よかったじゃないですか、救われて。今、こんな変わった形です

けど俺は呪縛から開放された。イカれた母からも、妹からも」

「母さんを馬鹿にするんじゃない。あの人は確かにしてはいけないことをしてきた。だけど、君たちに注いだ愛は本物だ。あの人は全て分かって、悟って、助かることもできたはずなのに、子供達のために死んだ。僕はそう思う」

「まるで見てきたような言い方ですね。何も知らない癖に」

「少なくとも君たちよりも僕は長く彼女と暮らしていたからね」

静寂。

沈黙。

言葉の要らない会話がそこにはあった。

人間は酷く下らない。

下世話だ。

馬鹿げている。

誰が強いだ弱いだの、自分の味方だ敵だの阿呆らしい。  
そう優月は思っていた。

彼女は不登校児だった。小学生の頃から今現在まで彼女はろくに学校というものに行つたことがなかった。

学校に行けば人は奇異な目で彼女を眺め、まるでバイキンのように恐れた。中には彼女が近親相姦でできた子供だと噂する教師もいた。

賢い彼女はそれに絶望し、学校に行くことを止めた。母親もその理由を分かつてか、彼女がそれを選択することに何もいわなかった。優月が高校生になる頃には寧ろそれに協力するかのようにな私学を買収した。

それは彼女の母自身、ハーフということで差別された過去があったからかもしれない。

常にテストの成績が満点で、母という強力な札を持つ彼女に文句をいう教師はいなかった。

しかし、周りにとって優月はやはり異質な存在だった。肌は新雪のように白く、瞳は燃える炎のように赤いのだ。当たり前といえば当たり前だった。

たまに学校にすれば彼女は寝ているか、本を読んでいるかの二つしかなかった。それは周りから鬻躰ひんじやくを買ひ、彼女は攻撃を受けた。父と母譲りのルックスの良さが周りの女子の嫉妬を買った一面もある。優月のマイペースな性格や言動もそれに拍車を掛けた。

校舎裏、三人のクラスメイトが彼女を囲み、腕を組んで眺めていた。

前々から優月に嫌がらせをしていた気の強そうな女三人。

何が面白いのか、顔には薄笑い。

「アンタさ、何で学校きてんの？」

「……暇だからです」

「なにそれ。学校はさ、ふざけてる奴が来るような場所じゃないんだけど。わかる？ ベンキョーするところ。アンタ頭いいならベンキョーする必要ないじゃん？ 来なくていいよ、ジャマだし」

「自分、可愛いと思ってるワケ？ ぶっちゃけ目立っててキモチワルイだけだから！ 男子がカワイイとかいってるけどハチユウルイを見てると一緒だから！ わかるう？ あははは」

もう一人の女もその笑いに釣られて声を上げた。優月は何が面白いのだろうと眠た気な瞳で彼女たちをぼうつと見ていた。

「笑えよ、バーカ」

小突かれ、彼女は尻餅をついた。

「なにカワイコぶってんの？」

「アンタ、もう学校来なくていいから。……つかくんな」

紙パツクのジューズを優月の頭に零して彼女たちはニヤニヤと笑い、去っていった。

優月はいつもと変わらない瞳でそれを眺め、舌で口の周りのベタついた液体を舐めた。

「甘い」

そして笑った。

次の日も彼女は学校に来た。当然の如く、三人に昨日と同じ場所に連れて行かれた。

「アンタさ、あたしら舐めてるよね。今日はタダじゃおかねーからア」

「ホウキをアンタの穴にぶち込んであげる」

「ユヅキちゃんのバージンはこの子！ ホウキくんでーす」

三人はゲラゲラと手を叩いて笑う。

優月も笑った。

「平社員、課長、自営業」

微笑みながら一人ずつ指をさす。

三人は薄笑いを浮かべながら首を傾げた。

「はあ？」

「頭オカシーんじゃないのこイツ」

「コワイ！ キャハハハハ」

優月は続ける。

「あなたのお父さん、わたしの会社の社員です。あなたのお父さんも。あなたのお父さんはわたしの会社が大きな取引先です。この意味わかりますか？ 分からなければどうぞ、そのまま続けて下さい。わたしは何も困りませんから。わたしは、ね」

そういつて彼女は三人を見回す。三人は蛇に睨まれた蛙のようにじっとりとした脂汗を浮かべ、チラチラと互いに目を見合わせた。

“優月はお金持ちのお嬢さんらしい”という噂はほぼ事実としてクラスの中にあつた。

ちよつとした悪ふざけは気がつけば大きな火傷に変わっていた。

その気になれば三人は明日から路頭に迷うことになる。

生かしてやっていると思っていたら生かされていたのは自分たちだった。

「わたしに何をするんですか？」

「いや……別に」

「ご、ごめん！ ほんとごめん！ じ、実はタカコが最初に言い出して、あたしは止めた方がいいと思っただけだよ」

三人の中の一人が急に頭を下げた。

先程とは違う種類の薄笑いで上目遣いに見る。

「キタネーぞ！ 最初にちよつかい出したのはヒロとミカじゃん！ あたしだって、ほんとはこんなことしたくなかつたし！」

「はああああ？ キタネーのはどっちよ。喜んでやってたジャン！」  
優月は混沌としたやり取りをじっと眺め、笑いを堪えるように微笑んだ。

「冷静になりましょう」

「えっ、ちよつと……」

「あ、避けるんですか。まあ、別にいいですよ。好きにして下さい。  
今年の冬はこのジュースよりも冷たいですよ」

「……………」  
隠し持っていた紙パックのジュースを頭から掛けた。一人一人順番に掛ける。

誰一人文句言わない。避けようとしめない。

ただそれよりも互いに睨み合い、唇を噛んで、黙り込んでいた。

こんな目に合っているのは私以外の二人のせいだ、とでも言いたげに。

次の日から優月に文句を言う人間は誰もいなくなった。クラスの女子をまとめていたグループが彼女を校舎裏に連れていったその日に崩壊し、翌日彼女を“さん”付けでご機嫌取りをするようになればそれも当然だった。

彼女たちは優月の後ろにある会社という力に屈したのだ。そして取り入ろうと擦り寄り、互いに蹴落とそうといがみ合う。

優月は思った。

馬鹿らしいと。

お前たちが声高に語る友情とはこんなものかと。

幼い頃に公園で出会った少年は別の子供達にイジメられている自分を守ってくれた。

何の打算もなく、ただのそれがおかしいからという理由で。

それも自分とは関係ない人間を。

引越すまでいつも守ってくれた。

引越すまでいつも遊んでくれた。

あれこそが友情だ。

彼女はいつも彼が楽しそうに語ってくれるアニメの話が大好きだった。彼の見せてくれるプラモデルがとてカッコよくて大好きだった。

彼のことを思い出すと胸の奥底が熱くなった。

優の訪問のあと彼女は久しぶりに学校に行った。

そして例の三人を集めていう。

「姫野夕香さんのこと、教えて下さい」

無表情に見えるその顔は誰にも分からないくらい、小さな微笑があった。

優は頭を抱えた。酷く混乱もしている。

何故、裸の妹が横で寝ていて、自分は何も着ていないのだろうと。体全体が鉛のように重く、肌は乾燥したような力サつき。

頭を必死に働かせて彼は記憶の糸を手繰らせる。

「確かお酒を飲んでそれで、それで……」  
それで？

じつとりとした嫌な汗が背筋を伝うのが分かった。

「ふぁ……あら優、おはよう」

上品に布団で胸元を隠しながら夕香は起き、小さく欠伸をした。カーテンから漏れる光を艶やかな肌は鈍く反射させる。

彼女は少し視線をさ迷わせたあと、髪を掻き上げて笑った。

「その、昨日は……凄かったわね。優からあんなに求められて、私ちよっとびっくりしたわ。酔うとタガが外れるというか、本性が出るというか……。何にしてもあまりお酒は飲まない方がいいわよ」

「え、あ、あの」

「……もしかして兄さん、昨日のこと覚えていないの？ 自分から私を襲った癖に」

「ほ、本当に？」

「……はあ、呆れた」

夕香は溜息をついて経緯を語った。

酒に酔った優が高ぶり自分を襲ってきたのだと、少し恥じらうように。

優もそう言われてみればそんなような気がした。記憶の断片に自分が夕香に向かって腰を振っているような映像が浮かぶ。

「いくら恋人でもああいうのはちよっとビックリするわ。でもよかった。だって優ここのところ私とシてなかったじゃない？ 少し私の体に飽きたのかと不安に思ってたのよ」

「飽きるだなんて……俺は」

「あら、そういうわりに昨日あんなに激しくしたこと、私のこと忘れてるじゃない？」

「……うん、ごめん」

優は二日酔いの頭痛とは違う種類の頭の痛みに目頭を抑えた。

奇妙な吐き気もある。

調子が悪いのか？

いや、それは誤魔化しだ。

心の何処かで夕香に欲情していたんだという現実から目を背けているだけ。酒でタガの外れた本当の自分に吐き気を催しているだけ。

いつから自分はそんな人間になっていたんだろうと彼は悩んだ。

兄として失格。そんな声が頭の片隅から聞こえたような気がした。

「だから優、今度は自分からちゃんと私を愛してちょうだい。忘れないように頭に刻みこんでちょうだい」

優はある意味で完璧主義者だった。絶対的な自分の理想がまず先にあり、その理想が彼であり彼を動かしていた。それを彼女はプラモデルの件からよく理解していた。

積み上げた積み木が途中で崩れるとやる気や熱意が失われるように、彼はそういう人間なのだ。

彼は確かに今、全てが無駄に思っていた。胸の中心に大きな穴が開いたようなそんな感覚。

言われたことを忠実にこなす。そうすると周りは、自身の両親は褒めてくれた。

だから彼は何でもこなした。両親のいうことは特に重く守っていた。

父の言葉。

母の言葉。

大切な大切な守らなくちゃいけない言葉。

それを無下にしてしまった。

もう自分には何も無い。

彼は全てがどうでもよくなった。

唯一自分に残っているのは妹の約束だけになってしまった。

カップが地面に叩きつけられ、もうどうにもならないようなそんな感覚が彼の中にあった。

「うん」

優は心の中で自分を呪い、罵倒し、泣いて、心の外で笑った。

「今から、頭に刻み込むよ」

「いい子ね」

最早その頭には夕香を学校に行くように言わなければいけないという基本的なことも失われている。

自分を約束も守れず、夕香に劣情を抱いていたクズなのだと思っていた。人として最低な人間である自分が誰かに偉そうにいうなど間違っている。

本当の意味で夕香のことを第一に考えようと。

「本当にいい子……」

彼女は優の背中に手を這わしながら小さく舌を出し、頬を歪め、笑った。

だからその優の決意がどういう意味合いを持つのか、ということ  
を彼女は理解できなかった。

優月は本の海、本の森の中にいた。

窓を眺めながらまだかまだかと彼を待った。クッションの上に座り、青い空を眺めながら足をばたつかせる。

本来彼女にとって優という存在は、彼の母の死の理由が分かった時点で興味は失われていた。だからそれ以降は特別彼に疑問を投げかけることもなかった。

でも今は違う。

新生物を見つけた生物学者のようにその心は好奇心に溢れ、長年自分を悩ましていた難問を解いた数学者のようにその気持ちは晴れ晴れとしていた。

海外のどこかにいる母にそのことをチャットで相談すると母は直ぐに答えを出した。

『避妊はちゃんとすること』と。そして『その感情はナマモノだからデリケートに扱いなさい』と。

彼女はその答えに高ぶっていた気持ちを抑え込んだ。

それを見る前は何をするか自分でも分からないほど興奮していた。ただ彼と仲良くなりたい、心が覗きたくてという気持ちが前にあった。今すぐ彼の家にいって彼を連れ出し、自分の考えていること、思っていること、思考……頭の全ての彼に聞いて欲しかった。

もしも母の忠告がなかったら監禁くらいはしていたかもしれないと彼女は思った。

だからそれを堪え、彼が来るのを待つ。

両手を広げ、薄暗い闇の中、白い妖精は指揮を振るう。曲名は交響曲第九番、第四楽章の歓喜の歌。

鼻歌を歌いながら何度もサビの部分を繰り返す。

何を話せば言いのか全く思いつかない。

だけど何故かワクワクする。

「こんなみんなで動物園に行った時以来です」

優月は両手で口を覆い、クククと喉を鳴らした。

b e f o r e | 3 3 (前書き)

これ書いていいものか凄く悩んだ。

「ぼんぼ、いちゃい」

そういつて私は優に身を預け、上目遣いに見る。優は少し困ったような顔をして、私のお腹を摩った。

「……ここ？」

「ちがうのー、もっとしたー」

優が顔を赤くした。私も羞恥心から少し顔が赤らむのを感じる。

私は自分のプライドが高く、そして自己顕示欲が強いことを理解している。兄もそれを理解しているだろう。

だから尚更私のその行為に首を傾げざるを得ないのだ。

私が幼児プレイをしたがっているなんて。

優とセックスしたあと、私は前々からしたかったプレイの一つを彼に頼んだ。地下室から昔、自分の使っていたおしゃぶりと涎掛けを持ってきて、優に見せた。

それを見せられた優は自分がこれを付けるのかと少し複雑な顔をした。

「……私に決まってるじゃない。ここにもペンでユウカって書いてあるでしょう。ああそうね、おむつがなかったかしら」

「いや、あのちよつと」

「大丈夫よ、今から買ってくるから」

私は家を飛び出し大人用のオムツを直ぐさに買ってきた。

恥ずかしくないわけがない。今、目の前に拳銃があったら私は自分の頭を吹き飛ばしているだろう。でも前々からしたかったプレイで、私が自慰の時によく使っていたネタでもあった。

羞恥心がどうだと言っている場合じゃない。

私はベットに寝そべるとおしゃぶりをくわえて、ガラガラを持った。

首には涎掛け、服は着ていない。

本気で恥ずかしい。顔から火が出るほど恥ずかしくて、羞恥心に焼き殺されそうで、今すぐに奇声を叫びながら窓の外から飛び降りたかった。

でもやっぱりずっと前からこれをしたくて、兄に極限まで甘えたくて、自分用のおしゃぶりのカタログをみたり、こっそり哺乳瓶を買ってみたりしていた。

優はものすごく複雑そうな顔で、うんと頷くと私の足を上げてオムツを付けようとした。

顔は酷く赤い。

「ちよつと、何やってるの？ 恥ずかしいのはこっちも同じよ。真面目にやってちょうだい!!」

私は起き上がり、ガラガラでばかりと兄の頭を叩いた。

「いたつ……！ でも、こういうのは慣れてなくて……」

「言い訳しないで！ ほら、最初はウエットティッシュで汚れを拭く！ 兄さん、私のオムツも変えてたんでしょ！？ しつかりやっつて！」

ああ、死にそう。寧ろ殺して欲しい。

いい年した小娘が股を開きながら兄に逆ギレして、オムツのつけ方に文句をいうだなんて誰が想像しただろうか。

私は顔を隠すようにそっぽを向いておしゃぶりをくわえた。

優はしぶしぶといった感じでウエットティッシュで私の股周りを丁寧に拭き、次にお尻の穴と性器の辺りを丁寧に拭いてくれた。

屈辱感と同時に性的高揚を感じて、股の間から愛液が溢れ出ているのが分かった。敏感な部分がアルコールによってすうすうと刺激される。優の指が絶妙な優しさで豆に触れて、お尻がひくつく。

ああ、きつと兄の中で私はどうしようもない変態だと決定づけられている。救いようがない変態だと。

そう思うとセックスする時とは違う種類の快感が全身を包んだ。兄に全てを任せ、委ねる快感。

心の奥底まで見られているような快感。

「……あの、夕香できたよ」

「おっぱい、ほしい」

「え？ 俺男だから……」

ハイハイでにじり寄る。

ああ、いおうか。いやいやだけど、ああもっついてしまえ。

「ぱぱのおっぱいほしいのー」

赤ちゃん言葉。

ああ、言い知れようのない屈辱。でも気持ちがいい。安心する。  
今度はわざと口元を緩めて涎を零した。

「あーあーあー！」

驚いた表情で優はティッシュを取り、私の口周りを優しく丁寧に拭いた。その情景が私の中の原風景を掘り起こし、懐かしい気持ちにさせる。

あの頃、よく私は口を開いて歩いていて、鼻水や涎を兄に拭いてもらっていた。

優の膝の上に頭を寝転がせて、上目遣いに見る。

「ぱぱあ、おっぱいほしい」

「うー……」

まず優は何とも言えない表情を作り、そして次には諦めて私に乳首を晒した。前かがみになり私がしゃぶりやすいようにしてくれた。

「のめにゃいー」

おしゃぶり取ってくれなきゃ飲めないでしょう！

優を押し倒して抗議する。ああ、だめだ凄く楽しい。

兄は私のおしゃぶりを取って、頭を撫でた。私はそれが嬉しくて乳首に飛びついた。

外気に触れているせいか胸は鳥肌が立っている。私はそれに唇を強く押し付けて、舌で乳首の先を探し、ちゅうちゅと乳首を吸った。乳輪の周りを舌でぐるぐると舐め回し、硬くなった乳首を甘く噛む。

小さく喘ぎ声を漏らしながら優は自分が感じていることにショックを受けたような顔をしていた。

私の授乳に下半身を滾らせているようだ。私はにやりと笑う。

「ぱぱ、ほんぽいたいのー？」

「あ、いや」

「ぱぱのこつちのみるくものみたいなー」

「……………わかったよ」

優は観念したのかズボンを脱いで硬くなったその乳首を見せた。

「へんにやかたちー！ くしゃーい」

そついいながらはつはつと犬のように口をだらしなく開けて涎を零す。恥ずかしいからか優は枕で自分の顔を隠した。

探るように、そしてあくまでも授乳という形で私はそれをくわえた。先つぽを口に差し込んでちろちろと断続的に弱い刺激を与え続ける。時たま裏の筋をべろりとなぞる。

出るというよりも漏れるといった感じで兄のミルクは私の舌の上を汚した。どろどろと緩やかに、そしてさざ波のように長く出す。

「うぐっふう……………」

私はごくごくとそれを飲み込んだ。赤ちゃんがミルクを飲み終えてゲップするように私もゲップした。

自分の下品さに恥ずかしくなる。でも楽しくて仕方がなかった。

もしも優以外の人にこの性癖がばれたら、きっと私は首を括るだろう。

優にすらこうやって打ち明けるのに時間が掛かった。

優は所在なさげに私の顔を太ももに置いた。彼の差し出したおしやぶりを口で受け取る。

「ぱぱあ、おしっこ」

「え、トイレいかないと」

「あかちゃんはトイレなんていかにゃいの」

「えっ……………それって」

私は顔を真っ赤にしながら微笑み、その場でオムツの中に排泄し

た。

その時、私の中の大切な部分が音を立てて崩れ落ちたのを感じた。  
さよなら私、こんにちは私。

兄は部屋で椅子に座って空を眺めていた。私は後ろから優に抱きついて頬ずりした。

もう私は私を演じる必要がなくなっていた。自分の屈辱的な姿を晒した私はどこか吹っ切れた気持ちだった。

先程までお注射してだのと甘えていた人間が今更取り繕っても意味がないのだ。気取ったところでそれはただの恥の上塗り。

「ゆう」

「あ、夕香」

「何していたの？」

「空を見ていたんだよ」

「優はいつもそればかりね。夜空なんか見て楽しい？ 何も見えなけれど」

「いろんなものが見えるよ」

見上げる空は星すらも隠れていて薄墨のような不確かな暗闇があるだけだった。

優は一度も振り向かず、じつと空を見ている。

私は悔しくなって優の頬をカブリと噛んだ。

「ひひゃい」

「優の馬鹿」

空よりも私を見なさいよ。

「ご飯できたの？」

「ええ、だから呼びに来たところ。今晚はカレーよ」

「俺が殆ど作った奴だね」

「皮むきは私がやったわよ。包丁じゃなくて皮むき器だけど」

私は家事が壊滅的に駄目だった。できることは風呂掃除と洗濯。その洗濯も洗濯機が全部やってくれるという情けない話。

「うん、夕香のおかげで凄く助かった」

微笑む優に少し口づけ。冷えた優の唇と温かみのある私の唇。

「料理冷めちゃうから、早く」

「うん」

私と優は隣り合った席で一緒に頂きますと手を合わせた。

優がスプーンで野菜をすくって食べると私に微笑んだ。私はそれにブスツとした態度でじっと待つ。

困った顔で彼は私に首を傾げた。

「どうしたの？ 食べないの？」

「たべさせて」

「……ああ、うん。じゃ、ほら、あーんして」

「あかちゃんは、柔らかいのしか食べないのっ！ 柔らかくしてっ」

優は少し考える。そしてスプーンですくったカレーを口に放り込み、咀嚼し、私に口移しした。

私はそれを待ってましたと言わんばかりに顔を傾けて受け取る。

カレー味のキス、カレー味の優の舌ベロ、唾液。

香辛料の香りと優の汗ばんだ匂いにクラクラする。

気がつけば私の左手は優のスポンの中にあって、私は優の手を自分の下半身に向けさせていた。

からんと優のスプーン落ちる音。

「……夕香、ご飯冷めちゃう」

「じゃあ、早くイカせてちょうだい？」

「わか……った」

優は慣れない手つきで私の中に人差し指と中指を差し込み、ゆっくり急所を擦った。親指が豆を優しく揉む。

私は優の服を強く握って、爪を噛んだ。

「んふっんふっ………んぐっ！！」

そして絶頂。ショーツは愛液に重く濡れ、爪の先端はギザギザになった。

優は達しなかったらしく、少し頬を赤らめながら私にもういいか、

と目で聞いた。

「なんか……凄く悔しいわ。どこでそんなテクニクを覚えてきたの、兄さん」

「夕香さんが一番気持ちよさそうなところを考えたただだよ」

「……何だか複雑な気持ち。まあいいわ、カレー早く食べましょう」  
「口移し、はしなくていいの？」

優はスプーンをテーブルの下から拾い、途中机に頭をぶつけた。

私は濡れたショーツを脱ぎ捨て下半身裸のまま料理を食べることにした。暖房が聞いていて室内は暖かいがイスは少し冷たかった。

「食べるの遅くなるし、今ので満足したからいいわ」

「うん、じゃあ改めて頂きます」

「頂きます」

どうせこの後直ぐに二人とも裸になるのだ。下半身裸くらい問題ないだろう。

学校に行けと言われると途端に行く気がなくなるものだが、おかしなものでも何も言われないと今度はどうしても行かなくてはいかないうような気がしてしょうがなかった。

特に何かしなくてはいけないことがあるわけでもなく、それなら学校にでもいこうと私の中で採決が行われ、可決した。

教室に入ると机がひっくり返されていた。私は周りを一瞥するが、誰も目を合わせようとしない。男子すら伏し目がちだ。

どうやら私は完璧にクラスの中で孤立したらしい。

机を元に戻すとチープな悪戯書き。正直なんとも思わない。これ以上のことは“兄の時”に散々された。私は椅子の汚れを払い、罵詈雑言が書かれた机に頬杖して我が家の方向を眺めた。

「ふう……」

兄は喚くことも、あからさまに嫌がることもなくなってきたが、何故行為のあとはいつもあんな悲しそうな顔をするのだろう。

自己嫌悪なのか？

不意に景色が陰る。私は頭を上げて、そちらを見た。

「ねえ、ちよつと顔貸してくんねー？」

「はあ……？」

三匹の香水臭いメス。シューズの色から先輩だということが分かった。

挑戦的な瞳。イラついたのか彼女は舌打ちした。

「早く立てよ、てめー」

「トロイんだよ」

クラスの中は見えて見ぬふり。

随分と薄情だね。まあ私も情なんてこれっぽっちもないのだけど。

私はがっちりと前後を彼女たちに囲まれて、体育館の裏に連れて行かれた。気がなく、殺風景な場所。

「アンタが姫野夕香？」

「今、それを聞くんですか？」

先に確認しとくのが普通でしょうに。

「何こいつ、ちょーナメてるんですけどお」

「センパイに調子こいていいと思ってるんのかよ」

ああ、面倒だ。正直私の方が身長が高くて、明らかに彼女たちより強い。ボコボコにしてもいいのだけど、面倒な目に遭うのは嫌だった。

女はしつこいのだ。

何度手紙を破り捨てても蛇のごとく執拗に靴箱に入れてくる。私がか兄と仲良くしているだけで靴に画鋏。

「とりあえず、何のようですか？」

「ちよつとアンタさ、ムカつくんだよね」

「アタシらのダチもそう思ってる奴多くてさ、ちよつとヨノナカを教えてやるうと思ってるさア」

「とりあえず歯食いしばれよノッポ」

「顔に傷ついたら、先輩たちもいろいろ危ないんじゃないですか？」

教師に目をつけられますよ」

その言葉に三人が目を合わせてにつと歯を見せて笑った。下衆な笑み。

リーダー格と思われる女が腕を組んで私を見た。

「あたしらには強力なケツモチいるからさア」

「そうそうあの人の名前出せば教師もブルっちやうもんね」

腕を組んでいた女が平手を掲げた。横の二名はそれを楽しそうに眺めている。

ああ、このビンタが終われば帰っていいのか。じゃあ早くやってちょうだい。

「おら、屈めよ」

「どうぞ」

パンと風船の破れるような音。頬がじんわり痛むが大したことない。

私はそれが終わると連中の輪を抜けて教室に帰ろうとした。

「何帰ろうとしてるわけ？ マジ調子だわコイツ」

「輪姦させるぞ、このメスブタ」

汚い手で私を掴むな、人間。

その首引きちぎるぞ。

「とりあえず今回はこのくらいで終わらせとくけどさ、あんま調子のつてんなよ？ 地獄見せるよ？」

「はあ……」

彼女たちは笑いながらヤニ臭い唾を私の顔に吐きかけた。

嬉しそうにきゃあきゃあ笑う声が後に残った。

校門近くでどうしようとして少し迷った。だが夕香がお腹を空かせてはと思い、緊張しながら門を潜った。

どこも変わっていない学校。授業中なのか辺りはしんと静まり返っている。

優はまず職員用玄関に行き、手続きを取った。名簿に名前を記載し、バッジを受け取った。来客用の薄いスリッパを履き、妹のいるクラスに向かった。昔とは違い、教室の並びが微妙に変わっていて少し迷う。教室を通り過ぎることに生徒が顔を上げて彼を見つめた。「ああ、そっか……」

妹の教室前に来て、どうしようとして固まった。

今は明らかに授業中で、教師が喋っている。窓側の席で夕香がじっとノートを見ているのが見えた。

ふと教師が優に気がつき、扉を開けた。少し怪訝そうな顔が来客用のスリッパを見て、外行きのものに変わる。

優は彼の顔を知らないことから、自分が学校を辞めた後に赴任してきた教師なのだろうと思った。

「どうされましたか？」

「あの、姫野夕香の………家のものです。あの、忘れ物のお弁当を届けにきました」

兄とは言えない。

恋人とも。

「はあ、なるほど。少しお待ち下さい」

分厚いメガネの数学教師らしき男は教室に戻ると夕香に声をかけ、何かを話した。

教室中の視線が夕香に行き、そして廊下の優に移る。夕香は心底意外そうな顔で優を見て、足早に廊下に出た。

「優、どうしてこんなところに？」

「お弁当」

「そんなの購買でなんとかなるわよ！ もう馬鹿なんだから。ここは“敵”がいつぱいいるのよ？ 教師に嫌がらせされたりしなかった？ 大丈夫？」

「大丈夫だよ。ほら、揚げたての唐揚げ弁当」

微笑みながら肩掛けカバンを開き、弁当を取り出す。

夕香はそれを両手で受け取って、少し微笑んだ。優もそれに微笑み返し、つま先立ちしながら優しく頭を撫でた。

「ちゃんと勉強してるんだね。偉い偉い」

「みんなが見てるから……やめてちょうだい」

「あはは、ごめん。それじゃあ勉強頑張ってるね」

「ええ」

「じゃあね」

教室で見ていた教師に深々と一礼して、優はその場を去った。

後ろで教室のざわめく音。

優は教室から離れながら夕香に迷惑かけてしまっただろうか少し後悔した。

足は図書館に向かっていた。

それは初めから決めていたことで、自分用のお弁当もその為を持ってきていた。

優は考えていたこと、悩んでいたことを彼女に聞いてもらおうと思っていた。

彼女は聞き上手だし、自分の考えを上手く形にしてくれる。

自分の気がつかない部分に目が行く洞察力と客観性がある。

そう思っていた。

だが実際には違う。それは優自身気がつかないで、彼女が気がついていることだった。

自動ドアをくぐりエレベーターに乗り込む、慣れた手つきで上へと向かい、扉のくぼみに指を通しあの部屋に入った。

奥に向かうと扉の前で優月が膝を丸めて寝息をたていた。長いくせ毛が傘のようになっていてまるで別の生き物のようにも見えた。

「あの……」

「ふじっ！」

「ふ、ふじっ？」

優月は顔を開けて涎をすすると眠た気な瞳をより一層眠そうにしていった。

「わたし寝てません。優月は寝てませんでした」

「え、いや明らかに寝てたよね？」

「脳が休止モードに入っただけで決して寝てません」

「それを俗に寝ているっていうんじゃないの？」

「目を瞑って夢の世界にいただけです」

「寝てるんじゃない」

優月はうんうんと唸りながら背筋を伸ばし、大きな欠伸をした。

「わたし昨日からここで優さんが来るものだとずっと何も食べず、水も飲まず待ってました。あ、今の嘘です、キャンディー食べました」

「……どうでもいい微妙な嘘だなあ」

優月はふらふらと立ち上がると扉を開けてどうぞといった。かさついた唇。

薄暗い部屋を進むと灯りがつく。前回と同じ部屋。

「お腹空きました」

「普段から何食べてるの？」

「冷凍食品です。カップラーメンはもう飽きました」

「普段から？」

「普段からです」

「体に悪いよ」

「知ってます。でもわたし料理できません。優さん、体にいい料理をわたしに作って下さい」

「や、うーん、でも材料とかなさそうだし……」

「では優さんの持つている美味しそうな匂いのするそれと、わたしの冷凍ピザと交換しましょー」

「何が“では”なんだらう」

そして鼻がいいな。

「報酬ということはどうでしょう」

「何の報酬？」

「わたしに聞いて欲しいことがあるんじゃないんですか？ その報酬です。タダから値上げです」

「まあ、確かにそのつもりできたんだけど、なんかちょっと納得できないのはなんでだろう」

優は鞆からお弁当を取り出して、テーブルに乗せた。優月はそれが当然だと言わんばかりに包んでいた布を開き、箸で唐揚げを口に放り込んだ。

ため息混じりに彼は台所を使うことを宣言して簡単なコンソメスープを作り、彼女に振舞う。

「そんなに急いで食べると喉詰まらせるよ」

「ふごっふがふがふが！」

「ああ、昨日から何も食べてないから、お腹が空いてしかたがないってことね」

首を縦に振る赤い瞳。スープで口の中のものを流し込む。

「……ふう。それで、優さんわたしに何を聞いて欲しいんですか？」

「うんと、なんていうかさ、うん」

「何を恥ずかしがっているんですか？」

「あの、夕香がさ」

「はい、夕香さんが？」

「今度誕生日なんだ。だからそのプレゼント買いたいんだけど、どうすればいいか分からなくて。今まではそんなことなくて俺、例のことがあってから友達はいないし、女性の知り合いもないから、悩んで……その」

優は恥ずかしそういって、声のトーンを落とした。優月は少し考

えて、スープをすすりながらそれをいった。

「優さんが裸で箱に入って、首にリボンして俺がプレゼントだって言えばいーんじゃないでしょうか。それか、あー見えても夕香さんって甘えたがりですから甘やかし券を発行してみるとかどうでしょう?」

「それがいろいろあって既に夕香は俺に甘えまくってる状況なのですよ」

その言葉に優月は赤い瞳を大きく見開いて驚いた。首を傾げて優をみる。

「……………あの鉄仮面が? 優さんに? 隠れた性癖でも晒さない限りそれはないでしょう。あの人、頭を強く打ったりしましたか?」  
「まあ、いろいろあってね。それで俺はどうしたいいかな」

「そうですね、少し考えます」

優月はカタカタと指を踊らせて、じつと何かを考えはじめた。

その間に冷蔵庫から冷凍ピザを出してレンジで温める。

「優さん、編み物できますか?」

「いや、やったことないよ」

「じゃあ、やりましょう。手編みのマフラーを夕香さんにプレゼントしましょう」

「え、今から覚えるの? あんまり日程ないんだけど……………」

「だから毎日ここに来て一生懸命頑張りましょう。ちなみにわたしが一番嫌いな言葉が頑張れ、です。本当に最低の言葉ですよ。他人に全てを投げかけ、まるで今まで頑張っていなかったような物言い。言葉の責任は一切取る必要がないですし、綺麗な聞こえがありません。わたし的には呪いの言葉です」

「その最低な言葉を俺にいうのか……………」

「はい、頑張ってください」

優は複雑な表情で彼女の眠たそうな瞳を見続けた。

うず高く積みまれた本の山。雑に崩れて部屋の一部分を占拠していた。

「本当にベッドが見えないね……」

「これでも綺麗にした方です」

優は彼女の寝室にいた。本当にベットと本以外は何もない質素で小さな部屋。

優と彼女は本の獣道で一列になり、前方の山を見つめていた。

「では頑張りましょう」

「君も一緒にやるんだよ」

「え？」

「何その意外そうな反応は」

「手伝うことはやぶさかではありませんが、ギャランティーの方は貰えるのでしょうか」

「何で俺が君に手伝いを要請してる側になってるんだらう。俺って

君の手伝いをするってことになってたはずだけど……」

「優さん御託はいいので、さっさとこれを片付けましょう」

「ああ、ちよつと今イラつとした。俺ちよつとイラつとした」

優月と優は二人で相談した結果、とりあえず室内の本を全てまとめ、本棚の部屋に移動させようということになった。整理整頓はまた後にしてとりあえずベットを発掘させる作業。

作業は優月が本を読み始めたりと難航したが、一時間もしないうちに全てを終わらせることができた。

優はソファに寝っ転がり、うーうーと唸った。優月はお盆にインスタントの紅茶を乗せて優の近くに置く。

「ああ、腕がパンパン。最近力仕事してなかったからダメダメだ……」

「お疲れ様です。優さんのおかげでわたしの一ヶ月は掛かるはずだ

った作業が一気に短縮されました。おかげでその一ヶ月をツダに費やすという新たな予定ができました。ほくほくです」

「ツダは悲しきMS……」

優は呟きながら起き上がり紅茶を飲む。優月は説明書を暗記しているのか全てのパーツをランナーからニツパーで切り離していた。

パチパチとプラスチックの音。

「優さん、先程毛糸等の物は発注しておきましたけど……それでよかったですか？」

「うん、白の毛糸でいいんじゃないかな。夕香は暗い色とか落ちて着いた色が好きみたいだけど、たまには明るいのもいいと思うんだ」  
優月のグリーンのニツパーがぴたりと止まった。赤い瞳は優を捉える。

優も紅茶の手を止め、首を傾げた。

彼女はゆっくりといつものトーンで言った。

「いえ、それでいいのかというのは、つまり本当に話したいことはそれで終りかという意味です。わたし、てっきりそれを口実に別の話があるのかと思ってました」

「本当にさっきのことを相談したくて……」

「優さん、あなたは本当にギリギリにならないとここに来ない。本当に悩んだときにしか来ません。だから優月は聞きます。何かあったんですか？」

「全て順調だよ」

優は微笑み、紅茶で喉を潤した。暖かい液体が食道を通り、胃に落ちて行くのが分かった。

優月はニツパーをテーブルに置いて、ソファにより掛かった。その動きのせいか長い前髪が表情を隠し、瞳と唇だけを覗かせる。

彼は赤い瞳に何かに恐れを抱いた。見透かすような圧迫感のある視線。

「わたし、その嘘くさい微笑み、嫌いです。助けてほしいような顔してるのに無理に作ったような微笑み、なんだかお腹が立ちます。夕香

さんの寂しいくせに寂しくないとでも言いたげなああの無表情に似て  
ます。私が信用できませんか？」

「そういうわけじゃなくて……」

「あなたの性格からいって夕香さんに自分から止めてほしいといえ  
るような勇気はないでしょう。かといつてそれを仕方ないと受け止  
めることもできない。ではあなたは今度は何を我慢しているのか。

本当に夕香さんが好きにでもなりましたか？ いや、それはないで  
しょう。ならここには来ない。セックスが気持ちよくなってしまっ  
たとか？ 確かに生命の危機に陥ると人は感覚が鋭敏になり、性的  
感覚が強まるという話があります。強姦を受けた被害者は悲惨な状  
況であったはずなのにオガズムを感じてしまい、そのことに絶望  
して自殺する者も少なくないそうです」

「あ、いや、そういう話でもなくて……」

「では何ですか？」

優は観念してポツポツと零すように語った。人形のように優月は  
黙ってそれを聞く。

「俺、この前さ、夕香に危害を加えるようなこと、しちゃってさ。  
でもそれは夕香は危害だとか何とも思ってたなくて、でも俺の中では  
そういう事ってしちゃいけないっていうか、何だか許せなくて……」

一度唇を紅茶で湿らせる。

彼女はその間も死んだように動かず、じっと瞳は前を見続けた。

「だから俺って夕香の側にいるべきじゃないんじゃないかな、とか  
この前思ってたんだ」

「……………何が原因かは置いておくとして、完璧主義者の優さん。  
それって凄く普通のことですよ。間違いや他人に対する憎悪はとて  
もありふれた事です。たった一つのミスで自分を拒絶するんですか  
？」

優は視線をそらして空のカップを口につけた。優月は自分の飲み  
かけの紅茶を無言で優に譲る。

「そういうのはとは、また、違うんだ」

「憎悪ではない……とすると性的な意味合いですか？」

「まあ、ね」

「あなたは過去の体験のせいで性的な行為はイコールで人の死、絶望と繋がっているからそれを恐れるのでしょうか。欲情もまた、ごくありふれた感情ですよ」

「……君は俺の心が何でも分かるね。実は心が読めてるんじゃないかなって不安になるよ」

「残念ながら一番知りたい気持ちは見えません」

「え？」

「いえ。ふと思ったのですが、その感情は夕香さんが相手だから思うのではないですか？ 彼女が当事者だからその情景が浮かんでしまっているのでは？」

「……わからない。でもそうだとしても何も変わらないよ」

「いいえ、明確な原因が分かれば対処や治療方法も確立できます。ということでは？」

「うん……え？」

彼女の病室。灰色のコンクリートに囲まれた鉄柵のある寂れた部屋。

こついった手合いの者には珍しくその部屋は冷暖房が完備されていた。金網から見える外の風景はこの寂れた病室と相まって退廃的に見えた。

夕香はじつとそれを眺めていて、男もそれに付き合うようにぼつと見ている。

午後の陽の光を浴びた彼女の入院服は本来の薄い青から黄色に染まり始めていた。

「そついえば……」

「ん、どうしたんだい？」

「そついえば優月はあれからどうなったの？ まだ生きているの？ それともくたばったのかしら」

視線は窓から離れることなく、口だけが別の生き物ののように動く。

表情は固く動かない。

「夕香、そついう言い方はやめなさい」

「言い直すわ。あの子、死んでくれた？」

歪みを作る頬の肉。

男は溜息をついて、言葉を返す。

「優月は、生きてるよ」

「そつよね。あの子が死んでたら私、あの子のお母様に殺されちゃうものね。あの怖くて恐ろしい人に」

「……………」

否定はしない。

優月の母、つまり男の妻はやられたら確実にやり返すタイプの人間だった。

いや、自分の愛娘を殺されて黙っている親はいないか。

「でもきつと今は死んだようなものでしょうね。だってあの子……」  
「夕香、そろそろ教えてくれないか。あの時、あの時期に、あの場所  
所で何があったのか」

男は彼女の言葉を遮るように声を上げた。

「……殆ど分かっていることでしょうか？」

「本当に大まかなことだけ、ね」

男はボイスレコーダーにスイッチを入れて、ペンとノートを取り出す。

彼女はそれがどうでもいいのか、窓から視線を外さない。

そもそも彼女は普段からあまり動くということをしなかった。

あの時から。

動くのは気分がいい時、調子のいい時だけ。それ以外はこうやってぼうつとしている。

「私達の何かが壊れただけよ。ねえ、優」

彼女とは違う何かの声。

「うん、そうだね」

「夕香ちゃん……」

「俺と夕香と彼女の細い細い糸がきれただけです。いつ切れてもおかしくなかった細い糸が、切れただけ」

ソレはそう歌うようにいうと頬を歪ませて笑う。

男はそれに胸を締め付けられるような痛みを覚えた。

全てが全て、巡りが悪かった。

全てが被害者で、全てが加害者。

人は常に誰かを傷つけ、傷つけあい、互いに干渉していく。

それは時に美しいものを生む。

そして時に悲しいものを生む。

「夕香……」

だから男は辛そうに、苦しそうに自分の娘を見つめながらいう。  
我慢しようとしていたものが溢れて止まらない。

誰が悪かったのだろうと。  
何が悪かったのだろうと。  
そして思った。

神様はなんて残酷なのだろう、愛が罪だなんて。

ソレは少し不思議そうな顔で聞く。それは男が微笑み以外の顔を  
作ることが少なかったからかもしれない。

「どうしてそんな辛そうな顔をしているんですか？」

「もう……もう、やめるんだ」

「何をですか？」

「だって君は」

「俺が何ですか？」

「優くんじゃない。君は夕香だから……」

自分の殻の中に兄を作り出した彼女。

悲痛な面持ちで男は搾り出すように言った。

「夕香、もっいいんだ。もう。君は……悪くない」

黄色い光に照らされた長い髪は不思議そうな顔で微笑んでいた。

席に戻ると他の生徒達はどこか奇異な目で私を見た。授業は再開され、ノートに私は目を戻す。

本当は無視したかった。しかし小さなその囁きは半ば強制的に私の耳に届いた。

私が笑ったところを初めてみただの、女の顔をしていただけの、あれは家族じゃなくて付き合っている彼氏だのそんな他愛のないもの。ああ、私は笑ってしまったのか。優が私のために来てくれたことが嬉しくて気が緩んでしまった。

退屈で息苦しい時間に現れた私のオアシス。優の微笑み。

唇、うなじ、甘ったるい匂い、柔らかそうな肌、優しい瞳、オスの匂い、精液の味、体のライン、声。

ゾクゾクとしたものが背筋を駆けて、口の中を涎が満たしていく。ああ、駄目だ。こんなところで、優が欲しくなってる。

学校で声を堪えながら優とセックスするのを妄想して私はどうにか堪えた。

「何あれ、カレシ？ おい、何とか言えよテメー」

「アイツ確か、こいつのアニキじゃなかった？」

「あー、あの人殺しの……」

侮蔑する笑み。自分たちは一般という上位で、私達が異常という下位に属するとも言いたげな醜い笑み。

体育館の裏で、耳障りな声が鳴り響く。

殺してやるうか。

私の優を馬鹿にしやがって、このメスは。

「あの、帰ってもいいですか？ お弁当、途中なので」

「……ああ、アンタの弁当ね、クラスメイトにゴミ箱に捨てておくように命令しといたからあ！ あははははは」

「キヤハハハハ」

はあ？

コイツは今なんて言ったの？

何をした？

兄の弁当を捨てるようにいった。

ああ、駄目だ。駄目だ駄目だ駄目だ！

殺しちゃ駄目だ。

でも殺したい。

「ねー、それよりさあ、ビジネスの話しよーよ。アンタのアニキさ、まだ結構キレーな顔してんじゃん。ああいうの好きっていう人、あたしら結構知ってんのよ。だからさ、そこで働かせてやるーって考えたワケ！」

「どうせ、ビンボーなんでしょアンタら。いいじゃん、この機会にお金イッパイじゃん！」

「大丈夫、アタシらがお前のアニキ、特別にチヨウキョウしてやるからさ。客もみんな大人しいし、心配ないって！」

ああ、頭がクラクラしてきた。殺意と暴力の欲求が酷い。

なんでこいつらはこんな人に人を逆撫でするようなことをいうのだろう。人を傷つけることに躊躇いはないのだろうか。人を傷つけるということは自分が傷つけられるかもしれないということを理解していないのか。

「……………私達、生活にも困っていませんし、兄をそういう危ないところで働かせるつもりもありません。失礼します」

私は下げたくもない頭を下げ、微笑み、踵かかとを返した。

三匹の香水臭いメスはそれをバカにされたと取っいたらしく、よく分からない悲鳴を上げながら私の髪の毛を掴んだ。

続けてへタレた拳が二発、溝に入る。

「……………ぐっ！」

「……………ンジャーネー！ ザケンジャーネーぞ！ 何、ぶりっ子してんだよテメーエ。あたしらがお前らイカレた兄妹のために仕事やるって

いつてんだろーがよー！ あたしの顔にドロを又ルってのかよー」

「チヨウシ！ まじチヨウシだわコイツ」

「危険とかさあ、アンタのアニキ最初から頭オカシーんだろ？ じ

ゃあ、ホモにケツ振ってんのお似合いジャン！」

ぎゃははははとブリキのオモチャのように両の手を叩く小太りの女。それに釣られて笑い声を上げる女。

「そーだよ、頭オカシーなら丁度いいじゃん！ キチガイはヘンタ  
イの世話がお似合いダヨネ！」

「もうさ、アタシら前金貰ってんのよ。だからさ……」

すつと音が消えた。ぶつりと意識が切れた。ざっくりと何かが切れた。

兄を馬鹿にしたコイツらに、私の大切な優に向かって唾を吐きかけたコイツらに。

優が綺麗だと褒めてくれた自慢の髪の毛に触れたコイツらに。

いつも早起きして作ってくれている弁当を捨てたコイツらに。

私のために全てを背負ってくれた兄を、優を馬鹿にしたコイツらに。

私は殺意をぶつけた。

気がつけば一人の女の顔がくしゃくしゃになっていて、臭い小便を漏らしていた。もう一人は血の混じったゲロを草むらに向かって吐き散らかしている。もう一人は寝そべり、くの字に折れ曲がった腕を押さえながら、青あざのできた顔を悲痛に歪めて泣いていた。

私の手のひら。血。

壁には血。床にも血。

「ああああ、あたし友達、ヤクザいるっつからあああ！」  
意味の分からない叫びを腕の折れた女が叫んだ。

近づく。

「あああああ、ごめんごめん。ほんとごめん、もうしなっぴから  
っ！ ごべんなざい……」

失禁。

化物を見たかのような恐ろしげな顔がおかしくて、堪えきれなくて、私は吹き出した。

手で抑えようにも喉から漏れる。

「くふふふふ、くははははははははは！」

「ひいひいひいっ！」

「もう、しない？」

「ししししししなな、しないっていつてるでしょ！ だから、もうこっちこないで！ バケモノ！」

「バケモノ？ 私が？ 優しい私が？ 人を傷つけて平気な顔をしているあなた達がそれをいうの？ 兄を馬鹿にして私を馬鹿にしたあなた達が？ 笑えない冗談ねえ、それ」

「ヤク、ヤクザの友達にい！ あがつ」

腹を踏みつけ、体重をじわりじわりとかけていく。

「友達がなあに？」

「ゆる、して」

「嫌よ」

「ゆづ……きさんに頼まれて」

恐怖に歪んだ顔がそういう。

嘘は言っていないように見えた。

「優月先輩が本当にあなた達にこういふことしろっていったの？」

「……………」

「どうなの？ ちゃんと答えてちょうだい」

踏みつけを強くする。

視線をさ迷わせたあと、蛙の鳴くような声でそれはハイと答えた。

「嘘つき。優月がそんな下らないこというはずないでしょう？ そんなにキョロキョロしても助けなんて来るわけないわよ。あなた達がそういつつもりでここを選んだんだから」

「じゃあ、さようなら。」

私は思い切り、折れた腕を踏みつけた。

かちやりと扉が開き、ただいまと間の抜けた声が玄関に響く。消え入りそうな西日の光に照らされて優は顔を出した。

「遅いじゃない……」

「夕香、どうしたの？ こんなところで」

「服を脱げ」

「え？」

また間の抜けた声。私は無理やり優を玄関に組み伏せると服をはぎ取った。

抗議の声を上げる優を平手で黙らせる。赤い色の液体が唇を伝い、頬を滑っていく。

私は舌ベロで生暖かいその滴をすくって飲んだ。鉄さびの味。

そこで優は私の頭を軽く撫でて微笑んだ。ポンポンと片方の手で背中を叩く。

「どうしたの？ なんか嫌な事あった？」

「別に、何も」

「嘘だよ。夕香さん、凄く悲しそうな顔してる。なんだか辛そうで無理してる」

「……嫌い！ 私は優に暴力を振るうの！ ところ構わず暴力を振るって迷惑を掛けるの！ 優に！ みんなに！ 私は……そういう子なの。だから、だから優を犯すわ」

両の手は首に添えられ、ぎゅうっと細い首を閉めた。優は私の頬を優しく撫でてて掠れた声を出した。

「ゆ……かが、そ したいならいいよ」

私はそこで手を離れた。一気に感情が腹底から湧き上がってきて、ワーッと声を上げて優に泣きついた。したたる涎や鼻水はもうどうだってよかった。

ただ話を聞いて欲しくて、優に謝りたくて、慰めて欲しくて優に

抱きついた。

「あのっね！ ゆうかね、お兄ちゃんに、みんなにね、悪いこと、したの」

「よしよし、うんそれで？」

「あのね、あのね……」

そこで私は優に事の経緯を話した。

聞き取りにくいだろう私の声、泣きすぎて中断される話をじっと優は辺りが暗くなるまで聞いてくれた。

職員室に行き、女子生徒三人を半殺しにしたと自分から言って停学処分を受けたこと。学校で嫌がらせをされていること。優のお弁当を食べられなかったこと。嫌な先輩のこと。

全て、全部。

玄関は青みがかった暗闇に染まり、優の抱きしめてくれる温かさ  
と私の泣いている熱だけがその闇の冷たさを埋めた。

「そっか。夕香は俺を守ってくれたんだね。ありがとう」

「いっつも、ゆうか、お兄ちゃんに、まもって、んぐ、もらって、えっぐ、ってるし、ゆうか、お兄ちゃん、大好き、だもんっ！ えぐっ」

「夕香、鼻水。ほら、チーンして」

優は自分の服を私の鼻に添えて頭を撫でる。

私は鼻水をすすり、顔を胸に押し付けた。優の胸を私の鼻水で汚すのは嫌だった。

胸いっぱい優の匂いを嗅いで、むせび泣く。兄は嫌な顔ひとつしないで、背中を叩いて、髪を撫でてくれる。

「ちよつと冷えてきたから、夕香お風呂入っておいで」

「お兄ちゃんと一緒がいい」

「……ん、わかったよ。一緒に入ってあげるから、さあ立とう」

「だっこして」

「おんぶでもいい？」

「うん」

優の背中に覆いかぶさり私はまず、リビングに連れて行かれた。

優は暖房をかけ、キッチン付近の壁に備え付けられた給湯のボタンを押した。

ひざ掛けを持って私とソファに座る。

「まだ寒いからね」

「……優が私を庇って、学校辞めてくれたのに、それも意味なくないっちゃんかもしれない」

「まだ停学だよ。きつと大丈夫」

「処分が決まるまでの停学よ。優のことがあつてただでさえ、風当たり強いっていうのに……私、わたし！」

なんて馬鹿なんだろう。

怒りに任せて、暴力を振るってしまった。

人はとても脆いと知っていたはずなのに。私の力は人よりもずっと強いと知っていたはずなのに。兄に迷惑が掛かると分かっていたはずなのに。

あそこでただ殴られ、下手に出てればよかった。あの女たちに媚びていればよかったんだ。

私さえ我慢できていれば。

優はそんな私に微笑みを零す。慈愛の籠った父親のような微笑み。

「もう、いいんだよ、夕香。大学まで行きなさいって言ってた母さんも、もう死んじゃったし。だからもう、いいんだ。また、俺働くから、夕香は何も心配しなくていいよ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「いいんだよ」

いいんだよ。

その言葉は決して私を許してくれてはいない気がした。どうでもいい、そういう意味に聞こえる。その固定された微笑みは私に全く興味がないように思えて酷く背筋をぞつとさせた。

私にとって優は何だ？

最愛の人、恋人、唯一無二の存在、恋慕する相手、欲情の相手、  
獲物、寄生先、宿り主、父。

優にとって私は何だ？

庇護の相手、自分を守る為の繋がり、アイデンティティの欠片、  
父との約束の残りカス、母の約束の残りカス、兄に欲情するカワイ  
ソウな妹、頭のおかしい妹、暴力を振るう妹、兄を犯す妹、精神疾  
患を持った妹、母の死の切っ掛け、あの時の呪い、自分を責め続け  
る呪縛。

「どうしたの、夕香。オバケでも見た？ 夕香は昔からオバケが苦  
手だもんなあ……あはは」

兄の体をぎゅっと自分に寄せる。

逃がさないように、離れさせないように、私といつまでも一緒に  
いるように。

兄がいなくなることを恐怖するように。

「私から離れないわよね？ 優」

「夕香は心配性だなあ、あはは」

柔らかく微笑んで、頭を撫でた。

私は目を瞑り、いつまでも兄が“離れない”と言ってくれないこ  
とに疑問を抱いた。

ザアザアと優がお湯を被る音。

先に優が風呂場に入った。

私は準備ということ、タンスの肥やしになったやらしい下着を  
取り出して、脱衣所においた。

優をびっくりさせようと思っていた。

それと、もう一つ。

「そう、もう一つ」

私は優の服の匂いをもう一度嗅ぐ。

優に抱きついた時、普段とは違う兄の服の香りに何か良くないも  
のを感じた。仄暗い感情といってもいい。

多分これは、そう。私の一番嫌いな臭い。  
他の女の臭いだ。

メスが兄に触れた臭い。フェロモン。

私は自分の部屋から持ってきたガムテープで優の服のチリやら毛  
やらを採取した。

隅々まで採取して、白く長い髪の毛を見つけた。

透き通るほど白く、艶やかなくせ毛。

「夕香あ、入らないのお？」

「うん、今いくよ。……………お兄ちゃん」

服を脱いで、私は風呂場に入った。

ぷつりとワイシャツの上のボタンが外される。白い胸元が顔を覗かせた。

「わたしには性的魅力は感じませんか？ やはり夕香さんだから、そーいう感情が湧くんですか？」

優月の棒のように細い黒タイトの足が音も立てず彼に近づく。優はカップを持ったまま固まった。

動くことができない。

「いや、あの……」

「知識ばかりで初めてですけど、大丈夫です。痛くはしませんから」「それって何か間違ってるじゃない!？」

桜色の唇から赤い舌がちろりと出て、弧を描く。ざらついた柔らかそうな舌。

細腕がやんわりと胸を押して優はソファに寝転がった。顔が赤くなり、彼の脳内はアラートをけたたましく鳴り響かせる。

優月の白く長い髪の毛は触手のように彼の体に掛かり、赤い瞳は瞳の奥を潤ませながら迫った。自分とは違う、甘く爽やかな香りが身を包む。

「胸はありませんけど、わたし、それなりにかわいいですよ」

白く輝くその柔肌。

眠たげな表情としか見ていなかった端正な顔。

近づく。

近づく近づく近づく。

自分の顔へと。

「あ……あっ」

「犬に噛まれたと思って下さい」

「だ、だめだよ！ そーいうのは!」

優は彼女の肩を押しつけ、赤面した顔でいった。額は汗で濡れて、

目は瞳孔が開ききっている。

「こ、こついうのは、そのすすすす好きなひつと！　したほうが  
っ」

「……………ジョークです。ブイ」

「え、あ、じょーく？」

「ブイ」

「た、たちの悪いジョークだ……………」

彼女は元の席に戻るとソファの上で膝を抱えて、ごろんと横にな  
った。

「しかし、妹さんにしか興奮しないというわけではないみたいです  
ね。やはり、よくある欲求不満から来るのではないでしょうが。優  
さん、ちゃんと自慰していますか？」

「じ、い……………」

「つまりオナニー、マスターベーションです。語源となったオナニ  
ーは旧約聖書の創世記によると、オナンという男性が

「わああああ、分かった！　もういいから！」

「で、ちゃんとしていますか？」

「な、なんでそんなエッチなことを女の子に言わなくちゃいけない  
んだ……………」

優は頭を抱えた。

優月はいつもの調子でいう。

「気にしないで下さい。わたし、結構エッチなので。それでちゃん  
としますか？」

「……………んん、いや、まあ、ここのところはホラ」

「いえ、当然それは分かっています。夕香さん以前のことです」

「そ、その前はバイトとかしてて、忙しくてそういうことは……………」

そういう本とか買っても夕香が直ぐ捨てちゃうし、怒るから我慢す  
るしかなくて」

「夢精もしてなかったんですか？」

「む、むせい!?!」

「夢精というのは……」

「ああ、分かっているから。うん、してませんでしたっ！」

優は何故こんなことになっているのだろうと内心愚痴を零した。自分は酷くうるたえているのに目の前の少女は酷く静かだ。

慌てふためく優とは対照的に優月は頭がどんどん冷え切っていくのを感じていた。

何年も夢精せず、また自慰もしないということは可能か。

男性の人体の構造上その答えはノーである。

ではどうやって、その欲求を彼は解消していたのか。

なるほど、彼の妹は。

では、本当に彼は妹に性的接触をしてしまったのか。

真面目が服を来て歩いているようなこの人間にそれは無理だろう。では彼女に騙されているとして、彼はそれを信じるか否か。

状況がある程度揃えば信じる。

なるほどなるほど。

それで自分に彼を縛り付けているのか。

こういう結果になるとも分からず。

興味深い。

「優さんって昔から、御飯食べると直ぐ眠くなるタイプだったんじゃないですか？」

「え、や……ああ、でもそうかな。最近はそういえば眠くならないなあ」

「なるほど」

優月は小さく微笑んだ。

「話をまとめます。優さんは夕香さんから離れたいと思っている。しかしそれができない心理的理由が同時に存在していて、離れられない。そもそもそう思った原因は夕香さんに性的な行為を自分からしてしまったから、ですね」

「……うん、まあ」

「正しい兄でいることがあなたのアイデンティティを保つ一つの条件なわけですが、それを自分で崩壊させてしまった。しかもそれは心のどこかで忌避していた性的行為。……まるであなたは人を殺すことを自分から望んだかのような気持ちになった。両親を自分の手で汚してしまったような気がした。大好きだった母親を死に繋げてしまったあの時のように」

「……うん」

優は膝を抱えた彼女の視線から逃れるように視線を落とした。

「守るべきモノを自分から壊してしまった」

「うん」

「その時、あなたは全てが等しくどうでもよくなった。自分という形が、自分の信念があやふやになり、今にも消え入りそうだった」

「うん」

「崩れて消えてしまいそうな心を再度構築するために、あなたは夕香さんに依存した。夕香さんもそれを望んでいた。一見幸福に見えた。でもそれは見せかけで、退廃的で、どこか腐臭がする関係。でもそれしか今の自分には残っていない。だからあなたはこうすることもできない歯がゆい気持ちに苛まれている。だからいつそ消えてしまった方が、と考えている。過去を切り捨てて、今の呪われた依存を捨てて、もっとまともな依存先を見つけようとしている」

彼はまだそれに気がついていない。

もう既にそれを見つけていることを。

「そう……なのかな」

「そうだと思います。やはりあなたの中には血縁者との倒錯的関係をよしとする感情はないのでしょうかね」

「多分、それはさ……。俺があの人に」

優は自嘲するように微笑み、言葉を零す。

それを彼女は優しく補完した。

傷は一人で傷つけるものじゃない。

他人に傷つけられるから、浅くなる傷もある。

「そう、あの時に……誰とはいいませんが優さんは“そういう関係”で、それが原因で人が死に、全てが変わってしまったから。それを嫌悪し二度と起こって欲しくないと思っっているから、慣れることができない」

「……………ねえ、俺はどうしたらいい？ 結局、夕香と“そうなること”もできなくて、自分を汚いと思っでいて！ 夕香が大切で、でも夕香から離れたいと思っでいて！ そんな、あやふやでどうしようもない俺は……………どうしたらいいんだろう？」

優は両手で顔を覆い、吐き捨てるようにいった。

独り言のように、まるで訴えかけるように。そしてそれは自分自身を責めるかのように。

優月はそこで初めて口ごもり、目を逸らした。

「わたしが、あなたの自由のお手伝いをします。優さんが自由になれるためのお手伝いを。少しずつ開放されるように、この優月が…

…」

そう、少しずつ

真綿で首を締めるように。

ゆっくりと。

暗い一人だけの部屋。孤独。沈黙。静寂。

優は既に帰った。

明らかに無理をしている表情での「ありがとう」という言葉を残して。

優月は少し自己嫌悪した。

答えを曖昧にして、綺麗な言葉を並べて、まるで自分は彼を助ける指針になるかのような言葉を吐いた。

偽りの優しさ、偽りの言葉、偽りの偽りの偽りの。

そして決して真実のそれは見せられない。勇気が出ない。

果たして自分はふさわしいのか、並ぶ価値があるのだろうかという、どうでもいいことばかりが頭に浮かんで消えていく。

「ぐすつ……」

鼻水をすすり、優月はソファの下に隠したノートパソコンを出し、キーを叩く。

チャットソフトの発言欄に言葉が記される。

『セックスしようといったら断られた……』

暫くして、ポンつという軽やかな音と共に母からのメッセージ。

『そういうことはある程度、関係が進んでからでないと駄目。私達は伝えたいことをシンプルに伝えるけれど、世間ではその逆。答えをオブラートに包み、周りの空気を感じとらなければいけない。あえて伝わりやすくすることがある種の社会性を確立する術<sup>すべ</sup>』

『わかった』

よく分からないと思いつつも彼女はそうキーを叩き、画面を閉じようとした。

そこでまたポンという音。

『応援している。あなたには決して私と同じ道を歩まないで欲しい

……』

『お父さんには言わないでね。……あの人、心配性だから』  
ふと両親の思い出が浮かび上がる。

道端でコケただけで絶句して、救急車を呼ぼうとした父。  
冷静な母に足蹴にされて、自分の擦りむいた足よりも顔面が酷い  
ことになった父。

それを見て救急車を呼ぼうとした母。

「ふふ……」

『頑張つて。優月』

『うん。ありがとう』

「ありがとう、お母さん」

小さく彼女は微笑んで、もう一度ありがとうと言った。  
部屋が少しだけ明るくなったような気がした。

風呂場の戸が開き、風呂場とは違う冷たく乾いた空気が流れ込ん  
できた。

鏡に夕香の笑顔が写り、そして次に裸体が写り、優は直ぐに頭を  
下げた。

それを夕香は少し嬉しそうに微笑んでいった。

「あら、もう見慣れたでしょう?」

「いやあ、そんなことない、よ」

「綺麗?」

「う、うん。キレイ」

「出るところ出てる?」

「お腹とか?」

「うふふふふふふ」

ぱこんとプラスチックの風呂桶が鳴り、文字通り之の意味で優は  
頭を抱えた。夕香はその風呂桶でお湯を被り、全身を温めた。

また濃い湯気が立ち上る。

「体、洗ってあげる」

「じ、自分で」

「洗ってあげる」

「……わかった、お願い」

風呂桶を持ち上げた夕香に優は苦笑いを浮かべて頷いた。

夕香は青色、つまり自分のボディータオルを泡立てると、優しく兄の背中をこすった。

優は少しくすぐったそうな顔。

「ねえ、浮気しないわよね？」

「どこまで浮気なのか分かんないけど、多分しないと思うよ」

「しない？」

「しない」

「嘘つかない？」

「夕香にはついたことない」

「私のこと好き？」

「……好きだよ」

「………そうか。そうよね」

夕香は少し下を見ながら微笑んだ。

乾いた笑み。

自分の好きと兄の好きとの温度差を感じたような、そんな笑み。悲しそうなそれ。

「……兄さん、今日は帰りが遅かったけど、どこ行ってたの？」

「……ん、ちょっと図書館」

「そう」

「うん」

「優、こっち向いて」

「いや、流石に前は自分で洗うよ」

「いいから」

「今日はちよつと……」

優は優月に言われた妹だから興奮してしまつのではないか、という言葉を妙に意識してしまい、内心あまり夕香に体に触れて欲しくなかった。

彼女は当然それを知らず、体を向かせようと優の肩を引っ張る。

「あーもう！……じゃあキスして」

夕香は優の肩に顎を乗せて、少しいじけるようにキスをせがんだ。

「あー、えー、うー、うん」

「……………」

優は顔を後ろに向け、唇を重ねた。

とりとめのない接吻<sup>せつぶん</sup>。

二人は目をつぶる事なく、互いの瞳の奥を覗きあった。

そうすれば相手の考えていることを理解できるのではないだろうか、とでも言いたげに。

夕香は兄の胸にもたれるようにして湯船に浸かっていた。髪の毛は頭の上で団子状にまとめられている。

優は彼女を両手で抱きしめて、目を瞑り、小さく鼻歌を歌った。

曲名は雨に唄えば。

「お兄ちゃん、本当にごめんね」

「もう学校のことはいいよ。起こってしまったことはしょうがないんだ。今は明日からのことを考えよう。あ、夕香さんが殴っちゃった人のところ、お見舞いとかいかないとね」

「……………あんな人間のところに？ どうせ、嫌味言われるだけじゃない。やっぱり頭がおかしいだの、気が狂ってるだの、優がこれ以上馬鹿にされるのは耐えられない！」

「もう、慣れたよ」

乾いた笑い。

それを夕香は苛立ち混じりに言った。

「慣れるのと辛くないのは違うわよ」

「そう、だね。……ああ、でも人殺しがお見舞いに行くつても問題かな。かといって夕香さんだけ向かわせるのも……………」

「それは、明日考えましよう」

「あはは。なんだかどンドン、先延ばしにされそうだね」

「私が何とかするから」

「ん？」

「何でもない。優は美味しいご飯作って、ニコニコ笑って、私の帰りを待っているのがお似合いなのよ」

「俺は主婦か」

「くふふふ、じゃあウエディングドレスは優に譲ってあげる」

「夕香は普通にタキシードが似合いそうだから、ちよっとズルいよ」

「兄さんがチビスケなのが悪いのよ」

「結構気にしてるんだけど……」

「チビスケな兄さんは貰い手がいなさそうだから、私が貰ってあげるの。感謝してちょうだい」

「ありがとう？」

「何で疑問形なのよ」

二人は笑った。自然に笑い声を上げて、顔を見合わせた。

“まるで昔の頃のようにだ”と。

一緒にお風呂に入って、一緒に笑って、同じ時を刻む。

昔の記憶、昔の思い出。

でも“それ”を口には出さない。

それは昔とは明らかに何か欠けていて、何かがねじ曲がり、何か失われていたから。

人は現在が辛いから美化された過去を望み、思い出す。

今が辛いから。

今が辛くないと信じたいから、彼らは決してそれを口には出さない。

幸せだと信じているから。

この先もずっと。

カーテンから漏れる朝日の光。それは疲れた体に否応なしに朝だと私に教えてくれる。目覚めたくなくても無理矢理に目覚めさせてくれる。

「だるいわ……」

欠伸をかみ殺しながら目を覚ます。足腰が痛い。

「……昨日張り切りすぎたからかしら」

隣では上半身裸の優が少しかさついた顔で丸くなって寝ていた。

若干香る室内の淫靡な汗と性臭。

優は眩しいのか小さく唸って丸くなった。小動物のようで可愛らしい。

眠り姫に王子がそつするように、私は髪を掻き上げ、優の唇に自分の唇を重ねる。

冷たく乾いた唇。

私とは違う、冷たく乾いた唇。

まるで私と優の関係性を表しているかのような感触。

私は唇から啄むようにして、胸元に辿り着く。目を瞑り、鼻と唇を頼りに乳首を探し当て、ちうちうと音を立てて吸い付いた。

お乳はでないけど、その行為は恐ろしいほど安心する。

「あふっ……って何してんの、夕香」

「……………」

私は上目遣いに寝ぼけ眼の優を見ると、舌ペロで周りをざらりと舐めて乳首を甘く噛んだ。

「ひゃあ」

「んふふふふ」

優は自分の顔を押さえて身悶える。表情は赤く、羞恥に震えている。

私は硬くなった乳首をもう一度強く吸うと唇を離して、優を抱き

しめた。

「目、覚めた？」

「……………お、おかげさまで。で今のは何？」

「赤ちゃんがお乳欲しくなるのは当然でしょう」

「そっか、そうだよね」

「でもミルクが出なかったから、別のところからミルク貰おうかしら？」

「も、もう出ないよう……………」

「そういつて昨日は何度もイケたじゃない」

「……………」

荒々しく優はキスをして、舌を絡ませる。びくついた動き。

キスで誤魔化そうとしているのだろう。

でも、そんなのじゃ誤魔化されない。誤魔化すにはそう、もっとこっぴどい風に情熱的に。

溶かすように、ふやかすように、腰が抜けるように。

愛を込めて舌を絡める。

くちゅくちゅと、くにゅくにゅと。

ちゅぽんと可愛いらしい音がして、口が離れる。

優は少し放心気味で、口端に唾液の泡を乗せてベットに倒れ込んだ。表情は先程よりも赤く染まっている。

「自分からキスしてくれるのは嬉しいけど、するならもっと上手になってちょうだい」

「夕香、口の中どうなってるのさ……………」

「優を悦ばすようにできてるのよ」

私はそう微笑んで、先に部屋を出た。

平日だというのに家にずっといるというのは奇妙な感覚だ。お昼ごろの独特な空気は時間が止まっているかのような静けさに包まれている。

朝食と昼食を一緒に終わらせた私たちはぼうつとソファで教育テ

レビのチープな動物番組を眺めていた。

私の頭は優の膝の上で、優は私の髪の毛を手ぐしで整えてくれていた。私の髪の毛は途中絡まることなくすつと優の細指を通した。

「シカ」

「ほんとだ。可愛いね」

「シカより私の方が可愛いわよ」

「……………うん。そうだけど、でも、可愛いよね」

「臭そう」

「……………まあ、そうだけどさ。でも可愛いと思わない？」

「美味しそうだとは思うわね」

「夕香のバカー！」

ぺちぺちと頬を叩かれる。何故か嬉しい。

「私はカバじゃないわよ。どちらかという和马鹿よ」

「……………あれ、思わぬ方向で気持ち伝わった？」

「兄さんみたいなチビスケで頭が悪くて、お人好しのことが好きで、溺れてるんだもの。十分馬鹿よ」

「うっ……………」

しれっとそういう。優は何にもいえなくなり、髪をとかすことを再開した。

顔はきつと赤いのだろうと私は微笑んだ。

優は学校に連絡を入れると、先日私が半殺しにした先輩の住所を聞き、メモを取った。

いつもとは違う余所行きの声に優の違う一面を見たような気がした。

「それ、どうするの？」

イスに座ってなにやら書いている優の顔をのぞき込む。

「ほら、俺たちってどっちも顔出せないでしょ？ でもちゃんと謝罪はしないといけない」

「なるほど、お礼参りにいくってことね」

「なんで物騒な方向にいった？」

「冗談よ」

「……まあ、だからお花とフルーツにメッセージを添えて送ったことと思つてさ。ようは買収、賄賂みたいな感じ」

「勿体無いわよ、お金の無駄」

「まあ、これで夕香が学校行けるようになるなら安いもんだよ」

「馬鹿」

兄は料金の計算等を始め、暫くして出て行った。一緒に行くかという甘美な誘いがあつたが、私はそれをあえて断つた。

だから今私は家に一人。誰も家にはいない。

孤独、孤独だ。

寂しい。

でもだからこそ、できることがある。

兄には見せられないことができる。

短いコール音の後、受話器から間延びした声が聞こえた。

「……あなたから電話を掛けてくるなんて珍しいですね」

「そういえばそうね」

「ご用件は？」

「今から会いましょう。話したいことがあるの」

「わたしは話したいこと、特にはないです。夕香さんから知りたいことは、もう大体分かりましたから」

「優のことで話がしたいの」

「それと？」

「それと……私のことも」

「分かりました。行きましょう」

「場所はそつちに任せるわ」

「では今から図書館で」

「ええ、じゃあ図書館で」

優月との通話が終わった。

図書館。大きな建物。行き交う人々。

平日だから心なしか親子連れが多い気がする。その次に老人。

私が子供の頃にリニョールを終えたばかりの近代的なデザイン。

私は重い足を前に進めて、自動ドアを潜る。玄関ロビーは石畳で、灰色のソファがあった。壁際にはコンサートなんかのチラシ。

センサーを通り、受け付けを過ぎる。図書館に顔を出すなんて久しぶりで、勝手が分からない。

でも迷う必要はない。彼女は暗い場所にいけば必ず会えるから。

「でも、ちょっと広すぎるわよこれ……」

日本文学のコーナーに彼女はいた。近くで老人がソファに背をもたれて寝ている。

擦りガラスの薄い光に照らされた彼女は似合わないサングラスをして、本を読んでいた。

伸びっぱなしの白い髪の毛。ウェーブの掛かった長い癖毛。

髪と髪の毛の開いだから文字を追う彼女の横に立つ。

「隣り、空いてるかしら？」

「空いてない、と答えたらどーするんですか？」

「それでも座るわ」

「なるほど」

丁度読み終わったのだらう彼女は本を閉じて、顔を初めてこちらに向けた。そしてゆっくりとした手つきでサングラスを外した。

彼女の赤い瞳は光の量を上手く調節できない為、明るい場所ではサングラスを掛けていないと眩しくて周りが見えない。

同時にそれは周りからアルビノであるということを隠す意味合いもあった。優月は瞳を見なければその容姿のせいもあってか、外国人にしか見えなかった。

「夕香さんがスカートなんて珍しいですね。とても似合っています」  
クリーム色のロングスカートと黒のタートルネックを交互に見て  
彼女はいう。

「ファッションなんて彼女には分からない。だからこれは適当なお  
世辞だ。」

「だけど彼女がお世辞をいうなんて、とても珍しい。表向きでは平  
常を装いながらも私は内心驚いていた。」

「そういう優月はいつも同じ格好ね。黒い制服に黒いタイツ。それ  
じゃ逆に目立つわよ」

「別に周りがどうこう言おうが私には関係ありません。それで要件  
は？」

「そうだ。呑気に世間話している場合じゃない。  
私はその為に来ているんだ。」

「どちらから話そうかと思ひ、私はまず現状について言うことにし  
た。」

「優月、あなたは私が今どういう状況に置かれているか知ってる？」  
「父親は行方不明、母親は死亡。小さな家で質素に兄と暮らしてい  
る……ということですか？」

「違う。学校での私の状況」

「知りません。わたし、学校はどうでもいいので」  
「……………私、ある先輩を半殺しにしたわ」

「あなたから手を出すなんてよっぽどですね。兄を侮辱でもされま  
したか？」

「動かない表情。眠た気な表情。見透かすような表情。」  
「まあ、そんなところ。そいつらは三人組で誰に命令されたのかっ  
て聞いたしたら優月の名前を出したわよ」

「本当は分かっている。」

「優月はそんな下らないことをしない。させない。」  
「優月はやるならもっと徹底的にやる。」

「あの先輩たちの発言が嘘だと分かっている私に優月という。責任

を被せる為、この後のやりとりをやりやすくする為。

「わたし、知りません」

「……そう。で、まあ私は停学中なんだけど、このままじゃ十中八九退学」

「だから、コネクションのあるわたしにそれをどうにかしてほしい、ということですか？」

「そうよ」

「わたしがあなたの停学を解いて、あなたの退学を阻止してなんのメリットがあるですか？ 別にわたしはあなたが退学しようが停学になろうがどうでもいいです。わたしは何も変わらない」

「あなたの知り合いがあなたの名前使ったんでしよう。あなたにも責任はあるわよ」

「ありません。その理屈でいくと強盗があなたの名前を使い、犯罪を行ったらあなたも責任を取らなくてはいけません。姑息に罪悪感を植えつけようとするのはやめて下さい」

「……で、でも優月。あなたの名前を出したってことは少なからずあなたの関係者よね？ それって何かおかしくない？」

「彼女たちはわたしに喧嘩を売ってきたので、返り討ちにしてやっただです。ただ、それだけの間柄ですよ。ただそれだけの……」

優月の表情は変わらない。瞬きをした程度の変化しかない。

沈黙が場を包む。

私は話題を変えることにした。

「……あなた、私の優と会ってるでしょう？」

「あなたのじゃない、優さんとなら会っていますよ」

「なに、してるの」

「何してると思いますか？」

挑発。

分り易い挑発。

「……優に手を出したら私、承知しないわよ」

「そうやって優さんを困い込んで、苦しめてあなたは楽しいですか」

？ 優さんは自由を望んでいるとわたしは思います。それはあなたも分かっていますよね」

「そんなの……わかんない」

嘘、嘘だ。

本当は分かっている。でも、分かっているでも私は優が必要なんだ。

優月は私の顔をじっと眺めながら口を動かす。

「あなたに彼は相応しくない」

「……な、何を言っているのよ。じゃあ！ じゃあ自分には相応しいって言うの？」

「ここ図書館です。静かにして下さい。……… 優さんはわたしにも眩しすぎます。世間の悪意、過去の絶望が彼をあそこまで純にさせているのでしょーね」

兄さんはもつと前から純で優しく、かつこいいわよ。

そう叫びたいけど、私はぐつとそれを飲み込んで我慢した。

苛立ちに冷汗が額を走る。

「優月、私の優にちよっかいを出した代償として私の停学を撤回してちょうだい」

「ノーです。わたしにメリットがありません。それにわたしがちよっかいを出しているわけじゃありません。優さんが自分からわたしに会いに来るんです。わかりますか、この意味」

「……なっ、あっ」

わたしには。

私には。

私には、兄さんから求めてくれるようなことなんて何一つなかった。

体も、気持ちも。

なのに、それなのに……。

胸が痛い。呼吸が上手く整わない。

震えが、寒い、怖い。

捨てられるのが怖い。優がいなくなるのが、怖い。遠くにいつて

しまうのが。

優が私から離れて行くようなそんな感覚が私を包み込む。溶けて消えてしまうような感覚が包む。

優から私が消え去られてしまうような、そんな。

どうしようどうしようどうしよう。

どうやって。

この女を殺そう。

「その手、何ですか。わたしを殺すんですか？」

「黙れ」

興味深そうに微笑む優月。

憎つたらしい笑み。

嘲笑。

「母親を殺した時のように？ 今と同じ顔で薰さんを殺したんですね。臓物を床にぶちまけて、喉を掻き切った。あなたは優さんにならずと前から性的な嫌がらせをしていた。優さんは我慢していたけど、ついに耐えきれなくなって悲鳴を上げた。そこに母親が入ってきた。あなたは前々から母が憎くて、優さんが大好きだった母が気に喰わなくて、丁度いいと思って、優さんを脅すために使っていた包丁で薰さんを……」

「黙れ……！」

細首に手を掛ける。しかし赤い瞳はどこまでも淀まない。

真っ直ぐ私のどす黒い瞳を見続ける。

やめる。

私を見るな。

私を笑うな。

私を私を私を私をわたしをあたしを。

そんなめしてみるな。

哀れむような目で見るな。同情した目で見るな。見下した目で見るな。

「わたしを殺しても何も変わりません。あなたが母親を殺して何も

変わらなかった時と同じように。それは優さんを傷つけるだけです。ここでわたしが死んで一番傷つくことになるのは、後悔するのは、悲しむのは、あなたじゃない。優さんです。あなたに絶望して、また彼は自分の殻に籠ることになる。それでもいいですか？」

「構うものか……」

「骨の髄まで寄生虫ですね。わたしはどーでもいいですが、次は優さん自殺しますよ」

「……………兄は私を置いて死なない。どこにもいかない」

「だと、いいですね。大切な人を守れなかったから、夕香さんのことがあったから、優さんは今こうしてあなたに付きっ切りなわけです。わたしを殺すということは付きっ切りだったこの意味がなかったということになります。優さんの存在は意味がなかったということですよ。彼は自分はいない方がいいと考えて自殺するでしょう。彼のことです、きっとそういう可能性も考慮して遺書みたいなものを残しているのでしょうね」

「……………」

意志に反して。

手が。

緩んだ。

首筋から離れ、だらしなくその手は膝に帰る。

優のベットの下のカバン。その中に入っている手紙。

それが脳裏に浮かんだ。

畜生。

畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生！

こんな白子の出来損ないに、馬鹿にされて、侮辱されて、黙っているなんて。

人間の癖に人間の癖に人間の癖に。

歯を食いしばり、掠れるような声で私は言葉を紡いだ。

「ゆ、づき……このままだと、兄さん、また、仕事にでないといけなくなる。また負担が掛かって、無意味に時間が消費されてしまう。」

だから……助けてちょうだい」

「いいですよ」

彼女は静かに立ち上がり、サングラスを掛けた。

そしてじつと自分の靴の先を眺めている私に言った。

「わたしも優さんに会える時間が減るのはイヤですから  
ちくしょう。」



決して覆すことのできない、それが起こってしまったその一時を。  
その後の何とも言えない後悔の一時を。

不幸の前にある最高の一時を。

そんな残酷な問いを彼女は可笑しそうに笑いながら聞く。

男は口を開けて、何かを言おうとしてやめた。

「あるんでしょう？　ねえ、教えてちょうだい。あなたはその笑みの向こう側にどんな憎悪を孕んでいたの？　どんな怪物を育てていたの？　何人殺した？　何人死ぬことになった？　何人の命をなかつた事にしてきた？　悲しむ人がいる中、あなたはどれだけの人を無視して笑ってきたの？」

「ぼ、僕をそんな……」

「　　そんな目で見ると、僕を僕を馬鹿にしたような目で見ると、見下した目で見ると、哀れむような目で、同情した目で見ると、でしよう？　母さんと同じ目で見ないでくれと思っているんでしょう。同じ顔で同じ目で見ると、夕香、やめて……くれ」

這い上がる過去。

足元から何かが手を掴み、底なしの沼に沈めようとしてくる。

「不幸から目を背けて、死んだ人も過去のことにして、自分に優しい場所に逃げた。母さんと兄さんと私を捨てて、あの人のところに逃げた。本当は母さんが死んで、ほっとしてらるんでしょう？　あのことを知っているのは、母さんとあなたとあの人とあとは数えるくらい。それも、みんながみんな忘れて死んで逝く。それは今も苦しんでいる人、家族がいた人、秘密を知っている人、全部含めて、まとめて。それが死んでお父さんはほっとしているんでしょう？　誰も秘密を知る者はいなくなるって。誰も僕を責める人はいなくなるって。もう夢に苦しまされることはないんだって！　くふふふふ」

男は額を汗で濡らして、胸を押さえる。

ふつふつと息を切らして、言葉に耐える。

投げかけられる言葉の刃から身を丸め、少しでも耳を背けようと。

自分の暗い感情を抑えこもうと。

「あなたを見てると、ああこの人とは血繋がっているんだなあって思うわ。今、耐え難い殺意と絶望と自己嫌悪と恐怖が全身を駆け巡っているんでしょう。分かるわ、その気持ち。よおく、分かる。美しい過去は辛い現在を粉碎し、辛い現在は美しい過去を陵辱する。その怖気立つ感情よく分かるわよ。慟哭とも怒りともつかないその感情」

夕香は美しく微笑み、笑い、詩を唄うように死を歌った。

「俺は……私は今でも、思い出す。今でも忠実に再現できる。臭いも肌ざわりも空気も。あの時の冷たい汗、熱く乾ききった喉のべたつき、足のすくむような恐怖も。夢に見る、妄想の裏側で視る。いつでもどんな時でも」

最悪の場面を。

最悪の思い出を。

最高で最悪の記憶を。

白い少女は相変わらず眠そつな表情でゆっくりと歩を刻む。指は楽しそうにカタカタと見えないキーを叩く。

彼女はこれで彼について文句をいうことはできなくなっただろう。これは譲歩案ではなく、一方的な借りであり、お願いなのだから。彼の時間を減らさず、いい条件で借りを作れた。

わたしの行動は果たして悪か善か……彼ならこれをどう判断するのだろう。

少女はエスカレーターに乗り込んで『閉』のボタンを押そうとし、その手を止めた。扉の間に差し込まれる手。

「ああ、乗る乗る、乗ります！ ……いやあ、丁度そつちに行こうと思つてさ」

「……優さん」

「うん？ どうしたの不思議そうな顔して」

「今、そこで誰かと出会つたりすれ違つたりしませんでしたか？」

「いや、別に」

「……優さんは今、非常に危ない状況です。わたしの命も危ないです」

いくら冷静な彼女でも目の前で想い人が別の女と、それも一悶着あつた相手と会つてるのが分かつたら激昂するだろう。

来てくれたことは素直に嬉しいが、なんてタイミングの悪い。

優はにこにここと微笑みながら、首を傾げた。

「んん、よく意味がわからないけど……」

彼女はガラス越しに周囲を確認すると即座にボタンを押した。緩やかに扉は閉まり、静かにエレベーターは上へと昇つた。

自分と優月を包む空気が少しおかしいことに彼は気がつき、タイミングが悪かつたのだろうかと思ひ悩んだ。

そつと表情を窺うが、その長い髪のに隠された顔はいつも通り、

眠た気で特に変化は見られない。

「あの、毛糸、届いたかなって思って……それあの」

「届いてますよ」

「は、早いね」

「ええ」

返答は短く、素っ気ないものだった。優は意気消沈し、俯いた。

優月は内心、自分がまず完璧にマフラーの編み方をマスターし、自分の手で手とり足取り教えたかった為、早すぎる彼の訪問を想定していなかった自分に苛立っていた。

昨日のうちに覚えておけばよかった、と彼女。

後で切っ掛けを見つけて謝ろう、と彼。

「……ふう」

「……はあ」

扉は開き、暗い玄関が現れる。彼女は慣れた手つきで奥に進み、優はそれに追従する。

廊下には真新しいダンボールが一つ。優月が持とうとするのを譲り受け、運ぶ。

箱の大きさの割りに、それは軽かった。

本の森に入った辺りで不意に彼女はいった。

「優さん、質問です。あなたは善と悪をどう区別しますか？」

「……質問の意味がよく分からないんだけど」

「例えば多くを助ける為に一人を殺したとします。これは善の行動と言えるでしょう。全体という種の保存の為に行われる行為は集合的無意識によって正当化されるからです。では愛する一人の為に多くを犠牲にするのは正しいことなのでしょう？ その愛する一人と全てを犠牲にした人間だけが幸せになる行為は正しいのでしょうか。つまり無意識化に存在する共通理念であるところの全体主義に反する考えは正しいといえるのか、どうかという問題提起です。優さんはどう思いますか」

「……………なんていうか、凄く難しい話だけど、うーんとえーつと、俺はねえ。正しいだの正しくないだの無理に決める必要はないんじゃないかなって思う。基本的なことに善悪やらなんやらを求めるのは正しいと思うよ。でも、極限の状態……………例えば仲間の死体を食べなきゃ飢え死にってしまうなんて状況とかでさ、善悪や正しいか正しくないか、なんて何の指針になるんだろうって思うんだ。結局は善悪云々がどうこうじゃなくて、人間はしたいことをするようには自己満足にしか過ぎない。悪いことをしたっていう罪悪感に苛まれようが、あれはいいことだったんだって開き直ろうが、結果は何も変わらないんだ。だから俺は全体の為だとかそういうことを考えるんじゃなくて、本人がしたいことをしたいようにすればいいと思う」

「したいことをしたいように……………」

「うん。だつてさ、自分のしたことをして後悔するの、しなくて悩んで悩んで、あの時こうしておけばよかったって後悔するのも結局は同じことじゃないかな？ どっちがどっちにいつても、戻ることとやり直すことできないんだ。それと同じように後悔しないということもできない。だったら直感に任せてほしいようにすればいいと俺は思う」

「その直感が理性で考えて、悪だとしてもですか？」

「んーとさ、少しずれた回答かもしれないけどね、何が悪で何が善なんて俺たちには結局のところ、分からないんだ。善らしい、悪らしいという法律なんていう指針があるだけだね。その指針があったとしてもさ、それが正しいなんて誰が決めるんだろう？ どうしてそれが正しいといえるんだろう？ きつとそれが分かるのは神様だけなんだ。俺たちに神様は見えないし、教えを乞うこともできないっていうなら、自分が感じる正しい方向にいくしかないんじゃないかなって思うんだ。俺はそう思って生きてるけど」

「……………あなたは」

優月は生活区域の扉の前で固まった。ダンボールが当たりそうになるのを優は何とか防ぐ。

どうしたのだろうと彼は彼女の背中を盗み見た。

肩が小刻みに震えている。

笑いを堪えているのか、それとも泣いているのか分からない。

ただ張り詰めた緊張が辺りを包み込んだ。

「あなたは……！」

振り向いた彼女は困惑した表情で優を見つめた。

優は咄嗟に誤魔化すように笑った。

「な、なんか、かつこつけて悪いこといっちゃったかな。ごめん。

俺さ、馬鹿だから考えたことすぐ言っちゃうんだ。それでよく夕香に怒られててさ、あはは」

「違うんです。わたし、凄く………そうです、感動しました。感動です。お父さんが作ってくれた卵かけご飯に匹敵するほどの感動です」

「え、いや。俺、大したこといってないけど」

「いえ、とても感慨深い言葉です。ドイツの哲学者ニーチエは神の教えという全体主義思想から抜け出せない均一化された社会の中で、神の教えに縛られず、自ら考え自分の価値観によって行動を取捨選択できる人間を“超人”と呼びました。あなたは神から解放放たれている。まさに超人です」

「ちよ、超人だなんて大げさだよ」

「やはりあなたで間違いなかった。わたしは、そう思います」

優月は赤い瞳の奥をキラキラと輝かしていった。

もしかして自分は凄いことをいってしまったのだろうかと優は少し恥ずかしくなって目を逸らす。

「べ、別に俺は思想家でも哲学者でもないよ。ただ俺はそう思って生きてるっただけだよ」

「世の中に個人こいつに対するように自分を尊重し、自分に対するように個人を尊重できる人間がどれほどいるのか。全体主義の世の中で、

周りに流されず、自分の思考をここまで明確に言語化できる人間が  
どれほどいるのか、あなたは分かっているか

「……ええっと、あの、うーん、よくわかんないけどさ。ひとつだ  
けいってもいいかな」

「はい、どーぞ」

「扉開けて、前進んで欲しい」

優月は首を傾げ、そして次になるほどと頷いた。

優月は質問を重ねる。

それにただ優は答えた。

「考える事をやめた人は人ではないとわたしは思います。人は自分で考えて、行動する生き物だからです。それができない人間はただの木偶人形。そう思いませんか？」

「はは……木偶人形までは思わないよ。そういう人ってさ、きつと安全なところに浸っていないと辛いんだよ。守られた場所、守られた面白さ、守られた状況に安心するんだと思う。子どもが母親の保護下にあるような状況とちょっと似てるよね。なんていうか守られてる安心って感じがさ」

「籠から出ることを望む鳥もいるなら、籠を愛する鳥もいるということですね」

「……んん、そういうことになるのかな？ あ、ダンボールこの机の上でいい？」

「はい。では明らかに異質であるが故、コミュニティに入り込むことのできない個体について優さんはどう思いますか？」

「ようは仲間外れと外れにされた人間ってことかな。どんな社会でも、どんな世界でも他人を排斥する現象ってのは常にあることだよ。逆にみんな仲良くしましよっていう理論をよく聞くけど俺はおかしいと思う。……絶対に分かりあえないことって結構あるよ。まあ、とりあえず排斥された人間は自分が安心できるコミュニティにいればいいんじゃないかな？ 無理していたくもないグループに入ったって疲れるだけだよ」

「そのグループが社会では主流で、それに属していないと異端と見られるとしてもですか？」

「なんかそれ、魔女狩りの歴史みたいだね。キリスト教徒以外はみんなおかしくて、異常ってみたいに。客観的に見て、間違ってるこ

とは間違ってるんだよ。どんなに正当化してもさ。声が大きいから相手が正しく見えるってこともあるけど、実際はその正しさって別だよな」

「……………わたしも優さんのような客観性が欲しいです」

優月は台所でやかんに水を入れて、火に掛けた。

優はソファに座りながらダンボールを開けて、中のものをテープルに広げている。

「十分、客観的だと思うけどな。というか俺よりも客観的だと思うよ」

「わたしは自覚しているほどに主観的です。些か客観性に掛けます。母とは対照的です」

優は客観性だけの人間もどうなのだろうと思った。

そもそも客観的と主観的の違いとはなんだろう。

優月は何かを考えながら、紅茶を入れる。片方に砂糖を多めに入れて、砂糖とは違う種類の粉末をブランデーで溶かしながら入れた。レモンを落として、更に味を誤魔化する。

自分が正しいと思うことをする。

それが理性で悪だとしても。

優は運ばれた紅茶を受け取った。

「ああ、ありがとう。……………こっちが君のじゃないよね？」

「はい、今度は間違えていません。お代わりもあるので欲しかったら言っして下さい」

優は微笑みながら紅茶をすすり、小さく甘いと呟いた。

珍しく優月も表情を作り、彼の笑みに微笑み返した。

「それで、まあ毛糸とこの二本の棒があるわけだけど、さてどうしよう」

「まず、作り方を見ましよう。作り方を頭に入れておけば、間違っただ時に対処し易いです」

彼女はそういうと、どこからか小さなノートブックを取り出し、電源を入れる。

お気に入り登録された編み物のサイトを開き、優に読ませた。次に動画を見せてその動きを記憶させる。

動画が終わる頃には優のカップは空で、彼はどこかたびれたように欠伸をした。

「ふわあっ……棒を使わない編み方なんてあるんだね」

「今回は普通に編む方向でいいですか？」

「うん、初心者だしそれが一番いいんじゃないかな。ボーダー柄なのなんだのはとりあえずパスってことで」

「そーですか、了解です。……あ、少し失礼します」

「ん、ああ、うん」

席を立つ彼女に優は気のない返事をして、微笑んだ。そしてノートブックを見ながら広げた毛糸と棒を見比べる。

優月は自分の寝室に入り、戸を締めるとその場で屈み、膝を抱えた。

震え。恐怖から来る震え。

震え。後悔から来る震え。

とんでもないことをしてしまったという震え。

もう、後戻りできないという震え。

「わたしは、何てことを……」

眠た下な瞳は今固く閉じられ、耳には手。

罪が結果的に救いになるのなら、それをわたしは行う。

自分が正しいと考える道を進む為に。

五分ほどして彼女は部屋から出て、先程の場所に戻った。優はすうすうとソファに寝そべり寝息を立てていた。小さく開いた唇から生暖かい息が漏れている。

彼女は薬の量から二時間弱はこのままだろうと当たりをつけた。

初めて罪を犯してしまったという後悔が体に纏わりつく。それは震えとなって彼女の体を揺らした。

戦慄わななく手で寝ている彼の頬を撫でた。さらりとした触り心地。

少しくすぐったそうに優は頬を掻いた。

その動きに優月の心臓が縮み上がる。

息を落ち着けて次は胸に耳を当てた。トクトクと小鳥の鼓動のよ  
うな音が聞こえた。

「次……次は」

汗ばむ手で優の服を脱がして行く。上着を軽く脱がして、次にズ  
ボンに手を掛けた。

そこで気分が悪くなり、手が止まる。

声が聞こえた。

心の声。

何を恐れている。

ここで彼をそうすることが正しい道だ。

「別に、こんなことじゃなくても……」

でもそれこそがお前が正しいと信じた道なのだろう。

なら、そうすべきだ。

「やっぱり、やっぱりこれは良くないことです！ わたしには……

無理だ！ こんなことをして何になる！」

夕香は避妊を完璧にしている。だから妊娠しない。

もしも自分が先に妊娠した場合、彼はどうするのか。

どんな理由があるかと、優しい彼は彼なりに責任を取るだろう。

そして、それが彼女から離れるきっかけになる。

そう思った。そう思い違いをした。

そう思って彼を犯そうとした。

自分の今までの行為に彼女はぞっとして、気分が悪くなった。頭  
が痛くなった。吐き気がした。

声が聞こえる。

薄暗く囁く声が。

いいじゃないか、それで結果的に幸福になれるなら。

「それは！ それは……わたしが？ 優さんが？」

それにどうせ。

彼は犯され慣れている。

その心の声に彼女は後ろに飛び跳ねるようにして尻餅をついた。

「無理です！ わたしには彼を傷つけることも、傷つけて知らぬふりをするのも無理。優さんの笑顔を奪うことも、自己欺瞞に浸ることも、孤独に耐えることもわたしには……」

虚ろな目で彼女は言葉にもならない声で小さく叫ぶと、その場でうずくまり、嗚咽を漏らした。

口を両手で覆い、自分に恐怖した。

自分の考えに、自分の業の深さに恐怖した。

赤い瞳から出る涙はどこまで透き通っていた。

赤い唇から出る泣き声はどこまで濁っていた。

最初にこのリビングの静寂を破ったのは意外にも自分からだった。

「お帰りなさい」

「ただいま」

寒い寒いと兄は小さく呟きながらストーブに手を当てて、小さく震えた。

私も微笑んで後ろから兄のほっぺに手を当て、温もりを与える

「遅かったわね」

「うん、ちよっと別のところも回っててさ」

「……別のところ？」

「うん、ちよっとね」

「ねえ、兄さん。」

私、知ってるのよ。兄さんがどこで誰と一緒にいるのか。

こんなにも女臭くしてれば、私じゃなくても分かる。

ねえ、何してるの？ あの女と何してたの？

優は、優は私に嘘はつかない。

でも本当のことを言ってくれろというわけでもない。

「ずるい、ずるいよ。お兄ちゃん。」

「あの……、ちよっとって？」

勇気を出して言ってみる。後ろから頬をつねりながら、聞く。

優は少し黙って、振り向くとにこにここと笑っていた。

「ひみつー」

「ふっん、そう」

そんな笑顔されちゃ、何も言えない。

悔しいけど、何も言えない。

全て聞きたいし、何をしているのかとても気になるし、内心はらわた煮えくり返っているけど、何も言えない。

兄さん、お兄ちゃん、優。

何も言わないから、酷いことなにもしないから、どうか私から離れないで。

「うわっ。夕香、苦しいよ」

「おんぶよ」

「えー……もう、しょうがないなあ」

だからお願い、私だけを好きでいて。私だけを見て。

アナタのことを思うとこんなにも胸が張り裂けそうなの。

だから、どうか私を独りにしないで下さい。

だから、どうか私を捨てないで下さい。

だから、どうか……私と一生一緒にいて下さい。

だから、お願い。

夕飯は私が作った。作ったと言っても簡単な料理で、それは冷凍うどんだった。

作り方は簡単。電子レンジ、または熱湯でうどんを戻して別に買った麺つゆを足すだけ。

それだけなのに優は酷く心配そうな顔で台所周りをうろろして、何かする度にひやひやしていたようだった。

「頂きます。……どうしたの優、ちゃんと手を合わせて、ほら」

「……ねえ、夕香さん。明らかに俺のうどんだけ、赤い粉末のせいでつゆが真っ赤なのは気のせい？」

「さあ？ 私のは普通だけど？」

本当のことを言ってくれない優が悪い。

「ほら、麺をすくうと白い麺に小さな赤い欠片が大量に釣れるんだけど……」

「あら、カラフルでいいじゃない」

「わあい……って嬉しくないよ！」

「兄さん、私の作った料理……食べてくれないの？」

「……うっ」

寂しそうに振る舞い、下を向いて無理して笑ったような表情を作

る。

兄はあからさまにうるたえて、うどんと私を交互に見た。

「そうよね、料理がど下手な私の作ったレトルトのうどんなんて、料理上手な兄さんには生ごみにしか見えないものね。そんなもの口にできるわけないのよね。……ごめんなさい、兄さん。食べなくてもいいわよ。きつと不味いもの。赤い粉末がどうとかも、本当は食べたくないからでしょう?」

「い、いただきます」

冷汗をかいた兄はズルズルと音を立てて麺をすすった。私は本当に食べるのかと兄さんの兄っぷりに惚れ惚れした。

兄は額に脂汗を浮かばせ、小さくむせながらも完食。

唇は赤く、ぼたりと膝下に汗が落ちた。

コップに注がれた冷水を飲み干し、私の分の水も持っていった。

「ほ、ほら、美味しくて……全部食べちゃった。もつと食べたいくらいだよ! ふひい……」

「あら、嬉しい。兄さんの為にまだまだ作ってあるのよ。今、お代わり持つてくるわね」

「いや、あの」

「……えっ、兄さん。今、美味しいって」

瞳を潤ませる私。

別の意味で瞳を潤ませる兄。

そして悟ったような顔で微笑んだ

「どんどん持つてきたまえ……っ!」

「分かったわ」

兄さんのどんぶりを手に掴み、うどんと麺つゆを入れる。

そして愛のスパイス。

「ねえ、夕香さんっ! その片手の“七味”って書いてあるの何!」  
「?」

「あら、これ? これは………愛のスパイスよ」

「本物のスパイスじゃん、それ!」

「私のハートの欠片よ。兄さん、私の愛はいらないうの？  
ああ、そうなのね。酷い兄さん……」

私の愛の欠片だから、辛いだよ。  
「もう、それでいいから……うん」

兄は複雑そうな笑みで笑った。

三杯で兄はダウンした。私はひいひい言って苦しんでいる兄に私の食べているアイスクリームを分けてあげていた。

兄は少しくぐつたりした様子で私の隣りに座って、週末に流される映画をぼうつと見ている。

「優、ほらアーンして」

「あーん………ってそこはほっぺ！」

「あら、ごめんなさい。ここだったかしら」

「そこはおでこだから！」

「あら、いつも兄さんおでこからアイス食べてなかった？」

「普通に考えてそれ怖くない？」

「……ほら、アーン」

「あーん………ってそこは鼻！ 夕香、口はここだよ、ここ」

人差し指で兄さんは赤く腫れた唇を指し示す。私はそれになるほどと頷いて、まず自分の口にアイスを入れた。そして兄にキスしてアイスを流し込む。

互いの唾液と舌でかき混ぜながらアイスを溶かし、優にそれを飲ませる。

唇を離し、舌で拭いながら私は笑った。

「今度はあつてたかしら？」

「あつてるけど………あつてるけども！」

兄は少し顔を赤らめながら、映画どこまで見てたか分からなくなっちゃったと小さくぼやいた。

私はごめんなさいといって兄の口にアイスを入れた。

「別に怒ってるわけじゃないけど………んむ」

「んふふ」

そしてキスして、今度は私がアイスすすすった。

兄とは違い、私は昔から辛抱強い方ではなかった。よくいえば自分に真つ直ぐだった。

悪くいえば貪欲。

今私は“それ”を強く感じていた。

「ふふふふふふふ」

私は背負った兄をベットに寝かすと、笑い声を噛み殺した。

そして自分を呪った。

「何が、もう酷いことはしないよ」

目の前では薬で眠った兄。何をしても数時間は目を覚ますことのない兄。

純真無垢な寝顔。

私はそれを眺めながら、気が狂ったように笑う。

そういうことはもうこれ以上しないつもりだった。でも、日課のように……あるいは条件反射のごとく兄への劣情は今日も無様に沸き上がり、私に下衆な行動をさせた。

「何が心の繋がりさえあれば、よ。何が好きでいて、よ」

ただ私は兄に欲情していただけじゃないか。

性欲以下の愛。

これを笑わずして何を笑うというのだろう。

屑らしいといえは屑らしいか。

私は蛇のように兄に纏わり付くと、スンスンと臭いを嗅いだ。立ち述べる私以外の女の臭い。

ザクザクの頭蓋骨の中をズタズタにされていくような痛み、嫉妬や絶望なんかの全てのマイナスの感情が混ざり合ってしまったようなそんな感覚。

心とは対照的に表面は笑みを作り、それを認めようとしなさい。辛いことを認めようとしなさい。

何故、優の胸元からアイツの臭いがする？  
知らない知らない知らない。

何故、優のズボンからアイツの臭がする？  
知らない知らない知らない。

「本当に酷い人。酷い兄さん……」

私は感情を供物くもつに捧げ、熱っぽく優の耳を赤くなるまでしゃぶりつくす。

ちろちろと舐め回すようなその動きはずると涎をすするような大胆なものになり、寝ている兄の呼吸を大きく乱した。ふうふうと上気した兄の耳をふやかしながら、人差し指で乳首を弾くと優は小さく声を上げて身を悶えさせた。

直接、ソレには触れず私は自分の知っている兄の性感帯をただ貪り続ける。

そうすることで、自分の方が兄をよく知っているのだと、自分がそが兄を知っているのだと安心する為に。再認識する為に。

首筋、手足の指、へソ、乳首、肛門、睾丸と責め立てる。

優のソレは赤々と腫れ上がり、透明の涎を零してビクビクと震えていた。舌でひとなでしただけで、達してしまいそうな艶、臭い。

私は大きく股を開き、自分の秘所へとそれを宛てがい、一気に腰を下ろした。そして一心不乱に腰を動かす。叩きつけるような、機械的な動きで締め上げる。

達していようがしてなかるうがそれは関係なく、熱い液体が肉と肉の間から溢れ出るのも構わず私は腰を動かす。

獣のように口を開け、犬のように息を切る。

「うあゝっあゝっあゝっあゝあゝ！」  
声を上げる私。

口を開き、声なき声を上げる優。

私は既に達した体を止めもせず、貪欲に兄の体を貪った。

肉壺からは私の液とも兄の液ともつかない白濁としたものが、ぶちゅぶちゅと音を立てて零れた。

「ゆうっ、すき！ ゆう、すき！ ゆうっ！」

あまりの快感に膝が笑い、優に倒れ込む。

キス。濃厚でねばついたキス。

赤ん坊が母親のお乳を求めるような、そんな必死で甘えたキス。

しかしどこか官能的なそれ。

「んふう……んく、んっく」

優は夢の世界にいて、私に犯されていることなどこれっぽっちも知らないのだと思うと興奮した。人形のように人を犯しているのだと思うと股の奥から溢れ出るものが止められなかった。

暫く兄の口腔を犯し、どちらがどちらの口なのか少しわからなくなった頃、私の中の圧に兄のソレが押し出された。

「あっ……」

名残惜し下に私はそこで唇を離し、ベットの上に寝転がる。

優の汗まみれの表情。熱い息を吐き出し、冷たい酸素を求める私の肺。部屋に充満する湿っぽい性臭。

私は片手で自分の表情を隠すと泣いた。笑いながら、ポロポロと泣いた。

「ううっ……くふふふひひひ」

自分は酷く狂っているのだと再確認できた。もう兄を求めないと決めて、たった一日も我慢できなかった阿呆なのだと。

嫉妬がそうさせたのか、それとも最初からこうだったのかは分からない。

しかし、明らかに決定的なことは私が狂っていて、兄はその被害者であるというだけ。

もしも。

もしも、ここで兄が目覚まし、狂喜乱舞したとしても私はきつとそれを喜ぶのだろう。

兄が狂っていく、私と同じようにと。

歌え歌え、泣けや泣け。狂気に踊れ、苦しみ涙を交えて歌え。

そうなってしまえば、全てが早い。  
全てが狂ってしまえば、全てが早い。  
でもきつと、きつとそうなってしまっても、私が謝れば兄は私を許すのだろう。心に深い傷を負いながらもきつと許すのだろう。  
泣きそうな顔で笑いながら私を許し、心のどこかで私を憎み嫌い、毛嫌うのだろ。

どんなに酷いことをしても彼は私を許してくれる。  
そう思うと、余計に私は許せなくなった。  
それは自分が。

兄はきつと許してくれるのだということにどこか安心しているよ  
うな、そんな甘えが見えた。心の底から嫌われることはないのだと  
いう安心感。相手の優しさに甘える狡賢さが見え隠れする。また平  
気な顔で兄を傷つけて、自分にとって都合の良いこと結果しか考え  
ていないことに腹が立つ。嫌われて当然だというのにそれを受け入  
れようとしない自分に怒りを覚える。

「あははははははははは………許さない。絶対に」  
許さない。

こうまで私を追い詰めた、世界を。  
こうまで私を追い詰めた、自分を。  
こうまで私を追い詰めた、彼女を。

全て消えて、私と兄と二人だけの世界になってしまえばいいのに。  
「ねえ、そうでしょう優。………ねえ、なんとかいいなさいよ」

「ふう、大分できてきた。ほら、見て」

「……本当ですね。優さん、呑み込みが早いです」

彼女は優の対面のイスに座ってプラモデルを掴み、ぼうつとそれを眺めていった。

優は少し沈黙した後聞いた。

「……こんなこと聞くのもどうかと思うんだけどさ。あの、俺邪魔だったりするかな。なんていうか最近、違和感を感じる」

「違和感、ですか」

瞳を少し上げて、彼女は優を見つめる。二回ほど瞬く瞼。

「うん、なんか君が俺のことを避けてるような、恐れてるっていうのかな、なんかそんな感じがするんだ。ちょっと気のせいだとは思えなくてさ。俺がここにいるのが苦痛なら、これからはここに来ないし、文句も言わない。安心してほしい。だから言いたいことをいってくれないかな？」

「……………そういうのではないんです。きっと、いえ多分」

優月は少し考えるように天井を眺めて、机の上で指をカタカタと踊らせた。いつもの楽しそうなタップではなく、ただ無機質で神経質そうな音。

暫くして踊りは止まる。

「うん、原因はやはり、わたしにあるようです。なんとというか、優さんに対する自信がなくなりました。あなたにはこういう付き合い方や接し方が一番なんだ、というものがあつたんですが、何だかそれが正しいのか分からなくなりました。恐らくそれがわたしに対する違和感なのだと思います。気にしないでください。ほうっておけばそのうち勝手に解決します」

「そういうなら、まあ気にしないけどさあ。別に深く考えなくてもいいと思うよ。俺は結構、そのままの優月さん、好きだし」

ロボットのプラモデルの両腕を動かしていたその手は止まり、下を向いていた顎は静かに上に向かう。

そして彼女は静かに首を横に傾けた。くせ毛が揺れる。

「……………何ですか？ あの、もう一度お願いします」

「ん、いつもみたいに唯我独尊っていうか、我侂な感じの素の優月さんでいいと思うんだ。部屋着がいつもパジャマか制服ってのも凄くチャーミングだと思う」

「チャーミングなんて久しぶりに聞きました。あ、いや、そうじゃなくて、あの、私のことが何ですか？ 深く考えなくてもいいの後ろをもう一度」

「あ、ええつと……………もう一度言わなきゃダメ？ なんか今思うと結構恥ずかしいセリフだということに気がついたんだけど」

「りぴーとあふたーみー」

「んんん、あー、なんだその。俺は結構、そのままの優月さん、好きだよ」

「最後のセリフだけ抜粋してもう一度」

「んー、好きだよ？」

「はい、頂きました。元氣充電完了です。優月はあと三年は戦えます。フル回転です。元氣百万倍です」

小さな声でぎゅいーんといいなながら手でロボットを飛ばし、うっすらと微笑む優月。

彼はそれを見ながら、自分は何をしていたのだろうと思い、両手の編み物を見た。

これなら誕生日前には間に合いそうだな。

「夕香、きつと喜ぶぞ」

だらしない笑み。

心の中で夕香はコロコロと笑っていた。

それを思い描き、気合を入れて丁寧に編み込む。

「今、兄馬鹿って顔してましたよ」

「……………あはは」

優月は一言そういつとまたプラモデルに熱中した。

「コーヒー。」  
優はお湯をカップに注ぎ、紅茶を入れた。自分はインスタントの

両方とも砂糖を多めに入れる。優月も優も甘党だった。

暖かな湯気の中に白い粉が、魔法のように溶けて消えていく。

「ミルクは？」

「いります」

「はいはい」

市販のミルクを二つ出し、お盆に乗せて運ぶ。

彼女は一度も振り向かず、新しいプラモデルを机の上に広げながら、説明書をじいっと読んでいた。

「はい、紅茶」

「どーもです」

優は彼女が普段の調子に戻ったことに内心ほっとしていた。

もしも彼女に嫌われたら完璧に自分は一人だ。

流石にそれは寂しい。

説明書と睨み合いを続けながら彼女はいった。

「今日は長くここにいますけど、夕香さんのことはいいんですか？」

「うん。今日、夕香は遠いところの病院にいつてるからね。時間があ  
るんだ」

「優さんは病院に行っていないんですか？ 優さんも十分心に傷がある  
るように思えますけど」

「……俺は、俺はさ、夕香みたく自分の過去に向き合えるほどの勇  
気も度胸もないんだよ。過去に向き合うことって結構体力とかいる  
んだ。俺はそういうの、耐えられないから……」

優は甘ったるいコーヒーを口に含み笑った。優月は何かいいたそ  
うな顔をして、黙った。

彼女は自分の過去に向き合っている訳ではない。

自分の過去を嘘という名前の壁で塗り固めて、それを忘却の彼方

に投げ捨てているだけ。

そうしないと壊れてしまうから。

そうしないと耐えられないから。

弱いから彼女は。

「そー……ですか」

しかし、果たして彼は本当にそんな理由で病院に行っていないのだろうか。

自分が弱いからという理由で本当に。

自分も通うことになったら二倍の費用が掛かるから？

兄も病気では妹の面子が立たないから？

真実を隠し、自分が全て責任を被っているから？

妹の不利になるようなことを少しでもしたくないから？

だから学校を辞めて、表向き妹に干渉することを止めたのか。

どれも思い違いで、本当に彼は弱いだけなのかもしれない。

でも、もしかしたら。

「優さん、あなたは……あなたは本当に優しいですね」

「あはは、なんだよそれ」

「いえ、少し思っただけです。……これは独り言なのです。だから聞き流してもらって構いません。あなたのその優しさは自己犠牲の上に成り立っています。それがどういう意味を持つのか。他人の傷を一挙に受け持つことがどういうことになるのか。もう少し理解してほしいとわたしは思います。あなたは自分は死んでしまった方がいーなんて馬鹿げたことを考えているかもしれませんが、あなたは言葉通りの意味で“唯一無二”なのです。もっと自分を大切にしてください」

「声の大きな独り言だね」

優は優月の言葉をよく聞いた上で笑い、その言葉を返した。決意や生き方を変えるつもりはないという無意識の返答。

彼にとって自分は常に他人の下にあり、それを助けるのは当然のことだった。

異常なまでの卑屈な生き方。

「……優さんの微笑み馬鹿」

「ほ、微笑み馬鹿って」

「独り言なので」

「独り言とか関係なしに酷いよ！」

「わたし、正直者なので」

「俺のことそう思ってたんだ。わー、ショックだなあ……」

「でもわたし、そういう馬鹿な人、嫌いじゃないです」

「俺も平気な顔して毒吐く人、嫌いじゃないよ」

二人は小さく頬を歪めるとカップを手を取った。

お互いに相手の口元を眺めながら、ミルクで濁ったそれを口に運ぶ。

舌の上で砂糖の甘さが広がり、豆の、あるいは葉の香りが鼻を抜けていくのを感じあった。

ただいまと声を掛けるとおかえりと声が掛かる。  
リビングに顔を出す。

夕香は膝を丸めて、ソファに寝転がっていた。

朝と同じストライプ柄のパジャマ。

「電気くらい点けようよ」

夕闇に支配された空間にぱちりと明かりが灯された。

「遅かったわね」

「そういう夕香は早かったね」

「いつもより早く終わった上に、一本早い電車に乗れたのよ」

少しばかり気怠そうに欠伸を噛み殺し、彼女はいう。

優は上着を脱ぐと、夕香の伸ばした手を取った。優を支えに彼女はのっそりと立ち上がる。

「ご飯」

「あれ、渡したお金少なかった？」

「お金が勿体無いと思って使わなかったのよ」

「え、じゃあ朝から何も食べてないの？」

「まあ、そういうことになるわね」

「んん、ご飯はあるからなんか適当に作るね」

「ええ、待ってるわ。優の臭いを嗅いだら、なんだかお腹空いちや  
った」

「……それってどういう意味？」

「バニラエッセンスの匂い、砂糖菓子の匂い、パンの焼ける匂い…」

…ケーキ屋でもいってたんでしょ？」

「夕香は凄いね！」

優は目を丸くして手放しに喜んだ。夕香はそれにつっすらと微笑み、歯を軋ませた。

そこへ行ったことが問題じゃない。

誰と行ったかということが問題なのだと。

しかし、彼女は何も語らずただ上品に微笑む。

「とりあえず炒めしなら直ぐできそうだけど、どうする？」

「じゃあそれで」

優は早々に支度を始め、材料を切り始める。夕香はそれをじっと眺めて思った。

無防備だと。

ここで押し倒すのも容易。

目の前にある果物ナイフで脇腹を刺すのも容易。

それほどまでに兄は無防備だ。

いつだって、どんな時だって。

あの女の前でもきつと。

「んー、何？ 今なんか言った？」

彼は朗らかに微笑みながら刻んだベーコンの一切れを食べた。

夕香は何でもないと首をふり、兄の頬に口づけをした。

「愛してるわ」

「俺も夕香のこと好きだよ」

違う。

それは違う。

愛していると好きであるという言葉は圧倒的に意味が違う。

兄もそれは理解している。

言葉の違いも、自分が実の兄に恋焦がれているということも。

それを知っていて、分かっている兄は愛しているとは言わずに

“好き”と答えたのだ。

なんて、なんて残酷なんだろう。

夕香は表情を苦悶に歪めさせ、兄の後ろ姿をただ眺めた。

食事が終わったあとは、一緒にソファに座り、ダラダラするといふことが日課になりつつあった。

優は人肌に温めた牛乳を哺乳瓶で夕香に与えていた。

彼女のいつもの鋭い表情はそこにはなく、どこまでも弛緩した顔があった。

優はいろいろ考えた結果、夕香が退行……つまり幼児化を望む理由は幼少時にあまり両親に甘えられなかったことが原因なのだろうと思った。唯一、甘えられただけの自分の自分にも一方的に“親離れ”させられ、孤独になった。それが起因しているのだと。

母が甘やかせなかったわけではなかった。ただ夕香はどこか母に遠慮をしていて、上手く甘えることができなかった。

小さな頃から大人しく、何でもできてしまったことも問題だった。それに母親が安心してしまい、年相応の扱いを受けることが余計になくなってしまった。

「んつく、んつく」

「まだ飲む？ もういい？」

「もー、いい」

夕香は口元を優に拭いてもらい、とろけた瞳でおしゃぶりを口で受け取った。

赤ん坊。

そこには不安や焦りといった恐怖はなく、ただ溶けていくような安心感があった。

胎児のように丸くなり、思考を止め、理性を止め、好きな相手の匂いに包まれながら目を瞑る。

たまに目を開けて相手の表情をじつと見つめる。

普段の自分ではできないことをする。それは恐ろしいほどの魔力を持っていた。

“大人”になれば時間は動き出し、辛い現実には忙殺される。

赤ん坊でいればそんなことに悩む必要ない。

自分は。

しかし相手は？

ふと彼女は起き上がり、おしゃぶりを外した。そして髪の毛を掻き上げる。

「ねえ、優」

「ん、どうしたの？」

「私、狂ってるでしょう？」

「急にどうしたの？」

「……何だか最近、ふと冷静になると自分のことが狂ってるかと思えなくて。それで優は私のこと、どう思ってるのか聞きたくなかったのよ。いい歳した妹がオムツを履いて、おしゃぶりして、ハイハイしてるのってどうなの？ 気色悪い？ 気持ち悪い？ それとも単純に狂ってるのしか思わないかしら？」

「んー、最初はびっくりしたけど、最近は可愛いなって思うよ。夕香はほら、いつも周りに気を張ってて苦しそうだけども、甘えてくれている時は本当に女の子って感じの顔してて、凄く可愛い」

「……ば、ばか！ あああ、もう、私が望んでた答えと違うじゃないの！ そうね、そうよね、兄さんも私と同じように十二分に狂ってるんだったわね。それをすっかり忘れてたわ。あーもう、顔が暑いー！」

夕香はつんと顔を背け、両手を扇替わりにパタパタと風を送った。優は急に殴られた頭を摩りながら、頭上にハテナを浮かべて首を傾げた。

「何か変なこと言ったかな？ んーと、好きなだけ甘えていいよ？ とか言えばよかったかな」

「もう、その話題に触れないでいいの。それに好きなだけ甘えるのは妹として当然の権利よ」

「うん、そうだね。可愛い妹の甘えてる表情を見れるのは兄の特権だね」

優は両の手を開き夕香を迎える。

夕香は少したじろぎ、次に観念したかのように兄に抱きついた。

そして温かい手が後頭部を優しく撫でるのに、赤ん坊になっている時とは違う安心感を覚えた。

「お父さん。あなたも、もう決してあちら側には戻れないのよ。人を殺してしまった人間はもう、決して。なのに何故、そうやって普通のふりをするの？ 私には分からない。いや、寧ろそうね、私よりも死に触れたはずのお父さんが私よりも普通なのが私達には分からない。お父さん、人の死を見すぎて感覚が麻痺しちゃったのかしら？」

クスクスと口に手を当てて彼女は笑う。

実の父を笑う。嘲笑する。

「僕は……僕は忘れてなんかない！ 忘れようとしたけど、忘れようと思っただけど、やっぱり彼女のことは……忘れられない。忘れちゃいけない」

「そうよねえ。何人も、何十人も、何百と殺したお父さんがそれを忘れて、忘れようとして、私達に文句を言おうだなんておかしい話しだものねえ？」

「僕は……文句をいいに来たんじゃない。僕の話をしに来たんじゃない。君のことを、優君のことを、優月のことを聞きに来たんだけ！」

「別の誰かに聞けばいい」

「その誰かが、みんな、言えないから、僕は……！」

「会いたくもない娘……会いたくもない人に似た娘に会いに来たんでしょう？」

彼女は卑屈に頬を歪めて笑った。

男は沈黙し、ただ呆然と口を開けていた。

「優は父さんに似てる。私は母さんに似た。だからお父さんは優が大切に、私が苦手なのよね」

「夕香っ！ 君はなんて！ なんて酷いことを言うんだ……！ 君はなんて悲しいことを……」

「…………泣きたいのはこっちよ。酷いと思うなら、私に優しくしてよ！ 会いに来たと思っただら何を偉そうにいけしゃあしゃあと！ お父さんはいいわよ、どんなことがあっても笑っていられたんだから。でもね、私達家族は違った！ 私と優は母さんが夜、泣いていたのを知ってる！ お父さんの写真を抱いて辛そう泣いていたのを知ってる！ 次の日は私達の面倒を見て、食事を作って、父親の役もこなして！ そんな母さんに私達が素直に甘えられたと思う！？ 母さんに負担を掛けないようにしたに決まってるじゃない！ 私達は母さんが大好きだった……！ そんなお母さんを私が……俺が殺した時の気持ちを父さんに分かるか？ 好きでいて同時に憎い母を殺す気持ちがい！ 好きな人が目の前で消えていく気持ちが！ 分かるのか！？」

それは叫ぶ。

悲鳴のように、責めるように、訴えかける。

西日の柔らかな光の中でその声は空気に響き、心に響き、男の心に響き渡った。

残酷で悲痛なその叫びは、男に。

「分かる？ 生暖かい血の中で拭いても決して落ちない罪の辛さを。二度と動かない大切な人の骸を眺める心の虚しさを」

「わか……るよ。僕にも分かる。でも、もう……どうすることもできないんだ。起こってしまったことはもう、どうすることも」

彼は思い出す。

人の死を。

親友の死を。

沢山の人間が自分の結果によって死んでいく、どうしようもない焦燥感を。

「なら私に優しくしてよ！ 兄さんのように！ 母さんのように！ もう、誰も！ 誰も私に優しくしてくれない。優しくしてくれる人はいない……」

でも、もう優しくしてくれる人はいらない。

その暖かいものはいつか消えてしまふと分かったから。  
消えて無くなり、余計に辛くなるなら、いつそ初めからない方が  
いい。

「兄さんだけが、兄さんだけが、私に優しくしてくれた。ずっとず  
っと長い間。もう、あれ以上の温もりはどこにもない。……だから  
俺がいる。私のために俺がいる。見せかけの温もりを与えるために  
俺が」

あの雨の日。

黒く濡れたアスファルトの上で、狂った世界は更に狂った。

悲痛な声が聞こえる。うめき声が。

私は走った。耳に手を当てて、走った。

冷たい雨の中、水たまりを踏みしめて、逃げた。

雨風は全てを流し、露と消えてゆく。

でも決して私の心を流してはくれなかった。

焼け付きそうな肺の熱を溶かしても、私の涙を流してしまっても、  
決してその現実だけは流してくれなかった。

ああ、どうか、どうか、夢なら覚めて下さい。

夢なら、どうか。

朝食はフレンチトーストだった。

私はバターのみだったけど、優は甘党でシロップをたっぷりつけて食べていた。

食事を終え、着替えると私たちは玄関に向かった。

「行ってきます」

「行ってきます」

誰もいない家にそう言葉を掛ける。

母は挨拶なんかに厳しい人間で私や優によく注意をしていたものだ。優は何故かそれを今でも忠実に守っている。

私は。

「ん、どうしたの？ 忘れ物？」

「少し考え事してただけ」

「そっか」

優は微笑み、家の鍵を掛けた。

そして少し一緒に歩いて、向かうべき場所へと別れを告げた。

「じゃあ、病院頑張つてね」

「ええ」

私は手を振り、背を向けた。兄は私が見えなくなるまで、ずっとこちらを向いて手を振り続けているのがカーブミラーに写って見えた。

角を曲がり、ゆっくりと歩を刻んでいた足を素早く動かして、兄のいる側に回り込む。

大分前から私は診察されることを止めていて、薬を貰うだけにしていた。

現実を見ることはそれほどまでに辛く、苦しいのだ。目眩がするし吐き気がする。

現実を見ないでも平気で暮らせていけるのなら、私はそれでいい

と思う。それで何も支障がないのだから。

私がちゃんと診察、カウンセリングを受けていると思っ  
ている優には悪いけれど、私は弱くて脆い。あなたに支えてもらわ  
ないと崩れてチリとなってしまふ。

だから。

それが怖いから、あなたを逃がさない。

携帯のGPSでも確認はできるが、私はその目でそれを確かめ  
たかった。

「本当に図書館に向かつてるだけ？ 本当に本を読んでもら  
うだけ？」

優は呑気に空を眺めながらとぼとぼと図書館に向かう。

いや、きつと向こうではアイツが待っているのだらう。卑しい  
あの白子が。

図書館の自動ドアを抜けると優は真っ直ぐホールには向かわず、  
エレベーターの方に曲がった。

私の視界から優が消えて少し焦るが、この図書館は二階までし  
かないのだから、なんら問題はない。一階部分から先回りして、見  
やすい場所から優を観察すればいいだけ。単純なことだ。

「……………おかしいわね」

なのに、何故か優の姿はホールのどこからも捉えることはでき  
なかった。

エレベーターは上にしかいかない。ならばこのホール内にあるの  
は当然なはず。

ではどこに？

優月らしい人間も見当たらない。

兄さんに巻かれた？ 気づかれていたのか？ でも、そんな仕草  
は。

では何故。

携帯で確認すると確かに図書館の敷地内にいることが分かる。で  
もどこにもいない。

どういふことだろう？ ああ、もつと細かい部分分かるものにしておけばよかった。

結局、待てど暮らせど兄はどこにも現れなかった。

とりあえず何度も携帯で兄の動向を確認しつつ、病院に向かい、受け付けで薬を貰った。

図書館で数時間粘ったせいか帰る頃には少し日が暮れ始めていた。無駄な徒労に終わったことに疲れを感じながら自宅に向かっていと兄に動きがあった。私は即座に図書館近辺に駆け、兄を探した。そして見つけた。

車通りの激しい歩道を兄は歩いていた。

「え……」

兄は、アレと。

サンングラスの彼女。

優月と一緒に歩いていて。

あの孤独主義者の優月と一緒に。

群れることを嫌った彼女が誰かと一緒に歩いている。それも少し楽しそうに。

いつもの警戒心はどこにもなく、無防備でいて、その白い手は優の手を掴みたそうに、あるいはその手に触れたそうに、何度も左右を行き交っている。

気がつけば私は爪を噛みながら物陰に隠れて二人をじっと見守っていた。優は微笑みながらケーキ屋に入り、楽しそうに笑った。優月もまた楽しそうに小さく笑い、母のタルトを指さして何かを言った。

誰がどう見てもその二人仲睦まじ気度。

誰がどう見ても恋仲だった。

相思相愛に見えた。

「何で……」

何であそこにいるのが私じゃないんだろう。

何であそこで笑っているのが私じゃないのだろうか。何で私じゃ……ダメなんだろう。

私の方があの子よりも可愛いし、綺麗だし、セックスだって上手だろうし、優のことはホクコの数までよく知ってるし、私なら何だってしてあげられるのに、何故。

あんな無口で屁理屈だらけの白子に何故私が負ける？ 何で優は私を見てくれないの？

何が、足りない？

「ああ、そっかそうよね」

そんなことを考えてるから、こんなに私の心は黒いから、だから兄は私を選んでくれないんだわ。

私を避けて、私を憎む。

きつとあの女に言い寄られても、私と違い兄は泣かないのだろう。頬を赤らめて身を許すのだろう。

「ああ、悔しいな。悔しい」

そして殺したい。

優が私以外の女に体を許しているのだと思うと吐き気がした。私以外の女に心を許しているのだと思うと怒りが湧いた。

殺意が、情動が、情欲が。

今すぐあのショーウィンドをたたき割って、あの女の首を捌き、その場で優を犯したい衝動に駆られる。あの女を人質にして犯したい衝動に。

でも優が身を呈してあの女を守ったら、それこそ私は狂ってしまっただろう。もはや立ち上がることもできないだろう。

それ故に私は最後の壁を守るためにも、それだけは我慢した。

優と優月が楽しそうに談笑しているところを遠くから眺めながらじつとそれだけは、それだけは我慢した。

チャンスはまだあると。

二人が消えたあとも一時間ほどそこにいて、血がにじみ始めてい

た爪を舐め、家に戻った。

灯りはつけず、台所に向かい、顔を冷水で洗った。  
手が震える。

貰った薬を手に開けて、口に放り込み、水で流し込んだ。

よろよると石油ヒーターを稼働させ、ソファに雪崩れ込む。

「優月のあんな嬉しそうな顔初めて見た」

あんな風にあの子も笑うのか。

いつも眩しそうにして暗闇にいた彼女は、いつの間にか眩しい存在になっていた。そして気がつけば自分が暗闇にいた。

「私も優とあんな風に……」

あんな風になれたら。

悔しくて吐き気がした。

「最悪だわ……」

麻薬中毒者の気持ちが少し分かったような気がした。

目の前にある、ご馳走に飛びつかずにはいられないこの感覚は、  
獣と麻薬中毒者と私にしか分からないだろう。

優をまた犯した。

今日は夜やりたいことがあるとあって、なかなか寝ようとしな  
い兄に酒を飲ませて無理やり寝付かせた。何度もそこで躊躇った。脂  
汗を浮かばせて、何度も爪を噛み、これを最後にしようと思っ  
て自分  
に言  
い聞かせて、犯した。

満たされ、冷静になり、自分の馬鹿さ加減を目の前にして吐き  
気がした。

でももうそれも慣れつつある。  
慣れ。

傷つけることも、開き直すことも全部。

最早、私は私が自己嫌悪することで“自己嫌悪したのだから罪は  
白紙に戻った”と思ってるやっているとしか思えない。

普通に優を誘ってもセックスしても結局それは彼の心を侵食する  
だけ。嫌われるだけ。

我慢しようにも、兄のフリフリと揺れる尻を見る度に何度も唾が  
喉を通る。甘い優の香りに子宮が重くなる。重くのしかかったスト  
レスに病的なまでの欲情が止められない。

それでもセーブしている方なのだ。

できれば一晩中、優の体を舐め回し貪りすり犯し……。

「寝よう寝なくちゃいけないわ」

私は優の体を元通りにしておく、自分の睡眠誘導剤を飲んで目  
を瞑った。

気だるい体を起こす。少し体に疲れは残っているが肌艶はよく、気分は爽快だった。

少し寝過ぎしてしまったのか日が高い。

私は欠伸をしながら、リビングに下りた。

「おはようございます」

優月がいた。

「え？」

冗談にも似た突然の状況に笑みが零れる。

「……なんで、優月が？」

何で私の城に、私の唯一の癒しの世界に優月がいる？ なんて椅子に座ってお茶を飲んでいるんだ？

私が言葉を失って呆然としていると台所から優が顔を出した。

「あ、おはよう。ご飯はね、温めれば直ぐに食べられるように

」

「ねえ……何で？」

「今日は優さんと約束がありまして、私と一緒にいろいろ回る予定なのです」

お前には聞いていない。

「そうなの、優？」

私は努めて冷静を装いながら優に聞いた。

優は少し目を泳がせた後にウンとうなづいた。

「どこに、いくの。今日、この日に」

そうだ、今日はクリスマスイヴ。

そんな日にお前はどこへ行くというのだ。どこへ何をしに行くというのだ。どういう意味合いで行くというのだ。

優は私の言葉にあーとかうーとか言いながら目を泳がせて優月に助けを求める。彼女は即座にそれを拾い、聞いていもないのに喋った。

「図書館とか」

「優月は黙ってて………私はね、優に聞いているの」

「優さんがどこに行こうが、それは優さんの自由ですよ。あなたが詮索することでも、文句を言えることでもない」

「私達、家族なの。他所の人が口を出さないでくれる？」  
何故か笑みが零れる。

私の心安らぐ砦に土足で入ってきた闖入者ちんこうじやに私は怒りを通り越した感情を覚えていた。

優はただオロオロと取り乱し、どうしていいか悩んでいる。

兄が他人をこの家に呼ぶはずがない。とするとやはり勝手にこの端女はしためが来たのだろう。兄さんは優しいから、家上げたということか。

「優、あなたはその図書館とやらを先にいつてらっしゃい」

「え、でも夕香」

「優さん、わたし夕香さんの入れたお茶を久しぶりに飲みたくなりました。ですので先に行っていて下さい。直ぐに追いつきます」

「いや、だって二人とも……そんな喧嘩しそうなのに、放っておけないよ」

「喧嘩はしないわよ。ちょっと話し合いがあるだけ。だから早く出てちょうだい」

「優さんがいるといろいろ、ややこしいので、さっさと行って下さい」

「……は、はい」

優は私達の剣幕に押されて静かに家を出て行った。小さく行つてきますという声が聞こえた。

私はお湯と混ぜるだけで簡単に作れる安いお茶を優月に出した。

彼女はそれに一口も口をつけず、ただ黙りこくっていた。

優のお茶は飲んだ癖に。

「どうしたの？ 飲みなさいよ」

「いえ、あなたの出す飲み物は危ないので飲みません。これからデザートなので眠くなったりしたら困ります」

「……………なにをいつてるの？ デートって何？」  
何で。

それを知ってる。

「誤魔化さなくてもわたし、知ってますから。あなたが優さんに何を飲ませて、何をしているのかを。だから優月はあなたを軽蔑します」

そういつて優月は赤い瞳を少し細くして睨んだ。

私は自分のお茶を飲み、笑う。

「あっそう。悔しい？ 優が私のお手つきで。いいでしょう？ 羨ましいでしょう？ 優の体で触れてない部位なんてどこにもないわ。足の先から爪の先まで全部私が……………」

「論点をずらしても無駄です。あなたが優さんと性行為をする為に薬で眠らせて無理やりことに及んでいるのは事実で、それは強姦です。自分のものにならないから力づくで自分の欲求を満たそうとする下劣な行為です。恥を知って下さい。あなたはいつもそう。叶わない願いは無理やりねじ曲げてでも叶えようとする。周りが傷つくことになっても構わず、それを求めようとする。……………血筋ですか？」

侮蔑、軽蔑、蔑視、侮辱の瞳で優月は私を見る。

眠た気な赤い瞳で私を見る。

私は何とか自分の恥部を誤魔化そうと言葉を探すけど、それが出てこない。彼女を言いくるめられる自信がない。

「あ、あなたには関係ないでしょう！ あれは私のモノなんだから！ 優月なんかに渡さない！ あげるもんですか！」

「彼を物のように扱わないで下さい。彼は“人”ですよ。決してペツトや物じゃない。ましてや、あなたの性奴でもありません。生きて、考え、笑い泣き悲しみ喜ぶ、ちゃんとした人間ですよ」

「あなたにしては随分、感情的なことをいうのね。……………あら、気に触った？」

私の言葉に優月は無言で席を立った。そして私を暗い瞳で睨む。  
……………可哀想な人ですね。昔のあなたはそんな人間じゃなかった。

少なくとも人を物扱いするような方ではありませんでした」

「ごちゃごちゃ喧しい！ あそう、そこまでいうなら今すぐ決着つけてあげましょうか？ その細首引きちぎって終わらせてあげればいいの？ 目を潰して喉を潰して腕をちぎって、臓物を庭に撒いて欲しいの！？ なんでそれをしないか分かる？ “借り”があるからよ。だからこうして、大人しくしているってのにあなたは！ ねえそんなに死にたい？ 私の大切な部分に触れて、私の大切な人に触れて！ 優は私のなんだから、私と約束したんだから、何しよう」と、何が起ころうとそれは私達の勝手でしょう！」

「強制という名の合意で彼を縛って、約束だなんて間違ってます。

元はと言えばあなたが……」

「あああああああ、煩いっ！！！！！」

机を叩いたのと同時にかしゃんと湯のみが碎ける音。

優月は一瞬それに目を奪われた。

私は彼女の間だらけの顔に手を伸ばした。

瞬間。

世界が反転した。

本の森。

今夜の献立と書かれた本を真剣に読み更けている優に優月はそつと抱きついた。

「……………」

「あの、優さん。わたし、抱きついてます」

「…………ん？ ってわあ！ 何してるの急に!？」

優は小さく驚いて、彼女の捕縛から抜け出した。

優月は気付かれないように頬を歪めて別に何でもありませんと言った。

「あ、夕香との話し合い終わった？ 喧嘩とかしなかった？ 大丈夫？」

「ええ、至って平穏な話し合いでした。喧嘩なんて一欠片もありませんでしたよ。それにわたし、弱っちいので喧嘩したら夕香さんに殺されちゃいます。彼女とわたしのスポーツテストの結果知ってますか？ 対照的という意味では鏡のような感じですよ」

優月は遥かに平均以下の記録を打ち出し、夕香は遥かに平均以上の記録を打ち出したスポーツテスト。

優は安堵したように溜息を吐いて、笑った。

「何はともあれ、何もなくてよかった」

「つまりらないことで待たせてしまってすみませんでした。なのでさっきの抱擁うづつぱはサービスです」

「…………サービスってことは普段はお金取るんだ」

「お父さんにやってあげると、デレデレしてお小遣いをくれます。そんなにお父さんが好きかーとかいって。でもお母さんにもやらないと、拗ねてしまうのでちよつと面倒です」

「君は両親が大好きなんだね」

「大好きです」

「あははは」

何だか暖かそうでいいな。

優は彼女を少し羨ましいなと思った。

優はマフラーの最後の手直しと細かいチェックを終わらせ、丁寧にたたむと肩掛けカバン入れ、優月と外に出た。

そして市営のバスに乗り込み、街中の包装店へ向かった。

日が日ということもあってか平日だというのに人が多い。灯りのついていないイルミネーションが街路樹に括られていた。

人の流れを縫うようにして優は進む。

「あれ？」

ちらりと後ろを見ると彼女がいなかった。サングラスをつけた茶色のダツフルコート姿の優月を探すがどこにも見えない。

少し後ろに戻ると道の隅で座り込んで地面を見つめている彼女を見つめた。

優月は自分の体を抱きしめるようにして、小さく口を開き、じっとしている。

「大丈夫？ 気分悪い？ かえろっか？」

「いえ、大丈夫です。少し酔っただけです。やっぱり、人の多いところは苦手です。何故、自分の歩きたい速度で好きな方向を歩かせてもらえないのでしょうか？ みんな一列に歩けばいいのにとか思います」

「……………んー、じゃあ俺たちだけでも一列に進もう」

首を傾げる優月の手を優は微笑みながら引つ張った。サングラスの中で彼女の眠た気な瞳が大きく見開かれる。そんなことを露とも知らず、彼は流れを切り込むように前へと進む。

止まることなく、ゆっくりと歩を刻みながら優は彼女の盾になる。手をつなぎながら前へと進む。

ショーウィンドウに反射した自分の姿を見て、彼女は少し顔を赤くした。

当たりのカップルと同じように手を繋いでいる自分たち。  
もつと、もつと触れ合いたい。

彼女はちよつとずつ彼が気づかないように手をずらし、指同士を絡めあうような繋ぎに変えようと試行錯誤するが上手くないかない。

「ん？ 手が滑る？」

彼はただでさえ遅い速度を緩めて振り返り、手のひらを見せた。

優月は一瞬迷い、手ではなく腕に抱きついた。

「わっ」

「こつちの方が……滑りません。それに、あの、暖かいです」

「うん、そうだね」

足はまたゆつくりと歩みを始める。

近くの黒い帽子を被った女性が彼女を見てニヒルに笑った。

彼女は俯き、その白い肌は傍目にも分かるほどに淡い紅色に染ま  
った。

マフラーを丁寧に包装してもらつと次はケーキ店に向かった。

その小さな店は優月のオススメの店ということもあってか黒山の人だかりだった。

二人は前もつて予約を入れておいてよかったと安堵。

寒い中、暫く待ち、優はケーキを受け取った。店を出る。

「寒いですね」

「うん、寒い」

空からは既に光が失われ始めていた。殺風景だったはずの景色は、流れては消えていく車のヘッドライトがイルミネーション代わりにきらびやかに染め上げていた。

二人は病院近くの自然公園前で止まり、顔を見合わせた。

「今日はありがとうね」

「いえ、普段家から出ないのでとても楽しかったです」

「あはは、ありがとう。あ、そうだ。これあげる。危ない危ない、忘れるところだった」

優はそういつてカバンの中からオレンジのマフラーを出した。包装はされておらず、素のまま。

「……わあ」

優月は呆然とそれを受け取り、胸の中のそれを見た後、顔を上げて優の顔を見つめた。

「本当はさっきのところでもらおうと思ったんだけど、そうなる君に見つかっちゃうからラッピングはなし。まあ、それは我慢してくれるとありがたいです」

「綺麗なオレンジ色です」

「うん、君はオレンジが映えると思って。コソコソ家で作ってたんだけど間に合ってよかった。細かいチェックとかしてないから、もしかしたら不恰好かもしれないけど、許していただきたい」

事実それは作りは甘く、どこか不恰好だった。何度も手直した後が見える。

それは優月がコートについている時とは違い、修正するのほぼ彼ひとりで行ったためだった。

その不恰好なマフラーをぎゅうっと胸に抱いて優月は言った。

「優さん」

「ん？」

「わたし、オレンジ色のマフラー持ってますよ」

「……………あっ」

「でも……………凄く嬉しいです」

彼女は白い髪を掻き上げ、壊れ物を扱うような手でマフラーを巻いた。

そしてくるりと優の方向を見て、微笑む。

「似合ってますか？」

「うん、我ながらいいものを作ったと思います」

「そうじゃなくて、わたしに似合ってますか？ 可愛いですか？」

「あ、うん。似合ってるし可愛いよ」

「そうですか……………そうですか。とても暖かいです」

「毛糸だもの」

「そうじゃないんです。そうじゃ」

優月はもう一度ありがとつございましたと言って微笑んだ。

空はどこまでも黒く、彼女の頬は赤く、吐く息はただ白かった。

どっ、どっ、どっ。

床を伝わり、自分の鼓動の音が聞こえた。

彼女は思う。

何故、自分は倒れて体がピクリとも動かないのだろうか。

何故、優月が見下ろしているのだろうか。

「ゆ……づき！ なにをお」

手足はじんと痺れ、舌が少し粘ついた。優月はそれを冷ややかな瞳で見つめる。

見上げているせいか自分よりもずっと小さなはずの彼女が夕香には巨大に見えた。

「まだ、喋れるですか。手足も微妙に動いてますね。相変わらず人間離れしてます。これも……血筋ですか」

彼女はテーブルのお茶を手に取り眺めた。そしてゆっくりと傾けて、彼女の顔に温い液体をこぼした。夕香はそれを何とか避けようとするが、体は糸の切れた人形のように動かず、ただ口を閉じ目を閉じるだけしかできなかつた。

温い雫が肌を叩いて消えていく。

「いつも夕香さんが優さんに行っていることですよ。抵抗できない、何も分からない彼の体にこんな風に自分の欲求をぶつけてきたですよ。どうですか、気分は。意志がある分、恐怖を感じますか？

本来なら彼を感じるべきだった恐怖を」

「あっ……ぐっ。も、もった」

「持った……？ ああ、盛ったということですか？ そうです。ポットの中に薬を入れさせてもらいました。殺されないように用心です。それが功を奏しました」

「うっうっうっ！」

夕香は何とか体を動かそうとするが、それは痙攣にしかならな

った。

無理をすればするほど体に痺れが回っていくような気がした。

小さく屈んで、優月は彼女に顔を近づける。窓から注がれる光が逆光になり、優月の表情を黒く隠した。

ただ赤い瞳が影から覗く。

心を。

脳髓を。

気持ちえ。

思考を、思慮を全てを。

「今、わたしがここですべきことは何か分かりますか」

労働を知らない、そんな子供のような白い手が夕香の首に掛かる。彼女の表情は変わらず、声は変わらず、手の力も変わらない。ただ瞳の奥が冷たく冷え切っていくだけ。

夕香は初めてそこでぞつとした。

殺される。

「あつ、ああつ！」

「優さんのことを一番に思うなら、あなたをここで殺すのがベストです。運動の苦手な私でも、握力の弱いわたしでも……ほら、こうやって両手を使えば、簡単にあなたを殺せる」

喉は絞られ、呼吸は絞られ、光は絞られる。顔が赤く腫れ、目が圧迫される。

彼女の元々の握力が弱いためか、それはまさに真綿で首を締められていくような感覚だった。

「苦しいですか。優さんはもっと苦しんだんです。何年も辛い思いをしてきたんです。彼が今もああやって笑っていられることがどんなに奇跡なことか、あなたは分からない。あの時と同じように笑っていられることがどんなに凄いことかあなたは分からない。分からないで、彼を貪り心を犯し、彼を消費し浪費し消耗した。そんなあなたをわたしは許さない。……何故、わたしじゃなくてあなたが。苦しめ苛め抜き、ただ汚すだけのあなたが彼の近くにいたんですか

? ……何故わたしは気がつかなかったんでしょう。こんなに近くにいたのに、こんなに近くで苦しんで悲しんでいたのに……」

「かはっ……あう」

不意に優月は手を離し、立ち上がる。

白い光に照らされた白い髪。それはまるで羽を休める天使の一枚  
絵。

しかし表情は対照的に暗く、決して窺うことはできない。黒く塗りつぶされ、誰にも窺うことができない。

ただ赤い唇だけが機械的に、独り言のように動いた。

「殺しませんよ。あなたと同じように人殺しにはなりません。人を殺してしまつたら、もう帰って来れなくなる。どんなに洗い落とすても、血の匂いは消えないんです。あなたのように、あなた達のように。彼女のように、彼女たちのように」

夕香はただむせるように息をして、震えた。

本当に目の前にいるのはあの無口で对人恐怖症で非協力的な優月なのだろうか、と。

本当に、人か。

「……っ！」

「夕香さん、お願いですから彼をもつ……苛めないで下さい。犯さないで下さい。侮辱しないで、陵辱しないで暴行しないで欲情しないで貶めないで壊さないで殺さないで苦しめないで悲しめないで触れないで」

そして願わくば死んで下さい。

彼とわたしの知らないところで、知りもしない場所で。

一人孤独に。

今までの全てを悔やんで。

「それがあなたができる唯一の善行。彼に対する懺悔です」

そういつて優月は夕香を一瞥した後、部屋を出て行った。

炎のように深く赤い眠たげな瞳の奥は、どこまでも冷え切っていて、ただ彼女を軽蔑し続けていた。

夕香はただ天井を睨み、薬が体内で中和されるのをずっと待った。最初こそ優月のことが恐ろしく思った彼女だったが、時間が経つに連れてその恐怖も薄まり、代わりに怒りが募った。

自分が動けない間に優と肌を合わせているのかと思うと、殺意が湧いた。楽しく笑い、語り、そして自分のことなど眼中になく過ごしているのかと思うと気が触れそうになった。

トイレに行きたくても動くことができず、結果その場でした。プレイでするのは違い、それは苛立ちにしかならなかった。

薬が切れた頃、彼女は全身に怒りを滾らせて自分の部屋に行き、携帯を手に取った。

見つけるのは簡単だ。

兄は外に行く時、必ず携帯を持って出歩く。

「優月優月優月優月優月優月優月優月優月優月！」

しかし、携帯に電波が入らなかった。

そもそも電池がなく、携帯会社と通信する為のチップが無くなっていた。

頭の何処かで優月が頬を小さく歪めて笑った。

「あああああああああつ！！！！！」

携帯を床に投げつけて、部屋を飛び出す。

優の部屋に向かい、布団を被り、優の服を体に巻き付け部屋の隅で深く深く呼吸をした。

「落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け………」

何度その言葉をいったのか分からなくなった頃。

兄のただいまという気の抜けた声が聞こえた。

布団から顔を出した。

空は黒く塗りつぶされていて、小さな光の粒がきらきらと輝いていた。

美しい。

そう、美しい。

最悪の場面の一步手前というのはいつも。いつだって。

空高く投げられたボールが地面を強く叩くように、最悪の一步手前は何かしら甘美なものを私に見せて、持ち上げる。強く私を叩きつける為に。

薄暗い部屋を音も立てずに出る。そして壁の影から顔を半分だけ出してそつと玄関を覗いた。

「ただいまあ……？」

玄関の灯りに照らされた優は探るようにリビングを覗いていた。出ていった時よりも明らかに荷物が増えていて、優はそれを見せたくないようだった。

片方に大きな袋に入った四角い白い箱。その上には綺麗にラッピングされた包みが見えた。

正直いえば私もそれは見たくない。きっとそれは私にとって“よくない結果”を生むから。

見なかったフリをして、布団にくるまれば何事もなかったように過ごせるのだろう。

「優」

「わっ！！ え、あ、夕香さ……ん」

しかし、それはできなかった。

私の精神状況がおかしくなっていたこともきつと原因なのだろう。優が嬉しそうだったことも原因なのだろう。

私が嫉妬深いのもまた。

「……今、何を後ろに隠したの？」

「なんでもないよ」

優は私と目を合わさずに首をブンブンと横に振った。首が振られることに優月の臭いが空気を侵食して私の機嫌を損ねる。

ゆっくりと私は距離を詰めて、優の背中に手を回した。

「ねえ、あの子の抱き心地はよかった？ 変態的な私と違って普通なセックスだったのかしら？」

「え、何？」

「私ね、すつごく鼻がいいのよ。だからね、兄さんがどこで何をしていたか、大体見当がつくの。体中から優月の臭いをブンブンさせて、何もしてないは通用しないわよ」

「あー、夕香は鼻がいいもんね！ なるほど、だから……」

「……嘘をつくなら最後までつき通してよっ！ なんて、なんでそこで認めちゃうのよ！」

「え？ ふうっ！ ぐう」

私は右足で兄の睾丸を蹴り上げた。兄は目を丸くしながらその場に崩れ落ち、小さくうなり声を上げる。

大切そうに抱えた袋を優から無理やり奪い取る。取った。

なのに、兄は袋を力強く掴み私に反抗した。私を見上げて、ふるふると首を横に振った。

「やめ……て」

「な、何よこの手は！ そんなに………そんなに大事なもののなの！？ そんなに私に見せたくないものなの！？ あーあー、もう駄目だわ！ もう我慢できない。ちょっと見るだけだったけど、もう許さない！！」

私は兄の顔を思い切り引っぱたき、力づくでそれをひったくった。まずは箱の上の小さな包み。箱を適当に床に投げ捨て、丁寧に包装された包みを雑に破って中身を見る。

「……………マフラー、ね。それも手編みの。ふうん、あの子とおんなじ色ね。暖かそうね。よくできてる。いいもの貰ったじゃない優でもね、でも……………」

こんなものは優には必要ないのよ。

そういつて私は兄の目の前でそれを引き裂いた。二つに引き裂き、四つに引き裂き、床にばら撒く。

兄は股ぐらを押さえ、冷汗を流しながら呆然とその光景を見ていた。

馬鹿みたいに口を開けて、呆然と。

その顔が可笑して可笑しくて、私は笑ってしまった。声を上げてケラケラとはしたなく笑う。

それでも怒りは尽きない。それでも殺意は、嫉妬は尽きない。

私のことを一番に優先するといっていた癖に、約束した癖に私の信頼を破って浮気して、嘘ついて約束破って！あの女に惚れ込んで！体を許して！

浮気者浮気者浮気者！

「あ……………ああああ！あああああああああ！」

股の痛みも忘れて兄はその欠片をかき集めた。泣きべそをかきながら、欠片同士を合わせる。

そんなことしても元には戻らないって分かってる癖に。

そんなことをしたって意味がないって分かっている癖に。

「兄さんが悪いのよ。私を怒らせるようなことしたんだから」

「あああ……………あああああう」

「聞いちやいないわね」

私は兄を鼻で笑い、大きな箱を軽く踏みつけた。ぐにやりとした奇妙な感触。

「こつちの大きいのは何が入ってるの？ねえ、優」

「うー、うー……………」

ポロポロと目の縁から涙を流している兄に微笑みながら語りかけ、箱を開いた。

沢山の苺に乗った大きなケーキ。生クリームをたっぷり使ったはずのケーキは、踏みつけたせいでスポンジの地肌が薄く見えていて、歪な形に変わっていた。

「あらあら、踏みつけるのはちょっと勿体無かったわね。とっても美味しそ……………う？」

あれ。

なんだろう。何かを忘れていている気がする。何か大切なことを。

何か重大なことを見落としているような気が。

「……………あ、れ？」

ふいにチョコレートの板が見えた。クリームで汚れたチョコ。

見るな見るな見るな見るな！ それを見るな！

私は震える手でクリームを拭い、ホワイトチョコで書かれた文字を見る。

いや既に分かっている分かってしまったているんだけど私はそれを認めたくない理解したくない知りたくない。

だってそんなそんなそんな酷いことって。

「ゆゆゆ、ゆう、かちゃん、お、おた、おたん……………おたんじよ、おたんじよび。おおおお、おめで、とう」

強烈な目眩。全身から血の気が引く。

震える声で私は文字を読み終り、真っ白になった頭でその場に尻餅をついた。

寒い。体が震える。息が苦しい。前が見えない。体が重い。

ああ、でも私はしなくちゃいけない。

だから頑張つて兄に近寄つて、そう足を動かして、そう四つん這いでもいいから前に進んで、いう。言わなくちゃいけない。

そんなことしても元には戻らないって分かっている癖に。

そんなことをしたって意味がないって分かっている癖に。

「お、おに、いちや……………あああああ、ごっごめ、おにいちやわたし！」

「バラバラに……………バラバラになっちゃった。もう元には戻らない」

顔を上げた兄はポロポロと涙を流しながら微笑んだ。  
微笑みながら、かき集めた破片を持って家を飛び出した。  
頭の中で何かが砕ける音がした。

廊下は冷たくて、玄関の空気は冷たくて、心は凍てついて、言葉は枯れ果てた。

何て馬鹿なんだろう。兄さんは毎年、私の誕生日を祝ってくれていたじゃないか。ひっそりと質素なものだったけど毎年祝ってくれていたじゃないか。

駅前の美味しいと評判のショートケーキを買ってきてくれる程度だけど私はそれがとても嬉しくて、でもありがとうと言えなくて。

よくよく思えば優に抱きついたり、甘えたりできるようになったのは本当にここ最近だ。楽しすぎて私はそれを忘れてしまっていた。孤独を。そのありがたさを。

ああ、だから私は嫉妬に狂ってしまったのか。

孤独が怖いから、独りになるのが怖いから、兄さんが離れてしまふのが怖いから。

分かっていながら兄にまた私は……。

どうしようもない。

「本当にどうしようもない……」

「何をしたんですか？ あなたは彼に一体何を……」

玄関の隅っこで丸くなっている私に優月は声を掛けた。鼻が赤く、息が荒い。

走ってきたのだろうか。

今となってはどうだったっていい。

「優月、何しに来たの？」

「この時間帯に優さんが、外に飛び出すなんてことは何かあった証拠です」

「何であなたが……ああ、私の携帯のアレ、他の携帯でも使えるの。便利になったわね、ほんと便利……くふふふふ」

優月は狂人を見るような目で私を見た後、部屋を見渡した。

床の小さな白い毛糸、潰れたケーキ、箱の凹み、私の立ち位置。それらを全て見て見て彼女は一人納得した。

母親譲りの観察眼を持った優月にはそれだけで十分だった。

私が母から譲り受けたものは、狂気か。ふふふふ。

「あなたは、何故……」

彼女は途中で言いかけて口を閉じた。言ったところで無駄とでも思ったのかもしれない。

ムスツとした顔で彼女は身を翻す。

「ねえ、優月。私を殺してちょうだい。なんだから、もうどうでもよくなつてきちゃった」

その言葉に彼女は振り返り、今まで見たこともないような表情で私を睨んだ。

炎のように燃ゆる赤い赤い瞳。燃え盛る業火のようにその目は私を睨む。

「人を傷付けておいて、人を苦しめて、あまつさえ善意すら悪意で返して。自分の醜さに気がついたら、殺してくれ？ 虫が良すぎます。自分で死ぬこともできなくて、最後まで他人に迷惑を掛けて……！」

「あなたの感情的な表情、初めて見たわね」

「死ぬなら彼に迷惑の掛からないどこか遠くで死んで下さい」

「……ねえ、優月。あなた、本当は、こうなること知ってたんじゃないの？ 優が、私がこうなることを知っていたんじゃない？ そうなんでしょ？ そういつてちょうだいよ」

無言で彼女は私を一瞥すると、何も言わず身を翻し、音も立てずに出て行った。

ふふふ、また呆れられて見捨てられた。

もう、私には何も無い。

美しいと兄に言ってもらえさえすばよかった。頑張ったよくやったと兄に言ってもらいたかった。頭を撫でて優しく抱きしめて欲し

かった。

ただ一言愛していると欲しかった。

ただ愛して欲しかった。私だけを好きでいて欲しかった。

そのはずだったのに。

「どうしてこうなったのかしら……。どうして」

「ん……」

兄の部屋で目を覚ます。まだ外はぼんやりと青みがかっていて、静けさがあった。

少し狭かった兄の部屋は兄がいなくてとても広く感じた。

固いベットに寂れた机、冷たい床、それすらも広大な大地に思えた。

手を吐息で温めながら、一階に降りて玄関を見た。

「そうよね……」

私の靴しかない。

トイレを覗き、風呂場を覗く。

何もなく、誰もない。

私は脱衣所にあった兄の下着を鼻に当てながら深く息を吸った。

ぞくぞくと脳が犯されている感覚に現実を忘れる、忘れることができた。

そのままリビングに行って、ソファを見た。当然何もなし。

庭を見ても何もなくて、台所を見ても誰もいなくて、テーブルには誰も座っていないかった。

私は独りになった。

独りに。

「うっうっうっうっうっ……うえええええええん！ おにいちゃあ  
ああああっんんん！！」

泣けども叫べども私の求めるものはどこにもない。

母の寝室を覗いても、地下室を見ても、どこにも。

あるのは孤独と静寂。

気が狂いそうになるほどの孤独と静寂。恐ろしいほどの孤独と静寂。

孤独が闇から這い出し、私の胸の鼓動を静寂に染め上げようと蠢く。それは闇であり、静寂であり、私であり、彼らであり、強く吠える月であつたりする。

「どこおおおおおおお！ どこにいるのおおおおおお！？」

同じ部屋を何度も行き交い、家中走りまわっても兄はいない。私の部屋にもいない。クローゼットにも。

闇から逃げる。あるいは静寂から。煩いほどの静寂から、孤独から。

彼らは一様に私を追い立てる。しかし逃げられない。何故なら彼ら、彼女らは私の血液、血肉に宿っている。私が彼らであり、彼らが私達で、私は彼らを見て、彼らは私を見る。

私はそれが溢れて体を引き裂かないように、口を押さえて目を瞑り、耳を塞ぐ。しかしかの者は皮膚の穴や指の小さな合間を縫ってドロドロと溢れ出し、色を黒く変える。大地を黒く変える。

視界を、心を、声を、言葉を。

それに抗う術はない。結局のところ私は負けているのだ。

「はあはあ……はあ」

過呼吸気味になった狂気を何とか押さえ込み、薬を飲んだ。飲んだあと、最も優の残りが感じられる兄の部屋で寝た。

寝ながら泣きわめいた。

目を覚ますともうお昼だった。

「こわい……こわいよお」

一階に下りる怖くなった。一階に下りることで兄がいないという恐怖の固まりが私の足元をすくってバリバリと齧っていく、そんな妄想が浮かぶ。階段の側に黒い一つ目の怪人がいて、黒い帽子と黒い服のニヒルに笑う怪人がいて、私と踊ろうとするのだ。



すれば、うん、全部丸く収まる。大丈夫、夕香は何を聞かれても知らないって言えばいい。何も覚えてないって、何も見なかったって言えばいいよ。さあ、お風呂にいこう。

「夕香、ほら手の力を抜いて、そう……ゆっくり、ゆっくりと優しく」

「あああ……」

手から包丁が奪い取られる。震えが止まり、現実が回帰する。

私の煩いほどの息遣いの音。滝のような汗が顎を伝って床にポタポタと落ちる。

現実か、ここは？ まだ夢の中にいるのだろうか。

いや、今までの全てが夢のようだったようにも思える。

私はまだベットの上において兄に怖い夢を見たといって抱きついて、母さんの朝食を食べて、父さんのぼうつとした顔を見て、兄さんと笑う。

声が出た。息遣いが聞こえた。

私以外の。

「夕香、包丁触っちゃダメっていったでしょ」

私はゆっくりと後ろを振り向いた。

「……おにいちゃん」

優しく微笑む兄の姿があった。

「一番星みいーつけた。くふふふ」

窓は金網。塀は高い。

彼女の部屋はある種、隔離されていたといえる。

個室を与えられ、無限とも思える時間を与えられ、自由を制限され、狂気を与えられた彼女はまさに籠の鳥だった。

「父さんも人を騙すのが下手くそね……。ほんと優と一緒に」

そう彼女は呟き、金網と壁を繋げている固い鉄の棒を何度もボールペンで傷つける。ペンは父からくすねたもので、彼はもう既に部屋にいない。

今日にもこの金網は取り外せる。

取り外し、ベットのシーツとカーテンを束ねてロープを作れば、もう自由だ。

自由。

初めは死のうと思った。

自由になった後は死のうと思った。

窓の縁を乗り越え、頼ることもできない空中に身を投げ出し、そしてあの家である我が家である部屋である兄の部屋で死のうと思った。

その為に少しずつ時間を掛けて、部屋のフェンスを壊してきていた。

しかし、今彼女の目的は大きく変わっている。

死から生へと。

絶望から希望へと。

「本当に下手くそ」

彼女の父は一度も喪服を着てこなかった。線香の匂いすらなかった。彼女は何度もそれを観察した。

父は極力あるワードには触れようとしなかった。その後のことに

触れようとしなかった。

兄のその後のことに触れようと……。

つまりそれはどういうことか。

「俺はもういらないうつてことだね」

ええ、そうよ。

一人が喋り、一人が答えた。

悲しそうな表情はそこにはない。ただ彼女は目を爛々と輝かせ、期待に、あるいは想い人に胸を膨らませて籠を壊す。

外に羽ばたくために籠を壊す。

暗闇の主は彼女の手に分の手を添えて、力を貸す。暗闇の獣は彼女の心に巢食う見せ掛けの温もりを喰らう。暗闇の音楽隊が不協和音を奏でる。

全てが彼女を讃え、愛で、そして力を貸した。

「もう次は失敗しない。絶対に失敗しない」

闇の中で冷たく乾いた拍手が響く。

それに応えるように彼女はひび割れたペンを何度も振り下ろし、

微笑む。額に汗を走らせ、笑う。

そしてペンが砕けると同時に金網の鉄柱が折れた。

歓声は高まり、獣は吠え、主は彼女の頭を撫でた。そして一様に声をかける。

「いつ行く？」

朝に。

「夜の方がいい。夜の方が暗くていい」

そうね、そうしましょうか。

あの時に戻るという意味では確かに夜の方がいいかもしれない。

雨は降っていないけど、闇という意味ではおんなじだ。

「そうだ、そうだ。夜がいい、夜の方がいい」

彼女はシートを引き裂き、カーテンを引き裂き、一本の長い長いロープを編んだ。強度も申し分ない太くて長いロープ。

ベットに重石おもしを乗せた後、その足にロープを括りつけた。

腰にロープを巻き付け、壁を蹴るようにして下りる。少しずつ、ゆっくり丁寧に。

「なあんだ、とっても簡単」

あっさりと地面に足を下ろし、芝生の上に立った。裸足で草を踏み分け、前へと進む。

もう闇は怖くなかった。恐れてはいなかった。

闇は彼女を応援してくれていたし、もう彼女は一人ではなかったから。

「兄さん、お兄ちゃん、優」

次は失敗しないから。次はちゃんと、ちゃんと。

女は芝生の上で月の光を一面に浴びて心地よさそうに笑った。消毒液の匂いとは違う草木の香りを胸一杯に吸う。

月に薄い雲が掛かり、光を遮る。彼女の姿は闇に溶け、彼女自身も黒く染まった。

薄暗闇で声がした。

「次は優の赤ちゃんが欲しいわ。くふふふ」

月がもう一度顔を表す頃、そこには誰も立っていないかった。ただ笑い声が聞こえた。

「はあはあ……」

優は図書館の自動ドアの前で膝を丸めていた。既に閉館されていて、建物は暗い。館内の残り火と街灯のように照らす図書館周りの灯りだけが彼を照らした。

どうだっていい。

もうどうにでもなってしまうえ。

手に持ったバラバラの白い毛糸。彼はそれに顔を沈めて泣いた。声を殺しながら泣いた。

彼は夕香が喜んでくれさえすればよかった。妹の笑みが見たかった。いろいろな文句を垂れながらありがとうという妹の笑顔さえ見ればそれでよかった。

ただ一言、お兄ちゃんありがとう。

それだけでよかった。驚いて喜ぶ妹の顔が見たかった。

そのはずなのに。

「どうしてこうなったんだろう……。どうして」

白い上質の毛糸は涙を吸ってもなお、その温もりを絶やさなかった。

妹とこんなに話すようになったのはごく最近のことだった。そのことに気がついた彼は、ある種記念のような意味合いも含めて誕生日に大きなケーキを購入し、妹を驚かせようとした。シャンパンを密かに買い、妹の好きな食べ物を買集めた。一生懸命、毎日心を込めてマフラーを編んだ。

そして妹の笑顔が見れる。嫌なことが続いて沈んでいた妹の笑顔が見れると思ったその日。

全ては脆くも崩れ去った。

兄さんが悪いのよ。私を怒らせるようなことしたんだから……。か。俺は夕香に必要とされてなかった。

俺は夕香を怒らせてしまっただけだった。

「優さん、何してるんですか？ 風邪、引きますよ」

白い少女。白く輝く肌と髪の毛。首にはオレンジ色の不恰好なマフラー。後光のように光を背に受けている。

サングラスはしていない。その為か赤い眠た気な瞳が頭かぶになっ  
ていた。

肩で息をしながら彼女は口を開く。

「運動でも……してたの？」

「優さん、何かあったですか？ 酷く悲しそうな顔してますよ。泣いた跡があります」

精一杯普通を装ったつもりだった。精一杯微笑んだつもりだった。しかし彼女は当たり前のようにそれを看破した。

それが悲しくて、少し嬉しかった。

彼は手のひらに乗せたマフラーの残骸を優月に見せる。

「あはは、バラバラになっちゃった。折角、手伝ってもらったのに意味なくなっちゃった。本当にごめんね。……ごめん」

「そんな……そんな、ごめんなんて言わないで下さい。悪いのは夕香さ」

「悪いのは俺だよ。俺がもっと夕香の気持ちを汲んであげれば、もっと夕香の気持ちを分かってあげればよかったんだ。夕香はね、寂しかったんだ。ずっと俺がマフラーに熱中しちゃってたから寂しく思っ  
て、こんなことになっちゃったんだ」

遮るようにそう答えた。

優月は唇を固く閉じ、そっと優を抱きしめた。

花の香りのする白い髪の毛の中に体が埋まる。

「もう、そーやって自分を責めるのはやめて下さい。私はそれを見る度に心が辛いです。自分を傷つけたって何も変化しません。ただあなたが苦しみ、辛くなるだけです」

「でも！ でもそれしかすることがない！ できることがないんだ！ 俺には……それくらいしか、それだけしか！ 母さんを殺して

しまった時から俺は！」

「……な、ら」

彼女は優を抱きしめながら一瞬躊躇した。その言葉をいうのを戸惑った。

その言葉は決定的だ。それを言ってしまうえば彼女にとって全て片が付く。

だが、しかし、それは。

とてもズルい。

「なら？」

「なら、優さんは……夕香さんにとってよくない存在なのかもしれない。もしかしたら彼女に悪影響を与えているのは優さんなのかもです」

「俺が、夕香にとってよくない存在ってじゃあ俺はどうしたらいいんだろう。夕香の近くにいってもダメで夕香から離れてもダメって悲しすぎるよ」

「だから、その距離を測るために、少し、距離を置きませんか？

彼女と距離を。最適な位置を測るために優さんが彼女と少し距離を取るです。わたしの、わたしの家に、住んで、それを測りましょう。どのくらいの距離が一番いいのか調べましょう」

「で、でもそんな悪いよ。君にも迷惑が掛かる」

「優月は平気ですっ。寧ろ優さんがいてくれた方が賑やかで楽しいです。わたしを孤独から助けると思って、どーでしょう？ それに

……」

ダメ押し。

優月は唾を飲み込み、口を開く。

「それに、優さんのことをいろいろ聞かせてもらえれば、夕香さんと仲良くなる案を考えつけるかもしれない。彼女と笑って暮らせる方法を思いつくかもしれません」

「本当に、そんなこと……できるのかな」

「ええ、できます。優月を信じて下さい」

ズルい。

とてもズルい。

そう彼女は思った。

彼は基本的に妹中心のロジックで生きている。既に思考回路にそれが組み込まれてしまってる。

だからそれを上手く扱えば。

「……………わかった。そうしてみる」

こうなる。

「はい。ではとりあえず中に入りましょう。流石にわたしもちよつと寒いです」

「俺も何だか寒い。でも君は暖かいね」

「わたしは……冷たいですよ」

そう彼女はいい、優と共に立った。無表情な表面の奥底で自分を責めながら。

その絆を決して離さないように固く手を繋ぎながら、微笑みかける彼に微笑みながら、エレベーターの中で泣き出した彼を慰めながら、彼の作った料理を食べながら、彼と一緒に寝ながら彼女は自分を責めた。

なんて自分は卑怯なんだろうと。

「……おにいちゃん」

優は夕香の伸ばした手に少し肩を震わせた。

彼女もそれを分かってか、気まずそうに手を引く。

昨日は兄に酷いことをしてしまったのだ。兄の精一杯の好意を踏みにじってしまったのだ。

今更、甘えるのも兄を欲するのもおこがましいことだと彼女は俯く。

優は包丁を夕香の手の届かない場所に置き、少し戸惑うように言った。

「あ、あのね、あれから俺凄く考えたんだ。一生懸命、考えたんだ」  
やめて、その続きをいうのをやめて。

彼女は自分を包み込む異様な空気に耳を塞ぎたくなった。  
何を言うのかは分からない。

しかし、どうなるのかはきつとよく分かるのだ。

そしてそれは絶対に私にとって好ましくない。

「夕香の側にいても俺はきつと夕香に良くない影響を与えちゃうんだ。かといって夕香と離ればなれになっても夕香は寂しくて辛い気持ちになっちゃう」

「うん」

声を上げてそれを遮りたかった。頬を叩き、その言葉をねじ伏せたかった。

しかし、声は出ない。掠れた泣き声だけが、掠れた嗚咽おえつだけが喉から漏れる。手で幾ら拭ってもその滴は止まることを知らず、手の甲を濡らし続ける。

それを見ても兄は言葉を止めない。その死刑宣告をやめようとはしない。

止めようにもそれが正しくないとは言えなかった。何か言おうに

も前日兄に酷いことをしたのだと思うと何も言えなかった。

ただ涙が零れて出た。

「だからね、二人の丁度いい距離を測ろうと思うんだ。傷つけなくていい、傷つかなくていい丁度いい距離ってのがあるんじゃないかなって。だから、だからね」

「……うん」

「だから、夕香とは離れて暮らそうと思うんだ」

そう彼は言った。微笑みながら、彼女の目を見ないで言った。

私から離れないという約束があるだろう。

私がそれを望んでいるわけないだろう。

私と何時までも一緒にいると、私の側にいると約束しただろう。

そんな言葉が頭の中で渦巻くがひとつとして声に出ない。言葉と出て出ない。

ただ涙と鼻水と泣き声だけが出た。

謝る為の言葉もそれを否定する言葉も発することができなかった。そこまで自分を、兄を追い込んだのは誰か。

当然、それは自分。

そう思うと何も言えなかった。

ただ自分の馬鹿さ加減を呪い、結果を想像できなかった自分を呪い、貧弱な自分を恨んだ。

「暫くは、優月さんのところでお世話になるから。毎日、様子を見に来るから。大丈夫、きつといい距離を見つけれらるって。だから泣かないで」

「なんで……ゆっ！ がっ！ えっぐ」

何でそこで優月が出てくる。

何故優月を頼った。

本家に世話になればいい。

男の子を欲していた本家には願ってもないことだろうに。

いやそうじゃない。

問題は何故、あの女と兄さんが二人きりで暮らすことになってい

るのか。

「どうしたの？」

「なんでも、なんでもないわよお」

「ごめんね、ごめん。でもね、きつとこれが一番いいんだ。これが一番夕香を傷つけないんだ。だから許してほしい」

そういつて優は夕香を抱き締め、背中を優しく叩いてあやした。

「よおしよし」

「うづうづ……」

泣き止んだ後、兄の作ってくれた朝食を食べ、無理して作った笑顔で兄を見送った。

いつてきます。

いつてらっしゃい。

「あなたから呼び出しは珍しいですね」

「いいじゃない。私達、まだ友達でしょう」

「そう、でしたね」

どこか既視感を覚える光景だと彼女は思いながら、彼女は優月の隣りに座った。スーツがシワにならないように気をつける。

日本文学のコーナーは少しばかり暗く、近くでは老人が目を瞑って寝息を立てていた。

「それで何ですか。わたしを殺す気にもなりましたか」

「単刀直入にいうわ。兄さんを返して」

「わたしは夕香さんのように優さんを縛り付けてなんていませんよ。優さんがわたしという方が楽だと思ったから、わたしの側にいるんです」

「よく言うわね。優は自分の意思で私から離れようなんて思わない。誰かが惑わしたりしない限り絶対に。それが母さんと父さんと優の約束だから。誰かがそれをねじ曲げない限り絶対にそれはありえない」

「その条件に甘んじてきた人の言葉は重みがありますね」

「あなたらしくないわよ。話を逸らすなんて」

「……………」

優月は彼女を見ない。ただじつと前を見つめている。

夕香の視線にも何の変化も見られなかった。

「それで、それであなたに優さんを返したとしましょう。……また暴力を振るうんですか。また彼を犯すんですか。また彼を侮辱して陵辱して心を踏みにじるんですか？ わたしは、もう、彼が傷つくのは……………耐えられない。彼の悲しい顔を見るのはもう嫌です。辛い顔も嫌。わたしはただ彼の楽しそうに笑っている顔が見られればそれでいいです。それで幸せです。プラトニックでいい。わたしは自分から知恵の実を齧ろうとは思わない。だから、あなたには、返さない」

歌うような、眠っているかのような緩やかな調べ。

しかし、それは確かな言葉で、確かな決意があった。目の奥の燃えるような色は揺ぎ無い決意を秘めていた。

それに夕香は笑う。勝ち誇ったような笑み。

そして言った。

「私がそれを選択したらどうなると思う？ 私が自分をちゃんと見つめ直して、カウンセリングを受けて、性欲を、あるいは暴力的欲求を押さえる薬を手に入れたらどうなると思う？」

優月はそこで初めて彼女の顔を見た。

私には分かる。優月は驚いている。

この眠た気な瞳の奥はとても、とても驚いている。

「私がそれを克服できれば、また兄さんと一緒に甘く暮らすことができると思わない？ 私ね、今回のことで心底自分を呪って、反省したの。何て馬鹿で愚かで周りが見えてないんだらうって。悲観するのと同時に思ったわ。私が変わらない限り、兄さんは私から距離を離しつづけるって。永遠に手が届かないんだわって。確かに現実を見つめ直すアレは嫌で辛いけど、それで全てが解決するなら随分と安いと思うのよ。それが私の幸せの代償なら、それはとても些細なことじゃない？ これからの幸せの為なら、一瞬の苦痛なんて大したことないわ」

「……………」

「性欲の開放は魅力的よ。眩しいし、とても甘美。それが好きな人となれば尚の事よ。でもね、私は思ったの。私はセックスがしたいんじゃない、優とすること……優と何か同じことを感じていることが私には大切なんだって。だから気持ちがいいんだって。なら別にそれがセックスでなくてもいい。代用が効くならそれでいい。それで兄を傷つけなくて済むなら、兄が戻ってくるなら私は自分からそれを捨ててみせる。いや、捨てるわ」

私には性欲もいらさない。暴力的欲求もいらさない。それが抑えられるのなら抑えてみせる。

それで兄さんと、優と幸せに暮らせるなら私は何だって捨ててみせる。

「…………それでも、あなたの罪は決して消えることはない。彼を、優さんを傷つけたという罪は、母を死に至らしめたという罪は消えませんが」

「だから一生掛けて償うわ。兄の側において、一生この身を捧げる。」

優月、アナタだけじゃないのよ。私だって、プラトニックでいい。兄さんと手を繋いで、兄さんと映画を見て、お兄ちゃんと一緒に寝て、優と一緒に笑っていられるなら、一生プラトニックでいいわ」「それでも、彼はあなたに振り向かない」

「それじゃあ、優月になら振り向くっていつの？ よおく自分を見なさいよ。オシャレなわけでも、会話が上手なわけでも、とびつきり美人なわけでもない。優月、アナタは対人恐怖症で自閉症でアスペルガーで無口で、発言も思考も通常のそれとは違うわ。兄に甘えていたのは私だけじゃない。アナタだって兄の優しさに甘えている。……………優はね、優は誰にも振り向かない。誰かを愛したりはしない。ただ優しいだけ。優月だって本当は分かっているんでしょ？ 優は大好きだった母さんが死んだ時に全てが止まってるんだって。愛するという気持ちも全部」

「……………ええ、分かっていますよ。分かっています。全部、全て」  
私が。

そう私が無意識下で父に欲情し、恋していたように優もまた無意識下で母に恋をし、そして欲情していた。つまりはエディプスコンプレックス。

そんな大切な母さんが死んだ時、優の中で母さんは永遠の存在になった。唯一無二の存在に。

だから誰にも恋をしない。誰にも愛を覚えない。ただ残酷に優しいだけ。どんな人にも丁寧で優しいだけ。

“それ”は母さんのみが独占し続け、母さんだけに向けられる。でも母さんはもう既に存在していないから、誰にも向けられることがない。

優が私に絶対的に優しいのも母さんの面影があるから、母さんと似ているから。

だから長い髪の毛を褒めてくれる。母さんに似ているから。だから私を甘やかしてくれる。母さんはいつも休むことができなかったから。

だからだからだから。

だから私だけが母さんに成り代われる。だから私だけが母さんに上書きできる。だから私だけが愛される権利を持つ。

……だから優月は私に勝てない。

優はこんな私にも優しくしてくれた。それはいろいろな精神的な条件やら葛藤が絡んだという意味合いも勿論あるだろう。でも結局のところ、兄は私に母の姿を見ていた。母に似ている私に。

それ故に私は優の母親になれる。優月はなれなくても私はなることができる。

私は必死にそれを考えた。何度も何度も兄のいない孤独な家でどうすれば兄が戻ってくるのか、死ぬ気で、狂いそうな頭で考えた。

そして私は答えにたどり着いた。

私が優にとつて母親のような存在になれば、暴力を抑え込み性欲を抑え込めば、彼は私と一緒にいてくれる。

私が自分を母親まで昇華すれば、優の心を癒すことができる。

そうすれば私が優にとつて唯一無二の存在になる。

男はみなマザコンとはよく言ったものだ。

優月を見る。

彼女は自分の膝の上に置いた握りこぶしをじっと見つめていた。

「ただそれを伝えたかったの。それじゃこの後、病院だから失礼するわね……きゃっ！」

優月の掴んだ手に私は転びそうになった。彼女は泣きそうな表情で私を見上げていた。

私には分かる。優月の気持ち。

この眠た気な瞳の奥は酷く、酷く不安がっている。

「わたしから、彼を取らないで下さい。どうか、お願いします。彼がいなくなったらわたしはもう……」

「最初に手を出したのは優月、アナタじゃない。私と兄さんはただ元あるべき形に戻るだけ。それだけよ」

全てを償おう。兄の傷も、母のことも全て全部。

私が優の母親になって、全てを癒そう。全ての傷が癒えた時、初めて優は、私は開放される。

そして全てが始まるんだ。

「さような、私の大切な友達。さようなら、私の姉さん。さようなら、私の恋敵」

「夕香……さん」

「あなたには私のお父さん、普通の家庭、普通の日常を持っていかれた。最初、話しかけてくれたのもその罪悪感があったからでしょう？ でもね、優月。他の全てを持っていかれても、優だけは兄さんだけは譲らない。……私を少しでも哀れんでいるなら、今あなたは何をすべきか分かるわよね？」

そういつて私は姉さんを睨んだ。彼女は奥歯に何か挟まったような顔で震える手を離れた。離してうなだれた。

私は一度も彼女に振り返らず、図書館を後にした。

午後の光はいやに眩しかった。

流れて行く景色が緩やかなものに見えた。何の変哲のない野花が美しく見えた。私の吐く白い吐息が暖かそうに見えた。

夕日が、雑踏が、人の声が、犬の遠吠えが好ましく思えた。思えたのに。

今は酷く憎らしかった。

私は人の少ない駅のホームでぼつりと佇んで空を眺めていた。

夕日は青みがかつた夕闇に染まり、その赤茶けた空は小さな星々が見え隠れし始める。

「優月……！」

私はもう一度叫ぶ。

「優月っ！」

ホームにいる数人がこちらを何事かと窺った。

あれから私はあらゆる病院を回った。

ただ私は自分の感情を制御する薬が欲しかっただけ。それなのにどの医者も全く薬を出さなかった。

何を言おうとも、掴みかかってもらってもそれは変わらず、ただ私は意味もなく苛立ちを積み重ねた。

十軒以上は回った。

彼らは待たせるだけ待たすと一言、今回処方箋は渡せませんとニヤけ面でいうのだ。

小さな心療内科から大きな大学病院のようなところまで、それは等しく同じだった。

医者に掴みかかり、数人の看護師に押さえつけられ追い出された時に私はやっと分かった。

優月だ。優月が圧力をかけているんだと。

何故そんな下らないことを？

彼女らしくないことを？

「優の、優のために決まってるじゃない……！」  
いや自分ためか。

ずっと私の兄を自分に繋ぎとめておくために。  
だからそんな意地汚いことを平気でするのか。  
プライドも捨てて、自分の信念すら捨ててこんな行動に走るのか。  
賢しい彼女なら、どうすればいいかよく分かっているはずだ。

兄さんの心を、傷を癒すには私が不可欠だと。それが優に一番いいということ。

優を虐めるな？ 優を侮辱するな？

お前が言えたことか。お前が私に言えたことか。

自分が安全な位置で、得をする安全な位置で腰を据え、ふんぞり返っていたお前が私に言えたことか。

最もらしいことをいうのも、優の身を案じるようなことを言うのも全てポーズだ。優が自分になびくと分かっていたから言えたこと。  
偽善。

偽りの正しさ。

邪魔なのは私ではなくて、当然優でもなくて。

優月だった。

彼女がいてもいなくても私たちはきつところなっただろう。こういう過程を踏んだだろう。遅かれ早かれきつとこんな感じに悩んで自分を呪い、兄に申し訳ないと思ったのだろう。

結局のところ彼女さえいなければ、私たちは元の鞘に戻っていた。  
私は反省して、兄と一緒に歩んでいたはずだった。

「優月、私はアナタを軽蔑するわ」

あるいは侮蔑。あるいは哀れみ。あるいは侮辱。

紺青色こんせいしょに染まった景色を電車の窓から眺め、私はポツポツと降り出した雨に明日の天気を心配をした。

「洗濯物、乾くかしら」

駅前のコンビニでビニール傘を買った。それからバスに揺られ、

私は別のところに寄るために何時もとは違うバス停で下りた。

星の見える夜空から降り落ちる雨粒を透明のビニール傘からぼつと眺めていると、小さく泣き声を上げる子猫を見つけた。路地裏の暗く湿った場所にそいつはいた。

私の目を見て少し表情が固まる。頬には泥。色は黒。

「お前、お母さんと離れたの？」

猫はナアと小さく鳴いた。近寄り、つまみ上げて頬の泥を拭う。

雨粒に音がかき消えて母親の音が、自分の声が届かなかつたのだろ。私は腕の中で猫を抱きしめながら裏路地を歩いた。

濡れた体は冷たかつたけど、体の芯はとても熱く、トクトクと血の流れる音が心地よかつた。

「きやつ」

手の中で急に子猫が暴れたかと思うと、遙か向こうに小さく見える親猫の元へと嬉しそうに駆けていった。一瞬、立ち止まり私に向かつてナアと鳴いてまた走った。

私はそれを眺めながら雨の、それも暗闇の中でよく家族を見つけられたものだと感嘆に似た溜息を吐いた。

「よかつたわね。家族が見つかつて」

やっぱり家族といるのが一番。それが一番安心できる。

私は何か一ついいことをした気持ちになって一人孤独に微笑んだ。暖かい気持ちに心から微笑んだ。

微笑みながら金物屋に入り、包丁を買った。

透明のプラケースを取って少し緊張しながら柄を握る。

よし、何も感じない。

「くふふ」

雨粒を弾きながらぬらりと鈍い光を放つ刃物を握り、私は道を進む。

携帯電話で兄の居場所を確認しながら外を歩く。鼻歌を歌いながら歩く。雨に唄えばを歌いながら歩く。

過去を思い出しながら現実を進む。現実を思い出しながら過去を

進む。

携帯に、液晶に表情を照らされながら、暗闇の合唱団を連れながら進む。

水たまりを踏みしめて、傘を投げ捨てて、草木を踏みしめて自然公園を抜ける。

進んで歩いて、そして止まった。

「ここらへんね」

GPSに表示された兄の位置と私の場所が重なる。私は慣れた手つきで兄に電話を掛けた。

自然公園のどこか、駐車場の方で兄の携帯の着メロが聞こえたよ  
うな気がした。

私はにっこりと微笑むと子供のような足取りでそこへ向かって走った。

「はい……はい。そうです。ええ、母にはちゃんと……はい、お願いします」

通話を終わらせた優月は携帯電話を机に置いた。

壁際を埋め尽くすガラスケースを眺めながら、少し沈黙。

視界に映るのはコツコツと時間を掛けて作り上げたプラモデルの数々。しかし、厳密にはその瞳はケースを見ているわけではなかった。

ただ彼女は自分を見つめていた。

指がタイプを刻みそうになって彼女はその手を止める。

「データを引き出さなくても……これは明らかかなことです」

独り言。自分に言い訳するかのような独り言。

彼女は席を立ち工作室を出た。

部屋を出た瞬間、バニラエッセンスの甘い香りが鼻をくすぐる。

彼女はその匂いに優が自分の為にクッキーを焼いてくれているのだということを感じ出した。

嬉しい。

はずなのに嬉しくなかった。

「あ、今焼いてるところ。もう少し待ってね」

「はい」

黄色いエプロンをした彼は台所の器具を洗いながらそういつて笑った。

彼女は彼のその笑みが痛かった。彼のその優しさが辛かった。

だから彼女は少しでもそれを、彼を意識ないように努めて平坦に答えを返す。震えそうな体を意志によって抑えつけて、ソファに座った。

そして思った。

人は、人はみな自分がいい人間だと思う。少なくとも平均的な良

心を持ち合わせていると信じる。

しかし、いざという時に本当の自分は現れる。その身の丈以下の醜い自分を見て人はショックを受ける。

ショックを受けて開き直る。

屑なら屑なりに人の良心を嚼つて生きていこうと自身を肯定する。でもそれは心が弱いから、現実を認めるのが怖いから。事実を受け止める余裕がないから。

自分のしてしまったことの恐ろしさをよく分かっているから。だから。

「どうしたの？ 凄く辛そうな顔してるよ」

不意に斜め上から差し出されるココア。白い陶器のカップに注がれたそれは湯気を散らし、バニラの香りとは違った甘い匂いを届けた。

彼女は優の顔を一度も見ることはず、ただ平坦にありがとうとお礼を言った。

それに彼はますます疑問を膨らませる。

「本当に大丈夫？ 何かあったの？」

「別に何もありません」

「本当に？」

「はい」

「……嘘だよ。昨日までの君なら俺のココアを受け取ってくれたらありがとうって言ってすぐ飲んでくれた。でも今は手すらつけてない。それどころか目すら合わせようとしない」

「……………」

「既に起こってしまったことはもう、どうしようもないよ。覆すこととは誰にもできないんだ。でもね、でも、それを悲しんで悔やんで次に生かすことはできる。誰かにその悲しみを共有してもらおうこともできる。誰にも迷惑をかけず、傷を抱え込んでより傷つくという選択もあるけれど、俺は誰かにそれを話して傷を浅くするって方法もあると思うんだ」



髪の毛を丁寧指でとかして、じつとりと汗ばむ頭に何度もキスをした。

ただ唇が触れる程度のもの。

だけどそれはキスだった。

優しく、暖かいそれだった。

泣きつかれた彼女は赤ん坊のように親指をしゃぶりながら優の膝の上で丸くなり、寝息を立てていた。

そして何度ももうわ言のように許してくださいと呟き、優の服を強く握る。

彼はそれを見て、きっと今まで辛いことがあっても彼女は誰を頼むということができなかつたのだらうと思った。

それはとても辛かつただらうと。

自分と同じように。

「……あつ、雨」

彼女の寝息だけの緩やかな空間にシャッターを叩く雨の音が混ざる。

静かな空気の中、優は我が家の洗濯物と明日の天気のことを心配をした。

「ん……、おはようございます」

「あはは、おはよう。目が真つ赤だよ」

「……前からです」

「そういう意味じゃないんだけど」

「知ってます分かってます。だからその話題をいうのはやめて下さい。わたし、結構アレ、恥ずかしかったです」

「あ、ごめん」

彼女はつんと顔を背けて冷たいココアを口に運んだ。

パラパラと雨の叩く音。窓は全て冷たく固いシャッターによって塞がれていて、外の景色や時間というものがこの部屋にはなかった。時計のないこの空間では自意識のみが時を測る。

「優さん、外に散歩に行きましょう」

「今、雨振ってるし……外も暗くなってきてるんじゃないかな」

「雨が振っている日は散歩しちゃいけないですか？ 外が暗いと散歩しちゃいけないですか？ わたしは雨の日が好きです。雨の音が好きです。シトシトと降る雨も、パラパラと降る雨も、ザアザアと降る雨も好きです。朝日に、夕日に、夜に、輝く雨が好きです。常にアトランダムに振り続ける粒の軌跡が好きです。風になびかれる雨粒が街灯に照らされて光の粒のように見えるのも好きです。両手一杯に手を広げて体中にそれを浴びるのも好きです。ゲコゲコと緑色の蛙が鳴くのが、草木に立ち込める湿気の匂いが、土の香りがわたしは大好きです」

優月は微笑を浮かべて立ち上がるとその場でクルクルと回った。手を広げて笑った。

優にはそれが雨の中で踊る白い天使に見えた。青みがかつた闇夜に踊る白い天使に。

それ見て優も立ち上がり、回る彼女の手を掴み一緒にクルクルと

踊る。

直ぐにバランスを崩してその場で尻餅をついた。互いに微笑む二人。

「じゃあ、クッキーを持って、暖かい紅茶を持って、夜のピクニックと洒落こもつか」

「ピクニック……素敵ですね。お弁当はないですけど、とても楽しそうです」

「きつと楽しいよ」

「きつと楽しいですね」

二人は直ぐに準備を始めた。

冷えたクッキーをタッパーに詰めて、紅茶を沸かして水筒に入れる。コートを出して、傘を出して、タオルを出して二人は笑い合った。

全ての準備が整い、何か忘れ物はないだろうかと優が思っている時、優月が後ろから彼の首に何かを巻きつけた。

「わあ……ってこれ」

「残骸を余った毛糸で縫い合わせたからか、デコボコで長くなってしまいました。変かもしれないですけど、あの、その」

「ありがとうっ！」

「わわっ」

優は目を大きく見開いて彼女の両手を掴んだ。

どこかデコボコのマフラー。バラバラにされたはずのマフラーは確かにそこにあった。

優はそれが何よりも嬉しくて、優月もその笑顔が何よりも嬉しくて。

ただただ。

悲しかった。

外にでる。

一本だけの青い傘の中、優と優月は身を寄り合わせながら自然公園に向かった。

優はいつもの深緑のカーゴパンツに落ち着いた色合いのジャケット。首には少し長くなってしまった白いマフラー。

優月はいつもの黒いセーラーに茶色いダツフルコート。首にはどこか不恰好なオレンジ色のマフラー。

自然公園について最初に飛び出したのは優月だった。

彼女はただ嬉しそうに微笑みながら傘を飛び出して、ぼつりとできた水たまりに飛び込んだ。ひざ下まである白いくせ毛に水がはねる。

辺りは少し暗く、早くも街灯が白い光を灯していた。その光に照らされながら彼女は嬉しそうに笑い、雨にただ濡れる。

「雨、強くなってきたけどいいのー？ 寒くないー？」

優は苦笑しながらそう言葉を発する。しかし、雨音がその声を遮断して彼女の耳には入らない。

振り返る彼女が何かを喋るがそれも優には届かなかった。ただ彼女は雨が頬を濡らすのをとても気持ちよさそうに笑った。気持ちよさそうに目を瞑り、クルクルと踊り、全身で雨を受け止めた。

「うわあ、すつごく楽しそう……」

優は近くにある屋根つきの休憩所のような場所に自分の上着や荷物を置く。そこにいた黒い帽子の女が程々に、と静かに笑って去っていった。

優はその言葉に若干の気恥しさを覚えながら優月に向かって駆けた。駆けて、彼女の手を取り、クルクルと回った。

世界は回り、白い吐息は口が出る。

しかし、二人の笑みだけはいつまでも変わらなかった。

優月が許してくださいと笑いながら小さくいい、優が辛かったと笑いながら小さくいい。

言葉は雨に消えてしまっても、相手の笑顔だけは雨に消えなかった。

遊び疲れた彼らは休憩所で休んでいた。熱い紅茶を冷ましながらかッキーをかじり、ただ笑う。

互いの首には濡れたタオル。互いの顔には転んだときの泥。

二人は地べたに座り、屋根から降りしきる雨を眺める。

先程まで見えていた星空も陰り、既に辺りは夜に包まれていた。

濡れたコートを隅に置いて、優月は優のジャケットに身を包みながら、ぼつりといった。

「雨の日は最高です」

「最高か。どつりで楽しいはずだよね」

「でもちよつと寒いのが難点です」

「最高つていうわりには、それって結構マイナス要素のような気がするけど。まあ、確かにこの時期にやるにはちよつと辛いよね」

湯気の立つ紅茶をありがたそうに啜り、優は笑う。優月も頬を小さく歪めて笑った。

草木の青い香り。泥の、水の匂い。

ただ地面を叩きつける雨の音。暗い屋根の下。

互いの瞳が重なり合い、息遣いも聞こえる距離。

優月は妙に緊張した。それに追従して言葉が、気持ち溢れて止まらない。

「あ、あの。あのですね。優さん」

「ん、どうしたの？ 寒い？」

「いえ、そうじゃなくてあの……わたし、わたしですね。思っんです、けど」

「うん」

「あの」

「うん」

「また……また、一緒に今日みたいに、遊びましょう」  
いえなかった。

その言葉だけは伝えることはできなかった。

「そうだね。今度は夕香も一緒に連れてきたいなあ。夕香はこういうハチャメチャなの好きだからきつと気に入るよ。あ、でも晴れた日に普通にピクニックもいいかも」

「……………ええ、そうですね。夕香さんも、一緒に」

「明日、晴れるかな」

「……………晴れるといいですね」

どちらがいうでもなく二人は帰りの支度を始めた。

優月はそのまま優のジャケットを借り、優は両手がふさがるところという理由で優月の濡れたコートを着る。

屋根から出て少し歩いたところで、携帯電話が鳴った。優がそれに出ようと手に取ったところで着信は切れた。

「あれ、夕香から？ 何だったんだろう」

「……………ちよつと携帯電話貸してもらえますか？ 優さんのこれ、そういうえばGPS搭載型ですよ」

「え、そう……………だったかな？ 忘れちゃった。夕香が全部選んでくれたから……………」

優月は優の携帯を両手で弄り、何かのアプリケーションを立ち上げている。

それは優が初めて使うもので、夕香がよく使っていたものだった。「これ、アプリケーションで互いの位置情報が確認できるようになっています。だから、こちらからも相手の位置を……………え？」

液晶に浮かぶ相手の現在位置と自分の現在位置を見て優月は首を傾げた。優はただぼんやりとしていて、何が起きているのか理解していない。

不意に。

不意に傘が落ちる。

くるりくるりと、ひらりひらりと、回りながら落ちる。

優の顔が驚きに満ちた。優月の顔が悲愴に満ちた。

音が。

雨音が、全ての音が等しく消えた。

a f t e r ?   b e f o r e ?

その時は雨が降っていた。雨が降り出していた。雨が降りしきっていた。

強く、弱く、冷たい雨が。

「みいつけた」

彼女は影から二人を見つけた。仲良く相傘をしている二人を。そして爪を噛みながら彼女は悩んだ。

どちらだろう、と。

頼りない街灯の光ではどちらがどちらか見分けがつかなかった。だから彼女は、外見的要素でそれを判断した。何が切っ掛けかは分からない。

それはマフラーの色と髪の色を重ねたのかもしれない。或いは服装かもしれない。

ただ彼女はそれがそうだと思い、雨の中を走った。背中に向かって走った。

走って。

腰だめに構えた包丁を。

刺した。

粘土に指を突き入れたような固く柔らかい感触。

「ふうふうふうふう」！

「ぐあっ」！

獣のように唸り、白い息を吐き、えぐるようにして包丁を肉にめり込ました。

あの時を思い描きながら、包丁を引き抜き、何度も背中を刺す。青い傘がひらりと落ちて相手の姿が顕になった。

誰かが叫んだ。

「……あああああ！ 夕香さん、あなたはっ！ そんな、そんなっ！ 死なないで下さい！ 優さん！」

ブルブルと震えながら目を瞬かせ、何度も首を横に振って誰かが咳いた。

「あ、あ、う、うそよ……。だって、だって私はそんな、ゆづ……きを、そんな!」

誰かは口から血を吐き出して、濡れたアスファルトにゆったりと倒れ込んだ。

白い少女は酷く狼狽した表情で優の傷口を手で塞ぐ。塞ぐがその血は彼女をあざ笑うかのように溢れて止まらない。

ただ残酷に彼を中心として赤い模様が広がっていくだけ。

雨に弾かれ、濃い朱色あかいろは薄い紅色に。

彼の表情は肌色から蒼色に。

「夕香さん! あなたはまた大切な人を! 前と同じように……!」

「わわわわわ、わたしじゃ、わたしじゃ、ないっ!! わ、私は何も悪くないし! 私は何もしてない! 私じゃ、じゃあ、ゆづ……

…私じゃないの、よ! あのおのあのね、優、私はそんなつもりじゃじゃじゃ……」

ぼんやりとした表情で彼は自分の脇腹をまさぐり、手についた血を光に照らして見た。

黒々としてぬめついた赤い血。鉄さびの香り。

目の前で包丁を持った手を真っ赤に染めて、震えている妹。

俺は刺されたのか。

「ゆづか」

「優さん、もう喋らないで! 血が、血が止まらない! 止まらないんです! 誰か、誰か助けて! 誰か……」

彼女は雨の中、悲痛に叫び、助けを求めるが、その返答はどこからも得られなかった。

ただ雨は血を洗い続け、時間は無駄に浪費され、暗闇からは刻一刻と死が迫る。白い手は赤く染まり、白い髪は血を吸って朱あけに染まった。

全てが赤色に染まっていく状況で、夕香は目を丸く見開き、今に

も倒れそうなほど顔を青白くさせて搾り出すように言った。

「にい……さん、私じゃなくて、あの、本当は優月を！ 優月を

」

「痛いよばか」

彼は。

そう彼は言いつて眠るように目を瞑った。

小さな声、小さな言葉、小さな呟き。

だけどそれは確かな声で、確かな彼女の兄の声で。

彼女を崩壊させるに足る言葉だった。

「わたしじゃあ！ わたわた……わわっ」

夕香はその場に膝をつき、手をつき、懺悔するかのように優に向かつて頭を垂れる。

何度もその手で表情を覆うが目の前に広がる惨劇、自分の結果は決して消えてはくれなかった。顔に爪を立てようと、頭を掻きむしろうとも夢は覚めず、現実覚めず、兄の血は止まらなかった。

母が死んだ時、彼女を後ろから抱きしめてくれた人は、彼女を慰めてくれた人はもうどこにもいない。

その残酷な事実、彼女の内面はゆっくりと音を立てて崩れ落ちていく。

そしてとどめを刺す優月の叫び。

「ゆう……さん？ 優さんっ！ 優さん、しっかりしてください！

優さん！ そんな、これからののに！ これからののに、死んじやうなんて……！ 私を置いていくなんて！ いやです！ 目を覚まして下さい！」

「あああああああああああああああ……！」

夕香は包丁を手から零し、叫び声を上げながらその場から走り去った。

私じゃない、私は何もしていない、と呪文のように何度も何度も自分に言い聞かせながら。

大切な人をまた殺してしまったという現実に恐怖しながら。兄に

拒絶され、責められたということに涙しながら。

覆しようのない現実に狂気しながら、彼女は全力で雨の中を走った。

ひたすらに、がむしゃらに走った。

「ゆる、して、許してください許してください許してください……」

優月は震える声でそう優を揺すり、血に濡れたその手で彼の携帯を取った。

その呟きは夕香に向けられたものなのか、優に向けられたものなのか、はたまた神に向けられたものなのかは誰にも分からない。ただ彼女は呪詛のように、或いは聖典に記された一説のように祈り、呟き続けた。

続けながら、――九番に電話を掛けた。知らない相手との電話ということを意識して心臓が跳ね上がる。

だが自分がここで頑張らなければ助かるものも助からない。

そう彼女は頷き、涙を流しながらコール音に耳を傾けた。

「あああああああのあの」

病院は近く、そしてまだ心臓は動いていた。

a f t e r ? b e f o r e ? (後書き)

終りです。お疲れ様でした。

最後が意味不明かもしれませんが、あえて解説はしません。  
その意味合いはみなさんが個々に考えればいいんじゃないかなあと  
思います。

(私の自己満足で終わっていないことを祈りつつも)

面白いか面白くないかは別として、とりあえずやっとなり完成です。  
本当はもっと短くしたかったんですが書きたいことが山ほどあって、  
ついついこんな長編に……。

長いからかもしれませんが、それがみなさんに評価していただけて  
作り手としては嬉しい気持ちで一杯です。

癖のある内容、癖のある分かりにくい文章を汲みとっていただけた  
みなさんに私はありがとうございます。

ここまで読んで下さって本当にありがとうございます。

次回作なんかがあったらまた読んでいただけたら幸いです。

追記：その後の話しをしようと思いましたがある意味それはクドい  
のでやめときました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0547j/>

---

重なりあわないシンメトリー

2011年1月22日21時41分発行